THE KAIZO

改造

八月号

大正八年三月廿一日 [illegible]

1924


歯の爲に一番よい
クラブ煉歯磨
朝と食后と寝る前のクラブ歯磨
は歯を強く美しく致します……
家庭用にクラブ粉歯磨
旅行用にクラブ煉歯磨
含嗽用にクラブ水歯磨

歐米品に優る最新型の

プラトン萬年筆

一番書きよくて狂はない萬年筆



萬年筆用

プラトンインキ

プラトン文具製造株式會社特製　クラブ商舗本店發賣



改造 八月號 目次

公益事業と同盟罷業批判



夏季の好讀物　改造社

阿部次郎著	北郊雜記	十六版	菊半截上製	定價壹圓九十錢 送料十五錢
倉田百三著	超克	四十版	四六判上製	定價貳圓貳十錢 送料十七錢
吉江喬松著	近代文明と藝術	六版	四六判上製	定價貳圓 送料十五錢
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	改版	四六判並製	定價壹圓九十錢 送料十七錢
山本有三著	嬰兒殺し	七版	四六判並製	定價貳圓 送料十五錢
藤森成吉著	東京へ	五版	四六判上製	定價貳圓廿錢 送料十九錢
菊池寛著	信康父子	近刊		
山川均著	レニンとトロツキー	十二版	四六判上製	定價壹圓五十錢 送料十貳錢
末弘嚴太郎著	嘘の効用	卅五版	四六判上製	定價貳圓六十錢 送料十九錢

夏季の好讀物　改造社出版

著者	書名	版	體裁	定價・送料
谷崎潤一郎著	愛すればこそ	百二版	四六判上製	定價壹圓六十錢　送料十五錢
谷崎潤一郎著	愛なき人々	卅五版	四六判上製	定價貳圓　送料十七錢
吉田絃次郎著	芭蕉	十一版	四六判上製	定價壹圓六十錢　送料十五錢
吉田絃次郎著	タビデと子たち	十一版	四六判上製	定價壹圓八十錢　送料十五錢
賀川豐彦著	死線を越えて	二百八十一版（改版中）	四六判上製	定價參圓　送料十九錢
賀川豐彦著	太陽を射るもの	百七十六版（改版中）	四六判上製	定價貳圓　送料十七錢
賀川豐彦著	星より星への通路	四十八版	四六判上製	定價壹圓五十錢　送料十九錢
厨川白村著	近代の戀愛觀	百十三版	四六判上製	定價壹圓五十錢　送料十九錢
厨川白村著	苦悶の象徴	五十版	四六判上製	定價壹圓五十錢　送料十五錢

改造社運動叢書

熊谷一彌著	テニス	十七版	定價貳圓參拾錢 送料十七錢
三宅太助著	野球	九版	定價貳圓八十錢 送料十九錢
梅澤親光著	水泳	五版	定價壹圓八十錢 送料十五錢
香山蕃著	ラクビー	近刊	
山田浩二著	撞球	近刊	
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四版	定價貳圓五十錢 送料十七錢
槇有恒著	山行	四版	定價參圓 送價十九錢

改造社の重要新刊書

板垣鷹穗著（新刊）

美術史論集 表現と背景

定價參圓八拾錢
送料十九錢

本書の目的は、美術史上、特に作品と背景との面白い場面を觀察したものである。全體として古代から現代に至る連續的な發展を見るのが目的ではないが、各時代の代表的な傾向丈けは追想することの出來るやうに試みた。（第一章）は、ギリシヤの理想神像が、思潮の變遷に伴はれて漸次に異つた表現を示して來る狀態を描き、（第二章）はローマ時代の市場建築を基礎にとつたクリスト教寺院樣式が變遷して行く有樣を考察し。（第三章）はレオナルド・ダ・ウインチの持に研究的な、そして天才的に多方面な人格が、作品の上に現れた有樣を見やうとし、（第四章）に於ては十七世紀以來の宮廷藝術が、十九世紀以來の國民藝術に變る過度期の興味ある現象を考察し、（第五章）は十九世紀末葉に歐洲の畫界を風靡した印象主義の表現をモネの風景畫に結晶させて考へたものだ。これに添ふるに四十一葉の參考畫を挿入した。本書は美術を愛好する人々、及良家の書齋になくては叶はぬ趣味の一著です。

參考圖目次

巻頭挿繪 レオナルド。素描 巻末參考圖 1 パルテノン 2 マウソレウム 3 アテナ・パルテノス 4 パルテノンのフリース 5 プラクシテレス。クニドスのアフロディテ 6 プラクシテレス。アポロン・サウロクトノス 7 プラクシテレス。サテユロス 8 プラクシテレス。ヘルメス 9 クニドスのデメテール 10 眠れるヘルムアフロデイトウス 11 ロマネスク寺院內部（ヒルデスハイム） 12 ランス寺院內部 13 ゴティック寺院內部（パリ） 14 ランス寺院 15 ランス寺院（部分） 16 ブラマンテ。テンピエット 17 サンピエトロの穹窿 18 ギルランダイヨ。晩餐 19 レオナルド。晩餐習作（ヱネチア） 20 レオナルド。晩餐（模寫） 21 ダウイツト。ホラテイウスの

のかも知れないが、たしかに新時代だけは籠つてゐるだらう。敢えて一個の爆彈を送ると云はう。沈默した爆彈？それを讀者がいかに點火し、如何に精神の中に爆發さして新らしい世界をひらくか、……その空想を許せ……新生活の中途に逝ける故有島氏の靈に此一卷を贈る。

埃及人ビシヤラ・ナハス著
高瀬毅譯（八月一日發行）

ツタン・カーメン

定價壹圓五十錢
送料十七錢

ツタンカーメンの生涯

現代文明と比肩すべき或はより以上の文明が紀元數千年前の古代に於て物質的にも精神的にも花を開いたとのある埃及の地はスフインクスの如く不思議な國である。四千年の間何人の手にも觸れず眼にも觸れず共儘に古代文明を地下に保存せし王陵の谷の發堀は世界の耳目を聳動せしむるに充分であつた。本書は佛國で高等教育を受けた埃及人ビシヤラナハス氏の著で此の王陵の他に發堀を主題とし埃及古代文明を語りつゝ現代の生活の一端をも示してある。讀者をして一讀悠久なる人類歷史の過程に誘導し卷を掩ふ能はざらしめる趣がある。

「ツタンカーメン」目次

既に、歐羅巴が自らその首を締めた五年の戰爭の間に於て、私は、愛と、兄弟としての相互扶助との理想に忠實に留まつた歐羅巴の魂を集めることに努力した。(中略)

世界は、他の偉大な力がその援助に來ることを必要としてゐる。亞細亞が「人種の會議」に於て、その席を再び取るべきである。

亞細亞の若き人々よ、一の人種の他の人種の上に占むる空しき優越が問題ではない。私たち總てのために、脅かされてゐる人類を救ふことが問題である。人類は英雄主義の一の確固たる意志によつてのみ成長した。人類はそれによつてのみ存續する。その存在の事實そのものが一の英雄的な行爲であつた。筋肉と意志との如何に巨大なる努力によつて人間は、地球の熱い泥土から脱出することに、一層よく武器を備へた、一層強い數百萬の他の生物の上に抜んずることに、その言葉を鍛え作ることに、その思想の大廈を石一つ石一つから築き上げることに、「夜」を貫き透す「精神」の光りを元素的な諸の力から奪ひ取ることに成功したことであらう(中略)

その光榮ある諸の文明が、一の長い眠りの後に、その力強い聲を新たに世界に聽かせようとしてゐる亞細亞の若き人々よ。人類の天才の最も輝ける力がその中に呑み込まれてゐる國民と人類との無益な爭鬪を再び始めることが問題でないことに注意せよ！人類は、その數千年の歩みの間に(中略)

日本の兄弟たちよ、あなた方の歐羅巴の兄弟があなた方に手を差し伸べて而していふ……「お互に助け合はう！お互に愛し合はう！」

厨川白村著

◇◇出版界の新覇王

苦悶の象徴

四六版天金
表紙羽二重
震災後唯
一の美本

定價壹圓八拾錢
送料拾七錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる淸境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

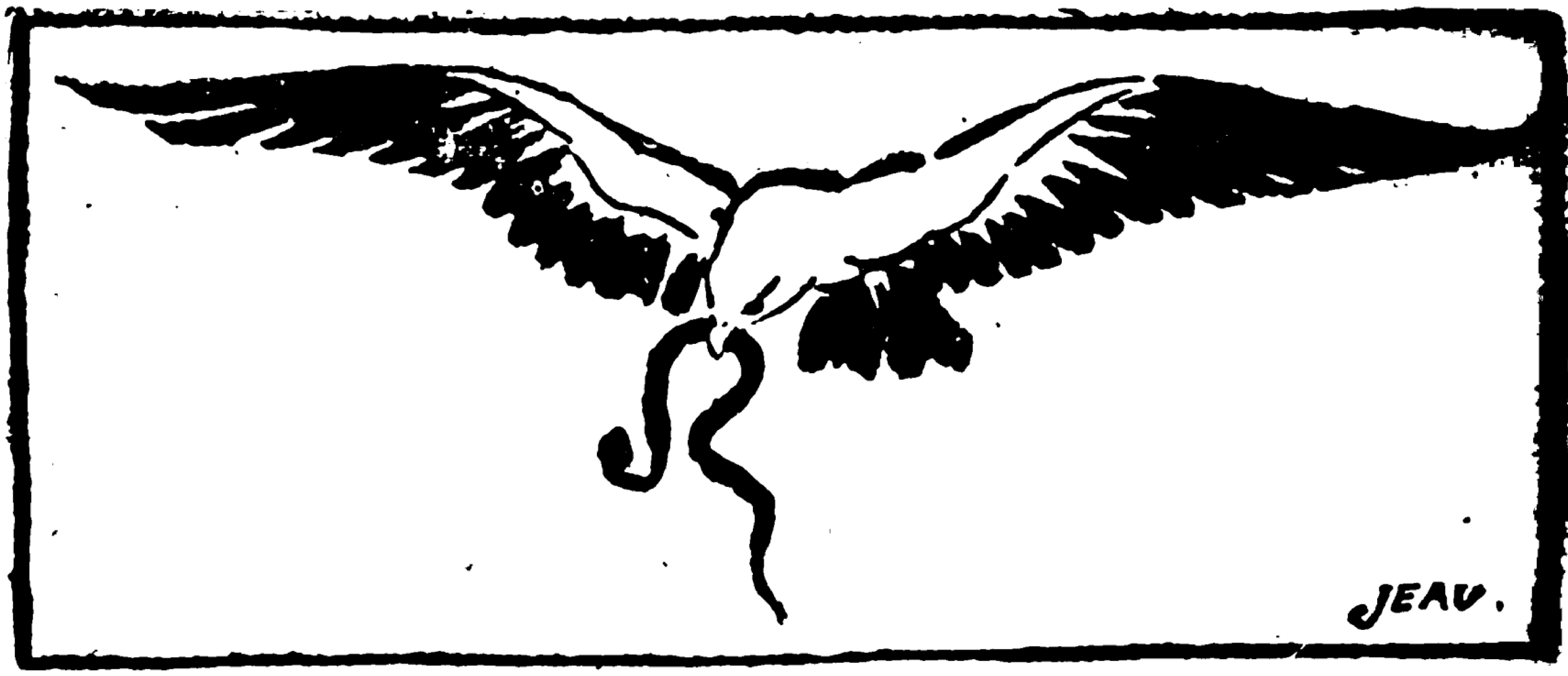
近代の戀愛觀

113版

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憧憬、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が動くと斷じ更に戀愛は人間の最高善であり、人生の最高理想だと高く擧置して因襲的結婚、非戀愛的生活に一大痛棒を喰はす。本書を味到し得る者ののみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



(八月號)

輿論漸く背抗

閣僚の選擇、樞密顧問、滿鐵社長の選任に現れたる現内閣の思想が悉く世人の期待を裏切り、政黨内閣の根本義を無視するものであるとの世評は漸く有力ならんとし、その官僚式、保守式傾向は清浦、山本内閣以上であり、且つ農村問題、財政問題に對する施設が時代の進行と逆行するものであり、政府の力を無能力視する點に於て加藤首相は露國專制時代のポベドノスチエフに酷似するとさえ有識者間に冷評されつゝある。事は、假りにも、護憲を以つ起ちし加藤内閣に對し、今更案外の感を抱かしめる。今日の如く世界經濟の轉機に立ち、政治の形式に於て又、十年前とは隔世の感ある時に於て、内閣主腦者及閣僚が依然として十年前の思想そのまゝにて我國民と、列強とに對せんとするは迂愚の極である。特に植民地大官更迭に對し政府の乗りたる態度は内閣の自信の總てを葬り、政黨の權威を土芥視するものである。植民地大官が、政黨員でいけないとならば内閣の主腦も政黨員ではいけない筈である。内閣員ト黨人とは時に偏頗の事をしていいとか、植民官だけはそれが許されぬとかは珍な條理である。閣僚も、一般官吏も植民地官吏も均しく同一齒位の保障による純良なる臣民であり、帝國の權利、利益に對しては、十二分の責任を持つものである以上、その人選は政黨員よりするも一向差支ない譯である。若し植民地大官は内閣の施設以上の國策によつて任免黜陟を支配さるるといふならば、然らば現内閣の奉ずる政策は歴代内閣の奉じたるものに比して第二義的のものであると云ふに歸する。かくの如きは政黨の信用と名譽とを全然度外視するものであり、國民を瞞着するものである、そしてあまりに自黨政策の矛盾を暴露するものである。そのやうな態度で何時の自覺、向上せる勞働者に對し、民衆に對したならば、もう瞬時にして總ての階級に背を向けらるることは請合だ。濱口君にしろ、この十年間に改造されたる露西亞、獨逸、英國の經濟的變革が社會的に、そしていかに國際的に行はれたかを窮めたらば、モット進んだ青砥藤綱にもなり得たであらうし、又奢侈品關税引上以上の財政的自由政策も生れたろう。若槻君の如きも地方官更迭によりて大鉈を有する人であろうとの大きな豫想を裏切り、且つ又努つくるしくも思想退化の宣言で青壯年者の總てに見切りをつけられた以上、現内閣の國民的期待は愈々以つて心細さを加ふに至つた。

かくの如き固陋頑冥な前世紀の頭腦で普選や臺灣議會問題、公共事業從事員の同盟罷工等近代的社會相を帶べる問題に、適宜の處置はとれないだろうと思はれる。

勿論、加藤君は國家社會主義者さへも國賊視する人であるとの批評も聞く所だが、それ處ではない歴代内閣が把持して來た社會政策的立場にも多大の根本的誤解の持主であるといふに於ては吾人は呆然としてこの立派な護憲首相を辨護する術を發見することが出來ないただもう少し時日をかし　現内閣の施設を見、その上で猛然として國民と共に併せ起つであらうことを宣言しておく。



自由獲得社會より資本的營利社會へ

——『社會運動と政治運動』に接す——【其二・完結】

福田德三

（九）

『十年史』第五最終卷の卷末に於てルイ・ブランは次のように云つて居る　『此の十年（自一八三〇至一八四〇）は適切に云へばブルジオアジーが支配した時代である。ブルジオアジーとは何を云ふか?、ブルジオアジーとは、勞働要具即ち資本を有するによつて、他人に從屬することなくして自可の才能を發揮することを得、極めて僅の程度までか他人に依賴するを要せざる市民の全體を云ふ。之に反して庶民（プユープル）とは、勞働の要具を有することなく、從つて、自力にては、自己を發達す可き手段を有せず、生活の第一必要に關するものを得るについてさへも、他人に從屬し

なければならぬ市民の全體を云ふのである。（中略）ブルジオアジーの誤謬は、各人が自己の天職を發揮する手段に就いて平等が存しないでも、自由さへあれば、進歩と正義とを支ふるに足ると信じて居たこと是である。乍去、考へて見よ、勞働の要具と信用とが、一部の人々の手に專屬する限、凡ての人に與られたりと稱する自己の力により自らを富ます可き平等の權利なるものに、何の意義が存するかを。之に到達す可き可能性のない幸福獲得なるものに何の意義が存するかを。自から歩む能ざる不幸なる者に取つては、廣き而して統一せられた大道果して何の用あるかを。眞正の自由とは、決して法律上に存するものではない。其れは、各人に事實上與へられた自から才能を發揮し得可き權能に存するのである。自由なるものは、一の囮に過ぎない。其れは、勞働の要具が獨占物たる處に於いては、信用の按排が富者の便のみを圖る私人によつて決定せられ、貧者にも提供す可く國家の手によつて行はれるのではない處に於いては、競爭が小なる資本家を富豪資本家の餌食たる運命に陷らしむる處に於いては、産業的取引が、一方飢餓に迫る者と他方富める者との間にのみ行はるゝ處に於いては、市民の生存が、其の善良なる操行と思慮とによらず、生殘れる疫病、停止する注文、人の發明する新行程によつて運命付けられる處に於いては、貧民の小供達が、生き乍ら工場に於いて奴隷とせられ得る爲の教育を施す學校に入ることを強制せらるゝ處に於いては、出版の自由が、莫大なる保證金を支拂ひ得る者の利益の爲めにのみ存する處に於いては、七歳の子供が生きんが爲めには、一日十二時間働かねばならず、十六歳の女子が、生きんが爲めに、醜業に身を投ず可く餘儀なくせらるゝ處に於いては、（中略）自由てふものは單に一の囮に過ぎず、專制主義の僞善たるに外ならないのである。斯の如き處に於いては、人民は次の如き叫び聲を以て鬪爭に進行する外はない、曰く、勞働しつゝ生き、鬪ひつゝ死せんと。（Louis Blanc, Histoire de dix ans 1830—1840 Nouv. Ed. Pais. Felix Alcan Tom. 5. pp. 149—156)

フリエーもサン・シモンも將た亦コンシデランも何れも、自由獲得社會のブルヂアオア社會への進程を以つて、其の思索の發足點としたものである。而して、此一列の思索は、まさにブルドーンに至つて、其の最高頂に達した。アントン・メンガーが、ロドベルトスを以て、悉くブルドーンから、其の思索を借用したものであると主張するのは、彼がマルクスを以つて、タムソンの受賣を爲すに過ぎないと做すと同樣に、無論公平な判定として受取ることは出來ないが、然し乍ら、兩者間に著しい影響の存することは、ロドベルトスに就ても、マルクスに就ても、疑を容るゝ餘地はない。ブルドーンの『財產とは何ぞや』は、此のブルヂオア社會のアンポビリテーを立證した社會思想的マグナ・カルタで、其の『財產不可能性の十則』は、ブルヂオア社會に下した彼の鐵案である。彼は云ふ『財產は、ヘルクレスの屠つた龍の如きものである。之を殺すには、頭を捕へるのでなく、其の尻尾を捉まへなくてはならぬ。財產の尻尾とは、即ち利潤と利子とである』『資本は交換され得べし、所得の源泉たる可きものではない。』『勞働者は其の勞銀を受取つた後も猶ほ、彼が生產した物に對して、**自然的所有權を有するものである。**』と。（Qu' est ce que la propriété? I et 2, Mémoires.)

（十）

ブルドーンは更らに、其の『十九世紀に於ける革命の一般的考察』に於いて云ふ。『一七八九年の革命は、其の仕事の半分しか成し遂げなかつた。（中略）此の革命は、一方には破壞し、他方には建設す可き仕事を有つて居た。革命は『アンシアン・レヂーム』を**撤廢する任務を有つと共に、新しい組織を作り出さねばならなかつたのである。**（中略）社會に於ける一切の否定は、**必ず之れに連續し、之と矛盾する一の肯定を含んで居るものである。一七八九年の革命は、此二つ**

の任務の中大なる務を捧げて、第一の仕事だけは成就したが、其の第二は全く忘れられてしまつた。六十年來佛國を悩ました生存不可能の惱は、茲から生じたのである。封建制度は八月四日の夜一擧にして廢止せられ、自由と四民平等との原則は確立せられた。其の歸結は、將來に於いて、社會は、モヘヤ政治と戰爭とを本位とせず、勞働を目標として改造せられねばならぬこととなつたのである。（中略）其の改造は、政府の改造であつてはならぬ。何となれば、政府の改造だけでは舊態が再び建造せられるに過ぎないから。改造せらる可きものは、國民經濟と經濟的利益の均衡と是れである。（中略）一七八九年八月四日の消極的行動より生ずる斯くも明白、斯くも緊要な結論は、一八一四年に至るまで、革命の辯護士、解說者たりし人々の中誰人によつても、理解されて居なかつた。凡ての思想は、唯だ政治の方面にのみ向けられた。（中略）此の不幸なる錯誤が一八四八年に於いて、臨時政府の顚覆を招來した原因である。（中略）要するに、一七八九年の革命を呼起した「社會」なるものは存在しない。「社會」は新たに作られねばならぬ。六十年來我々の有つて居たものは「社會」ではない、其れは、無政府狀態と、最も恐るべき貧困とを辛ふじて彌縫するに止まる皮想的の人爲秩序たるに過ぎないものである』と（Proudhon, Idée générale de la Revolution au XIX siècle Nouvelle Ed. par Berthod. Paris. pp. 133-136

更らに、ロドベルトスは云ふ『貧乏と恐慌、此二者は、社會が其の自由を贖ふために捧げた犧牲である。社會は、法律の助けによつて過去一切の桎梏から釋放せられ、其の生産力を完全に使用し得るようになり、力學と化學とは自然の力をそれに隷し、信用は幾多の障碍に打克つことを得せしめた。一言を以つて云へば、自由社會を幸福なるものたらし可き　物質的條件は十分に與へられるようになつて。——然れども、見よ、古き不正は單に新しき窮迫によつて代位せ

られたに過ぎない。從來法律上の特權の犧牲となつて居た勞働階級は、今や事實上の特權の餌食と化し、而して此の事實上の特權は、時には、特權者自らに對してさへも、破壞的暴力となるに至つた。（Zur Beleuchtung der socialen Frage. II. T. 1885. S. 166）□彼又た云ふ「勞働者も亦た獲得自由の制度に對して感謝す可く多くのものを持つ、佛國のエコノミスト（フヰジオクラット の事）やアダム・スミスが、人格の自由は、經濟上有用なりと立證したことは、其れを以て正義なりと教へた同世紀の自然法學者の說よりも、遙かに多く、人格の自由の附與を促進したは事實である。自己勞働の自由選擇てふ一事は、勞働者に取つて、決して輕視す可からざる賜である。又營業の強制を廢して、資本に自由活動を與へたことも、時には、勞働者に對する需要を增し、之れに支拂はるゝ勞銀を引上ぐる作用を生ずることゝもなる。此等皆人格自由の原則の賜である。併し乍ら、其賜は、此れ丈けに止り、其以上には何もないのである。アダム・スミスの經濟學體系位、前世紀の單に否定的なる性質をよく代表して居るものはないのである。自然國法は、顚覆された狀態の上に立つて、新しい秩序を作り出す可き力を産み出すことを避け得られないのに、自由流通の原則は、單に古きものを撤廢するを以て安じて居た。此の原則は、唯だ白紙狀態を現出したに過ぎない。其れは、産業上の自然狀態を將來したに止まる。而して、其れによつて、流通の全指導權は全然、利潤收得財産（不勞所得收得財産）の手に歸した。自然狀態なるものは、必ず強者のみ權利を有つ狀態であるから、此狀態の將來によつて、作り出されたものは、利潤收得財産の專制制度それであつた（一八三七年稿『勞働階級の要求』前揭書二一一至一二頁）と。

私は、私の見解が孤立的のものでないことを明かにする爲めに、佛獨兩國の社會主義的思索の出立點が、ブルヂオア社會の矛盾と之を除去せんとする要求とに依存することを示めす以上の發言を茲に援引したのである。マルクスとエンゲルスとのみが知られ、ロドベルトスさへ、小泉教授の若干篇を除いては、之を顧みるものなく、況んやルイ・ブラ

ン、コンシデラン・フリエー、サン・シモン、殊にプルドーンに對して何等の理解を有たざる流行社會主義學者の所說が餘りに偏狹なることが、此の若干例によつて暗示せられ得るとするならば、其れは、寧ろ望外の幸と云はねばならぬのである。

(十一)

自由獲得の社會が其の根基とする經濟財の自由獲得即ち營利の自由は、其社會に於ける各個人の全生存の中核を成すものである。否自由獲得は、實に個人の存在の自己目的である。何となれば、自由獲得こそは、此社會に於ける各個人の全發展、全享樂を左右するものであるから。此自由なく、各人の上に其の意思とは獨立なる上級的意思が支配するときは、各人は其生存の根底と其の個人的獨立とを脅されるものと云はねばならぬ。而してナポレオン政治は、實に斯の如き脅威を意味するものである。何となれば、ナポレオンの政府は人民とは全く隔絕し、其れ自らに生くる純粹の國家秩序であつたから。ナポレオン時代を特色付ける社會と國家憲法との分立は、此點に於いて、自由獲得が國家權力に對しては甚だ不自由であつたと云ふ大なる矛盾によつて伴はれて居たのである。

此の矛盾を釋くの道、換言すれば、自由獲得社會を包含す可き國家憲法の改造は、唯一つあるのみであつた。曰く、其れは、國民が國家意思の形成に有機的に、認められたる機關として、參加すること是れである。獲得行爲者が自ら進んで國家意思を支配する事によつてのみ、自由獲得の原則は、自己支配的のものとなり得る。而して、獲得者の國家意思への參加の機關は、憲法によつてのみ作られ得る。此の機關を認め之を創造すべき憲法の改造は、實に第一の緊要事とならざるを得ないのである。自由獲得社會は、一定の社會秩序として、之れに應ず可き獨特の性格を有する。此性格

は、又自ら憲法の上に表はれることを免れ得ない。

其性格の第一に要求する所は、強固なる國家權力（專制權と混同してはならぬ）である。此の要求は、憲法の要求を條件付け又之を拘束する。從つて其の憲法は、自由獲得が、國家意思に、有機的に參加することを公認するのでなければならないと同時に、他方に於いては、斯く參加することによつて、國家權力の獨立性を傷けてはならないのである。此の認承が、自由獲得社會を、一方は獨裁專制政治に對し、他方は、純民主政治に對し、判然と區別せしむる所以である。自由獲得社會の要求する所は、人格たる國家權力の獨立性を傷つくることなくして、人民代表が國家意思を支配すること、是であるのである。此の根本要求から、二個の原則が生ずる。即ち、國家元首——君主たると大統領たるとを問はず——の不可侵性及責任不擔制度と國務大臣の直接責任制度と是れである。

國家元首の不可侵、無責任の原則は、此點から觀察して始めて其の眞意義を悟ることを得るものである。責任内閣の制度は、國家意思の實現が、議會に於いて自己支配者として顯はるゝ社會の意思と分離して行はるゝとき、換言すれば、國家意思が、社會全部の意思でなく、社會の一階級の意思とのみ合致して發現するとき、現實の意義を有するに至るのである。國家意思が一部特定の階級の利益のみを目標とする傾向強ければ強きほど、責任内閣の制度は有意義となる。無責任の三菱内閣、無責任の貴族内閣なるものありとしたならば、其の懸念、此の危險は誠に端的現成のものとならざるを得ないのである。責任内閣制度は、かくて、其本體は、一國民中に存する社會的に種々多樣なる諸秩序の鬪爭舞台と見る可きものである。責任制度なき國家が、自由獲得社會を包擁して居るときは、國家は、概ね常に其の憲法の實質を失ひ、社會中一小部分の利益の爲めにのみ存することゝなる危險を免れ難いのである。國務大臣責任制度を以て、單に國法上の、法律上の事柄となし、其の社會的、經濟的意義を悟らざるは、大なる誤である。經濟社會は、元首

の不可侵性と國務大臣の責任制度とを有せざる憲法を甘受することは、到底出來ないのである。是れが、ブルジオア社會を容る可き國家に對して要求せらる可き第一原則であるのである。

（十二）

第二の原則は右と反對に、下人民に對する要求より成るものである。人民代表制度の根基は、社會に於ける自由獲得である。從つて、人民代表への參加の條件も、亦た自由獲得の本體から與へられねばならぬ。財の獲得には二つの要素がある。一は勞働であり、二は資本である。此二つの要素結合せざれば、眞の自由獲得はあり得ない。從つて、ブルヂオア社會に於ける人民代表は、勞働と資本とを財産に結合するもののみ、之れに參加するを得と、憲法は規定するを常とする。此規定は、自由獲得社會の本質より生ずる必然の結果であるのである。勞働と資本と結合して始めて、此社會に於いて一定の地位が得られ、それによりて、人格本來の任務が盡くされ、而して、此の社會が人民代表を選出するのである以上、勞働と資本と二者合して始みて、人民代表への參加權が與へられるのである。單に勞働丈けでは、經濟個人の全體を包含する完全平等人格性を爲し得ぬからである。此くの如くにして、公法上に於ける完全なる法律上の平等は、一の重要にして特殊的なる制限を被むることとなる。即ち資本を有する勞働者のみ法律上の平等を享受するを得ると云ふこと是れであつて、此の制限的平等は實に、凡べてのブルヂオア社會の特徴たるのである。資本を有せざる勞働者は、公法の眼には、完全人格として映じない。ソコデ、等しく國民であり乍ら、公法は、玆に二大階級を峻別することとなる。曰く有權者、曰く無權者。而して有權者のみが、公法の認むる國家市民——國家の意思決定に參加する市民——と呼ばれるのである。國家と社會とは此くして一致を見出したと云ふけれども、其れは、恰かも、希臘の喩話にあ

る王の作つた石の寢床同様のものである。王の作つた石の寢床は、餘りに小にして、それに乘り切らぬものが澤山あつた。王の臣下は、寢床を改造す可きやを伺ひ出でた。王臣下に答へて曰く、否、改造の必要なし、寢床より足のハミ出づるものは、其ハミ出づる部分丈け、人民の足を切斷せよ、然れば、寢る者と寢床とは一致するに相違ないと。

かくして、國家市民――公民――國家は成立する。經濟社會に於ける獲得の一要素たる財産の所有が、國家意思の決定に有効に參加する權利を公認せらるゝにより社會と一致すると考へられた國家は玆に成立し、經濟社會に於ける支配力が、同時に、國家の法制に於ける支配力となつたのである。此によつて、憲法と國家市民制とは、互に相制約するものとなり、元首不可侵の原則、大臣責任の制度は、相共に其運用を保障し、而して議員選擧法は確立せられる。

玆に於いて起る問題は、公民權授否の標準たる可き獲得所有の存在は、如何にして、之れを知るやの一事是れである。此れには唯一つの方法しか存せぬ。曰く、國家に對する納税之れである。何となれば、獲得所有が國家に對して存在の意義を有するのは、畢竟其れが、國家へ其獲得分の一部を納付するからであるから。國家への納税――直接國税――はかくて、獲得所有存在の表徴として、人民代表への參加の條件とせらるゝに至るは、當然と云はねばならぬ。納税は、自由獲得によるブルヂオア社會と國家意思との合致を表徴するものである。而して、此點に於いて、ブルヂオア社會の憲法は、デモクラシーの憲法と分明に判別せられる。デモクラシーは、普通選擧權を要求する。其意味は、納税による有權、無權の別を撤去することによつて、勞働を以つて社會の唯一の要素たらしめんとするにある。デモクラシーは、ブルヂオア社會と幾多の小さい點に於いて共通であるけれども、其本質に至つては、全く相異るものである。其本質的差違は、一見小事の如くである納税資格の制限（タトヘ其れが三圓であつても一圓であつても）の有無から生じ來るのである。此制限は、自由獲得社會に於いて、絶へず新たに發生しては消滅する所の單純勞働力對所有の差別を、單

に抽象的なる差別たるに止まらしめず、之れに具象的、實體的なる表徴を附與するものである。之れによつて、所有と勞働とは、的確に現然と區別せられ、國家意思の決定へ參加するものとせざるものとの別が判然と定り、かくて、ブルヂオア社會は、此點から見て、二つの本質的に相異る階級に分れ、一階級は、國家支配に參加する支配階級となり、他の階級は毫も之れに參加せざる單なる從屬階級となるのである。但し個々人に就いて云へば、此差別を踰越し、一階級から他階級へ進入することは無論可能であるが、階級其のものが儼として差別的存在を有つことは、毫も之れによつて影響せらるゝことはないのである。

（十三）

ブルジョア國家の憲法は、人格としての國家權力を認めることによつて、國家權力を人格として認め、其れに獨立の意思と獨立の行爲とを承認したのである。然るに、其憲法が、元首の行爲は、凡て責任大臣の副署を要すると規定することによつて、元首から獨立人格要素を取り去つたのである。其の憲法は、元首に要求して、社會に於ける一切の徒黨の上に超然として立ち、諸黨派の鬪爭を監視し、其れが過度に亘るときは、之を鎭壓す可しとするは、元首をして、人民代表の上に立つ獨立の要素たらしむる所以であるが、其反面に於いては、元首は、議會に代表せらるる多數の意思のみを執行すべしとするは、元首をして、議會に於ける多數を制しつゝある社會一部の權力の道具たらしむる所以である。元首を以つて、絕對的に不可侵なりとし、一切の國家權力の源泉なりとするは、人民代表が此の權力の濫用を妨ぐ可き權利を奪ふことである。何となれば、元首の不可侵性は、其れによる法の侵害を不侵害とするものであるから。然るに、元首が憲法を認め、之を人民の權利と認むることは、元首の不可侵性に對向する第二の不可侵性として、憲法の

不可侵性を認むる所以である。不可侵なる法！而して不可侵なる法の侵害を、侵害者に向つて、法の侵害として追窮し能はざる法！　この二者の併立共存は、是れが、所謂立憲制の憲法の基調を爲すものである。之を矛盾と呼ぶ能はずとするも、少くとも其れは永久に釋けざる錯綜思想の産物と云はなければならぬ。形式法理にのみ沒頭する人の思想には、此の亂麻を絕つ快力は含まれて居らぬのである。

乍併、我々は、一歩退いて考へて見なければならぬ。國家と社會とは、相互に矛盾することなきに至るとき、國家及社會てふ一體は、其他の一切體と相矛盾することを免れないのである。言ひ換れば、矛盾は、國家と社會との間にのみ存するのではない、矛盾は人性其のものに存して居るのである。國家と社會との矛盾は、より大なる矛盾を、小なる矛盾に結晶體現したものに外ならないのである。より大なる矛盾は、普通人格と個別人格との間に存する。個人性を犧牲とすることなくして、此の矛盾を有たざる憲法なるものは、到底考へ得られないのである。人間の政治的團結は、此の矛盾を包藏せずしては、生きたるものたり能はないのである。立憲政治とは、人格國家と社會との對抗の一特殊形態である。此對抗形態が善きか惡きかは、主要問題ではない。其形態の下に於いて、國家と社會とが、如何程よく、互に他を敬重し、他を維持するに貢獻するかが根本問題である。此く意識することが、憲法の眞の力であつて、憲法の形式如何に其力は存するのではない。其れと同樣に、所謂立憲政治の眞正究極の危險も亦伏在して茲に存することを忘れてはならない。

立憲政治國家は、此く二つの異れる要素の對抗と共運動とから成るものであるによつて、一方の行動にして、他方の滅亡を將來す可きものあるときは、國家の全生存は忽ち危殆に瀕するを免れないのである。如何に周到に考へ盡した國法學の法理を以てするも、此の運動に限界を設定することは、不可能である。何となれば、其れは如何なる意味にして

も、法理的現象ではなく、社會的又た直に經濟的の事實より起る現象であるから。法制局や行政裁判所は、此の限界設定に對しても、將た亦た權限踰越に對しても、全然無能無力であるのは、當然の事である。國家生存の破滅を將來せざる可き權限の遵守は、此二要素自ら之れに當るより外に道は存しないのである。矛盾對抗の協調的處置は、國家生活の經驗より來るのでなければならぬ。私は近來流行の『生の哲學』てふ造語を模倣して之を『國家の生の哲學』 Philosophie des Lebens des Staates と名けんと欲するものである。

國家に於ける此の二つの要素が協調を缺き、一方が他方を全く壓抑し去るに至るとき、其處に、矛盾は公然と爆發して革命となる。其れは、畢竟するに、社會が其敵となれる國家權力に對し鬪ふべく蹶起することとなるのである。シャール王が、一八三〇年七月二十五日、出版の自由を撤廢する勅令、議會解散の勅令、新選擧法發布の勅令の三勅令を發布したのは、切迫せる形勢を促進すべく、元首自らイニシアチーヴを取つて、革命を爆發せしめたものである。三勅令の具體的內容は必ずしも、革命を招致せねばならぬ底のものではなかつた。唯だ之れによつて、シアールは、人民代表を無視して立法することを、公々然明白にして、進んで挑戰したものとして、重大な意義を有するのである。換言すれば、ブルヂオア社會の根底に橫はる矛盾を、國家意思の社會征服によつて、除去せんとし、其社會に向つて、宣戰したものである。然るに、挑戰者は、僅か三日の內に、大敗北を招き、王は廢位せられ、人民は大勝利を占め、封建社會は茲に永久に葬り去られた。之を『七月革命』と名ける。一七八八年以來繼續した封建社會、身分社會と、自由獲得社會との矛盾は、かくて、一擧にして掃蕩せられた。一度發見せられた『社會』は、此四十年間幾多錯綜せる徑路を辿つて、此に一段落を告げたのである。發見せられた『社會』は、茲に全勝を占め、十分に成熟した巨人として、堂々濶步することとなつた。然らば、此社會は、最早何等の矛盾を包藏せず、國家容器と完全なる一致を見出すものであるか、否か。

此問題の解答は、即ち一八三〇年より一八四八年に至る十八年間、ルイ・ブランによれば一八四〇年に至る十年間の社會思想史と社會運動史とが、之を與へたのである。

(十四)

財の獲得の要素は、材料と勞働である。材料は若干の人のみ之れを有するが、勞働力は凡ての人之れを有つ。勞働力の行使によつて、材の獲得に到達するには、勞働は必ず材料に須たなければならない。元より材料も亦勞働の助を藉らなければならない。乍去材料を有する勞働力は自足し得るけれども、材料を有せざる勞働力は自足することが出來ない。從つて材料の所有者は、自己の勞働に依頼せざるを得ないは勿論であるけれども、必らずしも他人に依頼するを要せぬ。彼は他人との關係に於いては、自足的であり、從つて獨立であり得るのである。之れに反し、勞働力のみを有し材料を有たざる者は、必ず材料の所有者たる他人に依頼しなければならぬ。從つて、彼は、自足的たるを得ず、又た他人に對して、獨立なるを得ないのである。單に個人的欲望の爲めにのみ、材料に勞働を施すによつて營まれる財の獲得、其獲得財の個人的充用は、欲望、獲得、充用の三段より成る一系列を作る。之れが經濟の最根本的の形態である。此形態の支配する社會には、支配者たる材料の所有者と、從屬者たる勞働者との二つの階級のみが對立する。之れが最始の經濟形態である。之れよりより一般的にして又より高き第二の形態は、勞働と材料との結合たる生產力が、材料所有者勞働者の個人的欲望の狹い範圍を脫出し、主として、他人の欲望の爲めに生產する形態之れである。此形態の下に於いては、材料と勞働の充用は新なる面目を帶びる。特定確固の個人欲望は最早其標的でなく、廣き市場の需要が其對象となり、使用價値は交換價値によつて代位せられる。此の運動の全體を稱して流通と云ふ。此の流通經濟に於ける

財の獲得は、自己生産でなく、企業である。企業は、孤立する限り、十分の發展を成し遂げ得ぬ。企業の世界は、共存共榮の世界でなければならぬ。かくて、經濟生活の新紀元が來る。

新紀元の特長は、各種の企業が、相互に條件付け合ふ大なる流通の有機的組織の成立すること是れである。其れは、他の企業の爲めに働く企業の發生によつて導き來られる。企業の爲めの企業、之れを名けて機關企業と云ふも差支ない。大なる流通企業組織は機關企業の成立なくしては成り立ち得ぬものである。此の大なる流通企業組織を稱して營利の組織と云ふ。營利の組織は欲望、獲得、充用てふ單純なる一系列よりのみ成る經濟形態を驅逐して、全く新なる面目を我々の經濟生活に與へ、凡ての經濟價値の價値變化（ウムヴェアトング）を將來する。營利は一方欲望を充足する任に當ると共に、他方絶へず欲望を喚起する大作用を爲すものである。欲望を充すべきものは皆商品となると共に、其の商品を買ひ得ん爲には、自己の有つ材料なり勞働なりは又た商品として賣られねばならない。材料又は勞働を商品として賣り得る度合が、價値の度合となる。其價値は必ず貨幣に見積られ、貨幣に換へられるものでなければならない。かくて、凡ての人は、其所有、、其勞働を常に貨幣價値の稱呼に於いて、評價することになる。企業は、最も純粹に貨幣價値の指導を追蹤せねばならぬものである商品其のものゝ品質は從たる地位に下り、貨幣價値の收得即ち利潤の大小のみが、企業の生命となる。貨幣は、營利經濟の成立前、既に久しい前から存在して居た。乍去、營利社會の成立を待つて、故に貨幣は、財獲得の全活動、經濟生活の全體に對する統制者、命令者、指導者となるに至つたのである。營利の觀念なくしては、貨幣の貨幣性は發揮し得られないのである。

貨幣は凡て誰人かの所有の中に存する。誰人も有せざる貨幣なるものはない。乍去、營利的企業の手に於ける貨幣は、一種特殊の任務を持つ。企業は、常に大なる貨幣量に對する規則的、不可避的の需要を有つ。從つて此の需要を充たす

爲めに特殊の機關が發生する。即ち、貨幣財産を蓄積し、之を一定の利子に對して企業の求めに應じて用立つる機關是れである。換言すれば、最狹義に於ける資本たる貨幣資本の流通機關是れである。其機關は亦一の獨立なる企業として運營せられる。其れは即ち銀行である。

（十五）

企業の存在と其の繁榮とは、一に貨幣によつて左右せられ、而して此の貨幣は、銀行若くは、貨幣資本主の手に集中せられて居るが故に、營利社會の發達すればするほど、一切の企業は、其等の人々の手にある貨幣資本によつて支配せられることゝなる。リーフマンが『貨幣資本主義』と名つけたものは、即ち之を指すのである。私は、『貨幣資本主義』なる造語を以て、甚だ誤解を惹き起し易きものとして之を斥ける。何となれば、其の貨幣資本主義なるものが初めて眞の資本主義であるのであり、否、其れは、寧ろ、資本主義の第一期を形づくるものであると信ずるから。リーフマンが『貨幣資本主義』の前に置く所の『物的資本主義』なるものは、實は、單に自由獲得の經濟社會の謂に外ならないのである。貨幣資本の支配の下に於いて、初めて、凡ての企業の資本支配が實現せられるのである。所謂物的資本は、未だ一切の企業の死命を制する底に勢力を有つて居たものではない。

貨幣資本の企業の支配は略ぼ次ぎの如くにして成立する。材料と勞働力とを相應に所有する企業も、貨幣資本の助によつて、生産過程の費用を支辨し得るに非れば、利潤の潤澤なる收得を爲し得ざるものである。貨幣資本の潤澤なる供給を受け得ん爲めには、企業者は、貨幣資本所有者の要求する條件を甘受しなければならない。其條件は、資本利益の擁護に要せらるゝ條件に外ならない。其第一は、一定資本の供給に對して、必ず其價として、一定高の利子を支拂ふと

云ふこと是れである。利子の支拂は、各企業者が企業經營の前提條件として、シネ、クア、ノンとして甘受せざる可からざる事である。此條件を充たす爲めには、企業者は次の二事の内何れか一を爲さねばならない。（一）利子額丈け、其賣る商品の價格を其價値如何に拘らず高むるか（二）若くは、利子額だけ自己の收得する利潤額を減ずるか、是れである。（一）の方法は遙かに單純なるが如くに考へられよう。併し乍ら、自由獲得社會の激甚な供給競爭の下に於いては、これは、事實不可能な場合が多いのである。之を免るゝ道は、貨幣資本の所有者が、自ら企業經營者となるか、若くは、企業に參加し、又は之をコントロールすることによつて、利子の收得者と利潤の收得者との二つの資格を單一の手に併合することと是れである。かくて、資本なき企業者は、資本を有する企業者の競爭に對抗し得ず、企業の死命は、貨幣資本主の制する處となる。第二の方法は、實行遙かに容易である。即ち殘高所得たる利潤の高が如何なるものとなるを問はず、商品の賣價中より、支拂利子額を控除すること是れである。此方法を取る企業者は、資本家にして企業者たるものの競爭の爲めに害せられることはない。何となれば、後者は、投下資本に對する利子を收得した上に、更らに、資本なき企業者と一列に、同樣の利潤を收得するものであるから、資本を有する企業者と之を有せざる企業者との差違は、投下資本の利子を收むるか否かにのみ存し、企業者としては、二者何れも、ハンデキヤツプ付けられることとないものであるから。從つて、資本を有する企業者が之を有せざる企業者を壓迫すると云ふ處も起らないのである。

併し乍ら、企業には、必ず資本を要するものであつて、自ら之を有せざるものは、他人に就いて、之を借入れなければならぬものである。從つて、自ら要する資本を作り出し得る企業は、之れを作り出し得ざる企業に比するときは、より獨立、より安全なるものと云はなければならぬ。一切の企業は、此く獨立に、かく安全にあらんことを欲するは、理の見易き所である。換言すれば、一切の企業は必ず其の投下資本の償却を其主要目的の一とするものである。ケネーは、

既に其の『經濟表』に於いて、此理を明白に暗示して居る。而して、投下資本（ケネーの所謂『アヴアンス・プリミチーヴ』）の償却を爲し得る方法は唯一しかない。即ち企業者が、其一切の生產費と資本利子とを支辨した後、猶ほ資本償却用の資本積立てを爲し得る丈けの企業利潤を收得すること是れである。企業を獨立安全ならしめ、企業の自由を確保する爲めに必要なる投下資本の償却が可能なりや否やは、此くの如く、一に企業利潤大なりや否やに依存するのである。然るに、資本を有せざる企業者の列へ、資本を擁する企業者が加入するときは、後者は、此の投下資本の償却の爲めにする資本積み立ててふ強制的必要を持たざるが故に、企業利潤を低く見積ることを得るによつて、前者に對して打ち勝ち難き強敵となるを免れない。資本を有する企業者は、其收得する利子を以て、自己資本の增殖を爲すことを得るものであるから、企業利潤の中には、資本增殖、又は償却の爲めに要する部分を含ましめずとも、猶ほ且つ絶へず、其所有資本を擴張し行くことを得るのである。之と競爭せねばならぬ資本なき企業者は、其の競爭の相手以上の利潤を見積ることは出來ない。然らざれば、彼の商品はより高價のものとなつて、競爭に打負かされるに極つて居るから。故に資本を有する者が企業者の仲間に侵入し來ることは、資本なき者の企業の發生を妨ぐるか、然らざるまでも、其等の企業者の手に於ける新資本の形成を不可能ならしめて、永久に獨立の地位に進むこと能はず、絶へず銀行其他の資本家に對し從屬的地位に彷徨せしむるに至るを免れないのである。かくして、二様の意味に於いて――同列の資本的企業者の支配と、企業界外の資本家の其資本企業に對する支配と――資本は企業を全然支配し、其の生殺與奪の全權を掌握することとなる。資本家以外の手に於ける新資本の形成は、多々益々困難、否、不可能となるによつて、此の資本的支配は、又た愈々獨立的、排他的のものとなり、既存資本のみ獨り肥へ且つ太ることとなり、一社會の企業、其の企業利潤は悉く、其支配の下に立つこととなる外はないのである。かくして、自由獲得社會は玆に一變して、『資本的營利社會』に化す

るのである。『資本主義』と云ふ造語に、學問的妥當性を附與するものは、此の資本的營利社會の概念である。而して、其れは、佛蘭西に於いては、一八三〇年の七月革命から一八四八年の革命に到る間に於いて完成したのである。英國も亦粗ぼ同様である。但し、アダム・スミスを以て、資本主義の代辯者と爲す人々には、此間の消息は到底諒解し得られる見込のないは、言ふ迄もないが、其れは緣なき衆生致方もないことである。

（十六）

資本的營利社會の成立には、（一）銀行業の企業に對する活躍と（二）企業其れ自らに於ける資本の活躍との二つが重大なる關係を有つ。此二つの活躍は、企業が既に稍々久しい存在を有つ處でなければ起り得るものではない。企業が久しく存續した處でなければ、銀行業の利潤は、安定にして而も且つ大なるを得ず。從つて其の資本の蓄積が、企業の需要を超過することを得ず、又た企業に投下する資本が、普通銀行業務に充用するより、より大なる利潤を産むことは出來ない。銀行の手に蓄積せられる資本大であり、之を企業に投下するに對する利潤が、他の投資に於けるよりも、大となるとき、自由獲得社會は、當然消滅し、茲に資本的營利社會が起る。何となれば、單に自由に財を獲得すると云ふことは、茲に至つては、最早經濟生活を統制する力を失ひ、資本の增殖、其の爲めの餘剩（利潤）獲得が統制者となるから。かくして、支配者たる資本增殖の力と、被支配者たる企業及勞働とが、對立せる二大陣營を形つくり、前者は、十分に獨立と自由とを享受し、後者は自由も獨立も之れを有たず、否、殆んど絶望的に之を得るの日を、逆睹し得ないこととなる。所有と無所有、材料と勞働、所有による支配と所有なきための從屬との對立は、長き徑路を經て、茲に有資本對無資本の對抗に進展し來つたのである。資本的營利社會は、自由獲得社會が、早晩進み來る可き一境界であ

る。**其成立の端緒は、自由獲得社會の成立と共に與へられてある。各人の財の獲得が自由なる可しとの原則は、社會と經濟生活との實際に調育せらるるとき、必然的、**不可避的に、資本所有の全經濟生活と共運動、而して全社會に對する**優越支配權の設定を招致せざるを得ざるのである。**

(十七)

貨幣資本は勞働から發生したものである。けれども、貨幣資本と云ふ定まつた形を取るようになると、其れは、勞働**及び勞働による財の獲得とは、正さに對抗の地位に立つに至るのである。**其故如何。貨幣資本の充用、即ち貨幣取引の運營は、決して簡單、單純なものではない。(一)其の生命は計算にある。計算は純然たる精神的の仕事であつて、勞働とは著しく趣を異にするものである。(二)其は自ら生産するものでなく、他人の生産に手段を提供するものであるに拘らず、最大の利潤を獲得するものである。故に資本の存する處、一切の勞働に與らずして、安固なる生存を確保し、高き社會的地位を占むること可能となる。封建時代に於ける土地所有と共に、貨幣資本の所有は、最も確實なる不勞所得の源泉となるのである。從つて(一)資本所有は遙かに尊敬せられ、勞働による財の獲得は輕視せられる。殊に勞働者は、資本家に從屬の關係に立つが故に、勞働と云ふことの一切を直ちに從屬的行爲と考へしむるに至る。從つて、自由獲得社會一變して、資本的營利社會となるや、資本を有たざる企業者は、極度の努力を捧げて、投下資本償却の道を得んが爲めに、新販路の開拓、新發明新工夫の成就等により、企業利潤の增大を圖る。然し其れは、多くは初期のことであつて、資本的營利社會が完成する曉には、其の餘地は段々狹くなる。ソコデ、他に利潤增大の道を求めなければならなくなる。其れが即ち、投機の勃興となるのである。正當なる企業の經營によつて求め得られざる大なる利潤を、取引

所投機其他の投機によつて獲得せんとする傾向が增大する。少數の成功者、若干の成金は、衆人羨望の標的となり、其蔭には、無數の倒産者、落伍者あることは、殆んど忘れられるに至り、人生萬事を擲げて、資本の增殖の爲めに貢獻することとなる。(二)凡ての企業は、其商品の價格を低廉にして、他の競走に打克つ必要に迫らるゝにより各種の不正行爲を辭せざるに至るが、其は永續的の手段ではない。ソコデ、彼等は、唯一の可能を捉へる。其れは言ふ迄もなく、勞銀の切り下げである。勞銀の切り下げは、必ずしも、支拂勞銀率の切り下げにのみよつて行はれるのではない。否、公稱勞銀率は或は之を引上ぐることによつて、却つて實際の切り下げを行ふ工夫は澤山に案出せられる。殊に請負給、出來高拂、各種の獎勵給制度の如き勞銀形態の按排、並に利潤分配制度、出來高利益分配制度、或は能率增進法、科學的經營法などの名の下にも行はれる(其等に就ては拙著『社會運動と勞銀制度』を見られたし)、約して云へば、勞働の絞り取りが著しく促進せられるのである。資本の全體的支配は、勞働の絞取りなくしては維持せられないのである。是れが成立したる資本的營利社會の體様である。然らば、此の社會の國家に對する關係は如何。

(十八)

資本的營利社會は、自由獲得的社會と共に、法律上の平等と産業上の自由との上に築かれたものである。乍去、其の現實の秩序は、獲得によつて得られた所有によつて定められる。此社會に於ける支配階級は、獲得と所有との上に、其支配權を置いて居るものである。而して其れによつて、國家權力を掌握して居る。從つて、其國家權力の支配も亦た以上の二要素の上に立脚せねばならぬ。然らざれば、彼等は、自家撞着に陷り、遂に其支配權を滅すこととなるであらうから。

法律上平等の原則は、繰返して云つた如く、消極的なものである。産業自由の原則は、私人經濟と國家經濟との自治を前提とする。現實所有支配の原則は、現實の所有を、社會上の地位の條件とするのみならず、政權の行使の條件とする。從つて、資本的營利社會の國家に對する關係を決定する原則は、財産を以て之れに參加する條件とする國家經濟の自治、是れである。乍去、此原則は、決して、國家の本質にも、其の人格的生活にも關係して居らないものである。國家は、此原則によつて作られたものでなく、此原則の爲めに利用せられるに過ぎないものである。其利用の爲めに要せらるる條件は、(一)納税資格制限の下に於ける人民代表、(二)人民代表の豫算協贊權それである。自由獲得社會に、未だ支配階級が起らざるときは、此の一般原則丈けで事足りて居るので、政治の要務は、人民の代表と政府の重要機關との關係にのみ限られて居る。支配階級存せず從つて社會の凡ての部分が平等の階級に立つ限り、自治の機關中、其本質上、國家權力を獨占せんと努むる要素は含まれて居らぬ。故に資本の支配の未だ起らざる自由獲得社會に於いては、民選議員の任務は、主として、豫算協贊權の行使により國家行政に參加する一事に限られて居つて、國家生活の最高問題は、議會活動の主要對象とはならないのである。換言すれば、此狀態の下にあつては、國家の積極的權力は一に全く政府にのみ存し、社會は唯だ其の消極的方面に預るに止つて居るのである。然るに、社會中に支配階級が成立するに至ると、其階級は必ずや、國家の積極的行動を其手に收めんとするに至るのである。乍去、此目的を達する道行は、自由獲得社會と共通の地盤の上に立つものである。即ち、人民代表の制度とそれによる豫算協贊權の行使による外に道は存せぬのである。此二つによつて、支配階級は、國家の積極的權力を其手に收めんとするのである。支配階級は、人民代表の制を其儘に承繼し、唯其の運用を促進する。彼等は、決して、國家の人格的存在を否認することなく、自治の形態にも、顯著なる變化を惹き起さしめないで、國家權力の發動する一切の機關に於いて、國家權力を人民代表に服從せしめ

ようとするのである。人民代表と豫算協贊權の行使とによつて、社會の支配階級たる資本階級が、自由獲得社會に於いて既に與へられた國家機關と其權利とを通して、國の政府が侵すことなく、又た其の形態を著しく變ずることなくして、猶能く之れを自己支配の下に置く國家秩序、之れを名けて、近世的立憲政體と云ふのである。

（十九）

資本の支配を、國家生活の一切の機關に貫徹する第一の應用は、社會が國家を支配するに要する機關の形成それである。其機關は即ち議會である。自由獲得社會に於いて、其れは既に存した。併し、議會が眞に其機能を發揮するのは、近世立憲政治に於いて表はれた資本支配時代においてゞある。現實の獲得が支配階級を維持するのであるが故に、此現實の獲得のみが、國家意思への現實的參加の唯一條件たるのである。然るに國家に於ける現實の獲得の主たるものは、國民の納税である。殊に直接國税是れである。何となれば、間接税は消費に向ふものであるに反し、直接國税は、所有及所有の運用に課せられるものであるから。直接國税によつて、始めて資本所有が捕捉せられる。資本所有を捕すると云ふことが、直接國税のねらひ處であるのである。直接國税によつて捕捉せられた資本所有が支配する機關は下院である。近世立憲政體に於いては、上院を認めない、存在を認めても、之を第二位に置き、殊に豫算先議權は必ず之を下院に附與するは、一院であれ二院であれ、議會は財産議會、資本所有議會たる可きが爲である。世襲貴族の集團たらざる上院なるものは、封建議會と近世議會との間の中間的畸的産物であつて、正當に其存在の理由を有たざるものである。其れが、時ありては、國家權力を支配することのあるのは、アノマリーの亦た甚しいものであつて、決して永く繼續することは許されないことは、誰人も能く知る所である。（但し清浦內閣と研究會とは、それを、知らざりしか、甚

は、知つて、自らを欺いたものである）。

資本階級の支配を固定する議會政治は、二個の原則を守ることによつて、圓滿に遂行せられる。一は議會に於ける多數決の制度、二は國務大臣の議會に對する責任制度、是れである。多數決の制を擁護して、之れによる外、他に議會の意思を表示する道がないからだと云ふのは、極めて皮相の見解である。議員選擧權は、貨幣納税を基礎とするものであるから、其れは明かに、資本と資本的營利との利益を代表するものである。此の選擧權の行使によつて成立する議會は、社會の利益の代表者である。議會の權力は、一に此の事實の上にのみ立脚するのである。其結果として、議會に於ける多數とは、元より個々の表決權の數的多數たるには相違ないが、其れと同時に、最普遍利益の多數を意味するものである。資本的營利社會に於いては、經濟的利益が支配者であるから、議會に於ける多數によつて言ひ表さるゝ利益の多數は、絕對的に支配者たる可きである、何となれば、多數の利益とは、社會上の第一階級の支配利益を意味するに外ならないから。故に如何なる國家に於ても、如何なる憲法にても、自由獲得に發足する立憲政治國に於けるほど、議會に於ける多數の支配を、無條件的に認めるものはないのである。而して、此の多數利益を侵害することは、軈て、社會秩序の現狀に對する開戰の宣言、從つて革命の布告となるのである。

（二十）

此くの如くにして議會に於ける多數政治から、立憲責任政治の形態と本質とが決定せられる。此點を看過する者は、責任政治の本質を唯だ法理上に求むるの誤謬に陥るのである。乍去、法理上の責任は、多くは大臣の箇々の所爲に限られる。此意味にての法理上の責任を問はるゝが如きは、低能なる大臣にあらざる限り、殆んどあり得ないことである。從

て其れは殆んど有名無實の事に屬する。大臣責任の眞意義は、更らに深く遠い處に存する。其れは何であるか。答へて曰く、責任制度は、行政部が非立憲違憲の事を犯さゞるを要求するに止まらない。其期する處は、行政の全體が議會に多數を占むる支配階級の意思に違背せざることと之れである。政府の施政が支配多數の利益と合致せん爲めには、行政の原則が、先第一に、支配階級の利益増進を以て國家行動の主要任務とすることを要する。而して、議會に於ける多數黨は、同時に利益上の多數黨として、最も善く此利益の那邊に存するかを知るものであるが故に、如上の目的を達する爲めには、行政は、必らず議會の多數を追從して運營せられねばならぬとせられるのである。議會多數の欲する所が、行政の各部門に平等に實現せられて、其處に始めて、立憲的多數政治としての憲法政治が完いのである。之れに反して、議會多數の意思に反することを行政部が行へば、兩者の間に乖離が生ずる。然るときは、多數黨は、行政部と衝突することとなる。其の多數黨にして、例へば解散後も引續き多數黨たる場合には、其れは、社會に於ける支配利益と一致するものであるから、政府をして退却の餘儀なきに至らしめ、多數利益と合致する新政府之れに代るを餘儀なくすることとなるのである。何となれば、行政部の認容せられるは、社會に於ける支配利益に合するような政治を執ると云ふ條件の下に於てのみであるからであつて、支配多數が欲するより以上に長く其地位に居るのは、其存在の本義に反することである。其れが資本的營利社會の憲法に向つて要求する第一義であるのである。立憲責任内閣制なるものは、政府は議會多數によつて代表せられる支配利益の欲する政治を行ふ可しとする政體の謂たること、之れによつて明かであらう。之れによつて、社會と國家との協調が得られるのである。之れが、資本的營利社會が喚起した國家形態、政治形態としての立憲政治の事實上の眞相であつて、國法學の迂回的說明は、其の皮相を言表はすに過ぎないものである。

（二十一）

議會に於ける多數黨なるものは、單に政治上の現象たるに止るものではない。多數とは讀んで字の如く、數の多いと云ふことだけに意味が存するのではない。其れは、社會が、其支配階級を以つて國家權力の行使に參加し、これによつて、社會が國家を支配するに付いての一の有力なる機關なのである。故に、此意味に於ける眞の立憲政治の下に於ては、多數の支配と一致を缺くに至れる內閣は、即時に、其地位を去つて、支配多數と一致する內閣に、これを讓る可きものとされるのである。護憲と云ふことに、何等かの意味がありとするなれば、それは、此一事を擁護することであらねばならぬ。支配多數と一致せざる封建の殘物たる貴族內閣が恬として其の地位を固守することは、憲法の本質を辱することであるが故に、これに對して、護憲運動を起して、支配多數と一致する內閣にあらされば、誰人の推薦によるとも、其任に就かないようにしようと云ふことに外ならざる可きである。何となれば、責任內閣なるものは、常に必ず支配多數の欲するやうに政治を行ふ可しとの前提の上に立つものであるから、支配多數か欲するより以上に、便々と其地位にあるは、憲法の最重大の意義たる社會的意義を打破するものであるからである。其れは決して單に、國法學上の一問題たるに止まるものではない、憲法の條文解釋の一事實たるに止まるものではない。其れは、資本的營利社會と國家との關係、前者が後者を支配するは付ての根本秩序其ものを破壞する所以なのである。此の制度は、單に法律の制度丈けを以て擁護せられるものではない。憲法や條文に少しも違反せずして、此制度の實質を打破する工夫は種々あり得るのである。此の制度をエフエフチーヴに擁護し得るものは、社會に於ける支配階級の現實なる全能力でなければならぬ。此の全能力を伴はざる護憲運動は無意義なものであり、又た無力なもので、決して永く繼續し得るものではない。佛國

の七月革命は、支配階級に此の全能を與へた。さればこそ何等新しき法律の制定を見ずして、其の實質は、資本的營利社會の手に確實に移り行つたのである。而して、同じ形式は、最近英國に於ける勞働黨內閣の成立に於いて繰返された。プロレタリアは、少くとも、今日までは、其の國家との關係、交渉に於いて、殆んど常に、ブルヂオアジーの採つた形式と手段とを襲踏しつゝあるものなること、此一事を以つても窺ひ知り得るのである。革命を以て、街頭流血に伴はれねばならぬものとするの誤なることも、亦た此一事に依て察知せらるゝのである。資本的營利社會は、斯くの如き意味に於いて、嘗つては、革命運動の成就者であつたのである。然らば、此の社會に代位して起らんとする新社會の運動は果して如何なる行程を取りつゝあり、又た取らんとするものなるか。其れは、本論文の問題とする所ではない。私は、他日折を得たらば、更らに稿を重ねて其の行程に關する考察を開陳したいと思つて居る。

(終)

此論文を起草するに就いては、私は、プルドーンの諸著殊に Proudhon, Qu'est ce que la propriété? Avertissement aux propriétaires- Théorie de la propriété all Idée générale de la révolution au XIX siècle.-Edition A. Lacroix. 187[illegible] 及 Nouvelle édition de 1924. Marcel Rivière. 等から甚だ多く學んだ。又た、ルイ・ブランの Histoire de dix ans Edition Felix Alcan（無年號）と、ヂョレスの遺業 Jaurès, Histoire socialiste de la révolution française Paris. 1922 其他コン、シデラヤ及シュタインの諸著や、其れを祖述した R. Meyer, Der Emancipationskampf des vierten Standes Berlin. 1874 や、更に、ロドベルトスの諸書から得た處も亦た尠くない。（一三、七、七）

貴族院制度に付いて

美濃部達吉

一　二院制の本旨

代議制度の組織に一院制を可とするや二院制を可とするやは、立憲制度の歴史に於て、今日まで、幾度となく繰返し論ぜられた所である。一八六一年に初版を發行したジョン・ステユアルト・ミルの「代議制論」の中にも、既に『代議政治の理論に關する總ての問題の中で二院制の問題ほど多く議論せられた問題は無い』と曰つて居る。就中フランスに於ては、大革命以來、或は一院制を取り、或は二院制を取り、而して其の改革毎に兩者の理論上の可否や實際上の利害得失やに就いていつも激しい論爭が行はれた。殊に大革命直後の第一共和政府の憲法及び一八四八年の革命に依る第二共和政府の憲法には、共に一院制度を取つたことは、恰もイギリスに於てクロムウエルの共和政時代に一時貴族院を廢止して一院制度としたのと同樣であつた。其の主たる理論上の根據は、國民の意思を代表すべき機關は唯一つであるべきである。國民の意思が一あつて二なく、分割すべからざるものであるとすれば、之を代表すべき機關も亦二つに分たるべきものではないといふに在る。其の實際上の論據はさま〴〵であるが、就中、二院制であれば兩院の不一致の爲に立法が妨げられ易く、必要な改革を實行し得ない恨みがあり、又之が爲に全體としての議會の勢力を弱くする傾が有ることは、其の最も强い理由として主張せられた所である。併ながら今日の諸國の實際に於ては、ブルガリア、セルブ、クロアート、スロヴエーン、獨逸聯邦内の各小邦、瑞西聯邦内の各小邦といふやうな小さな國を除いて、稍大きな國では、殆ど例外なく其の議會制度に付いて二院制を取らないものは無い。フランスに於て二回の共和政府に於て一院制度を經驗したに拘らず、現在の第三共和政府は王政時代と同樣に二院制を取つて居る。

を始めとして、世界の各立憲國は君主政體であると共和政體であるとを問はず、又古くからの立憲國であると新しく憲法を作つた國であるとを問はず、皆二院制度を取つて居り、二院制は殆ど立憲制度の必然の原則の如くに看做されて居る。世界戰爭は多くの國の憲法に重要な變革を持ち來したけれども、議會の二院制に就いては、依然として舊の如く、戰爭後に作られた新興諸國の憲法も等しく同じ制度を維持して居る。

議會の二院制度が此の如く廣く諸國の共通の制度と爲つて居るのは、一つには代議制度の祖國たるイギリスの議會が最初より貴族院、庶民院の二院に分かれて發達したことが、其の一の原因を爲して居るのであるが、外の諸國に於て同じ制度を取るに至つたのは、決して單にイギリスの制度を眞似たといふに止まるものではない。イギリスの二院制度は寧ろ偶然な歷史的事情の結果であつて、意識した立法の結果ではないが、外の諸國では、何れも理論上及び實際上の可否得失を考察して、二院制を適當なりと認めて、立法に依つて之を定めたのである。言ひ換ふれば二院制度が廣く世界に通じて行はれて居るのは、決してイギリスに於ける歷史的發達の結果にのみ基いて居るのではなく、二院制そのものに一院制よりも優れた長所が有ると認められた結果に外ならぬことは明瞭である。

然らば二院制度には如何なる長所が有るかと曰へば、フランスの故エスマン教授は之を左の三點に歸して居る。

（一）立法議會の勢力が餘りに强大となることを妨げ、議會專制の弊を防止するを得べきこと、議會は立法權及び豫算議定權を有つて居る結果として、其の性質上政權の中心勢力となるべき必然の傾向を有つて居る。併しながら議會專制の弊害が決して君主や獨裁者の專制に讓るものでないことは、歷史の證明する所である。此の弊害を避くる爲には議會を兩院に分つことが最も適當の方法である。之に依つて議會は過大の勢力を獨占することが出來なくなり、行政權や司法權と對立して丁度適當の地位を有するに至るであらう。

（二）政府と議會との衝突を緩和し得べきこと立法權と行政權とは少くとも或る程度に於て分離せられて互に獨立の地位を有つて居るのであるから、其の間には衝突が起り易く、時としては避くべからざることが有る。此の衝突が餘りに激烈であると遂には暴力に訴へることともなり、憲法破壞(クーデター)にも導く虞が有る、議會を兩院に分つことは、此の衝突を緩和して成るべく平和の手段を以て兩者の調和を得せしむることに頗る有利である。何となれば、多くの場合に於て衝突は何れか一院と政府との間に起るのが普通で、此の場合には他の一院が其の衝突の極

度に達することを妨げ其の仲裁者の役目を行ふことが出來るであらうし、若し兩院が一致して政府に當る場合であれば、正理が議會の側に在るものと認むべきは當然で、勝利が議會に歸するのは國の福利に適するものと看なければならぬ、若し又兩院相互の間に衝突が起ることが有れば、政府が其の仲裁者となり得るであらう。

（三）議決の輕率と過誤とを避け得べきこと　總ての議決機關は動もすれば輕卒に誤つた議決を爲す傾を免れないものであるが、兩院制は明に此の危險を救ふの利益がある。若し一院制であれば、其の議決が直に法律となるのであるから、無思慮な惡法が容易に作られる虞が有るが、二院制であれば、一院の過誤は他の一院が之を正し、一院が輕卒に議決した事柄は他の一院が充分之を熟慮することが出來る。殊に議員の提出案は調査不充分の嫌あるものが少くないので、兩院が重ねて之を審議することが極めて必要である。議員の發議に基いて修正を加へる場合も同樣である。

以上はエスマンの説であるが、此等の三點の中、最も重きを置かるべきものは疑もなく第一の點に在るであらう。故ゼームス、グライス卿の名著「米國共和政」に於ても、米國諸邦の憲法が悉く二院制を取つて居ることを論じて『今日では二院制度の必要は政治學上の公理とも看做されて居る、其の理由は總て合議體は本質上輕卒、專制、腐敗に傾くべき傾向を有つて居るもので、之を妨ぐには必ず同等の權威ある他の一院の並立することを要するといふ確信に在る』と、曰つて居る。ジョン・スチュアルト・ミルも亦二院制の最も大なる長所は議會專制の弊を矯めるとなし、曰く『自分の判斷に依れば、二院制を有利ならしむる最も強い根據は、一人にもせよ合議體にもせよ、總て權力を掌握する者が自分以外に同意を得ねばならぬ者が無いことを自覺することから、生ずる、心理上の惡影響に在る。何人と雖も、假令一時的であつても、自分以外に他の者の同意を得る必要なく、自分だけの獨斷を以て萬事を決し得るやうな權力を有たしめてはならぬ。一院の多數黨が長い間絶えず多數を占めて居り、而して若し其の行爲が他の一院の同意を得るや否やを考慮する必要が無いとすれば、容易に横暴專制となることを免れない』と。

此の最後の論旨は理由のある説であつて、自分も二院制度の本旨は主としては多數黨の横暴を抑制せんとすることに在ると信ずる。二院制に反對する論者が國民の意思を代表すべき機關は唯一つであるべきであるといふのは一應の理窟の有る説のやうであるが、併し、それは衆議院が眞に適切に國民の意思を代

表し得る機關であることを前提として居るもので、若し一院だけでは到底完全に國民を代表することが出來ないとすれば、其說は全く成り立ち得ないのである。而して一院だけで完全に國民を代表することは、如何なる選擧方法を取るとしても、事實に於て全く不可能である。如何にして議院を最も能く國民を代表する者たらしむることが出來るかは、選擧法制定に付いての最も大切な問題であつて、普通選擧といひ、女子選擧權といひ比例代表といひ、何れも成るべく完全に此の目的を達せんとする考案たるに外ならぬけれども、それは唯比較的に適當なる方法たるに止まつて、如何なる方法を取つたとしても、選擧といふこと其れ自身が其の根底に於て救ふべからざる缺點を有つて居るのであるから、選擧に依つては絕對に完全な國民代表の機關を得ることは不可能であり、而も選擧以外の方法に依つては尙更之を望むことは出來ぬ。議會の權限を一院だけの專制に任かして置くことの不當なることは、茲に其の主たる理由を有つて居るもので、一院に於ける多數黨の橫暴を抑制すべき他の機關を必要とする所以も亦主として此の點にある。

それであるから第二院の任務は、第一院とは獨立して、第一院に於けるが如き政黨の爭の外に立ち、其の智識と經驗とを以て公正に且つ忠實に第一院を監視し、萬一第一院が正當なる判斷を誤り多數橫暴の弊に陷いつた場合には、之を抑制して其の再考を促がすことに在らねばならぬ。其の任務は殊に第一院に於て一の黨派を以て絕對過半數を占めて居る場合に於て大切である。何となれば多數橫暴の危險は此の場合に於て最も著しいからである。若し之に反して第一院に於て多數の小黨が分立し何れの一黨を以ても絕對多數を占める者が無ければ、第一院自身に於て既に政黨相互の間の抑制が行はれて、多數黨の橫暴を防ぐことが出來るから、第二院の任務は比較的に其の重要さを失ふであらう。若し又第二院の多數が第一院の多數と相結託し一の黨派を以て兩院を縱斷するが如きことが有つたならば、それは全然二院制度の本旨を沒却するものと言はねばならぬ。

二　第二院の組織

議會を兩院に分つことは右述ぶるが如く殆ど各立憲國に共通の制度となつて居るが、第二院の組織を如何に定むべきかに付いては、國に依つて大に其の制度を異にして居る。それには先づ聯邦的の國家と統一的の國家とを分つ必要が有る。

聯邦制度の國に於ける第二院は統一制の國の議會とは著しく其の形を異にして居る。聯邦制度の國は統一的の國とは異つて一の國家が更に多數の小國家（邦）から成り立つて居るのであ

るから、全國民を代表する機關が必要であると共に、聯合各邦の代表機關が必要である。それであるから聯邦國に於ては必ず第一院として國民の代表者たる議會を置いて居る外に、第二院として聯合各邦の代表者を以て組織する聯邦會議を置いて居る。それは聯邦に特有な性質から來る當然の必要で、此の二種の合議體は實は同じ議會を構成する兩院であるといふよりは、別個の性質を有する獨立の機關であるといふ方が寧ろ正しい見方である。アメリカ合衆國の憲法は元老院と代議院との兩院を以て合衆國議會（コングレス）を構成するものと定めて居るけれども、其の實は元老院は聯合各邦の代表議會であり、代議員は國民の代表議會であつて、其の性質を異にし、其の權限を異にして居り、隨つて又元老院のみを以て單獨に開會し得る場合を認めゐる。獨逸に至つては、革命の前後共に、聯邦會議たる「ライヒスラート」（舊制では「ブンデスラート」）と國民議會たる「ライヒスターグ」とが全然別個の合議體であることを初より憲法上に公認して居る。其の他の聯邦國に於ても略同樣である。要するに、聯邦國の第二院は他の國の第二院とは全く異つた必要に基いて出來て居るもので、之と同一には論じ得べきものではない。

統一制度の國では、之に反して、兩院は共に國民代表の機關たることに於て、其の性質を同じうするもので、唯一院だけでは完全に國民代表の實を得ることが不可能であるから、別に一院を設けて成るべく其の缺點を補はうとするものに外ならない。それであるから、聯邦制の國に於て、兩院の組織が自ら其の性質に依つて定まり、國民代表の議會は全國民から選擧し、各邦代表の會議は各邦から選擧するといふことが、先天的に定まつて居るのとは異つて、第二院の組織に付いて、性質上必ず斯く有らねばならぬといふ一定の制度は存在しない。

統一制度の國に於ける第二院の組織に付いての諸國の制度には、凡そ二種の型を分つことが出來る。其の一つは全然國民から選擧する方法を採らず、貴族又は勅任議員の類を以て組織するもので、之を貴族院式又は舊制度型の第二院といふことが出來る。他の一つは第一院と等しく直接又は間接に國民から選擧するものとし唯選擧の方法を多少異にして居るもので、之を元老院式又は新制度型の第二院といふことが出來る。

民主政體の國では、貴族といふ階級は全然之を認めないのであるから、貴族院制度の存在の餘地なく、其の第二院は必然に元老院式である。君主政體の國でもベルジウム、オランダ、デンマルク、スウィーデン、ノルウェーの如き多數の國は、何れも選擧制度を取つて居る。

貴族院式の第二院は主としてイギリスに發達した制度で、イギリスの影響の下に、革命前まではプロシア其の他獨逸聯邦內の君主國、オーストリアなどに行はれて居たが、革命に依つて此等の諸國は何れも民主政に移ることゝなつた爲に、第二院の組織も亦當然選擧に依ることゝなり、隨つて今日ではイギリスの外には日本、イタリア、スペーン等に其の例を見るのみである。イタリアの第二院は名は元老院と稱し、貴族院とは稱して居らぬが、其の組織から言へば國民の選擧に依るものではなく、二十一年以上の皇族男子及び勅任に依る終身議員から成り立つて居る、勅任議員の數には定限なく、高職を占めた者、學術、文藝其他の職に優秀な地位を占める者又は多額納税者から勅任せられる。スペーンの第二院も亦元老院と稱し、其の議員は（一）法律上當然議員たる者（二）勅任議員（三）地方團體其他種々の團體から選擧せられる議員の三種から成り立つて居る。

各國に於ける第二院の組織が斯くさま〴〵になつて居るのは、主として歷史上の沿革と各國の國情のちがふごとに原因して居るのであるが、若し此等の歷史的沿革と各國特有の事情とを度外視して、抽象的に第二院の組織は如何にするが最も適當であらうかと言へば、それは必ずしも一般に斷言し得べき問題ではないが、自分の見る所に依れば、第二院の本分から考へて、殊に左の諸點を考慮すべきものであると思ふ。

（一）第二院は第一院と組織を異にすることが必要であり、殊に第一院に於けると同樣な政黨の分立は成るべく第二院には存在ないしやうにすることが必要である。第二院は第一院の缺陷を補ふが爲に存在するのであるから若し兩院共に同樣の組織を爲し、殊に同じ政黨が兩院を縱斷して兩院に於て共に多數を占めるやうになれば、二院制度の本旨は全く失はれて、第二院は全然存在の價値の無いものとならねばならぬ。此の點から見て、第二院も第一院と同樣な方法を以て一般國民から公選するのは、適當な制度とは言ひ難いであらう。

（二）第二院は第一院が一般民衆を代表するのに對して、成るべく智識と經驗とに富み、且つ社會上の各種の勢力を代表するものならしむるやうに組織するのが適當である。第二院と雖も等しく議會の一院であつて國民代表の爲の機關であることに於ては第一院と異なる所は無いが、唯第一院と同樣の組織であつては二院制度の目的に適しないのであるから、第一院が直接に一般國民から公選せられ、社會上の地位や勢力や智識經驗やに依つて區別せられないのに對して、第二院は其れ等の點に顧慮して、平等に全國民から公選するものと爲さず、何等かの方法

に依つて此等の特殊の能力を代表するものならしむるのが相當であらう。

（三）第二院をして第一院をも壓倒して議會の中心勢力たらしむるやうな組織を爲してはならぬ。議會は國民代表の爲の機關であることは爭ふべからざる所であつて、而して國民代表の機關としては必ず直接に一般國民から公選した第一院が中心勢力とならねばならぬことは言ふまでもない。第二院は唯第一院の缺點を補ひ萬一の場合に於ける專制橫暴の弊を抑制するが爲に存するのであるから、議會に於て必然に從たる地位を占むるものでなければならぬ。若し第二院の方が却て第一院を壓倒するだけの勢力を有するやうなことが有れば、それは本末顚倒であつて、議會が國民代表の機關であることと相容れない結果となる。是れは主としては實際政治の問題であつて、組織の問題ではないけれども、組織に付いても斯ういふ結果を生じ得るやうな組織は努めて之を避ける必要が有る。

三　日本の貴族院制度

日本の貴族院制度は言ふまでもなく、イギリスの貴族院制度の影響を受けて居るものであるが、イギリスの貴族院は昔の封建時代の遺物が大なる變化を受けないで其の儘今日に傳はつて居るのであるから、其の制度をそのまゝの形で日本に輸入することは到底、日本の事情に適しないことは勿論であり、隨つて日本の憲法に於ける貴族院は決してイギリスの制度をそのまゝ受け繼いだものではなく、多くの點に於てイギリスとは異つて制度を取つて居り、外の諸國には全く類例を見ない日本の獨特の制度を爲して居る。

就中、日本の貴族院制度の最も著しい特色としては、左の諸點を擧げることが出來る。

其の第一の特色は、其の制度の定め方に在る。憲法第三十四條には『貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス』と有つて即ち貴族院の組織に付いての詳細の定めは貴族院令を以て規定すべきものとして居る。其の貴族院法と曰はずして貴族院令と曰つて居るのは、法律に依らず勅令を以てすべきことを示して居るものと解釋せねばならぬことは言ふまでもない。即ち衆議院の組織は法律を以て之を定め、隨つて衆議院自身の外に貴族院も等しく其の議決權を有つて居るのに反して、獨り貴族院の組織に付いては、衆議院は全然其の議決に與ることが出來ないものとして居るのである。是は外の國には全く例を見ない所で、憲法草案の起草者が如何に衆議院に對し危惧の念を懷いて居たかを察知し得べき

である。

憲法には貴族院令の改正には貴族院自身の議決を要することとをも明言して居らぬ、而して別段の規定の無い限りは勅令は勅裁のみに依つて成立し、隨つて勅裁のみに依つて改正することとの出來るのは當然であるから、貴族院令の改正に付いても、若し普通の原則から言へば、貴族院の議決を經る必要も無く、政府だけで之を爲し得るもののやうに考へられる。然るに貴族院令第十三條には『將來此ノ勅令ノ條項ヲ改正シ又ハ增補スルトキハ貴族院ノ議決ヲ經ヘシ』とあつて、其の改正には貴族院の議決を經ねばならぬものとして居る。此の貴族院令の規定は憲法上當然の事を規定したに過ぎないものであるか、又は憲法の認めない新な權限を貴族院に附與したものであるかは、往々爭の有る問題であるけれども、自分は前の解釋の方が正しいことは更に疑を容れぬと思ふ。即ち自分の信ずる所に依れば、貴族院令の改正に就いて貴族院の議決を要することは、貴族院が議會の一院たる性質上明文を待たない當然の事柄で、假令憲法には其の明かな規定は無いにしても、貴族院令は全く一般の勅令とは性質を異にしたもので、單に勅裁のみに依つて任意に之を改正し得べきものでない。何となれば、第一に、貴族院は議會の一院であつて、政府からは全く獨立の地位を有つて居る者である、若し其の組織を政府の一存で任意に改造することが出來るものとすれば、貴族院は全然政府の機關となつて了まひ、其の獨立の機關たる地位と全く相容れないものとならねばならぬ。樞密院の如き純然たる天皇の機關ですらも、其の内閣に對して獨立の地位を有つて居る結果として、樞密院官制及び樞密院事務規程は樞密院自身の諮詢を經ねば改正することの出來ぬものと定められて居る。況んや貴族院は立法部の一員として完全に獨立の地位を有たなければならぬもので、政府だけの意向を以て其の組織を改造することの出來ないことは、憲法上當然の事理と言はねばならぬ。第二に、若し憲法の解釋として貴族院令の規定が貴族院議決を經ないで改正することの出來るものとすれば、貴族院令第十三條の規定は、貴族院に憲法の認めない新な權限を付與したものと言はねばならぬ。併ながら貴族院の權限は憲法自身の定むる所に依るべきもので、勅令を以て新に其の權限を付與し得べきものではない。憲法に依つて貴族院令に委任せられて居るのは、唯組織に關する規定のみで、權限に關する規定は委任の範圍には含まれない。其の委任の範圍を超えて勅令を以て新な權限を貴族院に與へたとしても、それは全く効力の無い規定とならねばならぬ。加之、第三に、若し貴族院令がその本來の性質上は普通の勅令と同じく勅裁のみに依つて改

正し得べきものであつて、唯第十三條の規定の有る爲にのみ貴族院の議決を要するものであるとすれば、其の當然の結論として第十三條の規定自身が勅裁に依つて變更し得べきものであり、隨つて假令此の如き規定を設けたとしても、それは實効の無いものとならねばならぬ。要するに、貴族院令第十三條の規定は唯當然の事を明言して居るのみで、此の如き規定なくとも貴族院の組織に關する勅令が貴族院自身の議決を要することは、憲法上自明の事柄であると信ずる。

右に述べた理論は、貴族院令に基いて定められて居る伯子男爵議員の選擧規則及び多額納税議員の互選規則が貴族院の同意を要せず政府の權限のみを以て改正し得べきや否やを決する上に、重要の關係が有る。近頃新聞紙に傳へられて居る所に依ると、若槻内務大臣、金子子爵などの意見として、此等の選擧規則は普通の勅令と同樣に政府だけで改正することの出來るものと解して居るやうである。其の理由とする所は、唯貴族院令自身は第十三條の規定に依つて特に貴族院の議決を經ねばならぬものと定められて居るが、選擧規則に付いては同樣の規定が無いから其の議決を經るに及ばぬといふに在る。若し此の解釋が正しいとすれば、貴族院改革論者に取つては誠に都合の良い解釋であるが、自分は斷じて其の解釋の誤であることを疑はぬ。貴族院の組織に關する勅令が貴族院自身の議決に依らねば改正することの出來ないことは、貴族院が議會の一院であり、獨立の機關であることから生ずる當然の事理であつて、敢へて貴族院令第十三條の規定を待つて始めて定められた事ではない。選擧規則に付いては貴族院令は自ら之を規定しないで『別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム』と曰ひ、而して其勅令には別に貴族院の議決を要する旨の規定は無いけれども、選擧規則も等しく貴族院の組織に關する規定であつて、若し政府だけで之を改正することが出來るとすれば、政府の權力を以て勝手に貴族院を改造し得るものとなり、貴族院は獨立の機關たる地位を失ひ、政府に隷屬するものとならねばならぬ。立憲政治は政府と議會との對立を前提とした政治である、若し政府の一存を以て議會の一院の組織を改造することの出來るものとすれば、是れ又全然立憲政治の根柢を破壞するものである。若しそれにも拘らず、政府だけで選擧規則を改正するとすれば、是れ明白なる「クーデター」であつて、其の改正の内容が如何に望ましいものであるにもせよ、自分は飽くまで之に反對せねばならぬ。

日本の貴族院制度の第二の特色は、華族議員の地位に在る。日本の貴族院は必ずしも華族のみから成り立つて居るのではなく、其の外に終身の勅選議員及び多額納税議員が有るけれど

も、勅選議員は百二十五人を限りとし、且つ多額納税議員を合せて、華族議員より多くなることを許さないのであるから、華族が貴族院全體の少くとも過半數を占むることは、法律上明に保障せられて居るのみならず、貴族院といふ名稱から言つても、華族をして其の中心勢力たらしめやうとした趣意を察するに難からぬ。

華族に貴族議員たるの特權を與へたことは、明にイギリスの模範に倣つたのであるが、イギリスの貴族院は前にも一言した通り、封建時代の慣習が其の儘今日に傳はつて居るもので、之を日本に傳へたのは、日本が維新以後封建制度を打破し、階級的特權を全廢し、四民平等の主義を確立した國是と相矛盾するもので、再び明治維新は前の方針に逆行した觀が有る。且つ日本の華族は皇族より降下せられた華族、公卿華族、大名華族、武家華族、勳功に依る華族など種々の分子を含くんで居り、此等に對して區別なく等しく貴族院に列する特權を與へたのは、如何なる目的に出でたのであるか殆ど理解し得られない。若し華族に依つて門地を代表せしむる趣意であるとすれば、血統を重ずることは人類の天性に拔くべからざる根柢を有つて居るものであるから、それも一理ある所であるが、それならば唯皇族降下華族、公卿華族にのみ限つて然るべきで、勳功に依る華族の如きは全然其の資格を缺いて居るものである。若し又社會に上流の地位を占めて居るからと言ふ趣意であるとすれば、それは決して華族にのみ限定せらるべき理由とはならぬし、又之に依つて智識と經驗とを代表せしむるといふ趣意であるとすれば、それは全然選擇を誤つたものと言はねばならぬ。要するに華族議員を以て貴族院の過半數を占むるとしたことは、唯漫然イギリスの制度に眞似たといふことの外には、甚だ理由に乏しいものと言はねばならぬ。

併ながら日本の貴族院は決してイギリスの制度を其の儘採用したのではなく、勅任議員の事は別にして、華族議員だけに付いて言つても、イギリスの制度との間には大なる相違がある。其の特色は主として左の數點に求むることが出來る。

(一) イギリスの貴族院はスコットランド及びアイルランドの貴族を除いては選擧に依らず貴族たることに依つて當然貴族院議員となるのであるが、日本の華族は公候爵を除いては凡て選擧に依つて議員となることの差異が有る。

此の差異に基いて更に重要なる結果の相違が有る。イギリスでは貴族に叙することは當然貴族院議員たらしむることを意味し而して貴族に叙することは無制限に君主の大權に屬し內閣奏請に依つて行はれるのであるから、若し貴族員が政府及び庶

民院の一致の意向に反對する場合には、其の反對を制すべき最後の手段として政府は幾百人でも新に貴族に叙せらるべき者を奏請して以て貴族院の多數を制するに足る可きだけの御味方議員を作ることが出來る是は固より已むを得ざる場合の最後の手段であるが、政府が新に幾人かの貴族を作るべきことを發表すれば其だけでも貴族院を威嚇する力を有つて居る。現に一九一一年の國會法制定の際のごとき此の威嚇に依つて遂に貴族院として其法律に同意するの已むを得ざるに至らしめたのである。日本の貴族院は之に反して華族になることが直に貴族院議員なることを意味するでのないから、華族に列せしめたとしても、直に之をして御味方議員たらしむることは出來ないのみならず、授爵を奏請するの權は内閣には居しゐで宮中の大權に居するのであるから、イギリスのやうに新に貴族を作ることに依つて貴族院の反對を制する途は無い。日本に於て若し貴族院が飽くまで其の法律上の權能を主張して、政府及び衆議院に反對するとすれば、政府は其の反對を制すべき如何なる手段をも有しないのである。

(二) イギリスの貴族院議員は全然無議貨な名譽職であるが、日本の貴族院議員は公候爵を除く外衆議院議員と同樣の歳費を入れる權利を有つて居る。是は小さい事柄のやうであるが、實際には可なり重要な影響を與へて居るもので而も其の影響は決して喜ぶべきものでない。貴族院式の第二院に於て民選議員と同樣の歳費を議員に與へて居るのは恐くは日本が世界に於ける唯一の例であらう。

(三) 伯子男爵議員の選擧が連名投票の方法に依ることゝ爲つて居ることも華族議員の地位に著しい特色を與へて居ることは、何人も熟知する所である。是あるが爲に同爵者の多數が唯一の團體の獨占する所となり、從つて又貴族院に於ける研究會の勢力を築き上る基礎となつて居ることも、玆に述ぶるまでもなく一般に知られて居る所である。

貴族院の第三の特色は勅任議員の地位に在る。勅任議員中多額納稅議員だけは選擧に基いて勅任せらるるので有が、終身議員は總て內閣の奏情に因るもので、其の時〳〵の内閣が自分に緣故あるものと奏請する慣習となつて居ることは、又貴族院の組織に著しい特色を與へて居る。是れは恐くはイタリアの制度に倣つたものと思はれるけれども、イタリアでは勅任せらるべき者の資格を限定して居るのに反して、日本の勅任議員は一に之を内閣の奏請に任じ、「國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル者」といふやうな規定は有つても、事實に於ては全くそれ等の資格に拘らず無制限に政府の奏請に任かされて居ることに於て、其の

特色が有る。

日本の貴族院の第四の特色としては、貴族院が啻に法律上に衆議院と對等の權限を有して居るのみならず、實際に於ても衆議院に對抗するだけの勢力を主張し、殊に貴族院に對しては解散が行はれ得ない結果として、貴族院の反對に對しては之を制抑すべき何等手段もなく、それが爲に其の政治上の勢力は益々增大する傾が有つて、遂に清浦內閣に至つては、自ら內閣の組織の主腦者たるに居つたことを擧げることが出來る。

是れは必ずしも制度から來た直接の結果ではなく、主としては實際の政治事情から來た結果で、衆議院の勢力が比較的微弱であり殊に其政黨が國民の信頼を贏ち得なかつたこと、歷代の內閣が貴族院の歡心を求むるに努め隨つて其の勢力を增長せしめたこと、貴族院議員自身に自制の念の乏しかつたことなどが其の主なる原因を爲して居る。併し制度の上から言つても此の勢を助成すべき原因に乏しくない。(一)法律上に兩院が原則として對等の權限を認められて居ること、(二)伯子男爵議員の選擧が連名投票の制を取つて居ること、(三)議員の定數が殆ど衆議院に讓らぬくらゐに多數であり、而もそれが衆議院と同樣に歲費を受くる權利を有つて居ること、(四)議員の任期が長く又は終身であること等は何れも或る程度に於て其の原因を爲して居るものと言ふことが出來る。

四　貴族院改革問題

日本の貴族院制度の特色は略右に述べた通りであるが、此等の制度が果して滿足すべき制度であるかと言へば、それが甚だしく不滿足なものであることは疑を容れぬことであらう。恐くは日本の憲法上の各種制度の中でも貴族院制度は其の最も不出來なものであらうと思はれる。

併しながら日本の貴族院の最も大なる缺點は、其の制度に在るよりも、其の運用に在るのであつて、若し貴族及び現に議員たる人々が二院制の本旨と第二號の本分とを理解して、自制する所が在つたならば現在の制度の儘であつても、さのみ大なる弊害を生ずることなくして行はれ得ることであらう。最も重要なのは制度の改革よりも、寧ろ其の自制を促がすに在る。

けれども、制度それ自身も甚だ不滿足のものであることは申す迄も無いから、之に適當な改革(改善と言つても同じ事だ)を加へることは固より歡迎すべきである。唯其の改善には貴族院自身の同意を要するものであり而して其の改造の結果は現在の貴族院の多數派の勢力を挫折するに至ることは當然であるから、其の同意を得ることは頗る困難であると覺悟せねばなら

ぬ。貴族院制度の改革が言ふに易くして行ふに難き所以は一に此の點に在る。

貴族院の改革を實現する爲には、どうしても其の調査の爲に特別の委員會を設けて之をして適當なる成案を作成せしむるの外は無いであらう。或はイギリスで行はれた一九一七年から一八年に至るブライス卿を委員長とする貴族院改革調査委員の如く、貴族院及び衆議員の兩院から各、若干數の委員を出だして、組織するか、或は日本で加藤友三郎内閣が衆議員議員選擧法に付いて行つたやうに、臨時法制審議會に委託するか、何れにしても、それ等の適當なる委員會の審議に付し、以て改革の機運を醸成することが缺くべからざる必要であらう。

貴族院改革の成案は此の委員會の結果に待つべきものであるが、唯現在は攝政殿下の御執政時代である爲に憲法を動さねばならぬやうな改革は全く行ふことが出來ないのであるから、其の改革は唯憲法に觸れない範圍にのみ止まらねばならぬ。隨つて貴族院の權を制限したり、華族議員又は勅任議員を廢止したりすることは、全く不可能であつて、唯華族議員勅任議員の範圍内に於て其の改革を加ふるの外は無い。

如何に之を改革するが適當であるかは、充分の調査を要する事柄で今之を斷言することを憚るが少くも左の諸點は之を考慮に入れる必要が有る。

第一　貴族院議員の定數を減少すること、今の貴族院議員の數は衆議院に比較して大きに失するものであらう、貴族院は主として智識と經驗とを代表するので、一般民衆を代表するものではないから、衆議院に比らべて約半數くらゐを以つて適當とするであらう。

第二　貴族院議員の歳費を全廢すること

第三　華族議員の定數を減少し、華族議員を以て全院の過半數を占むるの制を改むること

第四　公侯爵が當然に議員たることを改め伯子男爵と共に選擧に依るものとすること

第五　華族議員の選擧方法に適當なる改善を加ふること　今の選擧方法が甚しく不完全であることは一般に認められて居る所であるが之を改めて單記投票制とすることも決して適當の方法でない。華族は全體を以ても其の員數は比較的僅少であるから、比例代表法を實行するに如くは無い。比例代表法の中でも華族議員の選擧には所謂單記移讓法が適當であらうと信ぜられる。單記移讓法は衆議院議員の選擧法には自分の贊成し難い所であるが、華族のやうに人數の少い選擧には最も適當である。各爵が現在の如く別々に選擧をすることも理由の無いことで、各爵を通じて選擧を行ふのが相當である。

第六　勅選議員を政府が勝手に任命する制を改め適當なる選擧機關をして推薦せしむるの制を取ること

第七　隨つて多額納税議員は之を廢止すること

第八　華族議員及び勅選議員共に相當の任期を定め半數又は三分の一づゝ定期に改選するものとなすこと。

デイルタイの藝術哲學

勝部謙造

一

デイルタイは數ある近代の哲學者達の內でも、實に異常の天分を持つて居た人である。殊に思想史家としての彼は、比類のない天才的直觀を備えて居た。從つて藝術哲學の如きは實は彼の大きな思索のほんの一斷面に過ぎぬ。彼に取つては、哲學や宗教や藝術の盛衰浮沈の歷史其者が、直ちに一大藝術であつた。時間と空間とを背景にし、人間精神の全體を舞台とし、「生命」其者の演ずる偉大なるドラマに外ならなかつた。從つて彼の哲學の凡ては、かゝる意味に於ての藝術哲學である。概念の外殼を脫ぎすてゝ、生命其者の進展する姿を、如實に捕捉するといふことが即ち彼の一生の仕事であつた。若し藝術的哲學といふやうな語が許されるならば、彼の哲學の如きは實に最も壯嚴な意味に於てそれであると云はねばならぬ。

この事實は然し他の一面に於て、彼れデイルタイが藝術を哲學的に取扱ふことに於て、異常の好適者であることを物語るものである。實際近世の藝術論に於て、組織立つた抽象論に於ては、他にも其人がないわけではない。然し藝術の內面に深く這入り込んで、其眞生命を摘出するといふ點に於ては、彼は實に容易に他の追從を許さない。殊に詩歌小說の如き文學の分野に於ては、彼は確かに第一人者であると云ふて差支ない。彼の「體驗と詩歌」の如きは全く驚歎に價する書物である。現代の藝術論に於ては、藝術家は實在を模倣描寫するものではなくて、實在の意義精神を直接に捕え來るものであると云ふのであるが、デイルタイの如きは實に進んで藝術其者の生命を捕捉したものである。

ディルタイの藝術哲學の中心點は、藝術家の創作活動の考察といふ處にあつた。實際この藝術なるものゝ最も特有な問題は、こゝに求められなければならぬ。我々死すべき人間の手に依つて營まれる最も不可思議な働は、この創作といふことである。何となれば全く新しきものを創造する働は、元來神にのみ許さるべきものであるからである。從つてこの藝術創作の作用といふことは、確かに或る意味に於て宇宙人生の秘密を解くべき鍵であると云はねばならぬ。

神が天地を創造する場合のことは、我々人間には分りやうがないが、普通は全くの無からして神が此世界の萬物を造つた樣に考へられて居る。藝術家の創作の場合には、これとは多少事情を異にして居る。即ち藝術家は全くの絶無からして新しき世界を作り出すのではない。作られたる藝術の天地は全然新なるものであるが、然しこれを作り出す素材となるものは作られざる前から存在して居る。それは藝術家の過去の生活經驗がこれに當るのである。然らざれば創作されたる藝術は、人生とは全然無關係のものになり、我々に取つて何等の意味もないものであるわけである。かの神曲に於ける地獄の業火の描寫は、實に詩聖ダンテの不朽の創作である。然しかゝる恐ろしき地獄の火が創作せられた材料は、矢張り此經驗世界に於てダンテ自身が目擊した現實の火に外ならぬ。平和なる爐中の火を轉じて、かくの如く戰慄すべき地獄の火に換える處に、藝術家の創作活動なるものが働いて居る。現實的からして非現實的に超越せしめる處に、藝術創作に於ける飛躍高踏がある。かゝる飛躍は抑如何なる精神作用に依つて行はれるのであらうか。

云ふまでもなくそこには想像といふ極めて神秘的な作用が働いて居る。ツオイス大神のまな娘ファンダジアの不思議な働がこゝに加はつて居る。此故にディルタイの藝術創作の考察は、先づこの想像作用なるものに向けられねばならぬ。實際藝術的天才に最も特有な天賦は、この想像力が異常に強烈鋭敏であるといふことである。ゲーテは次のやうな特殊な精神機能を授つて居たことを、彼自ら語つて居る。曰く「自分は眼を閉ぢ、首をうなだれて、自分の視官の中央の處に一の花を考へて見る。そうすると此花は一瞬時も原形のまゝには止つて居ない。一の花が漸次分化して行つて、其中心部よりそれからそれへと新らしい花や緑の葉が現はれ來る。其花は自然のまゝのではなくて、極めて珍奇な然し頗る規則正しい形をしたもので、丁度彫刻家の薔薇花形のやうな形狀を呈して居る。この樣に次から次へと湧き出して來る創作をどこかで止めて固定することは不可能である。而してそれは一定の時間の間強くもなく

ず。又弱まりもせずにずつと續いて行く」云々と。

勿論此種の經驗は我々常人にもないことはない。我々が非常に疲れてゐる時とか、又將に眠に入らんとする時には、よくこういふ風な何物かゞ、規則正しい變化をして動いて居ることが知覺せられるものである。只ゲーテのそれの如くに隨時隨處にしかもはつきりと知覺せられないだけである。かゝる心像自身の內面的獨立發展といふことが、實に他の一面に於て藝術創作の特徵であつて我々はこゝに問題解決の大なる暗示を得ることが出來る。更に又此種の特徵は、我々の夢覺に於て一層著しく現はれるものである。夢に於ては先づある一つの心像が我々の意識の上に現はれて來る。そうするとその心像は、我々の覺醒生活に於ける如くに外界實在の支配は受くることはなくて、自分自身で獨立に色々發展變化して行くものである。かゝる精神作用にはどうしても覺醒生活の精神活動である識別とか比較とか融合、聯想、統覺とかいふ風な働に全く歸することの出來ない何物かゞある。

再びゲーテの語をあげて見る。彼曰く「自分はこれ等の民謠を、今迄數年間も頭に持つて居た。其間中これ等の歌は極めて活潑な心像として自分の精神を働かして居た。丁度で消えては現はれ、現はれては又消ゆる美しい夢のやうに。」「然し又自分の創作の或る他の場合には、この事情が全く違つて居る。前以て何等の印象も豫感もなしに、或る歌が突如として心に起つて來て、殆ど瞬間的に創作をしてしまふ。其樣な場合には其場で即座に筆を採つてしまふので夢心地の中にこれを書き下す」云々と。即ち藝術家が其創作に純一專念なる時は、全く夢幻の中を出入して居る。我々はこゝに藝術的想像作用と睡眠中の心像の働や夢に於ける精神作用に、非常に類似して互に相通ずるものがあることを認めねばならぬ。

三

以上の如く心像の內面的自己發展に依つて、藝術の創作は營まれるものである。然るに藝術に於ては、日常經驗を其儘表白するのではなくて、そこには全く新しき第二の世界が作り出される。創作活動に依つて現實的實在が變形して非現實的の一實在となるのである。然らば創作に於て働く藝術家の創像作用は、如何にしてかゝる變形を行ふことを許され得るのであるか。藝術の表す實在が眞實性を有するものであるとするならば、そは如何なる權利に依つて然るのであるか。ディルタイはこに類型といふ概念を持ち出して、この問題の解決を試みて居る。

蓋し藝術創作に於ける想像作用が睡眠中の心像、夢覺等と共通な點を有するのは、共に皆實在の强制を蒙らず、自由なる內面的發達を營むことが出來るといふことにあるのである。而して睡眠中の心像や夢中の心像の發展と藝術利用に於けるそれとの異なる點を求むれば、藝術に於ては特に創作者の體驗中に於て、出來得る限り多くの一般經驗が包括せられて居るといふことである。藝術が多くの人の心情の琴線に觸れ得るのは、全くかゝる特徵に基因するのである。單に藝術家の純粹に主觀的特殊的な體驗のみを列擧記載して見ても、汎く人を動かす力はそこに見出されることは出來ぬ。特殊的な體驗ではあるが、而かもどこかにこの特殊を通して一般が表はされて居なければならぬ。主觀的な體驗であつて、しかも普遍的な人間性の表現でなければ、藝術としての價値はない。オツトー・ルドヰツヒは一方では單一的事實性、實在性といふことも非常に渴仰してゐた。

然し彼も矢張り全くの單一的特殊的には、讀者を動すことを妨ぐる何物かゞあることを認めねばならなかつた。人は寫實といふことをよく云ふけれども、眞の寫實は體驗の主觀性偶發性を去り、これを普遍化するにあらざれば、行はれるものでない。然らざれば創作せられた藝術は、他人の感情や心情に訴へられることが出來ぬ。彼と我と共通な方面に從つて、初めて我は彼に對して語ることが出來る。

藝術の普遍妥當性とかいふ問題は、矢張りこゝから解かれねばならぬ。科學の普遍妥當と藝術の普遍妥當とはこの點にて、少しく意味が違ふ。藝術の普遍妥當性といふことは、凡ての人間が苟くも同じ人間のもつ感情を有する限りは、その藝術的作品を精神的に複寫して見ることが出來、又これを享樂することが出來るといふことである。かくの如くに生ける體驗からしてこの體驗の生命の關聯に必須なるものとして分離せられたものをば、本質的と名つけることが出來る。藝術の必然性はかゝる本質的に特有なものである。云ひ換ふれば、創作家の體驗と鑑賞家の體驗とが、共通な大關聯に屬して居るといふことである。他人の創作に對しても、自分も矢張り共通の人性に基づき、創作を自身の氣持になつて、彼の創作に再創作とすることを許すやうな藝術であれば、それには必然性が認められなければならぬ。

かくの如くにして藝術に於ては實在的に對して本質的が對立して居る。而して藝術に固有なものにこの本質的である。ディルタイはかゝる本質的とは類型と名つけて居る。思惟は概念を産み出すものであるが藝術家の創作は類型を作るものである。類型は此故に概念のやうな生命の抽象的な外殼ではない。強烈濃

厚にせられたる具體的な生命それ自身である。從つて類型に依る體驗の强化は概念の場合の如き空疎なる觀念性に於て行はれるのではない。雜多なる生命の體驗と一の形象に依つて代表せしむるのが卽ち類型で有。此故に類型は極めて有力にして又明晰なる構造を有し、これに依つて凡ての個々の體驗の意味が明にせられ理解せられることか出來るのである。凡ての藝術は類型的である。詩歌の如きは此點に於て最も明である。凡てが類型である。其描寫する性格に於て、情欲に於て、行動に於て、果た又其描寫樣式に於て全く類型的である。從つて藝術の作品は全體として一の纒つた類型である。個性である。

かくの如く凡ての藝術に於ては內的に體驗せられたる類型が外的に表現せらるゝが故に、凡ての藝術に皆象徵的である。例へば詩歌の如き、其原形は或一つの局面に於てこの內的體驗を示す比喩が卽ちそれである　故に凡ての詩類の根本特徵は其象徵的なる點にある　ゲーテは嘗てエッケルマルに告げて云ふのに、狀態や能力に就いての生ける風情を表現することが卽ち詩作であると。此故に凡ての藝術家の技巧は、類型を作り出すことにある。類型は卽ち藝術に必然性を與へる。讀者や鑑賞家として自分も亦その樣に行動せねばならぬといふことを感じさせる　從つて藝術の必然性は、自由の表現といふことと撞着しない。沙翁の描寫せる惡人は、道德法の實在を確信して居る然かも意識的にこれを破つて居る。自由に依る惡人であるが然し藝術的性格としては必然性を備えて居る。實際上の類型に於て表現せられる本質的なる範疇は、因果の範疇に劣らず、矢張り生命其物から生れ來つて居る。而かも藝術に於ける類型は、科學的思惟の因果範疇等よりは、ずつと古くから活用せられて居る。生命其物の表現である。

四

以上の如き類型といふ事實は、更に他の一面に於て我々が他人の創作せる藝術を鑑賞する場合の所謂了解作用あるものゝ本質を明にするものである。全體凡ての創作せられたるものゝ了解解釋は、如何に原作の眞義に忠實ならんことを求むるも、純粹に客觀的なることは得ぬ。それはどこまでも我々の體驗より出發する再創作もしくは內面的模倣の働きでなければならぬ。創作せられたものに從つて我々自身が創作することに依つて、初めて他人の創作を了解することが出來るものである。從つて我々の了解作用といふものは、單に語句や形體の如き表現樣式のみに捕はれて居たのでは、充分に主觀的であることを得ない。原作者と解釋者との精神生活に於いて、互に一路相通ずる

ものがなかつたならば、我々は眞に他人の作物を了解することは出來ぬ。他人の體驗を我々が充分に會得することは、單に知の働のみではない。我々の自我全體がこれに對して共感を感ずる處がなければならぬ。同情、愛、親密の度合に應じて、我々は他人の思想をより深く理解し得るものである。この事實は果して何事を語るものであるか。即ちこゝには我と彼とを包括する關聯がなければならぬことが明である。共通なる人間性といふ大なる組織に、我も彼も屬するのでなければならぬ。かくの如くにして初めて象徴を介して、彼は表現し我はこれを了解することを得るのである。了解は即ち創作である。了解と創作とを結合するものは類型である。創作者は單に偶然的主觀的を寫出するのでなくして、個々のものを通じての一般性、本質的を表現せる所に我々の眼を用ひて生命の深底を窺ふことを可能ならしめる。又了解者はその全我を活動せしめて自己の精神生活を深化することに依つて、かゝる類型を自ら作りつゝ他人の創作せるものを會得するものが出來るのである。

以上に依りてディルタイの藝術哲學に於ては類型なるものが創作にも了解にも必須なることを知ることが出來る。然るに彼は前述の如く他面に於て、藝術の作者が個性的なることを云ふて居る。共通的本質的なるこの類型と個性とは果して兩立することを得るか。これ我々の次に考ふべき問題である。この問題に就いては彼は所謂記載分析的心理學に依る新しき研究に基つく、個性をば人間性の性質的差異と見ず、分量的のものと見ることに依つて、これに答へて居る。

今ディルタイの新心理學の我々に教ふる所に依れば、先づ第一に我々の精神は常に知情意と別々に働くのではなくて、具體的精神は常に渾一的に作用するものである。從つて精神生活の事實に關して抽象的な理論は生命の深き事實を捕ふるものではない。在來の哲學思想の一般的欠陷こゝに存するのである。例へば我々は精神生活のことを考ふる場合には、觀念とか表象とかいふものも一般精神活動より分離して、これを異常に重視して居る。而してかゝる觀念は固定的のものであつて聯想の法則と云ふ如きに從つて機械的に働くものと考へて居る。然し事實に於てかゝる考は間違つてゐる。我々の意識に現はれて來る觀念には、必らず情意的要素が不可分離的に附着して居る。ディルタイはこれを心像と名つけて居る、かゝる心像は決して固定的のものではなくて、それ自身に生命を有するものであつて、云はゞ衝動的に發展生滅するものである。それ自身の内面からして變化して行くものである。我々が從に睡眠や夢に於ける心像の作用と、藝術家の創作に於けるそれとは相似してゐるもので

あることを説いた。それはかゝる特徴に就いて云ふのである。かくの如き場合には我々は意識的に具體的精神生活の一面を切斷して見て居るのではなくて、精神がそれ自身に純一になつて働いて居るのである。從つてそこには我々の精神生活の根本特徴が最も明らかに看取せられることが出來るのである。

ディルタイの新心理學に於ては、かゝる具體的精神の構造は關聯といふ語で表して居る。關聯とは精神其者が生成する法則を表はすものであり、又同時に精神の構造を明にするものである。精神生活に於ける凡ての特殊的の出來事は皆この關聯に附屬して其肢體をなすものである。しかも精神色介の特徴として個々の肢體が集積して然る後かゝる聯關を形成するのではなくて、全體は部分と同時に與へられる。或は先づ全體が與へられ、然る後部分が漸次明になつて來ると云ふても宜しからう。かゝる精神生活の關聯の特徴は、第一に統一があること、第二に外介環境との交互作用を營むこと、第三に合目的特徴を有することとである。而してこの三種の特徴に從つて精神生活は發展するものである。この發展を明かにするものを發展關聯と云ふ、尚又かゝる發展に依りて得られたる特徴は收得關聯なるものに依つて表はされる。品格とか人格とか云ふ現實はかゝる事實的關聯を表はさんと試みたものである。

然らば個性とは如何なるものを云ふのであるか。個性とは局この收得關聯のことに外ならぬ。即ち個性は我々が普通に考へるが如く性質的の差別性を云ふのではない。共通なる人間性、精神生活の最大關聯の分化せる分過的差別に外ならぬ。即ち個性的が抽象せられて普遍的が生ずるのではなくて、先づ普遍的がありそれが色々の事情に應じて個性化して行くのである。藝術の歴史は實に生命のかゝる個性化を最も有力に語るものである、創作者の主觀、其時代、國民性の如きが、個々の藝術をば様々に特殊化して居る。而かももとこれ共通の人間性の發展に外ならぬ。歴史的社會的實在の分化に過ぎない。此處にしかく一面に於て個性的なるに拘らず、凡ての大藝術は、時と處の如何を問はず人間の心情を動かすことが出來るのである。

五

然らば藝術創作に依りてかくの如き類型を見出すことは、如何にして可能なるか。ディルタイの哲學的態度よりしては、悉くはこゝに假定を設けて説明を試みることは許されぬ。藝術家にはかくの如き事物の本質を看取する天才的通觀が備つて居るといふ事實以外に踏み出すことは出來ぬ。藝術家は生るべきものであつて、養はれることは出來ぬと云ふのは此處を云ふので

ある。彼等は實に異常に强力な想像力を有し、これに依つて其感覺、記憶の如きも常人に比較を見ざる强度明晰を有し、又自己の心像を外界に投射して、これに實在性を附與する特殊な能力を有することについては、我々は數々の實例を持つて居る。かゝる强力な想像力は一面に於て彼等の精神生活を緊張せしめ、精神全體、自我全部を或一點に集中することを得しめる。ゲーテはウイルヘルム・マイステルの一部の構想を了るや、直ちに聲をあげて泣き初めたといふ話である。世にもし緊張生活なるものありとすれば、藝術家の創作活動の如きは、實に其最大のものであると云はねばならぬ。

これは要するに藝術家は、古のプロメトイスが天界の火を盜み來れるが如くに、人間にして神の業を奪はんとするものである。神の創造力を地上に實現せんことを求めるものである。そこに彼等の誇があり、又そこに彼等の悲劇がなければならぬ。彼等の創作活動に於ては、實に生命の最も内面的神秘力が働いて居る。我々はディルタイと共に、これを靜かに觀察記載することは出來るが、これを說明解示することは出來ぬ。何となればそれは我々に萬物を創造する力が與へられて初めて明にせられ得るものであるからである。

附記

本稿に於ては拙著『ディルタイの哲學』(文化哲學叢書第四編改造社出版)と重復する部分は故意に略したから讀者はそれに付いて見られん事を希望する



農村問題の歸趨

那須　皓

一　農村問題の特異性

農村問題とは何を意味するか。之に就きて解答を求むれば恐らく十人十色の答を得るであらう。即ち或人は農業の薄利、農家經濟の困難を救ふを以て農村問題とするであらうし、又他の人は小作爭議、其の他、農村に於て紛糾を釀しつつある社會問題を解決することを以て農村問題の主眼であるとなすであらう。或ひは更に一歩を進めて、教育、衞生、娯樂、社交等、農村に於ける日常生活を改善して農村文明を高むること、これ農村問題の要點なりと信ずるものもあらう。換言すれば、農村問題は農業經濟の問題であるか、農村社會問題であるか、又は農村生活の問題であるか、これに就きては人によりて其の說を異にするのである。

余は農村問題を常に最も廣義に解釋して居る。余は文明なる語を以て、經濟も道德も社會制度も慣習も一切を包含せるものとして解し、而して農村問題を以て實に一個の文明問題なりとなすものである。此の廣義なる文明問題中の如何なる部分を以て、農村問題の最も肝要緊切なるものとなすかは、時代と社會とに依りて固より一樣なるを得ざるものである。而して今日、農村問題を論ずる士が何れの點に特に重きを置くとしても、彼れは同時に他の諸點を悉く閑却し去ることを得ぬ。これ農村問題の內容をなす各要素が彼此脈絡相通ぜるに基くのであつて、農村問題の內容の斯く複雜豐富なることが、偶々人をして農村問題の本體何處にありやとの惑ひを抱かしむる所以となるのである。余は今、下に、何故に農村問題が然かく複雜なる形相を呈するやを吟味し、次に本邦現時の農村問題の主要點を檢し、其の解決に對する卑見の一端を陳べるであらう。

抑も廣義なる文明の問題は、學問又は政策的見地より論ずる時は、之を其の種々の成立要素に分解して研究することが通常である。即ち之を法制、經濟、教育、宗教、藝術等の事項に分ちて、各自を獨立せる研究對照とすること一般である。尤も、歷史研究に際して或民族の文明全體を達觀することがあり、此の時は上述各要素を關係的、總合的に觀察することもあるが、然かも斯かる時と雖も多くは先づ各要素を別々に觀察し、次に之を總括するだけであつて、各要素間の有機的關係それ自身を精細に調査することは尠ないのである。

多くの文明史か法制史、經濟史、宗教史、美術史等を總合せるに過ぎざる如き觀を呈するのは此の故であつて、上述各要素間の有機的關係の研究は、近時勃興しつゝある社會學を除けば、僅かに一部の文明史及び唯物史觀の學說に於いて之を觀得るのみである。而して一般經濟政策上の問題の如きは、勿論、極めて狹隘なる當該事項に限定して之を研究することが、比々として然りである。

然るに農村問題に限りて、農村なる地域を中心として、此の上に起る經濟、政治、敎育、社會生活等、百般の事項を有機的に、社會學的に研究するを要するは、如何なる特殊の理由に基くのであるか。何故に農村問題を以て、文明の或一要素、例へば經濟のみの問題とせぬのであるか。吾人は農村問題と對照すべき都市問題なるものを有しないし、又都市問題と名けられたるものありとしても其の內容は農村問題の如く複雜多岐に亘つて居らない。都會の文明問題は始めより其の成立要素に分解して研究せられて居る。都會にも都市計劃の問題を始めとして、住宅、衞生、敎育、失業、救貧、娛樂等各種の問題があるが、市民の私經濟を總括的に改善せんとするやうな問題は始めより成立しないし、又、上述せる一切の問題を有機的に綜合考察する都市問題、又は都市文明問題なるものは未だ研究せられて居らぬのである。

而して之には相當の理由がある。抑も或る社會的、文化的問題を取り扱ふに當つて、地域的關係は素より之を無視するを得ざるものではあるが、偶々同じ地域上に存在するの故を以て他種の問題との關係を常に考慮する時は、遂に研究の徹底を見ざるの虞れがある。即ち地理的制約は寧ろ從たるものであつて唯研究の舞臺を限定するに止まり、此の地域上に存する一切の他の問題、他の條件は之を度外視し、吾人の思索を特定なる社會現象に限定することによつて、始めて適切明快なる思索の體系を生み出だすことが出來る。此の意味に於いて學問は常に抽出である。研究對照を孤立的に抽出し、煩瑣なる周圍の條件を除却することによりて、始めて因果關係、相作關係等を認識することが出來る。故に經濟學者は複雜なる世相中の經濟現象を研究するために、往々にして經濟人（Homo Oeconomicus）なるものを假定し、又、物理學者は落體の速度を研究するに際して故らに物體をして眞空中を落下せしむる。實際に於いて世には純然たる經濟人もなければ、又落體は必しも眞空中を落つるものではない。さり乍ら千差萬別なる個人的心理狀態、或ひは空氣の抵抗力等を一々考慮して居つては簡明なる法則を容易に導き出すことが出來ぬから、學者は實際の事情にそのまゝ適

用する能はざる結論を得べきことを承知しつゝも、尙且つ此の抽出の方法を採るのである。經濟人假設に對する批難は、即ち抽出によりて得たる結論を何等補正を加へずして直ちに現實の事象の說明に用ふることの非なるを論ずるに外ならない。尙これ颶風吹く時、物體は地に落ちずして却つて天に昇ることあるを云ふに類する。此等の事あればとて現實圖の事實を以て、抽出による假設圖の理論を否定する譯には行かぬ。在來多くの無用の論爭が此の學問上の假設圖と現實圖とを混同することによりて生じたと思ふ。

偖て都市文明問題は斯くの如き抽出によりて研究せられる。例へば小學教育の如き、都市學童の個々の家庭の狀態、將來の職業等を顧慮することなく、此等事情を除却せる抽象的都市兒童を假定し、之に對して適當なりとする教育を授ける。此の教育が兒童個々の個人的要求や、家庭の經濟的事情等と如何なる關係にあるかは、之を觀ること容易でない。何となれば都會人の職業、家庭の環境等は千差萬別であるからである。故に此等事情は之を無視して教育政策を樹てる。都會文明の他の要素に就きても亦同樣である。

一國全體の文明問題の研究に際しても、都會に於けると同樣に、文明を個々の要素に分ちて獨立の研究をなすことが多いのは、これ國民の職業、思想、感情等が種々雜多なるに基けるのであつて、誠に止むを得ざる結果である。而して此等獨立研究の總和を以て、假りに文明問題の研究と呼んで居るのである。之に反して文明の各要素間の關係、例へば不道德、犯罪等と之により社會の被むる經濟的損失等との關係の如き、頗る興味深き問題であるが廣き地域に渉りて之を調査するは非常なる難事と云はざるを得ない。故に斯くの如き種類の研究は勢ひ閑却せられるのであつて、其の完成は今日の社會學が質的研究より量的研究に入るの日に俟たざるを得ぬのである。

然るに農村問題に於ては、一國全體、又は都會に就きて論じたる時に別々となせる問題を、往々、一括して相聯絡せ

るものとして論ずること多きは何故であるか。余は之には下の如き理由があると思ふ。

一、農村住民の大多數——我國にては八割以上——は略同一なる環境の下に、同一なる職業、即ち農業に從事して居ること。

二、其の結果としては農村民は其の心理に於いて共通點多く、經濟的、社會的、文明的生活及要求に於いて略同一なること。

三、農業は尙生業の域を全然脫して居らぬために、多くの市民にありては營利生活と家庭生活とを判然區別し得るに反し、農業者にありては其の經濟的活動と家庭的、社交的生活とが不可分の關係に存すること。

四、農村に於いては文明生活の各要素間の有機的結合著しきが故に、一の要素に就きて改良を圖るためには、同時に他の要素に對しても變更を加ふる必要があること。

五、農村においては人間及び職業の移動、事情の變遷が都會地に於ける如く急激ならざるが故に、各種要素間の相關々係を硏究するに便宜多きこと。

六、農村の對外的問題、例へば都鄙公租負擔の配分、農產物保護關稅、農產物價格調節、國民食糧自給等の問題と、農村の對內的問題、例へば農業組織の變革、農家經濟の改善等の問題とは之を切り離して考ふるを得ざること。

以上の如き事情存するために、農村問題は自から複雜なる內容を有するに至るのである。而して耕地面積と農業組織と貧困との關係、娛樂の缺乏と靑年風紀との關係、大地主制と農民離村との關係、農村敎育と農業振興との關係等、興味裕かなる種々の問題が玆に展開せられるのである。斯くの如き相關々係は、農業經濟と云ふ限局せられたる範圍內に於いても、尙存在するのであつて、次の例は之を明らかに指示するであらう。即ち、本邦農具の幼稚なることは何人も

直ちに想起する所であるが、之を廢して能率高き機械を採用せんとすれば、下の諸項を考慮する必要がある。

一、耕地一筆の面積が狹少且不規則であるから耕地整理の必要がある。

二、過少なる一戸當り經營面積を大にする必要ありとせば、玆に轉業又は移住の問題が起る。

三、而かも大機械を有利に使用する爲めには數戸聯合の必要あり、農業上の組合を作らねばならぬ。

四、農具變更の爲めに役畜不要となりたりとすれば、新たに廐肥不足の問題が生ずる。

五、勞力過不足の狀態變じ來るべく農業組織變更又は副業加味の問題が起る。

六、高價なる機械購入のためには農業信用の途を開かねばならぬ。

七、複雜なる農用機械を取扱ふためには農業者の機械的知識を發達せしむる必要がある。

此等相隨伴する各般の問題を何等顧慮することなしに、只機械の能率大なりと云ふ點のみを觀て、直ちに其の機械採用を有利なりと斷ずる譯にはゆかぬであらう。斯くの如き經營上の問題は工業及び商業にも均しく存することではあるが、農業に於ては其の作業の種類が商工に比して遙かに複雜であるから、研究すべき事項も頗る多端となるのである。これ農業經營學なるものが學的存在を要求する基礎である。而して此等複雜なる研究事項の各自が農業經濟以外の他の事項と痛切明瞭なる關係を有するのである。例へば獨逸農村にて勞力缺乏のため波蘭よりの移動勞働者を臨時に雇用せしに、所謂「旅の恥は搔き棄て」にて、渡り者のために村の風紀を害せられ、こゝに種々の問題を起せし如き、その一例である。又英國にて農業勞力の缺乏を感ずるは、其の一半は農業勞働者住宅の不完全なるために勞働者が離村するに基因すること、多くの人の認むる所である。獨逸農家の構造を變じ、圍爐裏を無くせしために、家族的團欒の機會乏しくなりて主人と農業勞働者間との關係の變じ來りたることなど、亦面白き事例と云はねばならぬ。本邦中農階級が其の子

弟を教育するために多額の資金を傾注し、其の結果として農業經營資本の缺乏を來すが如きは所在に見る所である。かくの如く都會生活に於ては確認することの甚だ困難なる因果關係の糸が、農村生活に於ては明かに認識せられ、而して其の糸は經濟、社交、教育、家庭等の各部門を貫いて居る。農村問題の複雜化は此所に發生する。

加ふるに農民自身の複雜なる立場は、農村問題の複雜化を更に助長する。即ち我が國の如き農村に於ては、農民の大多數は企業者であると同時に勞働者である。小作細農の如きは何等企業的利潤を受くることなく(萬一其の生ずる場合には直ちに高められたる地代となりて吸收し去られる)、其の得る所は極めて低廉なる勞働報酬に過ぎざるが故に、本質的には之を勞働者(Worker)と目すべきものであるが、併し法律的に觀察すれば正に企業者たるの形式を具へて居る。第三回國際勞働會議に於て農業勞働に從事する者の團結權を論議するに際し、日本政府委員が普通の農業賃銀勞働者の團結權は之を認むるに吝かならざれども、小作農は企業者なるが故に小作農の團結權を認むる事には直ちに贊意を表し難し、と論じたのは、本質よりも形式に捉はれた議論であり、又ヴェルサイユ條約勞働條項の精神に背戾せるものであつて、余の反對せざるを得ざるものであるが、此の奇論と雖も其の形式的論據は此所に之を求めたのである、(關口泰、淺利順四郎兩氏著、國際勞働會議と日本、三五一―四四頁參照)。此の事情は農村問題を研究するに際して之を無視するを得ぬ。工業勞働者の勞働運動は其の第一期、即ち社會政策時代に於ては、勞働條件の改善を以て唯一の旗印しとなして押し進み得るが、小作農民の運動は單に小作條件の改善のみを以て唯一の目標とし、之を達成することに由りて自家の經濟的地位を大いに高め得ると云ふことは期待するを得ざるものである。彼等には尙自作、小作に共通なる農業經營改善の問題が殘つて居り、農產物價格の調節、都鄙負擔の均衡、田舍社會生活の改善等の諸問題が殘つて居る。即ち小作農と雖も農業經營者又は田舍住民としての諸種の關聯せる問題につきて滿足を得るにあらざれば、單に小作條件

の改善のみを以て萬事終れりとして安心する譯にゆかぬのである。勿論工業勞働者とても、彼等が社會人としての問題は勞働條件の改善以外に殘つて居る。さり乍ら此等は別個の問題として切り離して取扱ひ得る。農村問題に於ても此の事は全然不可能ではないが、農村に於ては此等諸問題の有機的關係密接なること上述せるが如きを以て、這般の關係を認めつゝ研究の歩を進むる方が妥當なる場合多いのである。されば嘗て社會政策學會の討論會に於て、農民保護政策の內容多岐にして主眼判明せずとの意見も出たが、之は農村問題の特殊なる性質を聊か無視した結果でないかと思はるゝ。（社會政策學會論叢。第八編、小農保護問題一四—一五頁參照）。都會の工業勞働問題と農村問題とは共通點もあるが又異る點も多い。工業勞働に對する態度を以て直ちに農業勞働に對するは、大いに誤れるのである。之に關する評論は省略するが、工業勞働者と農業勞働者との心理が大いに異る所あるを觀ても、此の事は判明する。嘗て獨逸の社會民主黨は農民の土地所有慾が田舍に彼等の綱領を實現する障害となるを歎じたが、これ彼等の綱領は都市の無產階級の要求、心理に應じて作つたものであつて、農村の無產階級の要求、心理を斟酌して作つたものでないことに基くのである。コールは社會主義は本來都會勞働者の事情に基きて發生せるものであるから、社會主義者が農業問題を論ずる時は多くは水を離れたる魚の如しと論じて居る（Cole. Guild socialism restated. p.161）。水を泳ぐ魚に陸を走らせんとするから錯誤が起る。マルクス主義を字義通り實行しようとした勞農露國政府も其の土地政策に於ては明かに躓いて居る。レニンは一九二一年春の第十回共產黨總會に於て「吾人は過去三年間に農民を變更せしむる能はざりしが故に、今や吾人自ら彼等に迎合して吾人の政策を樹てねばならぬ」と告白して居る。有名なる新經濟政策は此所に生れた。獨逸の社會民主黨も其の農業政策を近時改修せることは人の知る所である。

農村問題の內容の多岐に亘ること、又勞働問題の如く簡單にゆかぬことは、以上論述せる所に依りて略明かであら

う。さり乍ら幾多の關聯せる問題中、時代により社會により、自ら中心となるべき若干の主要點を握み得ぬわけではない。かゝる中心點を握へないで居る事は、農村問題に對して五里霧中の感をなさしむる所以であり、前掲社會政策學會に於ける如き質疑を發生せしむる所以である。然らば我が邦現下の農村問題を研究するに當りて、此の中心點は何處に存するか。之を述ぶるに先つて、農村問題發生の經過に就きて一瞥するを要する。

二　農村問題の今昔

抑も農村問題が今日の如き意味にて叫ばるゝに至つたことは、本邦に於ては日清戰後、殊に日露戰後の事であり、西洋に於ても十九世紀末葉以後の事である。勿論その以前に於ても農業、農村に關する諸般の問題がなかつた譯ではない。否、昔時に於ては農業は經濟界に於て壓倒的優勢を維持したる最大産業であり、農民は國民の最大多數を網羅せるものであつたから、農村の問題は常に爲政者の注意を怠らざる所であつた。されば農村問題の一基礎をなす土地制度に就きては、遠くは古代希臘のリクルグス（Lycurgus）の傳說的土地制度、エーヂス（Agis IV）の土地改革案あり、羅馬のグラックス兄弟（Tiberius Gracchus, Gaius Gracchus）の田制改革あり、支那にては周の井田法、本邦にては大化の班田收受の制等亦各々著名なるものである。更に近代に於ては十八世紀末より十九世紀中葉に亘る歐洲諸國の農民解放、本邦に於ては德川幕府時代の田畑永代賣禁止や、明治維新以後、農民及農地に關する在來の拘束を撤去せる明治初頭の農制改革等がある。土地制度以外にも種々の重要なる農政の行はれしことは云ふを俟たぬ。而して此等制度の設定、改廢に際しては國家の財政、一般經濟界の進步と云ふ事と共に農民の幸福も無論或る度迄は考へられたであらう。さり乍ら又農民を以て貢租賦役を徵すべき手段となし、所謂「百姓は財の餘らぬ樣に不足なき樣に治むる事」を以て道となし

たる者が多かつたことも疑を容れぬのである。

本邦舊藩時代の農政中に例を求むれば、佐賀藩の農民土地制度の如きは前者に屬し、鹿兒島藩の門割制度の如きは後者に屬する。（小野武夫氏著、舊佐賀藩の農民土地制度、同氏著、舊鹿兒島藩の門割制度。及び日本經濟叢書第一卷所載、本多正信著、本佐錄の中にて百姓の仕置の事の條等參照）。兎も角も舊時に於ては、政策が農民の幸福を圖りしと然らざりしとに拘らず、其の出立點及び主眼は國の財政であつた。我が舊幕府時代の多くの農政書や、十八世紀の獨逸國務學（クイラール・イッセンシャフト）の內容などは、明かに之を證明して居る。されば農民側より農村問題が彼等自身の幸福助長の目的を以て叫ばれしことは嘗てなく、僅かに農民の聲の擧げられし時は苛誅に堪へ兼ねて百姓一揆を起せし時のみである。これ即ち領主の徵稅に對する反抗運動である。一言にして之を蔽へば、昔時の農村、農民の問題は皆、領主の財政を中心として起つたと云へよう。

然るに今日の農村問題はどうであるか。農家經濟の困憊を救濟すべしとの聲は、昔日、蓆旗の下に叫ばれた聲と似て非なるものがある。昔しは强訴と雖も尙且歎願であつたが、今日は平等なる社會の一員として生存權を主張し、文明享樂權を主張するのである。而して單に農家經濟振興の問題たるに止らずして、實に社會問題として、即ち社會の經濟的、政治的秩序に關する問題、更に云へば社會の各種階級各種職業間に於ける富と健康と閑暇と勢力との配分關係を變化することによりて社會全體の幸福安寧に直接に影響する問題として、農業者自身より提出せらるゝに至つたのである。

尤も、我國に於ても最近十年前迄の農村問題は、單なる農家經濟の振興問題として論ぜられた。而して論議の中心は農生産の增加であり、農業經營の改善であり、又農產物價格の調節であり、而して此等を通じて農家經濟を裕かにする事であつた。然るに今日に於ては農村問題の中心が小作問題に移つたかの觀がある。之は分配問題であり人格問題で

あり、又社會的、經濟的正義の問題である。

斯の如き情勢を導き出したに就いては、農家の經濟上の困難も與つて力あつたに相違ない。如何となれば、多數民衆は其の生活の基礎を脅かさるゝにあらざれば、大々的民衆運動を起すものでないからである。さり乍ら又今回の世界大戰を機として全世界に澎湃たる民衆的思想、勞働者の自覺と云ふことによりて、農民が刺激せられ、其の自覺を促成された事は疑を容れぬのである。加ふるに一方、帝國主義的政策の破綻や、資本主義の有する種々の缺陷が、今回の世界大戰に依りて暴露せられ、之によりて在來の政治經濟組織に對する信仰の念が搖らぎしこと著しきものがある。偶像の破壞は農民運動の火に注がれた油となつた。殊に農業に於て、最も露骨に今日の資本主義と國際關係との缺陷が露はるる點がある。一は農生産額の増加が必然的に齎らす所の農産物價格の低落であり、一はそれにも拘らず國防上より國内農産物増收を必要とする事情である。農産物の増收は農業の集約化に俟ち、而して農業の集約化は農産物生産費を高むる傾向あること、而かも農産物數量の増加は其の市價を低落せしむべきが故に、農業者は此所に進退谷まるに至ることは、當然の歸結である。これ工業に於て生産の増大は生産物市價の低落を伴へども、同時に生産費の減少を來すが故に工業家は苦む所少なきと大いに趣きを異にする。然らば國内農産額の消長を自然の推移に任せ、生産制限をなす事によりて農業者をして不利を免れしめんとせば、他面食料及び工業原料の國内自給程度を低くして國防上の安全を犧牲とすることを覺悟せねばならぬ。これ今日の國際關係に於ては多くの人の躊躇する所であらう。而かも農産奬勵の爲めに農産物價格の極端なる釣り上げをなせば、商工の發達を害し、やがて農業自身をも害するであらう。

かくの如く、今日の農村は現代經濟組織下に於ける農工商の關係、及び國際關係に基く種々困難なる事情を抱藏しつゝあるのである。此の間、一方に於て農業界に於ける土地所有者、企業者、勞働者間に於ける利益分配問題並びに階

級的對立關係は益々深酷を加へつゝあるのである。今日農村問題を考ふるに當りて、國際的及び社會的關係を考慮の外に置くことは不可能である。現狀の下に於て、人口稠密、土地高價、農業集約なる吾文明國に於ては農業は單に榮えると云ふだけで仲々の難問題である。更に從業者をして幸福にして意義ある生活を送らしめんとせば益々問題は困難である。此の解決は之を如何にするか。そは單なる小作問題の解決や、生產及び經營技術の改善位で片のつくものではない。經濟、法制、教育、社會生活等百般の方面より、統一的目的を追求して努力することによりて始めて其の解決を期し得べきものである。其の解決の具體的方策たるや、國々の歷史、習慣、文化、天然資源、國際的地位等によりて其の模樣を異にすべきことは勿論である。

三　經營規模の擴大と農村の工業化

本邦現下の農村問題を解決するに如何なる對策を以て進むべき乎。農村問題の內容の複雜なるに顧みて、唯一無二の萬能的手段のあり得べからざることは明白である。然も吾人は採るべき凡百の手段中に於て、本來輕重を識別すべき必要に迫られて居る。

農村問題に限らず社會問題の殆んど凡てが經濟的事情に立脚して居る以上、農村問題の解決に當りても先づ農業の經濟的方面を發達せしむる必要あるは云ふを俟たぬ。而して此のためには在來とても幾多の方策が講ぜられたのである。即ち或ひは農業に關する教育機關、研究機關――帝國大學の一學部、農業高等專門學校、府縣立農學校、國立及び府縣立農事試驗場、蠶業試驗場、畜產試驗場、園藝試驗場等――を興して大いに農學を進步せしめ農業技術の改良を圖り、又現に圖りつゝあるが、其のために本邦農產額が增大せし事は著しきものである。農業上の改良進步は工業界に於ける

如く人目を聳動する大變革によりて點接せらるゝことなく、默々として不斷に徐行するものであるから、動もすれば世人の閑却する所となるが、事實に就きて之を觀れば近世農業の發達は著大なるものがある。人造肥料の使用を考ふるのみにても想ひ半ばに過ぎるであらう。

又或ひは耕地を整理し、開墾を助長するに努め、其の結果として地區の分合が合理的となり、一毛作田が二毛作田となり、又新たに耕地を増加して土地利用を高めし效は多大である。或ひは小經營者をして協同に依る利益を得しむべき産業組合を誘導發達せしめ、更に副業の奬勵によりて農家經濟の改善を企圖し、或ひは勸業、農工兩銀行、拓殖銀行、産業組合中央金庫等によりて農村金融の改良を圖り、又農業倉庫法を發布して米穀販賣組織の改善に貢獻し、更に米穀法によりて不徹底ながらも米の數量の調節を試むるなど、あらゆる方面に亘りて至れり盡くせりと思はるゝ施設をなして居る。農業者の利益を社會的に代表する農會に對して、補助金を下附し、又地方改良を目的とする各種團體の宣傳、講習等に對して直接間接の保護を加へて居ることも亦世人の熟知せる通りである。

斯くの如く生産技術及び農家經濟の兩方面の改善に對して、各種の施設が試みられ、而して皆多少の效果を擧げつゝあるにも拘らず、我が農村の經濟的困難は益々加はるのは何故であるか。これ即ち根本に於て我が農業が多く過小經營なるの致す所であり、之を改むるにあらざれば、凡百の施設も充分なる效果無きを證するに外ならぬ。

抑も本邦農村の大部分は人口過剩なりとは多くの人の云ふ所であるが、其の何故に然るやを考ふるに、昔時封建時代に於ては農民の生活程度も勞働能率も極めて低かりしに淵源して居る。百姓は「死なず活かさぬ」樣に統治せられ、最低限度の生活を法制的及び道德的に强制せられた。爲めに、多額の貢租を徵せらるゝにも拘らず、多數の耕作者及び其の家族が村內に生活し得たのである。而かも人口の無限の增殖は此の最低限度の生存をも脅かすが故に、「間引き」其の

他の名を以て呼ばれたる各種の人口制限法が廣く各地に行はれた。（宗教的信念に基き此の事の餘り行はれざりし北越地方よりは多數の出稼ぎ人を出した事は面白き事實である）。明治維新以後になりても農民生活程度の低きことは情勢を以て繼續したが、然かも教育の進み智見の廣まると共に新しき欲望を發生し生活程度の高まり來るは自然の勢ひである。一方在來の人口制限は禁壓せられて玆に人口は年々激增するに至つた。此所に於てか增加せる農産額を以てしても、到底かゝる多數の人口を、高められたる生活程度に於て、村内農業を以て維持する事不可能となつたのである。

而かも日清、日露戰後に於ける如く日本の事業界が急激に膨張せる時は、農村過剩人口は都市の商工其の他の方面へ移動することを得た。今日の如く我が邦經濟界が已に或程度迄發達し、而して沈滯したのであつては此の事は容易に望み難い。人口增加は切實に我が農村の脅威となつた。加ふるに此の間、日本の國際的地位の進むに伴ひて、軍備、外交、教育、勸業等百般の政務は非常に膨大し、之がために國民の公租負擔は愈々重く且大となつた。都鄙間に於ける公租負擔は本來均衡を失せる所に加へて、農業者は商工業者の如く所得を誤魔化すことが出來ぬから、其の負擔は益々重くなる道理である。（帝國農會編、農業者と商工業者との負擔比較資料參照）。農家負擔の公平化は今日の急務であるが、必要なる國費は之を支辨せねばならぬ以上、其の大なる輕減は期待し得べからざるものがある。一方又農家今日の生活程度を低むるが如きは不可能である。而して多額の支出を要する多數農民を維持すべく、我が農村は餘りに土地乏しきものである。

玆に余は一言目下の懸案に論及したい。農村問題解決の一方策として、小作制度調査委員會及び帝國經濟會議は自作農創設案を可決し、政府亦之が實行に意あるようである。自作農は小作農よりも稍收入が多いであらうし、農民の無産（プロレターリー）化（レンク）を望まざる限りは、種々の點より觀て自作農家の多いことは望ましいに相違ない。農家の全部又は之に近き程度が

自作農になれば、今日の小作爭議の如きは自然消滅する譯である。さり乍ら假りに本邦農家の全部が其のまゝ自作農となつたとして、今日の農家の經濟的困難は除かるゝであらうか。又今日農村問題の内容をなす諸般の事項が刄を迎へて解けるであらうか。決してさうでない。自作が小作よりも收入大なるは土地財産を有するからであつて、若し小作農が債務を起して土地を購入して自作農となりたりとせば、地價が相當に低廉ならざる限り、彼れの經濟狀態は却つて改惡する恐れがある。戰時中、英國にて高價の耕地を購ひて小自作農となりし者が、今や穀價下落に際して土地債務の利拂ひに困難を感じつゝある實情は之を證して餘りある。我が國の地價が多く收益價格以上なることは殊に考慮せねばならぬ。更に土地を殆んど無代價同樣にて小作農が取得せりとするも、小作農の經濟が非常に裕かになることは之を考ふるを得ぬ。現在數町步の小地主の經濟的地位が頗る悲況にあるを知らば、此の小地主の乏しき所得の數分の一を加ふることは小作農の經濟を多少緩和するに過ぎないであらう。何となれば小作料を支拂ふ必要無くなると共に、地租其他の公租を支拂ふ必要生じ、彼れの增加所得は其の差額に過ぎぬからである。今日自作農の經濟の苦しきことは年々約一萬戶の自作農の亡びつゝあるに見ても明瞭である。自作農自身の地位を改善せずして無暗に自作農を作ることは無意義である。

況んや今回の小作制度調査委員會の自作農地創定案の如き、年々僅かに二百萬圓、第六年目より五百萬圓の金を費して、當初は年々自作農地約五百町步を作り、漸次之を增すとしても尙且三十有五年を費して自作農地約十萬町步、即ち現在小作地二百八十餘萬町步の約三パーセント半を自作農地に變ずるに過ぎざるをや。之を英國が愛蘭に於て、又獨逸が東部獨逸に於て、自作農創設の爲めに數億又はそれ以上の巨額を費して比較的短期間に相當の成績を擧げたるに比すれば、計劃の大小比較すべくもない。かくして得る所は失ふ所を補ふに足らず、自作創定が有名無實に終らずんば蓋し

至幸である。而して假りに金額を一層增大すべく、尙簡易保險、郵便貯金等より低利資金を引き出して之に充當して、充分自作農地を作るとしても、一方今日の自作農の減少を防ぐべき手段を取らざる限り、底無き桶に水を吸み入るゝ努力を爲すに止るであらう。更に又此等施設が成功し、本邦農家が全部自作農となりたる場合を假定しても、彼等は今日の窮境より悉くは脱却し得ぬであらう。

これは要するに本邦農業經營規模の過少なるに基くのである。本邦農家一戸當り平均耕作反別が田五反五畝、畑五反五畝、合計約一町一反なるは統計の示す所である。當然小經營なるべき兼業農家を除き、專業農家のみを取りて考ふるも余の推測によれば平均一戸當り一町五反內外に過ぎぬと思はる。此の小面積を以てしては集約なる園藝、養蠶等を大いに行はざる限り、到底充分なる收入を擧ぐる能はざるものである。自作田畑各一反歩の粗收入は、十數年前に於て平均約三十二圓及び十九圓であつた。今日に於ては增加して、それぞれ約八十圓及び五十圓位となつて居る。

今農家が田畑各七反五畝宛、合計一町五反を自作するとして、彼れの總收入は十數年前に於て約三百八十圓、今日に於て約九百八十圓である。之より生產費を控除せるものが彼の所得である。而かも此の間、勞賃はより大なる比率を以て騰貴し、物價指數も二倍以上に上り、農家の生產費並びに生計費は甚しく膨大して居る。最近に於ける某官省農家經濟調査によれば、平均田畑一町九反歩、山林其他一町九反、合計三町八反歩の農用地を經營する自作農家が、農業によつて得る收入は約千七百七十圓にして、農業經營費約六百三十圓を差引く時は、殘額千百四十圓が彼れの農業所得となる計算になつて居る。而して彼れの家計費は千二百六十圓に上つて居り、不足額は農業以外の收入を以て辛うじて補つて居る有樣である。今之に準じて考ふれば、一町五反の自作農は自家勞賃其の他を加ふるも農業所得約九百圓に過ぎぬであらう。之を以て中流の生活を營み、子弟の教育を充分になし得るや否やは問はずして明かである。若しそれ小作に至つ

ては、約一町五反を耕作しても其の農業所得は六百圓に充たざる有様である。

されば余は今後の專業農家は少くとも二町歩以上、所によりては三四町歩を耕作して、始めて相當の收入を擧げ得るものと信ずる。之と共に農業組織の改善に努力すべき事は勿論である。かくの如くにして專業農家一戸當り耕作反別を少くとも現在より五割以上增大する時は、農業の人口收容力は大いに減殺されるが、之を直ちに都會に送り出す時は、徒らに失業問題や住宅問題を激發せしむるに止まるであらう。かくする事は不可能でもあり又望ましからざるが故に、余は農村に大いに工業を起すことの必要を認むる。農林產物の加工（罐詰、生糸、木工等、等）は最も妙であるが、必しも之に限らずともよい。工業が都會に集中せしは金融、販賣、勞働者事務員を得る便宜等に基くのであるが、今日は田舍に於ても此等を得る事は困難ではない。金融や販賣には產業組合等を利用し得べく、勞力に至つては農業組織の改革と共に農村に於て之を求むること容易であらう。動力の如きは水力電氣豐富なる我邦にては、これ亦敢て困らぬ。

工場を英語にてミルと云ふは、水力を利用し得る溪流に沿ふて工場が先づ設立せられた事實に基くさうであるが、我が國の如き此のミルを字義通りに發達せしむることも不可能ではあるまい。農村電化は農村工業を發達せしむる基因となるであらう。在來の農民にして專農者に耕地を提供せし者は、此の工業勞働に從事して村內に止まり得るのみならず、尙彼れは兼農として一二反の耕地を家族と共に經營することが出來よう。この事は純然たる工業勞働のみに從事するよりも、仕事に變化を與へて心身を養ひ、趣味生活と共に經濟的安固を與ふる上に於て社會的意義の大なるものがある。工業勞働者の小農圃經營が英獨等にて盛んに行はるゝは故なしとせぬのである。

或ひは農村に工業を起すは農を衰へしむとの杞憂を抱くものがあるかも知れぬ。併し農工各々其の所を得れば相互に利益を受くるものであつて、南獨地方の如き山間の農村に立派なる工場が經營せられ、而かも附近の農業は益々繁

榮せるの實例を見る。今日の如く工業は都市に集中し而して農業薄利、田舍生活單調なる場合と、工業が農村内に存在し、農家は相當に所得を擧げ而して田舍生活が單調ならざる場合とは、其の揆を一にせざるべき事容易に想像し得らる。一局部に起り得べき過渡期の弊害の如きは、假令生じたりとも大局より打算として忍ぶべきであらう。

　或ひは又本邦工業の現時の不振を見て、農村に更に工業を起すことの不利を考ふるものがあるかも知れぬ。さり乍ら我國人口の年々増加する以上は、農業の發達は飽迄念とすべきも同時に工業を益々發達せしむる必要あるは多辯を要せぬ。此の事不可能なれば我國民は多數の失業者を出して漸次貧窮に陷るより外に途がない。我が國工業が今日ゆきつまりの狀況にあるは余も之を認むるのであるが、吾人は國民的死活問題として何としても現狀を打破し局面を展開せねばならぬ。一般物價を低廉ならしめ、生活費及び生産費を安くする爲めには、一時的不景氣の襲來を忍びても適當なる金融政策を取らねばならぬ。勞働能率を高むる爲めには利益分配制度工場管理委員制度其の他によりて勞働者の地位を高め其自覺を促さねばならぬ。我國工業の生産並びに販賣組織に於て無用の浪費多き事は我國最大工業たる生糸工業に就きて見ても明瞭である。經營管理を合理化せずして工業の沈滯を叫ぶも詮なき事である。此等一切に關し努力を傾けて我が工業は益々之を發達せしめねばならぬ。而して余は其のあるものは之を農村に於て發達せしめよと叫ぶのである。余は産業組合將來の發達、殊に市街地消費組合と農村産業組合との適當なる聯絡によりて、組合經營の工場を農村に起し得る可能性を信ずるものである。現在廢棄せらるゝ農産物にして加工利用の途を考究すべきもの多々ある。器械工業、化學工業の如き、適地に之を發達せしむるは勿論として、更に一方農民美術工藝の如きものゝ發達の余地大なるを思へ。ば農村の工業化は決して空想ではない。

四　農村計劃と植民政策

斯く農村に工業を起し、一方專業農家の經營面積を增すと同時に、他面兼業農家の經營面積を減ずれば、農村の現在人口は略之を村内に收容し得るであらう。其の實現の手段方策、採用すべき工業の種類等は各農村別々に之を考慮すべく、國家としては之に對して充分なる援助を與ふべきである。かの僅少なる自作農創定費の如き寧ろ此の目的に轉用するの優れるを信ずる。尤も凡ての農村が均一の程度に工業化する必要は毫も無いのであつて、所によりては永く純農村として止まり得るものもあらう。農村が種々多樣なる狀貌を呈することは却つて希望すべきである。

斯くの如くにして現在の農村住民は之を農村又は農工村に收容し得ると思はるゝが、併し此の爲めには國内に於ける人口の移動が或る程度迄行はれねばならぬ。即ち今日既に多大の過剩人口を有し、將來工業化するとしても多少は村外に人を出すことを可とする地方と、之と反對に人口不足なるために適當なる産業の起り兼ねて居る地方とある。東北地方の如き、人口稀少なる爲めに相もちの關係なくして産業發達せず、爲めに農村の人が他に出でゝ益々人口を不足せしむるの奇現象を見る事もある。此等を適當に調節する爲めには、政府は適當なる内地植民の方策を樹てねばならぬ。

更にかく内地植民をなすとするも、年々六七十萬宛增加しつゝある我が人口の過半は農村内に於て增加するものであり、之を引つゞき村内に收容することは到底不可能である。日本は人口稠密なること世界屈指であるが、耕地當り人口を計算する時は實に世界文明國中第一位を占め、斷然として他を拔いて居る。如何に國内の農工商を發達せしむるに努めても、天然資源乏しき我國にて年々六七十萬の增加人口を養ふは非常なる難事と云はざるを得ぬ。結局我が國民は海外發展を爲さゞる限りは窒息して共倒れに終るか、然らざれば人口を制限するかに歸着するであらう。我が國各方面の

事業の成績擧がらず、仕事の能率低き事は、一面人口過剩なるために勞力を浪費するに基いて居る。社會的空氣の險惡を加へつゝあるも、民其の堵に安んぜざるの致す所である。

されば人口制限を實行せざる限り、海外發展は我が國民の唯一の活路である。而してそは又我が農村生活の高められたる水平線を維持すべき安全瓣である。海外植民又は移住により國内にくつろぎが出來れば直ちに人口増殖して之を充たすとの論もある。併し社會に余裕あり、下層階級の人が努力如何によつて自由に上層に上り得るに至れば、即ち社會に毛細管現象が行はるゝ時は、各人が高められたる生活程度を維持せんとするが爲めに、人口の極端なる増殖は低減する傾向ありと云ふヂュモンの說は參考とすべきであらう。兎も角も國内の人口増加に基く壓迫を移植民によりて多少緩和し得ることは之を認めねばなるまい。

今余は此所に我が邦の植民政策を評論する事は避けるが、我が國是として植民政策を樹立するの必要は之を認むるものである。而して朝鮮には我が農民の入り得べき餘地多大ならず、滿洲亦多くは企業者としての發展に適すれども邦人の筋骨を用ふべき天地狹しとせば、滿鮮並びにシベリア地方の植民に可能的最大の努力をなすとしても、尚且他地方へも我が民族發展の地を見出さねばならぬ。而して、そは濠洲及び北米の門戸閉されたる今日に於ては、指を南洋、南米、及び舊獨領アフリカに屈するのみである。就中余はブラジルに多大の期待をつなぐものである。在來の我が國には植民政策又は移民政策の何等見るべきものがない。朝鮮植民の如きすら近時殆んど活動を停止せる觀がある。海外移民に對しては何等組織的指導後援をなす事なく、徒らに移民會社の私腹を肥さしむるのみであつて、ために不結果に終る移民も少なからぬのである。今後の植民及び移民に對しては適當なる精神的並びに經濟的指導者を附し、金融、宗教、醫療等の便も考へ、一組織體として之を渡航せしむる事肝要である。之に要する經費の如きは植民地移住地の發達に伴ひて

貿易其の他の形によりて回收し得るであらう。又かくの如くすれば國民中の最優分子が海外に出で去りて、母國を疲弊せしむるとの掛念を抱く者もあるが、適當なる手加減を加ふる事によりて、此の掛念をして杞憂たらしめ得るであらう。

以上余は我が國農村問題の解決のために

一、農業經營規模の擴張

二、農村に工業を興すこと

三、國內及び海外移植民

の三點を實行するを以て最も緊要事と認むるものである。而して之が前提としては各農村に於て

四、農村計劃を建つること

が必要である。農村計劃とは農村の經濟的、社會的、文化的組織並びに生活を誘導し、維持し、發展せしむる爲めに、農村住民自身が、之に向つて現在農村を意識的に改造しゆくべき一の模型を作ることである。農業組織の改善、農業金融、産業組合、耕地整理、農村教育、其の他在來の各種農業政策は皆此の農村計劃の大方針に基きて之を活用せねばならぬ。地方的指導者の養成維持も、村外に出づべき人員の決定も農村計畫に待つべきである。此の農村計畫と相並んで國家としては、都鄙負擔の公平化、農産物價格の調節、土地制度の改革、小作法及び家産法の制定等農業經營の社會的政治的基礎たるべき事項につきて充分なる考慮を拂ひ適切なる施設を行はねばならぬ。地方行政制度の如きも刷新を加ふる要最も大なるものであつて、地方財政の膨大し地方政務の甚だ重大なるにも拘らず、地方行政官吏の更迭頻々として在職數ケ月乃至一兩年に過ぎざるもの多く而して更迭と共に前任者の計劃を變更するため、地方民は多額の公租を負

捨しつゝ行政官吏の手段の存在たる種がある。これ吏道によらざれば地位待遇を向上する能はずとする不可解なる不文律に基く點あると共に又、地方官廳を以て中央官吏の養成所視する謬れる觀念に基くことが多い。更に又郵便貯金等により地方より多額の資金を集めたる大藏省預金部が多く其資金を中央に於て融通し甚しきに至つては特許會社の失敗事業の救濟等に使用するの不當なるは、夙に人の論ずる所である。

凡て此等の實情は現今に於て一切の文明的施設國家的事業が都市に集中し、人材と資金とを擧げて共に田舍より空しからしめんとする趨勢を明示して居るのである。故に國家は此の間に善處して

五、都鄙偏重の弊を矯むること

に努力せねばならぬ。斯の如にして始めて農村の振興、農村文明の發達を庶期し得べく、農村問題は茲に合理的解決の緒に就いたと云へるであらう

五　農村教育の新理想

以上余は農村問題の解決に關する卑見の概要を述べた。然かも此等方策の實行は畢竟するに農民自身の覺醒に俟たざるを得ない。人間の改良が凡ての改良策の出發點にして又到着點なりと云ふ古くして、而も常に新らしき眞理に吾人は再び逢着する。農村計劃の如き、村民の自覺なくしては到底其の實現、否研究をすら望み難いのである。産業組合の如きも自覺せざる農民に對しては徒らに負擔を增すに過ぎざりし例、多々存する。此所に於てか、農民の教化を高め自覺を促すべき農村教育の問題は我等の最後に一考せざるべからざるものとなる。

抑も農業教育とは單なる農業教育にもあらず、又農村に於ける學校教育を指すのでもない。其は農村居住者に對す

る、學校及び學校以外に於ける教育の全部を總稱せるものである。この中には技術的、經濟的教育も、法制自治に關する教育も、其の他農民の教養を高むべき農村の社會的施設、娯樂、運動等に至る迄の一切を網羅して居るべきものである。而して此等教育は人間教育としての普遍的要素を具ふると共に、又農村に於ける特殊なる事情要求に基く特殊なる教育をも含むべきである。かく考ふる時は、農村教育なるものは上述する農村問題の內容と無關係に考ふる能はざるは明瞭である。米のカツバレーが

『今日の農村學校問題は教育問題たるよりも寧ろ社會問題である。而して長年月間に於ける國民的發展の結果が、輓近田舍生活に起りし著大なる變遷と結合するに基きて生じたものである。農村學校問題は農村生活問題と離す可らざるものであつて、實に後者の一面を示すに過ぎぬ。』(Cu berl y, Rural Life and Educat on. Introduction)

と云つて居るのは、學校教育のみに論點を限局したる相違はあるが、其の見解は即ち余と同斷である。而して余は農村教育は單に農村社會生活に留意するのみならず、農村と都市との有機的關係、又一國の政治經濟教育等の不可分なる關係を顧る時は、廣く國民生活の全體に就きても一通りの考慮を拂ふの必要あるを認める。これ普遍的國民教育の一部と目すべきであるが、同時に農村生活にも切實なる關係を有して居る。例へば國是として植民を奬勵する時、之に關して適當なる知織を有することは、一般的教養として必要なるは勿論であるが、更に多數の子弟を植民地に出すべき立場にある農村にとりては、農村自身の問題としても肝要である。此のために植民的知識を子弟に與へ、場合によりては多少の準備的訓育を施すことも必要であらう。かゝる事柄をも農村外の事なりとして悉く排斥し去るは、即ち其の農村生活を極めて孤立的なる偏狹なるものとなし了するに過ぎない。

此の意味に於て余は農村計劃が農村教育中に於て占むる重要なる意義を指示したい。此の農村計劃を共々に研究する

事は、其の村の對外的及び内部關係の全部、其村の文明生活の歸嚮する所の全部を、直ちに諒知せしむる所以である。農村計劃の設定に關與するは、これ各人に理想實現に努力する機會を與ふる創造的教育の一部である。教育の一半はものに對する見方を教ふるにある。パウルゼンによれば教養(ビルドウング)とは知識の所有を意味せずして、認識並びに動作の活ける力を意味するのである。然らば農村計劃によりて動的社會の觀察並びに之に對する操作の手段を學ぶ事は、其の人の教育上重大なる意味を有することと疑ひを容れぬ。(Macgarr, Rural Community, 1922, P.43 參照)

次に農村の社會教育上健全なる社交、娯樂、運動、圖書館等は甚だ必要なるものであるが、其の細論は一切之を省略する。只一言注意を促したきは農村に於ける適當なる指導者の養成である。民衆的なる社會と雖も、之に適應せる指導者は常に必要である。指導者の個人的感化の下に有力なる社會教育は行はれ、社會生活の水準線が高まるものとすれば、かゝる指導者の養成及び維持は農村教育上の一大問題である。然らば此の指導者には如何なる人物を以て適當なりとするか。農村社會學の著者ヂレット教授は、農村指導者の備ふべき性質として、獨創力、組織的才能、人間の企圖に對する同情、鍛錬せられたる智力、及び見識を擧げて居る。かゝる人物を田舍に得るの望みは皆無ではない。ウアード等の研究によれば潜在せる天才は、人口五百につき約一人の割合にて存するが、多くは其の能力發揮の機會を得ずして終るさうである。かゝる人物を發見して大成せしむる事は今後の重要なる研究事項である。而してかゝる天才又は之に準ずべき能才をして、農村に留りて其の能力手腕を發揮せしむべき社會的環境を作ることは甚だ肝要である。寺院、學校、役場、農會、産業組合、青年會、婦人會、等の機關の幹部として、適當なる指導者を得ることは甚だ望ましき事と云はねばならぬ。

(J. M. Gillete Rural Sociology. New Ed. pp. 515—527參照)

次に農村の學校教育に就いて一考したい。專門の農學校教育は姑らく措き、普通教育に於ては必しも農業の技術的知識は授けずとも宜しいが——之と反對の意見を抱く人が米國にも日本にもある——併し、農村的空氣は飽迄之を維持したいのである。農村的空氣とは即ち自然に接近せる生活を通じて流るゝ原始的氣分であり、土に親しみ農を懷しむ感情である。學校に於ては、教育の素材を日常觸目する自然界並びに農業界に取ることに由りて、かゝる氣分を養ふと共に、農業に對する興味を生徒に抱かしむる事が出來やう。但しこれは他職業を蔑視する狂熱的尊農論者を養成することを目的とするにあらずして、唯、農業が他業に比して何等劣らざる尊嚴なるものなるを自覺せしめんがためである。自然の大なる力に對する驚異の眼を開かしめ、而して今日の都會生活に對する盲目的尊信の態度を變じて批判的とならしめんがためである。

更に又工業が村內に存する時、又は農家子弟の多數が出でて工業に從事するが如き場合には、工業に對する理解と趣味を養はしむることも不可でない。吾人は工藝を通じて自然を禮拜することとすら出來る。農村に生れたるの故を以て、一切の人を其の素質に反してまでも、又經濟的環境の當然なる要求を無視してまでも、無理に農業に從事せしめんとするが如き教育方針は、到底成功せざるのみならず、却つて弊害を齎らすであらう。

最後に余は教育の一般的方針に就いて尙一言したい。知識偏重、勞働の輕視の弊風は今日の教育界並びに一般社會に滔々として流れて居り、農村亦此の例に洩れぬのである。勞働の神聖は近時數次論ぜられるが、決して充分に體得せられて居らぬ。更に知育の偏重に至つては其の弊を說く聲すら微々たる有樣である。偶々之を唱ふる者は、固陋なる復古論者に過ぎぬことを發見する。

抑も教育の理想は古代希臘にありては心身兩者を完成して國家に役立つべき人物を作るにあり、東洋の教育理想亦人

格の陶冶を主眼として居つた。而かも在來の教育理想が政治的、宗教的、乃至經濟的支配階級の養成、即ち國民中の一小部分の育成教化に重心を置きしことは爭ふべくもない。而して此の情勢は民衆的勢力著しく伸長せる今日に於ても尙繼續し、大學は官吏又は有產階級の高級使用人製造所の觀あるが故に、獨逸諸大學の如きは新興勞働階級より不信の眼を以て眺められて居る狀況である。〔L. Wiese, Soziologie des Bildungswesens. S 154 參照〕兎も角も今日の高等教育機關が充分に民衆化され居らざるは事實であり、而して此等高等教育機關の感化の下に立つ普通教育機關までが、民衆化せられざる教育理想を有して居る事も事實である。然るに一方、近代科學の發達と共に教育の目標は、成る可く多量の科學的知識の獲得と云ふことに向けられ、爲めに物質的利便を多く與ふる效能ありし半面に、精神的陶冶は著しく閑却せられた。かくして學校は知識を授くる所、教育は就職の手段なりと云ふ觀念が一般に普及した。而かも人格の伴はざる知識は却つて社會を毒することが數次發見せらる、徒らに知識を逐ふことは自己を失ふに終る、とのゲーテの警告が今更ら想起せらるる。

吾人固より職業的教育、科學的教育が現代社會に於て有する意義を輕視するものではない。さり乍ら其は決して教育の全部であつてはならぬ。知識偏重の結果は極端なる詰込主義、暗記主義流行し、獨創的研究や眞理を逐ふの熱情は却つて抑制せらるゝが故に、知識の發達それ自身すら停止するに至るのである。而して社會は教育ある者と無き者との二階級に分れ、教育ある者は只死藏、否往々にして忘却せる知識を誇示し、之を以て物質的幸福を克ち得るの手段となす傍ら、教育なき者は徒らに羨望して彼れに追從せんと試むるのである。更に現狀を以てしては高等教育を受くることは有產階級者に事實上限定せらるゝが故に、高等教育と資本主義文明とは一種の結合をなし、爲めに教育は其の社會的使命を充分に徹底せしめ得ない。

教育界の現狀にあきたらざる吾人は、茲に眼を擧げて再び東洋の古聖、希臘の哲人の教育理想を想望せざるを得ない。さり乍ら異なれる時代を無視して單純なる復古をなすは、これ退歩である。吾人は彼等の理想を近代化して今日の民衆的覺醒、科學的文明に適應せるものとせねばならぬ。而して學問研究の態度それ自身をも一層人生化せねばならぬ。想ふに大學擴張運動は大學精神の改造と共に、今後愈々重大なる意義を加へ來るであらう。丁抹國民高等學校教育の如きも亦以て他山の石となすに足る。余は民衆化せる新しき教育理想の中に、「自然に還れ」とのルーソーの聲や、醇化せる野性の復歸を夢むるカーペンターの希願を抱含せしめたい。我が農村は此の教育の新理想を實現すべき絶好の舞臺である。東洋の精神的文明の發揚と農村の振興とを結びつけて獅子吼せるタゴールの聲（大正十三年六月帝大講演）は我等に多大の暗示を與ふるものではないか。

人類衰亡の眞因

川村多實二

一　人類の未來に關する論爭

現今地球上の最優の地歩を占めて居る吾々人類が早晩絶滅に瀕す可き運命にあるといふ人類衰亡論は、我動物學界の泰斗である理學博士丘淺次郎氏が其舊著「人類の過去將來及び未來」「現代文明の批評」を始めとし、諸種の著作及び講演に、十數年に亘りて屢々唱道せられた所で、既に世間衆知の事であるが、博士は本年に入つて更に中央公論一月號に「子孫を愁む」と題し、又最近大阪毎日新聞紙上に「猿の群から共和國まで」と題して、略ぼ同一趣旨の説を講述せられた。抑も此説は博士自身が斷つて居らるゝ通り、歐米諸國でも未だ曾て唱へられたことなき新説であるが、博士に於ては十數年來練りに練られたる宿論であり、而して御自身では世間實際上の事實にもよく適合すると保證して居らるゝ學説なのである。

此丘博士の人類衰亡論に對して今日迄我邦で贊否の意見を發表したる人は極少數であつて、私の知る範圍内では唯二つの代表的反對論を擧げることが出來る。其一は故大杉榮氏がクロポトキンの相互扶助論を擔ぎ出した頃に、博士の人世觀を評して「人間の社會と他の動物の社會とを全く同一視する傾向が博士には餘り多過ぎはしなかつたか」といつたのがそれであるが、之は私も同感である（後節參照）。然し此時は大杉氏の方に別に纏まつた自説が無かつたのか、それとも進化論に不案内であつた爲めか、如何にも怖々にチョッカイを出した樣な攻擊態度であつて、少しも徹底して居なかつた。從つて丘博士は之に對して特に應答せられたことを聞かぬ。

其二は京都大學の小野俊一助教授が一昨年七月中央公論誌上で「丘博士の人生觀に對して吾々が抱く疑念」と題し、又昨年一、二兩月同一誌上で「子孫崇拜論」なる長篇を以て發表せら

れたる意見である。小野氏は前者に於ては「人類愛は今なほ小さき揺籃の中にあれども、やがては必ず全地に普く行き渡り、民族間の憎しみと敵意とに打勝ちて世を支配するに到る」といふ説を主張せられ、後者に於ては「人類が人類として出現後の歴史にも進化と向上とのみを認め」、而して「其れは子供の中の或者が常に全ての親及び祖先に優つて居た爲めである」と論斷し、「現在の我れ等が未來の爲めに最も有效に奉仕し得る方法は惰性によつて今の人類生活の中にまだ存在してをる不合理と信ぜらるゝことの數々を一つでも多くまた一刻時も速かに除き去ることである」と結論せられた。小野氏の此二回の駁論は、啻に動物學上の材料ばかりでなく、歴史宗教衛生等の各方面の事例が多く擧げられてあるが、然しその爲めに論鋒の犀利を害したかの感がある。而して丘博士は之に關して本年一月に「友人小野俊一君が非常に長い文を載せて殆んど完膚なきまでに私の説を打破られた」と記されたけれど、之に「對しては何も云はぬ」とて取合はず、而して其後も依然として前説を持續せらるゝ態度より推斷すれば、此「完膚なき迄に私の説を打破られた」といふ博士の一句は、實は皮肉なる冗談であつて、博士は此冷評を以て小野氏の説を一蹴し去られたものと解してよいのであらう。

私は人類の未來をば丘博士の云はるゝ樣に絶望とは考へないが、さりとて小野氏の如く樂觀す可きものとも思はぬ。兎も角も、現時の人類が次第に衰運に向ひつゝあることを堅く信ずることに於ては丘博士と同一である。之に就ては私は先年來各地の講演の際に大要を喋舌つたこともあるが、私の考は衰滅の原因の考察に於て、博士のとは少しく異つた方面に立脚して居る。夫故に私としては、一度何かの機會に自説の梗概を書綴つて、前記諸氏の高教を仰ぎ傍ら、世間の批判にも訴へ度いといふのがかねての希望であつたが、偶々大阪毎日新聞紙上に此問題が揭げられたのを讀んで、取敢へず執筆する氣になつたのである。それで私は博士に對する質疑を主として、同時に簡單に卑見を述べて見ることゝする。固より弱號私の如き者の愚見、到底丘博士の一顧にだも値せぬであらうが、然し乍ら事柄は決して單なる學術上の問題では無くて、直接現代青年思潮の歸趨に關するものであるから、私は本誌の編輯を掌らるゝ人々に丘博士の示教を本誌上に揭ぐることに盡力せられるやう御依頼し置くものである。

二　人獸の別

本題に入るに先つて私はすべて人類社會の問題を論議せんと

する生物學者に取つて常に注意せねばならぬ一事のあることを斷つて置き度い。それは外でもない、人類と他の動物との差違を正確に了解することである。

前世紀の中頃に生物進化論が現はれて以來、人類の形質に關しては勿論のこと、その精神上の諸問題を取扱ふに當つても、他の動物部類の場合を比較して考へるといふ傾向が盛となつた。之は寔に結構なることで、又必ずそうなければならぬことであるが、併し之が爲めに人類の本質を誤解して、人獸の區別を無視するやうのことが有つてはならぬ。古來何處の國に於ても、人類と他の動物とは人間と畜生といふ風に全然懸け隔つた者と考へられて居たもので、ダーウイン、ハックスレー、ヘッケルを始めとし、最初生物進化論の宣傳に努力したる多くの學者達は、先づ此人獸間の墻壁を取り除くことに全力を盡さねばならなかつた。彼有名な「人類と類人猿との距離は類人猿と猿とのそれよりも短い」とか「人間と猿とは極近い親類だ」といふ樣な標語は此必要から、論說にも講演にも常に盛に唱へられたのである。

此事實は方便のためでも何でもなく、又少しも誤なき事實ではあるが、然し吾々は之に一の大なる例外のあることを忘れてはならぬ。それは神經系統の官能特に大腦半球の生理作用に於ては人間が決して猿を距ること遠からざる所に位する者では決して無いといふこと、言ひ換ゆれば智能といふ標準で測つた場合に、人類と獸類との中間に他の孰れの動物部類間にも見られ難き程の大なる間隔が嚴存するといふ點がそれである。このことは大腦皮質部に在る神經細胞の數量からとしても立證せられることであるが、そういふ形態學的の根據よりも、寧ろ腦髓官能上の實例を擧げた方が一般には解り易いかと思ふ。

夫は動物園の猿の檻を利用して之を試すことも出來る。例へば猿の手の屆かぬ高さに食物を吊して置き、其下方少し横に寄つた所に踏臺を置くとする。若し猿に此踏臺に登れば食物に達し得るといふ推理力があるならば、直樣猿臂を伸ばして此踏臺を引き寄せる筈である。さて澤山の動物に就て實驗して見ると、所際それだけの智慧の廻る動物は唯數種の類人猿だけで、夫以下の猿には一匹も無いことが解る。次に世間では「猿の人眞似」といつて、猿が何でも人間のする事を眞似ると信ずる人が多いが、學者が實際に試驗して見た所では少しも其證左が上らぬ。卽ちいくら彼等の前で人間が行つて見せても、猿が能動作を覺えるに要する時間を幾分なりとも短縮せしめたといふ陽性の結果が出ない。鸚鵡や九官鳥の樣な反射的本能的なる模倣は別として、智能によるところの推理的模倣なるものは猿の

にも又それ以下の動物にも實在せぬことが解るのである。恐らく「猿の人眞似」なるものは、單に猿の擧動が人間のそれに似たることより來た誤解であらうが、今日の動物心理學からいへばこれは寧ろ當然の事であつて、反應を或時間保留することの出來ないやうな、卽ち記憶心象を持ち得ざる程度の猿智慧では、到底模倣の出來る筈が無いのである。以上の二つの事實を以てしても、鳥類の賢こさがどの位の程度であるかゞ大略推定し得られ、兒童の知慧と雖も猿類のそれに較べるならば如何に偉大なるものであるかゞ容易に首肯せられると信ずる。

然し世俗には未だ此事實を知らないので、鳥獸蟲魚にも略ぼ人間と同樣なる智能があるかの如くに考へて居る人が少くない。今日ではまさか「鳩に三枝の禮あり烏に反哺の孝あり」とか「獅子は子を産んで三日目に其子を絶壁の上より墜して强弱を試す」といつた樣な話を眞面目に信ずる人はあるまいが、「昨日怒らした蜂に今日追かけられた」とか「蜘蛛が死眞似をして敵の目を晦ます」といふやうな談話を少しも怪まずに語り合つて居る人は幾らもある。クロポトキンの相互扶助論には之に似た「お話」が澤山に採用せられて、蟹が友人の困難を救助する話や、兎が遊戯に夢中になつて來ると狐を仲間に入れて一緒に踊るといつた樣な飛んでもない動物學が澤山に引證せられて居るが、之は强ちクロポトキンだけを笑ふわけに行かぬ。前世紀の動物學者例へばダーウインやブレームなども、實際此位のことはあり得ると信じて居たので、ダーウインは「蟻には人間以上の腦髓がある」と眞面目に書いて居る。大杉榮氏の愛讀したファーブルの昆蟲觀察記などにも亦同樣なる「買ひ被り」が到る處に見られる。然しそれは昔の事、過日大阪毎日新聞に丘博士が猿の團體を記して「萬一自身一己の利益のために團體全部の利益と撞着することを敢てする者があれば、大將は嚴しく之を罰して殆ど半殺しの目に合はせる故、一度で懲りて決して二度とはせぬ」と述べられたのを讀んだ時には、少からず喫驚した。「一度で懲りて二度とはせぬ」ことは、釣り落された魚にもあることで左程高度の智能を要せぬことであるが、刑罰を加へて他を懲らすといふ心は餘程複雜なる心像、卽ち高級の推理力を必要とするからである。丘博士の「進化と人生」（大正十年增補版）には更に驚く可き目撃談が載つて居る。それは東京お茶の水の聖堂の森の側で一羽の烏が他の烏の巢の材料を盜んだ科によつて近邊の烏によつて死刑を宣告せられ、數羽の刑執行者で喙き殺された記事で、「斯樣に多くの烏に圍まれて今か今かと死刑の宣告を待つて居る烏の心を推察するに、嗚呼惡いことは出來ぬものなり、あんな事を爲なかつたならば、此樣な憂目には遇ふ

まいにと後悔の念に堪へぬであらう。又之を見て居る他の鳥等も心中に我も悪事を働いて露顯すれば此通りの目に遇ふであらう。恐るべし謹しむべしと自ら誡めるに相違ない」と書いてある。私は丘博士の仰せらる、動物心理の智識を疑はずにはゐられない。此調子ならば博士は烏に反哺の孝位はあるものと敎へて居らるゝかも知れない。

先きに説明した通り、智能は類人猿以下下等動物に向ふにつれて急激に薄れ行くもので、蜘蛛や昆蟲の類を越えてはもはや其痕跡をも認め難い。他方に於て、本能なるものは人類に入つて忽ち極度に減退し、殆ど全く智能のために覆ひ被されて仕舞ふ。夫故若も此差別を正しく了解して居る者ならば、精神上の問題に關して論議する時に、人間の場合を以て直ちに他の動物の場合を律することを絶對に愼むであらう。即ち吾々は猿の群れから人間の社會へ移る境目の所で餘程考慮を回らすことが大切である。決して形態學上の問題を取扱ふ時の樣に、人間の隣りが直に類人猿といふ樣な輕卒を敢てしてはならぬ。之即ち私が最初に注意す可き一大事と呼んだところのものである。

さて現時第一流の動物學者であつて尙此人獸一足飛びの議論を爲す失策が起る所には、單に輕卒とか結論を急ぐとかいふことの外に、尙一つの可なり尤もらしい原因があるのである。抑も生物界の性質には大抵合目的性といふ特色があつて、本能は特に此點に於て著しきものである。語を換へて云へば、自然的なる反射性の生理作用である本能に、恰かも理智により終局の目的を熟知して爲す時の樣な完全性があるといふことである。例へば、冬籠の爲に食物を貯蓄するとか、雛を育てる爲に精巧なる巢を準備するとかいつた樣な本能を取つて考へて見ても、其外觀恰かも吾々が理智の判斷によつてする貯蓄や準備と酷似して居るから、ウツカリすると兩者を混同してしまふのである。

但し之にも種々の場合があつて、狐狸の毛皮が冬季濃密となることは誰しも無意識に起ることゝ考へるが、アミーバが狀況の惡いときに厚皮を被りて蟄居することなどは、自ら意識してやると考へた人が動物學者の中にもある位だから、俗人に云はせたらば、何もかも承知の上でやつて居る事と思ふであらう。其他團體内の秩序を保つための本能や、共同の敵に對する防護の習性等には、此合目的性あるが爲めに假りに公德心とか犧牲的精神と名づけて差支なきものもある。而してそれは外見恰も吾々人類の道德と同一物であるかの如くに思はれるし、又中には名稱の一致せることから同一物と速斷する人さへも出て來るが、之は深く注意す可き誤謬である。

右の樣な輕卒の戒む可きことは、一度之に氣が附いた人なれ

ば常に明瞭に頭腦の中に保ち居る筈であるが、動物心理學そのものが比較的近年に發達した學問である爲に、古い動物學者の間には今尚ほ此點に氣附かぬ者が決して少くない。今迄多くの動物學者が生物學の側から入つて社會問題や人生問題を討議するとき、何時でも此本能と智能の合目的性酷似に欺かれて、猿の群から人類の社會へ一足飛びに飛越えて仕舞ふから、哲學者や精神科學者の意見との間に妙な行違を生じ、彼等から反對を受けるのである。我丘博士の著書を讀んで見ても「此程確實な生物學的證左や、進化學的論據があるものを社會學者、哲學者乃至精神科學者が何故同意せぬか」といふ様な不滿が到る處に溢れて居るが、之は博士の方が無理であつて、縱令戀愛の始まりが受精の必要であつても、栗鼠のする半死の蜥蜴の貯藏が動物界の私有財産の好例であつても、若くは動物界の「道德」が團體本位から出やうとも、それは畢竟他動物の場合であつて、人間の場合までをも直ぐにオイソレと無條件で贊成するわけに行かないのが本當である。

三　丘博士の人類衰亡論

さて之より丘博士の人類衰亡論に關する缺點を述ぶる前に、私は一般讀者の方々の爲に、博士の說の大要を繰返して置いた

方が便利であると信ずる。それはかうである。

(1)人間は腦と手との働きより、又社會生活をなすことによつて、他の動物を征服して地球上の最優者となつた。(2)かくして他の動物に打勝つた後は、人間の團體相互の間で相戰ひ、生存に適せぬ團體が負けて打ち亡ぼされた。(3)此間に自然淘汰によつて團體の生存に有利なる性質が次第に發達した。(4)他の動物の團體では大さに際限があり、夫以上に成らうとする時は團體が分裂するから、自然淘汰の働きが何時までも永續するが、人間では戰ふために用ふる道具が益精巧となる爲め、團體は際限なく大きくなり得る。(5)團體が大きくなれば生存競爭の結果が小團體の場合の様に徹底的であり得ない。即ち敗れた團體でも完全に絕滅せずして子孫を遺し得る。その爲めに自然淘汰の働きが鈍くなり終には全く止む。此時から團體生活に必要なる一つの性質卽ち先天的協力一致の精神が次第に退化し始める。(6)蜜蜂の如き昆蟲の團體は平等型であるが、哺乳類では階級型の團體である。此階級型の團體に必要なるは絕對服從の性質であるが、小團體の間は此性質が進歩するが、大團體となれば却つて退化し始める。其結果協力一致の精神が衰へて階級鬪爭が始まる。(7)此理により最初は獨裁王國であつたが、服從性の減退と共に憲法の必要を生じ、更に進むと共和國

になつて仕舞ふ。(8)自然淘汰の働いて居る時代が人類の昇り坂で、之が止むで以後が降り坂である。現代の人類には此兩時代の性質即ち利他性と利己性とが併せ備はつて居る。人間のすることに限りなく矛盾のあることは、斯樣な歷史を經て來た證據である。(9)人類が腦と手とを用ひて不自然な生活をなし初めた爲めに體質が次第に弱くなり來つたが、精神的にも人間を引き下げつゝある。(10)夫故降り坂の頂點に於て人類が持つて居つた樣な協力一致の精神を再び獲る見込はなく、人類は今後益々墮落する計りである。

以上が丘博士が極力主張せらるゝ人類衰亡論の趣旨であるが、今の場合此說の各項に亘つて論議したのでは夥だしい紙幅を費すから、右の衰亡論の眼目と認めらるゝ次の二點だけに就て考へて見度いと思ふ。第一自然淘汰によつて人類の性質がそんなに消長するものであらうかと云ふことゝ、第二階級型團體とか先天性服從性とかいふものが實際承認す可きものであらうかといふことである。若し此二點が事實に相違し、根據なき架空の議論であることになつたならば、丘博士の衰亡論は到底認容す可からざるものとなるのである。

四　自然淘汰說

第一の問題に關する私の感想を率直に云へば、私は丘博士が、進化の學說として殆んど死屍に類する淘汰說を今尙ほ信奉せらるゝことが、不思議でならないのである。自然淘汰說とは人も知る如く、ダーウインやウオレースによりて唱道せられた最初の學說であつて、適者の生存を以て新性質の出現を說明せんとするものである。例ち「(1)同じ親より生れたる生物の間には形質に小變異があつて同一ではない、(2)此變異の中、生活に有利なる方に傾いて居るものは、然らざるものよりも生き存へて子孫を繁殖せしめる機會に富むから、(3)有利なる小變異が代を重ねるごとに次第に强められて、遂には立派な新形質となつて行く」と云ふのである。

此說は五十年前には誠に完全なる學說であつて、生物の進化を說くに充分であると考へられたが、其後生物學界に實驗的風潮が漲り來ると共に、根本的に缺陷のあることが明となつた。それは何であるかといふと、(1)同じ親より生れた子の間に變異のあることは間違無いが、それは極少許の異動であつて、多くは生活に利不利を醸す程のものではない。從つて(2此變異によつて優勝劣敗は起らぬ。生物の器官といふものは或程度迄發達する迄は官能を遂行し得ない。例へば牛の肉の角は可成り長くて先が尖つて來る迄は武器として役に立たぬ。短い瘤位の

程度では未だ有つても無くても同じ事である。夫故一躍して官能的なる程度迄飛び上るならば生存競爭の爲に役立つこともあらうが、之れは突然變異說といふ別の學說の主張するところである。(3)次に變異といふものは或中心の値を挾んで左右に彷徨する異動であるから、たとひ一方に偏した者を親として選んでも、其子は必ずしも其側に偏して居らぬ。之は既に十數年前に丁抹のヨハンゼンが實驗的に證明したことであつて、人力を以て淘汰を加へてさへ本來の形質を一方へ押し動かすことが不可能である。約言すれば自然淘汰なるものは新形質生成の動力とは成り得無いのであるから、人間の「協力一致精神」とか「服從性」とかいふ樣なものが假りにあつたとしても、それを自然淘汰の產物と云つたのでは到底說明にならないのである、

右のやうな次第であつて自然淘汰說は前世紀の頃から漸次其勢力衰へ來り、遂に十余年前ヨハンゼンによりて最後の止めを刺されたる古い學說である。而して丘博士の名著進化論講話が洛陽の紙價を高からしめて居た頃既に氣息奄々たる有樣にあつたものである。從つて何故に丘博士が斯かる學說を今日迄固持して居らると云ふことが、私の疑問の第一である。

五　階級型論

次の第二の問題に就ても極率直に申すならば、私は動物の團體に平等型階級型を區別することを全然不合理だと考へて居る。

成程蟻や蜜蜂の團體は見方によつては平等型である。世人は女王と云ひ兵士と云ひ又は職蜂といふ爲めに、何か實際の階級がある樣に考へるが、之は名稱の拙いことによる誤解であつて、本能によつて銘々が其分擔せる役目を演ずる場合、目上もなく目下も無い。恰も同級生が集つて芝居をするとき、王樣になつた者と侍女に扮した者とあつても實際は別に尊卑の差のない樣なものである。然し若し此見方よりすれば猿の團體と雖も平等型である。丘博士は哺乳類の團體をば「大將の經驗を最も有効に利用する方法として階級制度を採り」居るものと云はるゝが、之は大なる誤解であつて、實際の處猿の群が其中に一匹の指揮者を有つて居ることは智能ではなくて本能である。彼等は「生後の經驗によつて」一隊の仲間を支配するのではなくて、唯生後の經驗によつて外圍に對する感知性が銳くなつて居る點だけが智能の効用である。有蹄類は猿類や肉食獸に比すれば智能が遙かに劣つて居るが、先導者を持つものは却て此類に多い。生れて初めて旅に上る渡鳥の群にも、群游する幼魚の集團にも、一時的乍ら定まつた先導が有る。丘博士は之れをも階級型に入

れられるであらうか。若し然らば更に進んで、分房の際に蜜蜂の女王が先導となり多數の職蜂が之に隨從する現象をば孰れの型に入れられるであらうか。

抑も團體の組織を論議する爲めには、吾々は今少し根本的に考へなければならぬ。吾々の體は澤山の器官系の平等集團であるが、其中でも神經系統は他の諸系統を統御調節する役目を有つて居る。心臟といふものは元來血管の途中に於ける二個又は三個の連續したる膨大部から成るものであるが、此膨大部各個を別々に切り離して見れば、各收縮の週期を異にして居ることが分るが、一列に連つて居る時は其中の一個の週期が他を律して、すべてを同一ならしめて居る。クラゲの傘の周緣に切り方を入れると、其各片が律動の週期を異にするが、切らない間には斯かる遲速が無い。之れは其中の一つが先達のやうな役目をするからである。總て斯ういふ風に略ぼ同等なる器官が集合したときにも、或統御調節の方法が與へられるのが生物學上の通則である。して見れば個體が多數集つて團體を組立つる場合にも、或統御調節の爲めの習性が與へられるのは勿論のことで、之を同格個體の集合といふことから見れば平等的であり、統御調節といふ側から眺めたらば階級的である。決して或綱目に屬する動物の集團が平等型で、他の綱目に屬するものの夫が階級型であるのでは無い。

尙序に述べて置くが、集團生活に必要なものは統御被統御（或は支配被支配）の分業だけではなく、同格者間の相互扶助も亦屬缺く可からざるものである。夫故に團體を形づくつて居る動物には種々の程度に進步した相互扶助の本能が見られる。反對に獨棲性の動物には之がある可き理が無い。クロポトキンは此點に於て殆んど收拾す可からざる混亂に陷つて居るといつて宜い。私は彼がどの位まで動物學を學んだかを知らぬが、其處は矢張り素人の悲しさで、彼の擧げたる動物界の相互扶助には、集團性動物の眞の相互扶助の外に、子孫增殖のため雌雄の當然なす可き協力や、動物を人間並みに取扱ふた時代の荒唐な「お話」などが、無秩序に混入して居るのである。動物界に於ける相互扶助は道德でも何でも無く、統御調節性と同樣に集團を强力ならしむるための自然の妙法である。卽ち相互扶助は生存競爭とは黑白相反する現象ではなくて、却て團體間の生存競爭に打勝たんが爲めの內部の結束であり武力である。從つて生存競爭の演技者たる獨棲性動物各個、又は各團體の相互間には相互扶助のある可き理が無い。此點は丘博士も曾て說かれたことであるが、今でも尙世間では相互扶助論がダーウイニズムの苦手であるかの如く考へる人があるから、一言辯明して置くのである。

さて話は再び階級型の問題に立歸るが、統御調節に就ても、嚢に述べた合目的性本能の場合と理智判斷による指揮按配の場合とが外見的には類似することがある。本能と智能とは元來或所に行けば境界不分明となることもあるが、然し、若し生後の經驗によつて指揮することであれば疑も無く智能であるし、生れ乍らにして持つ習性なれば本能であつて、縱令類似はあつても別々の物である。ところが丘博士の階級型の說明を讀むと此點が何だか薩張見當が附かぬ。猿と人間の知能の差違が明瞭でないのは先づ宜いとしても、「自然淘汰により漸次進化し來つた協力一致の精神」といひ「先天性服從精神」と云はるゝ所を見ると人間の場合までも本能と認めらるゝ樣であり、又「一番利口なものが大將となつて」といはれ、「團體內で最も經驗に富んだ一疋を大將と仰ぎ總ての者が絕對に其命令に從ふ」と記さるゝ所を見ると、猿の場合までが智能で無ければならぬ樣でもある。或は博士自身全然混亂せられて居るのであるまいか。猿にそんな大將選擧の智慧の無きことは既に述べたが、人間にそんな遺傳性の服從精神の無いことも後章で述べることゝする。

一體、相互扶助性とか協力一致の精神とか云へば平等的に聞こえ、服從性とか指揮權とか云へば階級的に聞こへるが、其實は同じものであつて、團體の各員に振り當てられたる分擔業務の性質から客觀的にかく名づけられるだけであるから、寧ろ奉公的精神とでも云つた方が適當かも知れぬ。それは兎も角、丘博士に從へば、此性質は自然淘汰によつて團體の擴大と共に現はれ來つたものと成るのであるが、私は自然淘汰を否定したからして、別に此奉公的精神の起源を說かねばならぬわけである。然し之は別に此問題だけに局限して考ふる必要はないので、體中諸器官の協和や調整などゝ同一の合目的性、換言すれば集團進化に對する適應性として取扱ふ可き現象である。從つて之は生物進化論の中心問題であつて、玆に一々論評する紙幅がないのみならず、今の場合必ずしも其要を認めない。

六　人類の社會

動物の團體生活を詳述することは本稿の目的でないから、私は之より進んで少しく人類社會の特色を考へて見度いと思ふ。凡そ精神的方面に於ける人間の特色は、生後の經驗による影響即ち學習が主部を占めて居ることと、意識の著るしい進化のために自分で自分のすることを詳しく承知して居ることゝである。勿論之は人間に限ったとではなくて昆蟲の腦にも菌形體といつて吾々の大腦に比す可き部分があり、又實驗上からも昆虫が事物を學習することの證據が擧げられるが、然し人間等に比

べたらば極鈍いものである。意識の有無は客觀的には決定することが困難であるから、昔から學者の間でも人間以外には全く無いと云ふ人からアミーバに到るまで多少は有るといふ人まで、頗極端な意見の相違があるが、然し玆に斷言して差支無いことは、たとへ意識の樣なものが下等動物にあつても、それは極貧弱なものであるといふことである。哺乳類特に猿類や食肉類まで來ると智能も餘程進んでは來るが、それでも人間の場合に比較したらば實に著しい徑庭のあることは、曩きに人獸の別の項下に大要を述べて置いた。此精神上に於ける差違が精神作用、生理作用に關聯したる總ての方面に影響して、到る處で人獸の間に差を作るのは實に當然のことである。例へば異性間の憐憫の如きも獸類以下では明かに生殖本能の一部分であるが、人間に於ては生後の習練が非常に之に關與して居るから、單純なる本能とは云はれぬ。假りに前者を本能型と呼ぶならば後者は智能型と名づけらる可きものである。

之と全く同じことが團體に對する各員の精神即ち丘博士の「團體的精神」に就ても云はれる。雁の番兵が自らは餌を拾ふことなくして同僚の爲めに敵を監視する本能も、螞蟻の或ものが樽の代りとなつて、腹一杯に蜜を詰められて巣の片隅にヂットして居る本能も、共に單に團體生活に對する本能上の適應である。然し鳥や蟻は動物の中でも特に本能の進歩したる部類であつて智能が本能に入代つて居る人類に之を期待することは出來ない。勿論人類にも社交的群棲性の本能はあるが、昔大名の通行に路傍に土下座して頭を擧げ得なかつた百姓町人の恭順心、楯に乘りて歸れと誡めて我子を戰場に送り出した慈母の愛國心、これ等の心理は單に團體の膨大と共に發達したる「先天性服從精神」のやうな簡單なるものでは無いのである。重ねて云ふが、精神的方面に於ける人間の性質は、寧ろ其大部分が生れてから後に添加せられたる材料によつて出來て居るから、この後天的要素を考へることなしには、人間社會の何事をも吾々は論議し得ざる筈である。

凡そ科學上の立論には相當の根據を要する。殊にそれが社會人心の上に影響する場合には論者の責任も重いこと申迄もない丘博士は團體の小さかつた間に生れ落ちる赤坊は生れつきオートクラチックであり、團體の大きくなつてから生れる赤坊が襁褓の中からデモクラチックであるといふことの、心理學上の證據を探出せられたことがあるか。又それを證據立てる手段があると信ぜらるゝか、明確に伺ひ度いものである。

丘博士の斷定に從へば、人情全く地をはらひし當世には珍らしいとて人の賞める勤續數十年の忠僕や國難に殉じて靖國神社

に祭られた忠勇の士は、人の嫌ふ腑臭や兎唇の畸形と同様に「隔世遺傳と名づける現象で、遠い先祖の性質が偶然現はれた特別の例外である」ことなり、爆彈を懷にして一國の元首を襲ふ者や、世間の習慣社會の秩序を無視して個々の利益のみを主張する者が、最も進步したる人間といふことになる。之は如何に學問上の議論とはいへ、實に前代未聞の暴論である。之では社會主義者が喜んで弟子呼はりをした筈である。否流石の大杉榮氏も之は餘り亂暴だと感じた口吻が現はれる居る。之がクロポトキン位の他愛なき社會進化論等を振廻す末輩ならば兎も角、苟も世界的の動物學者で、我邦における最著名なる進化論說明者であり、教育家を養成する最高學府の首席教授であり、而して其門弟は今や全國各地の中等學校に其著書を教科書として教鞭を取りつゝある此老大家にして、憲法は皇室中心主義破綻の彌縫策であり、共和政體が國家必然の歸結であるといふ樣なことを公言し、反覆鼓吹せらるゝに於ては、其害毒實に測り知る可からざるものがある。但しそれも學問上當然の結論ならば致方も無いが、博士の國家論社會觀なるものは、人類の眞價を沒却し、智能と本能との區別を忘れたる僻見であつて、決して現今の生物學の基礎の上には立つて居らぬのである。日本にも隨分澤山の社會學者もあり、心理學者もありながら、縱令如何程生物學や進化學に不案內とは云へ、徒らに科學の盛名に威服せられ、曖昧なる服從的精神や死灰に等しき自然淘汰說で煙に卷かれて、此過激派以上の過激思想の宣傳を默認するとは腑甲斐ない事である。近時靑年思想の惡化を憂ふるの聲、上は要路の重臣より下は道途の甲乙に到るまで、一齊に之を口にする有樣であるのに、此暴論に對して未だ何等の反響を見ざることは實に怪訝に堪へない。

私は丘博士の動物學上の功業を深く畏敬するばかりでなく、個人としても多年知遇を忝うして居る者であるから、右の樣な批議の語句を用ふることは頗る心苦しいのではあるが、然し世間には博士の持論を目して最新科學上當然の歸結なりと誤解し、博士の社會觀を生物學者一般の懷抱する通念なりと迷信する者も多き樣であるから、國民思想善導の爲にも、亦生物學擁護のためにも、敢て一言せざるを得ないのである。

七 階級の起原

私は丘博士の社會觀に對する卑見を陳ぶる爲に豫想外の紙幅を費してしまつた。それで之から、述べやうとする私自身の考に就ては、極大體のことを擧ぐるに止めて、詳細は之を他の機會に發表することにする。

專政王國、立憲王國及び共和國の起原を所謂「先天性服從精神」の增減を以て說明することは、單なる假說としても許すことは出來ない。現代の極簡素なる野蠻人の部落と雖もそんな漠然たる服從精神を以て成り立つとは考へられない。彼等に言語のある以上、年長者から傳統的慣例を授けられることは必然であり、習慣形成の性質を有つて生れて居る以上、諸事が習慣となることも亦當然、而して推理力のある以上酋長に媚びた時と栖ついた時の共樂利害も判斷するであらうから、生れつきは全然平等で、單に親和性とか社交性とかを本能とする人類でも、生後に階級を承認する後天的服從習慣を作ることが避け難きわけである。共和思想の出現も亦同樣で「先天性服從精神」の減退位で說明の出來る者では決して無く、それかと云つて先天性の親和性や相互扶助性位で成立つ者でも無く、古來各國に於ける專制政治弊害の歷史的實例とか、個人權利擁護上の法律的便益とかいふものが反覆考量せられて結局之が宜からうといふことになるので、これこそ智能も智能、最高理智の批判に訴へて各國民性に好適のものを選ぶのである。動物學から資本を仕込んで世上の問題を論議するにも事と品にこそよれ、憲法制定から共和國の成立迄押通さうと云ふのは、これは無茶である。私は社會制度とか道德宗教の起源とかに就て一向智識を持たないが、然し丘博士の階級本能說よりは幾分か穩當なるものがあり得ると思ふ。

既に幾度か繰返し述べた通り、精神方面に於ける人獸の距離は甚だ大なるものであつて、現存の如何なる野蠻人の心理狀態といつても現今の猿類のそれと引續きに論ずることは出來ぬ。此中間に位するものが古代人類の有つて居た幼稚なる心的生活である。夫等に就ては、吾々の推測によつて種々の程度に分類することも出來やうが、玆にはそれを一々詳論する必要はあるまい。兎も角先づ今の猿などよりは、もつと迅速に(卽ち少い回數を以て)、而して又一時にもつと澤山の物事を覺え、而して二つ以上の事物を相關聯して記憶する性質を得たのが、此發展の始まりである。卽ち云ひ換ゆれば記憶聯想の能力の進化であるが、之が愈進むで終には過去の記憶が喚起せらるゝときに前後一貫した極明瞭なる心像として現はれ來るとになり、强い推理、想像の力が出來、期望恐怖後悔を有ち、夢を見、他人のすることを眞似する樣になつた。而して自己の體中に起る肉體的及び精神的活動を意識する程度が著るしく明瞭となつた結果、元來本能に關聯して味はつて居た感覺例へば飮食生殖等の苦樂の如きものを、一々選り好みをして取捨せんとするやうになつた。

智力が右の程度に達して始めて、權利及び資財の保有の問題、

主從關係の問題等が確立する。昆蟲に見らるゝ食物の貯藏や奴隷の使用は、外觀的には人類のそれと同一に見ゆるが、それは既に述べた合目的性一致であつて、貯藏により後日享受す可き利益を豫測し得ないときに眞の富はある筈がなく、自から上下の區別を知らずして行ふ分業を階級と名づけ得る理も無い。

さて人類の智力が進んで夢をいたり想像を逞しうしたりする樣になると、第一に起るものは宗教心である。死んだ者が生ける如く思はれたり、雷電風雨に靈あるものゝ如く感ぜられたりなどして、先づ所謂汎神教的の信仰が出來、更に自然現象の知的了解が進むにつれて、漸次他型の信仰にも轉移するのであるが、神以外にも尙ほ各群の人民中にあつて特に體力の强き者又は智慧の進んだ者が其群の一般人民から信頼せられて指揮者と仰がれる。之即ち酋長であつて、其職務は種々の手段によつて部落民の周圍及び生命に關する不安を除くことが第一である。祭政一致が原始的政體に見らるゝは此理に出るので、人民の國王とか英雄とかに對する依賴心は敵變外患ある際に一層熾烈となるのも亦「苦しい時の神頼み」に外ならぬ。次に斯くして擁立せられた國王や酋長が報酬とか地位保證とかの意味で他よりも多くの資産を與へられて有產階級となり、血統に對する尊重心や財貨相傳の習慣などからして、自然に階級の累代持續といふことにもなるであらう。之を要するに右の考では、理知發達の初期に免る可からざる自然現象無知の不安に基づいて、賢い者と愚鈍な者との間に地位の差級を生ずることが即ち社會階級の發端であるが、統治攻防上の便宜、土地財産の所有承認などが之を助長し、血統の尊重などが之を永續せしむるといふのである。

昔から人類に鬪爭の本能があると信じた者が少くない。特に生物進化論の出現以後此考を抱く者が激增した樣であるが、之は生存競爭なる言葉の曲解に基づいた誤謬である。多數の生物の間に少量の食物や狹き場所が與へられれば、總ての生物に行き亘らぬのが當然であるが、之が即ち生存競爭であつて、必ずしも一が他を引き裂いて喰ふといふ意味ではない。肉食動物は其習性として食物となる他の動物を狩獵することはするが、然し檻の中の二匹の虎はたとへ餓え死にしてもお互ひに相喰むことはしない。況して體中に何等鬪爭の武器を有たぬ吾々人類が、本能として同類相戰ふことの證據は一も無い。人類の戰爭は富力爭奪とか復讐の心理とかいつた樣なことに原因するので總て智能上の問題である。

慈悲憐愍乃至公德の心理も亦同じく智能上の問題である。人類に果してどの位の相互扶助本能があるかは頗る困難な問題で

はあるが、原人は今の類人猿の如く少數の個體を以て一家族を爲したものらしく、決して數百數千の群集を作つて居たとは思はれない。先年櫻島噴火の際、島に取殘された家畜が、牛は牛馬は馬と同種相求めて集合したと聞くが、吾々人類にも其位の親和性はあるかも知れない。然し夫以上の救護協同の天性を本能としては持つて居ない筈である。他人の苦惱に心を痛め、之を除いてやつて自分も喜ばしい氣持になるのは、記憶心像を生じて後始めて起ることで、之亦全然智能上の現象である。尤も鳥獸の中にも病者や孤兒を哺育するものがあり、昆蟲の社會生活には食客を扶養する場合があるけれども、之は集團生活上の或特別の事情によつて發達した稀なる場合か、さもなくば本能要因の簡化から起つたところの行違であつて、例へば同じ臭がする爲に仲間と間違へて食客にも食物を分配するといふ風なわけのものである。

要するに人類の社會にあつては階級も財產も戰爭も慈善もすべて之れ智能發達以後の問題であつて、動物形態學者などが受持つ可き領分では無いのである。

八　目的錯誤

智能は本能の爲し得ざる多くの事をするが、本能が智能以上の行動を爲し居る場合も亦多い。傳書鳩が數百里を一氣に飛び戾り、獵犬が雉兎の足跡を嗅ぎ分ける巧妙さを見れば、誰しも彼等の有利なる天惠を羨む心を起すであらう。然しよく考へて見れば、吾々人類が本能を與へられずして智能を惠まれたことは、寧ろ大に感謝せねばならぬ、何となれば一朝若し吾々の住む環境の狀況が何等かの事情で急に變化した場合、本能はもはや何の役にも立たぬが、智能は之に應ずる處置を有つからである。此意味に於て智能は動物が生存を續けるために最有利なる天惠と謂つてよい。然らばかくまで有利なる特色を與へられた人類が何故に衰亡に向はんとしつゝあるのか。私は此問に答へる前に生物界の目的錯誤なる現象を說かねばならぬ。

凡そ生物體中の諸器官は各生活上に意義ある特定の官能を有つてゐる。器官には此目的の爲めに一代の間にも變形順化する力があるし、又何等かの機構(それは進化學上の大問題である)によつて進化の長い道程の間にも亦次第に完成の域に近づく力がある。兩者は詮じ詰めて言へば順化適應の屬性であるが、玆に注意す可きことは、往々此力が一定の節度を超えて必要以上に發達するか、或は少しく方向を誤ることによつて、器官を却て生活に不利なる形に導びく場合のあることである。人の飼ふ牛羊の角が餘りに曲り過ぎ延び過ぎて、時々切つてやらなけれ

ば動物自身の頭を突刺す虞のあるのは此「過度適應」の一例である。而してかういふ目的錯誤は形態構造の上ばかりでなくて、本能行動の上にも亦甚だ屢見られる。凡そ本能には「要因の二次的簡化」といふ現象があつて、元來幾つかの要因が打揃うた時に始めて起る可き本能が、後には何れか一つの要因を主なる標準とする様になり、之れさへ備はればそれをキツカケに全本能が展開し來るといふ風になることである。幸に天然では此主要因と他の要因とが大抵提携して來るのであるが、どうかした機會に此簡化起れる爲に他の要因の少しも揃はぬ時に本能が起り始めることがあつて、茲に本能の目的錯誤を生ずる。例へば蛙は濕度さへ下ぐれば冬でなくとも蟄居せんとするし、羊の子は動く者ならば狼にでも隨行せんとする様なもので、其外倘ほ小春日和に狂ひ咲く梅櫻、飛んで火に入る夏の蟲等、目的錯誤は生物界には日常幾らもあることである。

さて古來我地球上に現はれたる諸種の古生物の中には、既に絶滅して其子孫を殘さない部類が澤山あつて、高等動物の中にも其好例が少くない。此絶滅の原因には二つあつて、外部原因としては氣候の急變食物の缺減等環境の變動であり、內部の原因としては器官の過度適應其他に基づく目的錯誤である。彼巨大なる爬蟲類の衰亡は前者の例であるが、後者の例としても角が無暗に大きくなり過ぎて死絶へた鹿の一種、牙が長くなり過ぎて物が食へなくなつた虎の一種などがある。而して斯う云ふ目的錯誤は急激に進化發達したる器官に多いのが通例である因に云ふが、丘博士の著物には「彼等が優勢を占むるに到つた長所そのもの丶爲に却つて絶滅した」といふやうなことが書いてあるが、長所そのもの丶爲めといつては世人が誤解する虞がある。正しく云へば長所が目的錯誤を生じて短所に變ずるから衰へるのである。

以上の一般的考察を爲した上で、私は人類の場合を論ずることが出來るのである。世間には人類はあらゆる方面に於て他の獸類に勝ると考へる人があるかも知れないが、之は大なる誤である。丘博士は人類の特徴として手の働らきを頻りに云はるゝが、拇指と他の四指が對向して物を握るに適した形は、哺乳類としては寧ろ古い形であつて、原始的獸として有名なるオホナマケモノの手は既に此形であつたのである。又哺乳類の齒は攝食習性と關聯して最も分化し易い性質であるが、人間の齒には門齒犬齒臼齒の別はあるか、寧ろ原始的であつて、食肉類や有蹄類又は嚙齒類の様に特に分化したる形ではない。總てかういふ様な事實から推して考へると、吾々人間と猿とを包含する猿類なるものは、哺乳動物進化の全般から見れば、寧ろ平々凡々

特別に傑出した形質も無くて比較的近年に到つたものと謂つてよいのである。然らは此類から如何して人間の様な靈獸が顯はれたかといふと、其最初の素因を爲したものは、體を垂直にして立ち頭部の重量を脊柱の縱の方向に懸ける様になつたことであらう。それは之によつて頭蓋骨内の腦髓がいくらでも重くなり得たからである。此直立歩行の習性は原人として分派した頃から益完全となり、從つて腦髓は愈大さを增し、精巧なる言語、感覺の中樞を其大腦皮質内に生じて、意識は次第に明瞭となり、四肢の使用法も亦甚だ巧妙となつた。而して之と同時に體軀表面の毛が少くなつて皮膚の感覺が鋭くなり、小兒の時代が永くなつて智能發達に必要なる時間が與へられた。之等が即ち人類をして今日の盛期に立到らしめたる内部的要因の主なるものである。

かくの如く人類は比較的短い年月の間に儕輩の群を拔いて一氣に成り上つた者であり、しかもそれが神經系統の中樞に於て起つた急進化であるから、之を前に陳べた一般法則に照して見て、人類が神經中樞に於て目的錯誤が生じ易いといふことは直ちに考へられることがあるが、事實果して之が起つたのである。

九　人類の自滅

凡そ智能の始まりは物を覺えることであり、物を覺えることは一言にして云へば、神經系統の高級中樞が外部から受けた影響の永存といふことに外ならぬ。從つて智能發達の前提としては、外界からの刺戟を成る可く明確に受取る方法として、各種の鋭敏なる感覺器官の發達が起り來つて居る。動物は此感覺を甲乙相關聯せしむることによつて種々の事柄を覺えるのであるが、就中苦痛と快樂とが特に有効なる感覺であることは、獸類に物を教へる際に賞罰として好む食物とか嫌ふ鞭撻とかを與ふることを以て見ても、直ちに了解せられるのである。詰り、智能の發達と感覺の鋭敏さとは全然相竝行して居るもので、智能の最も進んで居る人間には、他の孰れの動物よりも強烈なる快感不快感があると推論して差支ないのである。一體動物の體には普汎快感とか不快感とかいふ可き性質のものがある、恐らく之が快不快感の起源であらう。例へば吾々の内臓に故障があるとか、少しく發熱した場合等に、特に何處と其部位を指しては云ひ難き一種の不快感があるのも、この普汎感覺の一といつて宜しいでしやうが、此程度の快感は下等動物の生殖本能等にも伴つて居るかも知れない。然し智能の發達により始めて、此不

快感の記憶が身體防護の補助となり、異性の憧憬に此快感の記憶が加はつて受精增殖の確保をすることになつた次第である。

斯く快感不快感が進化すると同時に、意識が益明確となる結果は、連續した意識の流れを有つことになり、自己の行ふ總ての動作を自ら熟知する樣になつた。戀をする動物は澤山あるが、自ら戀することを知る樣になつたのは人間の心の大進展である。そこで、人間は自分のする動作の何れと何れとが快感を齎らし、何れと何れとが苦痛を齎らすかを明瞭に判斷し得るやうになつた。從つて〻身體防護の補助とか種屬增殖方法の確保といふ樣な目的を除外しても（即ち之と全然切り離して）、前と快感を味ひ得る方法を覺つて終つたのである。其結果は、縱令生理學的には多少有害であつても刹那に快感を與ふる刺戟なれば之を歡迎し、熱心に之を追求せんとする有樣に立到つた。即ち他の動物の場合の如く食慾必ずしも生理的要求ではなくて、食道樂や飲酒癖は味覺本來の目的を脱して仕舞つた妙なものになつて居る。他の感覺も性慾も皆同樣である。

人類の快感不快感には更に奇妙なる現象が起つて來て居る。例へば、實際身體には苦痛を受けて居ながら快感を覺ふる場合があつて、近頃世人の注目する變態性慾とか倒錯覺等とかいふものが之に屬する。之れは人類の感覺の中樞なるものが所謂高級中樞であつて、感受機關より直接傳達を受くる所謂直接中樞（若しくは低級中樞）とは別の所に存在する爲に起るところの行違である。智能上の習慣の形成とは、生理學上から云へば、高低兩中樞間の連絡の中に或一つの通り易い傳達通路が定まることであるから、此通路の定まり方如何によつては、隨分と奇妙なる倒錯感覺が起らぬものでも無い。從つて器官官能の圓滑運轉が快、澁滯故障が不快といふやうな一般的の法則や身體に有益なる環境が快で有害なる狀況が苦痛であるといふ本來の法則を打破つて、事實上有害なる刺戟に却つて一種の快樂を覺え、たとへ學問の力で身體の爲に惡いとは知つても、到底彼に對する執著が制し切れぬ有樣にもなるのである。要するに、中樞神經系統の高度の發達の結果として、元來智能發達の方便として賦與せられた感覺中樞が、不幸にも官能上の目的錯誤を生ずる結果とはなつたのである。而して此目的錯誤は啻に人類の健康を害して其死期を早むる計りではない、財寶の蓄積を望み權勢を獲んと欲する心も、團體と團體とが相殺し合ふ戰爭も、詮じ詰めれば畢竟快樂的感覺の飽滿を追はとんする人性に基づいて起つたものと云ふことが出來る。

現今文明諸國に於て、年と共に人民の生產率が減退したり、病死者の增加する實況を目のあたりに見、又は個人の歡樂を重

んじて社會の秩序を顧みず、家庭の平和を破毀して性慾の滿足を求むる樣な悪傾向をば新道德ででもあるかの如くに考ふる人心の大勢を察するならば、何人も私の所謂目的錯誤が着々として人類滅亡の因を醸してることを認めざるを得ない。卽ち私が主張する此人類衰亡論は、今更改めて學説の當否等を吟味する迄もなく、世上の總ての識者達が人類の墮落として頻りに眉をひそめつゝある現實の事例を基礎として居るのであつて、之なれば宗教家も教育家も又生物學者も何等の異議が無い筈である。

十　眞人道

現代の人類特に文明國の人間は既に生れつき感覺中樞の目的錯誤に陷つて居るのであるから、考へ方によつては、快感追求が天眞なる人性であつて、少しでも之を制壓しやうとするのが不自然だといふ論理も成立たぬことは無い。三角關係や四角關係を作つて、好きな同志の事なら仕方が無いぢやないかと濟まして居るのも、好きな酒に命を取られりや本望だと云つて醉ひ潰れるのも、此意味に於て吾々人間の本性に違ひ無い。然し乍ら……私は所謂新らしい思想の人達に是非此點に注意して貰ひ度い……夫れは大自然が人類の進化向上の爲にとて與へて與れたところの神聖なる本性では無くて、人類を自滅の淵に誘き寄せる後天の悲しむ可き迷夢である。人類向上の眞の理想は何であるかと問はるゝならば、盲目なる肉慾より脫却し、再び感覺中樞が目的錯誤を生じ無かつた昔の狀態に立ち歸つて、更に智能進化の正道を進み行くことであると答へるの外はない。之卽ち古來幾多の聖賢の說き示されたる道であり、同時に又最新の生物學が吾人に下すところの命令である。

丘博士の人類衰亡論に從へば人類の退化は大自然の公道であり、不可抗力の爲す業である。吾々は唯拱手して最後の日を待つの外無いからして、其位ならば義勇奉公や老幼扶養の樣な割の合はぬことは速に廢めてしまつて、銘々好き勝手な眞似をしやうぢやないかといふ自暴自棄の考も出ることになるが、私の考では決して左樣な結論に達しない。今日の墮落は邪道であつて正道では無い。人類は他の動物と異り、「出來ぬ事をする」動物である。自ら進路を訂正し得るだけの智力を有つて居る。夫故に今日世界の人類若し一大決心を以て立ち、感覺の飽滿は同時に攝生の手段であり又種族繁榮の方法であるといふ域に達する覺悟が定まるならば、人類今日の衰運必ずしも救ふに難からざることと信ずる。之こそ吾人の大理想であり千古に一貫せる大宗教、眞道德、而して亦科學の中心目標であらねばならぬ。

（四月末日稿）

職業市場に見はれた就職難の解剖的考察

安田龜一

一、客觀的就職難と主觀的就職難

就職難といふことは何時の世から始まつたものであらう、失業といふ言葉が近世産業組織の革新に伴うて漸く唱へられ初めた所から推して、恐らくあまり古い頃からのことではあるまい。よし古いにせよ、新しいにせよ、現在旺に此の言葉が使用されてゐることは事實である。かく旺に用ゐられてゐる言葉の意味如何を考へると其解釋は必ずしも容易でない、また必ずしも明瞭でない。強て求めると輕く「就職に容易でない」と云ふ程の意味以上にはあまり合理的な解釋は得られぬものゝやうである。その何故に容易でないのか、容易でないとは如何なることを指すのか、それは何人にもあまりに詮索されてゐない。或は曰ふ、現代は就職難でなく人物難だ、適當の人さいあれば地位は人を待つてゐるのであると、蓋し就職といふことは地位と人との結合に依つて成立する。地位の方面から云ふと其適する人は得難い、人の方面から見ると其求むる地位は得難いと云ふことになる、前の場合は人物難であり後の場合が就職難である。一は使用主側から見る嘆聲である、一は使用人側から見る嘆聲であり、一は求職者の側から見る嘆聲である。就職と人物難とは表と裏のやうなものであるから就職難を解剖すると人物難の理由も亦自ら明瞭となる譯である。

人が或る地位を得やうとするとき其地位を希望する人が多數あれば互に競合が起り、多數が希望を充し難き關係が生ずる。譬へて云ふと此に十の地位がある、希望者が十五人あるとすると、五人だけはアフレが出來る、此の場合に客觀的の就職難があると云へよう。何となれば、五人だけは當初より就職し得ざることが明かだからである。またこゝに十の地位がある、其地

位を希望するものが十人あるとすると全部が地位を得べき可能性がある、併し其地位は困難な地位であつて誰人でも充すことが出來る譯でない、そこで十人の内六人しか採用されぬとすればあとの四人がアフレる、此の場合に主觀的の就職難があると云へよう。何となれば本來可能性あるに拘はらず希望する人の內的素質に關して不就職が起るからである。

就職難を解剖すると、其處に種々の複雜なる關係が錯綜してゐることが知れる。先第一に其需要と供給の數の上に關しての不均衡から來る場合である。この場合は求職者の素質に於ては優劣はないものとして、單に數の上に於ける過剩部分に入るまいと互に競爭することから來るのである。第二に其地位に關して、普通人の充し得る地位か否か卽ち普通以上の特殊技能を具有するを要する地位か否かの差別から來るものである。この場合は需給の數の上の不均衡はなくとも技能の上に等差があることから優勝劣敗が起り就職の困難を生ずる。第三に希望する「人」の資質に關して、其の天資の適不適の差別から來るものである。この場合は其人の技倆の高下はないが、その人の態度とか事に當つての研究心とか、努力とか、責任感とか調子とか云ふ如き主として精　的の要素卽ち性格から流れ出る　る力の有無から起るものである。こんな種々の關係が互に交錯してイヤ地位がないでなく人がないのだ、イヤ地位がないのだと喧論される。人間は十人十色である。地位に於ける仕事も十種十別である。人は人として、仕事は仕事として、夫々要求の條件がある、その複雜な條件が一致して圓滿に結合するは至難のことである。多くの場合は程要求の互讓がせられねばならぬのを常態とする。要求の互讓が困難な時に就職難が起る。故に就職難の生ずるのは相互條件の充され得ざる一切の場合にあると云へよう。

人の方面から要求する條件には、主として自己の生活關係や趣味趣向に適合すべき仕事、報酬、勤務時間、待遇、勤務方面などの夫れがある。地位の方面から要求する條件には主として事業の繁榮に資し得べき適當の技倆、才能、性格などの夫れがある。

これら總ての條件の互讓點が最も合理的に見出さるゝならば、適材が適所に置かれるのである。互讓點が不合理に又は不當に見出さるゝならば就職は移動性が多い、不安不確實なものである。不平や、怠惰や、失業の萌芽は、既にこゝに胚胎してゐると云つてよい。

二、生存線の維持と僞裝就職

雇傭關係に於ける相互條件の一致は至難中の至難事である。

何となれば使用主と被使用人とは本來的に其の立場を異にしてゐるからである。使用主は飽くまで自家の爲めに利益なる樣にと圖る、被使用人は極力自己の有利なる樣にと希望する。若し使用主が人を求むるに最も急なる事情あらば其の主張の一部は枉げられる。被使用人が職を望むに切ならばその希望の幾部分は屈せられる。その相互の去就進退の微妙さは寔に浮世の戰場に於ての華々しい懸引である。併し多くの場合被使用人は其の切迫した事情の爲めに不利な條件で使用主に降伏するを常態とする。不景氣の世の中に於ては被使用人(求職者)の持てる條件は殆ど悉くが蹂躙さるゝことが多い、理論的に云ふと雇傭關係は公平適切なるべきものであつて、何れの一方にも偏してはならない筈である。然るに使用主と求職者とが相對峙するとき、到底機會均等や條件公正は維持されない。世の中が不景氣ならば不景氣なるほど使用主に利が多く、世の中が好景氣ならば好景氣なるほど求職者に勝味がある。けれども使用主は別に資本といふ大なる力を有してゐるからやゝもすれば求職者を壓迫し勝であり、求職者は常に生活不安といふ大なる弱點を有つから、多くの場合不利の條件にも引ずらるゝのが例である。雇傭關係に國家が干渉し、賃金の公正や雇傭方法の改善に力を添ゆる必要はこゝにある。若し失業窮苦が愈深刻になると求職條件の主張が益々薄弱になる。而して何れの點まで條件の主張の退却を見得るかといふと、それは人間の生存線までに至つて停まる。雇傭條件の範圍は此處が最低限であつて、之れ以下になると失業窮苦は猛烈なる反逆心と化して却て社會に對して反撥しようとする。恐るべき人間の危機は此處に在るのである。

生存線まで退却する間の或る著しく不利な地點に於て使用主に讓歩して降伏したとすれば、其處に矢張り就職は成立するが、かゝる就職の狀態は到底健全なるものでない、また永續し得るものでない。かゝる場合の就職を私は「假裝就職」と呼び、其の假りに就いた職業をその人の爲めに「過渡的職業」と呼んでゐる。しかしながら世間一般はこれをも就職と數へて何等怪む所がない。故に廣い意味に於て就職と云へば如何に豫期しない望まない地位でも、之れに就きさへすれば直に有就職と看做される。如何に條件が不利であらうと、如何に不本意の假りの承諾であらうと、それは問ふ所でない。けれどもこんな就職は譬へば路傍の石に腰を下して憩うてゐる人を其處に住んでゐるのだと云ふに等しい。生活苦といふ暴風雨に遭うて一時場所を選ぶの遑なく、野末の番小屋に雨宿りをしてゐるやうなものである。決して其處を住所と定めてゐるのではない。憧るゝ對象は職業ではなくして收入である。職業と收入とは固より違ふ。人は或

る場合には生活の壓迫とか四圍の事情の爲めに收入を求めて假裝就職をするの餘儀ないこともあらうが、この種の職業は當初より腦裡に描いた希望の職業とは其の間に大に差異があるものと云はねばならぬ。

凡そ人が職業なるものに對するとき、他の事情にして許せば、何か心に描く特定の種類が願望されるのは自然である。而して其の第一願望の背後には自己獨得の色が潜んで居り、少くとも其の自らの反省に基く對社會方針が加味されてゐると云へる。此の意味に於て求職者の第一希望は相當意義あるものであらねばならぬ。

三、就職難の計量

如何なる職業へでもよい如何に不利なる條件でもよいと云ふことになると、普通の人である以上、勞力あるものが何人にも若干の價値を認めらるゝ以上、就職難といふことは殆どあり得ない筈である。けれど人は生活して行かねばならぬ。生活形式としての職業には、自ら超ゆべからざる最低制限があらねばならぬ。人の職業に對する希望は、種々複雜なる背景に依つて其の根底を持つて居る。希望の職業へ希望通りに就職し得ることは人の最も望む所である。希望職業へ希望通りに從ふことを得ざる所に眞の意味の就職難がある。從て或る職業を希望した人々の幾パーセントが希望通り職業の地位を贏ち得、幾パーセントが然らざる業務に行くを餘儀なくされるかの比率は、就職難の世相を計算するバロネーターではあるまいか。此の關係は職業紹介所に表はれた統計を以て見ることを決して萬全なりと思ふものでない。しかし他に適切の統計がないから暫く職業紹介所の統計を通して就職難を計算して見よう。

東京市職業紹介所に於いて、明治四十四年十一月開設以降大正八年末迄に就職せしめた數が二四、一七四人に上つてゐる。これ等の就職した人々は必ずしも當初希望した職業に希望通りに就き得たのではない。希望職業と就職職業とは多くの場合に異つてゐるのである。それだけ世の中の就職といふことの困難なことが思はれる。

これを表出すると左の通りになつてゐる。

希望業務と就職業務（就職者二萬四千餘人に對する調査）

希望＼就職	職工	技手	徒[illegible]	[illegible]	店員	配達人	勤[illegible]	[illegible]金	[illegible]務	書生	給仕	使丁	看護	勞働雜役	女中	計

職工	五、四六二	二	五六	六三	一三	二九六	四六	九	一四	一三	一〇	六二	一三	一、〇八三	八	七、二〇〇
技術手	二八	一六	一	一	[illegible]	二	四	—	二	—	—	—	一	二三	一	八三
徒弟	二〇	二	一二	一八	[illegible]	二	二	—	—	—	—	—	—	一五	—	一七
小店員	一九	—	二〇	三七	一七	一五	一	—	一	—	二	一	—	三	—	三三六
店員	四三四	七	八	四	一、三三〇	三八六	一七三	三	一九	九	五	一二	四	五八	二	二、八八二
配達人	二三三	五	七	二	二一	一、五九一	三三	—	三	四	四	一六	三	二九四	—	二、二一六
外勤員	二八	二	—	—	一六	二六	四〇	—	二	一	—	一	一	六〇	—	六〇七
集金人	五	—	—	—	一	四	六	一四	三	—	—	三	—	六	—	四二
事務員	二三三	二	—	—	七六	九六	一八	七	四〇九	一〇	二	二三	一六	二八一	六	一、三五八
書生	九四	一	六	七	六六	九四	七	—	一三	二六五	一三	一四	二	一一五	—	六九六
給仕	二	—	三	四	七	三	—	—	四	六	九三	六	—	九	—	一四
使丁	六〇	三	—	二	一〇	四九	二〇	一	六	—	二	四七九	九	二〇六	—	八四
看護人	一	—	—	—	—	—	一	一	二	—	—	二	五四	二	一	六
労働雑役	七五九	四	八	二	八二	三五九	四三	—	九	二	二	五九	一三	五、五〇五	—	六、八四二
女中	七	一	—	—	—	—	—	—	五	—	—	二	一	三	六九〇	七二〇
計	七、二五三	四五	一二六	一四〇	一、七二一	二、九二二	九一三	三三	四九二	三二〇	一三	六七九	一一六	八、一一九	七〇九	二一、一七六

備考
一、右表の職別に該當せざる業務はその仕事の態様又は事情等を斟酌して右の職別中に含めた。
一、各職別に於ける男女は之れを併合した。

右表は就職者に就ての統計であつて横行の職別は當初希望した業務、從行の職別は就職した業務である。例へは職工に就て云ふと、當初職工を希望したものは七千二百人であつたが、當初所期通りに就職し得たものはその中の五千四百六十二人に過ぎない、其の餘は希望外職業へ行くことを餘儀なくされたことを示す。この希望通りの就職と希望外への就職とを左表で實數と百分比とを示して見よう。

	兩者ノ職業ヲ希望セシ人員	希望通り就職セシ人員	希望通り就職せずして他へ就職したる人	百分比 希望人員	百分比 希望通り就職	百分比 希望外就職
職工	七、二〇〇	五、四六二	一、七三八	一〇〇	七五、九	二四、一
技術手	八三	一六	六七	一〇〇	一九、三	八〇、七
徒弟	一七六	一一二	六四	一〇〇	六三、六	三六、四
小僧	三三六	二二七	一〇九	一〇〇	六七、六	三二、四
店員	二、八二三	一、二二〇	一、六〇三	一〇〇	四三、二	五六、八
配達人	二、三七六	一、五九二	七八四	一〇〇	六七、〇	三三、〇
外勤員	六〇七	四七〇	一三七	一〇〇	七七、四	二二、六
集金人	四三	一四	二九	一〇〇	三二、六	六七、四
事務員	一、三五八	四四〇	九一八	一〇〇	三二、五	六七、五
書生	六九七	二六五	四三二	一〇〇	三八、〇	六二、〇
給仕	一四八	九三	五五	一〇〇	六二、八	三七、二
使丁	八四七	四七九	三六八	一〇〇	五六、六	四三、四
看護人	六四	五四	一〇	一〇〇	八四、四	一五、六
勞働者	六、八三二	五、五〇五	一、三二七	一〇〇	八〇、五	一九、五
女中	七二〇	六九一	二九	一〇〇	九五、七	四、三
計	二四、一七六	一六、六〇八	七、五六八	一〇〇	六八、七	三一、三

此の表の上の三段は實數であり、下の三段はその百分比である。百分比で見ても解る通り、例へば茲に百人の職工希望の就職者があるとすると、其の中の七十五人九分は思ひ通り職工となつてゐるが、殘りの二十四人一分は他の職業に行くことを餘儀なくされてゐるのである。又事務員に就て云ふと、茲に百人の事務員希望者あらば、其の中の三十二人五分だけが思ひ通りに地位を得たが、他の六十七人五分は他の職業に行かざるを得なかつたと云ふのである。希望通り就職した比の多い程、其の職業は容易に獲得することが出來るので、希望外就職した比の多い程、其の職業の就職が困難であるとの意味を表はしてゐるものと云へよう。即ち希望外就職のパーセンテージは直に以て就職難の率と見る可きである。而して此の各職業の比率は何れも百分比であるから直に各職業を比較することが出來る。總體から云つて就職者百人中六十八人七分までは希望通りに其の職業に從事し得てゐるが、三十一人三分は就職不本意者であるとふいことになる。

しかしこれは大正八年末迄の取扱の就職者に就て考察したものであるから、近年は此の事情も多少變つて來てゐる筈であるが、近年は統計の取り方が異つて居る爲め、容易に前例の如き希望業務及就職業務に區別しての職態別の考察が出來ぬことは遺憾である。けれど大正十一年中の或る日に於て特に約五千人に就て右の希望業務及就職業務の同樣の調査をして見たことがある。それをも加へて前掲の就職難率を年別に比較して考察すると、左の通り面白い結果が表はれてゐる。

(乙表)　明治四十四年以降年別就職難の率

	明治四十四年	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正十一年
職工	三〇、八	三五、四	三四、八	四二、四	四七、一	二一、九	一六、九	一三、一	一七、七	四九、[illegible]
技術手	—	六四、三	八七、五	八四、六	八〇、〇	一〇〇、〇	八〇、〇	七一、四	八五、七	七六、九
徒弟	—	—	五〇、〇	四一、二	五三、四	四二、九	五〇、〇	二四、一	三〇、六	—
小僧	二〇、〇	四五、二	五三、四	三四、三	五八、〇	三五、三	三〇、八	一八、七	一三、七	四五、〇
店員	六八、八	六五、七	七〇、三	七二、八	六七、六	四一、六	四六、三	四四、二	一六、九	六六、[illegible]
配達人	六〇、〇	四三、五	五五、四	五八、五	五〇、九	三四、一	三三、三	一八、九	二一、八	六三、
外勤員	七、七	二一、八	四〇、七	二〇、一	四四、〇	三五、六	三五、三	一一、一	三八、五	八五、[illegible]
集金人	一〇〇、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇	五五、四	五〇、〇	三五、[illegible]	七八、五	五〇、〇	七四、三	五一、三
事務員	六六、六	七六、〇	七七、三	九一、七	九〇、一	六六、四	七〇、九	五四、四	五三、五	五〇、[illegible]
書生	七五、〇	七一、七	八五、一	八八、[illegible]	八五、七	四三、四	七〇、六	三七、〇	五〇、五	四九、[illegible]
給仕	六六、七	五〇、〇	二八、六	五〇、〇	七一、四	四六、[illegible]	六〇、〇	七、四	一五、六	五五、四
使丁	六五、〇	六〇、六	七一、七	七五、	八九、[illegible]	五一、[illegible]	三五、〇	一五、四	五三、九	五三、三
看護人	—	一四、四	六六、七	三三、三	五〇、〇	—	—	一四、三	—	三八、[illegible]
労働	三七、八	二一、一	二四、七	一〇、五	一一、二	三三、八	一九、二	二〇、六	二五、九	三七、[illegible]
女中	三〇、〇	五、一	一一、四	一一、八	一、五	三、〇	—	—	—	六、[illegible]
全般率	三九、六	三四、七	四一、一	三七、[illegible]	四一、[illegible]	二八、[illegible]	二九、七	一八、四	一四、八	四九、八

此の表は數字の高い程就職難の度の高いことを意味するのである。各般率で見ても明かであるが、大正七年は就職難が最も低く、大正十一年は就職難が最も高い、大正十一年に次で大正四年が高い率を示めして居る。大正七年の一八、四と云ふ低率に對して大正十一年は四九、八といふ高い數字を示してゐる。

こゝで一寸記憶を喚び起して頂き度いことは、大正三年末に歐洲戰亂が勃發して大正四年に入り財界が急に不況に陷つたことである。それから五年六年と景氣挽回し、大正七年に至り好景

氣の絶頂に達した。輸出貿易の殷賑や、軍需品工場の繁榮で職工や事務員の就職難が大に輕減されてゐる事象が此の表の上にもよく現はれてゐる。配達人や外勤員も此の例に漏れぬが、看護人などに至つては五年六年は就職難は絶無になつてゐる。集金人などの人的信用を要するものは、さすがに常に就職困難で、大正七年でも五〇パーセントを出ぬのも興味がある。各種職業を就職難の高い方から數へると、技術手、事務員、集金人、店員といふ順序になる。就職の最も易い方から數へると、女中、看護人、勞働雜役、職工といふ順序である。大正十一年になつて特に外勤員の就職難が高くなつてゐるのは世情が固定給を拂はぬ向が多くなつた爲めであらう。世情の推移に伴つて種々高下を生ずるは經濟界の好不況の外に生活事情や雇傭條件などの變動が反映するものであらう。

四、職業市場に及ぼす經濟界の波動の影響

言ふ迄もなく世に行はるゝ勞力需要は決して一定不變のものでなく、時に依つて著しく變動するものである。その變動する態樣を大別すると二つになる。一つは經濟界の好不況の大きな波動に作用されて周期的に生ずる場合であり、他の一つは季節的に來る業務の繁閑に影響されて生ずる場合である。かゝる場合に於て需要の變動が生じ惹いて失業者が出來、また就職難が起る。加之或る一の職業の需要の變動と他の一の職業の需要の變動とは必ずしも時期が一致しない、故に或る一つの時をとつて考へて見ると、職業に依つて或るものは需要殷盛に、或るものは需要沈衰してゐる狀態が見られる。さうした個々の職業が夫々の小波瀾を經つゝ全體として大波瀾に引ずられて行く樣は、丁度物價が小刻みの波瀾を爲しつゝ大きく波動を描いて行くと同樣である。好況の年と否とに依つて職業紹介所の統計の上にも、經濟界の波動が可なりに濃明に其の曲折を描かれてゐることは容易に見られる。

經濟界の大きな波動は週期律的に概ね十年を一期として循環してゐるとは學者の定論であつて、チョン、スチュアート、ミルは、此の循環期を區分して恐慌後最初の三年沈滯狀態が續き、次で來る三年間は好況を呈し、次の三年間は[illegible]熱狂時代となつて、終に十年目に恐慌を招くのであると云つてゐる。之を物理[illegible]に説明した太陽黑點説などもあつて頗る喧しい問題であるが其の年限の如きは學者の云ふ通り左樣に正確に行かぬとしても、大體さうした波動があることは事實である。職業市場に於ける業務の需要供給も其の波動に應じて需給の比が浮動してゐ

ることは、前の表に於ても見得るのである。

左に各年に於て求職の一〇〇に對して幾許の需要があるか、又一〇〇の求職の中の幾許が就職するかを東京市職業紹介所の統計表に依つて表示する。

求職割合及就職割合の累年比較表

年次	求職一〇〇に對する求人數の割合	求職一〇〇に對する就職の割合	備考
大正元年	一〇〇、六	三二、四	沈滯時代
二年	九四、二	四、三七	
三年	六七、七	三六、四（十月歐洲大戰勃發）	好況時代
四年	七〇、一	三三、二	
五年	一二二、五	四三、〇	
六年	一九〇、四	五五、三	
七年	二四一、一	五八、七（軍需品工業殷盛）	熱狂時代
八年	二二四、八	六三、七	
九年	一四四、五	五三、八（三月株式暴落の恐慌來）	
十年	一二九、八	四七、七	沈滯時代
十一年	一四一、九	四八、八	
十二年	一二二、九	五二、一	
平均	一三〇、二	四九、六	

（註　上欄は需要と供給との比率變化する關係を表はし、下欄は供給を消化する就職の難易の割合を示す。）

戰時好景氣の結頂たる大正七、八年に於ては勞力の需要及結合も最も多く、大正三年末歐洲戰亂勃發に伴ひ俄然襲來した財界の不況は失業の需要及割合の最小率を以て數字上に明瞭に表はれてゐる。是に依つて經濟界の波動に比例して求職に對する求人の比率も變動して行くことは認めらるゝのである。

經濟界に週期的波動がある以上、各種の職業も其波動の影響が惹いて就職の難易に表はれて來ることも理の當然と云はねばならぬ。それからまた、同じ一ケ年の中に於ても職業の種類に依つては氣候や習俗や嗜好の關係から時に應じて業務の消長が生ずることがある。例へば農業に就て云ふと七、八、九月の夏季にかけて非常に多忙であるが一、二、三月の頃は至極閑散であるし、通信業に就て云ふと十一、十二月の冬季は非常に多忙であるが、夏季になると比較的閑散である。汽車汽船の運輸などは夏季多忙を極め、印刷製本などの仕事は冬季多忙を極むると云ふ樣な差異がある。經濟界の週期的波動と一年間の季節的波動とが相交錯して個々の職業上の繁閑が生じ、かうした消長から複雑な就職の難易が生じて來ることも睹易き道理である。英國の學者シドニー、ウエッブ（現商務院總裁）は其『防貧策』に於て職業の季節的繁閑といふことを説いてゐるが、同氏の所説に依ると個々の職業には季節的に需要の旺盛なる時と需要の衰退する時がある。それは産業の上に季節的の消長が存する爲め

であつて、職業に依つて其の繁閑變化が劇しい。さうして社會には幾多の繁閑の時期を異にする職業が相交錯してゐるのであるから「不英國に於て或る一ケ月の勞働者の全數を調査し、之を他の一ケ月に於ける勞働者の全數と比較する時は同年間に於ける各月の數は概ね同一なるを見るべし」、と論じてゐる。此の結論には多少議論の餘地もあらうが、個々に就てはさうした繁閑があることは爭ひ難き事實で、職業其のものに存する繁閑の差違に、更らに天災地變其他種々の事由が加はつて其の關係は益々複雜になる。例へば大工や左官のやうな職業に從來でも需要が々かつたのが、大震火災で多數の建物の滅失したので、これが復舊の爲めに一層勞力の需要が多くなつてゐる。然るに供給は平素さい潤澤でないのに、揭て加へて急速の需要增加に會うて需給の差が一層著しくなつてゐる如き是れである。また知識階級とも云はるべき俸給生活者などは、大震災前でも官公省會社などで整理の爲めに供給過剩であつたのに、大震災以後は各方面で事業上の大損害の爲めに一層整理が著しくなり需要がますく閉塞するといふ狀況である。斯樣な事情が內面に存在する職業市場は、個々の職業に就て仔細に詮索した上でなく、單に總括の數字の上のみでは內容たる需給の一致、不一致が明かでないことは當然である。一般に不景氣の時は需要寡少で勞力に剩餘を生ずると云ふか、それは大勢から達觀した上のことであつて、內容的には或ものは需要過多であることも、或ものは供給過少であることもあるのである。左に職種別に依つて大正十二年中の東京市職業紹介所の統計から特徵ある部分を拔萃して其の需給關係を比較して見よう。

職別	求人數	求職數	就職數
(工業)			
紡織工	一、一九一	六五五	四一一
裝身具工	五、五四七	三、〇三五	一、九五一
機械器具工	五、〇六九	四、五五五	二、四〇八
食料品工	一、四四八	八九五	七二八
………	………	………	………
(商業)			
店員	七、一五八	△一〇、一六六	三、一九七
小店員	六、三八一	九九七	八八四
商店雜役	二五、〇五三	一四、八七一	一一、〇〇七
………	………	………	………
(雜業)			
事務員	四、五二二	△二二、七五三	四、二八四
看護人	一、〇八九	四五六	二五〇
藥局生	二六五	△五九九	一四七
集金外交	一三、三八五	三、二二五	一、九二六
配達人	一一、九一八	六、〇五九	四、五一六
………	………	………	………

【注意】△印は求職數の著しく超過したるを示す

右の表で見ると工業方面は概して求人超過である。商業及雜業方面に於ては少數の職業は求職が著しく求人を超過してゐる。併し工業方面が求人數が多いからと云つて直ちに其方面の就職が容易であると斷ずることは出來ない。何となれば工業方面には特に著しく喰合ひの成立が困難な事情が伏在してゐるからである。商業方面で見ると、小店員などは求職の六倍以上も求人の數がある。それほど世間では小僧(少年)を求めてゐるが一般の雇員(大人)となると求職が多く求人が少ない、其樣な狀況であるから少年にして小僧を望むもの丶大部分は容易に就職し得るが年長者に至つてはさうは行かぬ。雜業の方面で見ると、事務員や藥局生の求職は需要に對し二倍乃至四倍に達してゐる。著しく供給超過だ。然るに看護人や集金外交などになると著しく求人超過である。

五、雇傭條件の不調和

右のやうに統計の內容から見ると業種に依つて或るものは需要が多く或るものは需要が尠い、これを一般條件の點から云ふと、今日の世上には商業と云はず工業と云はず戶內使用人と云はず概して使用人は年少の人々を多く求めてゐる。トコロが年少の人々は多くは餘暇を利用して勉强したいとか、學校に通いたいとか、何でも自分の自由の時間を欲してゐる向が多い。然るに使用主の方では年少者は使い易いから欲しいのであつて、時間は遲くまで働いて貰ひたい、夜學校など行く人では困るとある。故に小僧などを雇はうとしても容易に得らない。また女中が雇入の困難なのに就ても略々同樣の事情がある。これは年齡の點はあまり問題にはならぬが、雇入れたい向は非常に多く、奉公したい希望者は太だ尠い。希望する人々の多くは使用主が求めるやうな條件では行き度くない。また奉公人に對し理解なき主人の許や小兒のあまり多い家庭には傭はれ度くないと云ふのが多い。その要求の根柢には一身の將來と眼ざめ來つた思想の關係などが含まれてゐる。要するにこれ等雇傭條件の困難は現代の風潮や徒弟制度の缺陷や家庭生活の關係などが根ざしとなつて起つた現象である。此等は求職者の側から云へば或條件さへ我慢すれば就職は容易なのであつて、雇傭難ではあるが就職難ではない。然らば其の雇傭難は何人の責に屬すべきものであるが、それは現代の世情に照して見て此の條件を要求する求職者の方が無理か、使用主の方が不當かの判斷に依つて決するの外にない。その推斷は此には留保して置く。

それから次に技能條件の不一致から來る雇傭成立難がある。

大工、左官、屋根職、技術手などが其適例である。大工や左官などの需要は一般に多い、其の待遇條件は他に比して一段優良である。職を求むる人々もその方面は心中に希望する向が多い。然るに事實就職し得る者は甚だ鮮い。鮮い理由は技術といふ特殊の能力を持たねばならぬ業務であるからである。然るに求職者の多くは此の種の技術を持つてゐない。故に曰く、これ等地位は多く人を求めてゐる人も亦多くその地位を欲してゐる。而もその地位に就き得る人は甚だ鮮いと云ふ妙な矛盾した現象が起る。それは其間技術といふ越え難き溝が存するからである。この溝渠には橋がない、誰が來て此の溝渠に簡單な橋を架して與れるならば、此方から彼方に渡らんとする人々の非常なる福音であらねばならぬ。さうさうした橋渡しの事業を企つるのは時代の必要であると言ひ得る。この要求に應ずる爲めに技術短期講習を試みて、而も開設日尚淺きに拘はらず相當成功を收めつゝあるものに職業輔導會がある。職業輔導會の事業は失業者を導いて就職の彼岸に達せしむる爲に、積極的に或る技術を授けて行く橋渡の事業である。

近時職業紹介機關の實情を視察する向が多くなつたが、さうした視察者に依つて最初に發せらるゝ最も普通な質問は「此頃は求人數と求職數とは何れが多いか、また求職の何割が就職するか」と云ふことである。極めて平凡な質問であるが、此の答には私は何時も稍躊躇させられるのが例である。と云ふのは、此の質問は刻下不景氣な實情を知りたいと豫期してゐる質問であるから、職業紹介統計に於ける求人の超過してゐる。合計の數字を短い言葉で說明すると、質問者の豫期を裏切ること甚しく惹いて誤解を生じ易いからである。求職より求人が多い事實に對して私は次の如くに答へる。曰く求職者は一人々々實際職を求めに訪れた人に就ての登錄であるし、求人の方は一口に五人十人、多いのになると百人と二百人もの需要申込があつて、それが悉く求人數に計上されて行くから一般に事業が諒解されて世の利用が多くなればなる程、求職の增加よりも求人の增加の方が數に於て多い譯である。尤も此の狀態は或程度に至ると飽和さるゝであらうが、今日の如く職業紹介事業の過渡期にありてはまだまだ紹介所利用の割合が擴つて行く、さうすると求人の數は比較的に殖えて行くであらう。けれども求人數の多いと云ふことは直ちにその割合で就職數の多いと云ふことにはならない。吾々の實驗に依ると求人數が求職數二倍以上なければやゝ思はしい就職成績は得られないのである。それ程人間と仕事との結合には條件其他の複雜な事情が加味されてゐて、成立が困難なのである。好景氣の時などは求人が求職の三倍四倍に

達することさえあると、けれども又人に依ると更に追及して質問して來る。曰く假りに求職は一人々々で求人は一時に多數申込があつたとしても、求職數よりも需要の多い以上、それは需要超過であつて、惹いて世間の好況を裏書し、また求職の容易を暗示するのわけであらねばならぬではないかと、これは至極尤もな詰問である。實は眞に正確に求人超過の實相を明かにし、就職の容易ならざる理由を說明するには、進んで統計の內容たる各種職業に就き點檢せねば明瞭にならない譯である。

六、需給關係の實相的解剖

職業市場に表はるゝ就職難の實相を率直に云ふと、人を求むる方向と職を求むる方向とは方向と種類が互に異つてゐると云つてよい。相互に要求する條件が互に相齟齬してゐることを感ぜざるを得ない。

形の上では求人、求職として同欄に並ぶべき需要供給の如く見えてゐても、其の實相をよく考察すると其の結合し得べき需要供給でないことが多い。左に大正十二年中の統計、工業關係中の一を採つて、其の求人多きに拘はらず喰合成立の困難なる所以を解式的に點檢して見る。例へば機械器具に就て

(大正十二年東京市職業紹介所統計)

業別＼種別	求人數 男	求人數 女	求人數 計	求職數 男	求職數 女	求職數 計	就職數 男	就職數 女	就職數 計
機械器具…………	四、九六四	一〇五	五〇、六九	四、五三五	二〇	四、五五五	二、三九五	一三	二、四〇八

となつてゐるが之を刻下の實情に照して見ると、機械の修理や應急諸器具の製作に稍復活の曙光を見出して來てゐるのであるが、十二年中の內容の實情に就て考察すると、此の業務の需要(求人)は機械よりも器具の方に多い、そして供給(求職)は寧ろ器具よりも機械に多いのである。それのみでない、その內の機械のみの求人求職の間にありても、求人の方は概して經驗ある者又は年少者を求めてゐる。然るに求職の方は概して無經驗(熟練工もあるが大工場の分業に從事してゐた者は、工場を異にして多少にても仕事が異ると殆ど不熟練者に等しい)の年長の者が多いのである。就職困難の實相を明かにする爲めに、

此の實際の事情を斟酌して前掲の機械器具の統計數字を分析(想定)して、統計表を事情に適當する樣に改作して見ると左の通りにならう。(男子のみに就ての考察)。

業別＼種別	求人數 熟練工 大人	求人數 熟練工 小年	求人數 不熟練工 大人	求人數 不熟練工 小年	求職數 熟練工 大人	求職數 熟練工 小年	求職數 不熟練工 大人	求職數 不熟練工 小年	就職數 熟練工 大人	就職數 熟練工 小年	就職數 不熟練工 大人	就職數 不熟練工 小年
機械	七〇〇	八〇〇	二一四	四〇〇	四〇	二一五	一、〇〇〇	六〇〇	三八〇	一九〇	二〇五	三二〇
器具	八〇〇	一、二〇〇	二五〇	六〇〇	五五	一七〇	一、〇〇〇	六〇〇	四二〇	一六〇	二四〇	四八〇
計	一、五〇〇	二、〇〇〇	四六四	一、〇〇〇	九五	三八五	二、〇〇〇	一、二〇〇	八〇〇	三五〇	四四	八〇〇

右の表で見ても明かなる通り、以前の表で需要と供給の如く見へたものは、細表にして見ると實は眞の需要でなく供給でなく、全く假面を被つたそれであつて、到底出雲の帳面に上り得ることとなき赤の他人が多いことが知れる。こんな事情に眼を閉ぢて、唯數の上で需要だ、供給だと喜んでゐた所で始まらない。試みに思へ。求職者の大多數たる二千名は不熟練工の大人であるのに、求人に不熟練工の大人はたゞの四百六十四人しか無い。これでは最初から千五百三十六人は不就職の運命を有つてゐることが知れるでないか、實際の場合にはまだ其の人の品位、態度、體力などの關係や待遇、勤勞條件に付ての種々の制限が數へられるのである。かく仔細に詮索すると、需要供給の赤裸々の所が表れて來て、詮索の上での求人、求職こそ眞のコンビネーションの出來る求人、求職であると云へる。職業紹介の實際の場合は自然さうした詮議の上で紹介するのである。果して然らば求職一〇〇、求人一〇〇なる時は、就職は必ず一〇〇であるべき筈である。然るに如何に適當に結合するに努めても、就職は矢張り一〇〇に達すること遠く、紹介數に對し六、七十といふ所を彷徨してゐるのが常である。その三四十といふ差は何を意味するか、その落伍者こそ即ち職業市場の取扱者の神ならぬ分量を示すものであらう。言葉を換へて云ふと、性能の鑑識上の見誤りである。こゝまで來ると性能診查と職業紹介とか關係の深いとこが知れる。尤も人を採用する側に於ても誤りなきを保し難いから、性能鑑識の必要は産業能率增進の爲めに、有らゆる方面で必要なことは論を俟たぬ。

かゝる需給の不均衡の爲めに職業市場に依つて共志を遂せら

れない各種失業者の行方を詮索するは、別に大なる興味ある問題である。而して之れを究むるはやがて職業轉換の系統を研究することである。別なる興味ある問題である。而して之れを究むるのはやがて其研究は他日に讓るが、一言にして云ふと職業紹介所を訪れて職を得ない人々の中の若手は再び訪れて求職し、他の若手は地方へ移動するのである。地方の都市や農村でも、今日の場合、此の人々の滿足は與へられぬ處から再び鍬を抛ち大都會に聚り、不斷の動搖の渦卷の中へ身を投ずる、かくして再三再四市場に出入する中に、當初の希望を抛つて、第二希望、第三希望に職業轉換の意志を定め、生計の切迫するに連れて、最も手近い勞働方面の仕事に携はるの餘儀なきに至る、かくして借間に移り家庭を解散して各個が他に寄食する、職業轉換の最後のドン詰りは自己の體力の許す限り需要比較的豐富な自由勞働に聚り寄るの外はない。而してそれは慘ましい人生の悲劇である。

前述のやうな事情は各業種に依つて區々であり、夫々の特色がある。更に汎く俸給生活者、技術勞働者等に就て考察するに興味あることであるが、此には筆を擱く。

波瀾のない臨時議會

安部磯雄

私は廿五年も東京に住んで居るけれども議會見物に出かけたのは唯一度だけだ。それで私が議會の動靜を知ることの出來るのは全く新聞紙に賴るである。

議會を國技館の角力に比して興味を感じて居る人には今度の臨時議會はアツケないものと思はれるに相違ない。氣候のためでもあらうが、實際新聞紙に現はれて來る議會は慥にダレ氣味である。政府黨が保守主義で在野黨が進步主義であれば、後者の突擊に多少の活氣も期待さるゝものゝ、穩健着實を標榜する政友本黨が在野黨とあつては、舞台面の淋いのも無理はない。然し政友本黨のみを責むるのは殘酷過ぎるかも知れぬ。なぜなれば此臨時議會には眞面目な議論を鬪はす程の議題が提出されないからである。

世人の期待して居る普選も貴族院改善問題も今度の臨時議會には提出しないことになつた。綱紀肅正も行政及財政整理も問題にならなかつた。現に今臨時議會の主要問題は豫算案であつて、これとても大體に清浦內閣の立案を踏襲するに過ぎないのであるから、各派共これを鵜呑にするの外なかつた。これでは活劇を演ずることの出來る筈がない。役者の拙なるがためではなくて、脚本の貧弱なるがためだ。

新聞紙だけの評判から見れば加藤首相の演說は餘り上手でないようだ。衆議院に於ける演說は比較的放膽であるに反し、貴族院に於ては戰々兢々たる態度で演說をするといふことだが、これだけ考へても首相は演說に不得手であるらしい。勿論演說の巧拙などは別段問題とするには足らないが、質問に對する首相の答辯振りには聊か飽き足らぬ點がある。議會に於て珍品問題を質問するが如きことが既に不愉快なことであり、無作法のことであらうと思ふが、これに對する首相の答辯も私共には餘り好い感じを與へなかつた。首相の言ふが如く政黨が實業家から寄附を受くることは何等不都合がないから、今後も益寄附を受くる積りだといふことが首相の心事であるならば、何故珍品問

五など〻言はずに明白に金五萬圓と書かなかつたかといふ疑問が私共の心に起らざるを得ないのである。

全體大臣の答辯は揚足を取られないやうにすることを科玉條として居る。捕捉することの出來ぬことを言ふたり、調查中の一點張りで逃げたりする。强いて追窮されると皮肉を言つたり怒つたりすることもある。此點から言ふと濱口藏相だけは例外で、新聞紙の評判は素晴しいものだ。藏相は眞摯に凡ゆる質問に對して答辯する。演説の態度も堂荒も大臣として申分がないといふことである。實業同志會の武藤山治氏に應酬した演説の如きは今議會中の白眉と稱せられて居る。實は藏相の提出して居る奢侈品輸入關税引上案が最も人氣を惹く問題であるがためかも知れない。

此問題が果して無事に議會を通過するか否かは分らない。私は藏相の大臣振りには充分の敬意を表するけれども、關税引上案に就ては大に其成功を疑ふて居る。輸入品のみに加税して內國産の奢侈品に及ぼさないといふことは經濟の原則に違反して居るではないか。尤も藏相は關税引上の結果を見て漸次內國品にも及ぼすとは言ふて居るけれども、これは一種の遁辭ではないかと思はれる。外國品に加税すれば、これは忽ち內國品を保護することになる。其結果は豫め想像することが出來る。若し藏相の言ふが如く奢侈品の輸入税を引上ぐることが國民に質素の氣風を鼓吹するに有りであるとするならば、內國の奢侈品に加税することにより更に大なる精神的効果を來すことが出來るではないか。

正直に言へば私は關税引上や奢侈品の加税によりて奢侈の氣風を矯正することが出來るとは考へない。德川時代に於てすら奢侈禁止令は永く繼續することが出來なかつた。人類に優越慾と競爭心がある限り、奢侈を禁止するといふことは不可能である。政府の收入を增加する目的を以て奢侈品の課税を引上ぐることは慥に成功であらうと思ふ。これは又社會政策の立場から見ても差支なきことである。何となれば其税を負擔するものは有産階級であつて、無産階級は殆んど全くこれに關係がないからだ。奢侈品の輸入税を增加することにより幾分か輸入超過の勢を阻止することが出來るとしても、これを以て國民の奢侈心を矯正することが出來ると考へるのは大なる見當違ひである。

營利と競爭と物質的文明とを根抵として築き上げられた資本主義には奢侈といふことが附物である。巨萬の富を有する富豪が質素なる家屋に住し、粗衣粗食に甘んずるといふことが察際想像の出來ることであらうか。生産は消費のためである。多く收入を得んとするのは奢侈生活を送らんが爲である。有産階級

の間には奢侈競爭が行はれて居ると同時に　無產階級の間には其奢侈競爭に加入せんと努力して居る者が少くない。貧者は必要品を得ることに汲々として居るけれども、少しく餘裕を生ずるやうになれば娯樂品を要求し、遂には奢侈品をも要求するやうになる。奢侈といふ動機がなかつたならば資本主義は今日の如く發達しなかつたであらう。故に私は資本主義旺盛の時代に於て奢侈を矯正せんとすることは絕對的に不可能であることを信ずる。

然し日本國が全體に奢侈生活のため惱んで居るといふことは事實だ。無產階級の間にも其れ相應に奢侈が行はれて居る。さらばと言ふて一人や二人の力で奈何ともすることは出來ない。奢侈品輸入稅の引上げも餘り賴みにはなら　い。若し一時的效果を擧げるだけでも宜いと言ふのであれば、私には一つの案がある。其れは政府當局者が先づ自ら範を示すことである。

國民の浪費を戒むるには政府自ら其實例を示さねばならぬといふことは私共の常に聴く所のことであるが、財政整理の必要が說かれるのもこれがためである。然し私は其よりも一層手近なことを說い　見たい。財政整理を手始めとして大臣が舊慣を打破して質素なる生活振りを示すことである。內閣成立後加藤首相は各派の重なる人々、貴族院や、實業界の代表者を官邸に招待して就任の挨拶をなすと共に饗應をなした。斯の如き形式的のことは止めた方が宜いと思ふが、若し必要があるとすれば茶果を供するだけで充分ではないか。此頃の會と云へば多く飲食が附物であつて、これがために浪費をなすことが少くない　大臣は此點に於て先づ其範を示す必要はないか。

大臣が自動車を使用するからとて別に不思議はない。然し高價な自動車に乘らなければ大臣の體面に關するといふものでもないからフホードの自動車でも用は足りる。急を要しない場合は電車に乘つても宜いではないか。兎に角大臣が質素な生活振りを示すどになれば、濱口藏相の所謂精神的影響は關稅引上の比ではあるまい。上の爲す所下之に傚ふといふ氣持はまだ我國民の間に可なり濃厚であるから、私はこれを當局者に獻策する。

私が議會に對して嫌惡の念を抱いて居るのに愚劣なる彌次の行はれて居ることも確に其一つだ。我國民は可なり彌次性に富んで居るから、演說會にも運動競技にも今日尙ほ彌次は絕へないのであるが、言論自由の模範場たる衆議院が彌次の本場となつて居るといふことは何たる不幸であるか。

私は今度の臨時議會に於て此惡習は斷然禁止されることゝ思ふて居た。護憲三派が聯合して居る上に中正俱樂部も政府黨を援助するが如き態度を取つて居る。若し數の上から言へば在

黨は政府黨の敵でない。元來彌次なるものは少數黨が多數黨に對する唯一の戰略であつて、鬱憤を晴すとか、揚足を取るとか見物人の人氣を呼ぶとかいふ極めて下劣なる心情より出づる所の方法である。憲政會の如きも殆んど十年間此戰略によりて悲憤を洩して來た經驗を有して居る。今や攻守位置を換へて、敵は言ふにも足らぬ少數黨である。何故に此好機を捕へて彌次禁止の模範を示さないのであるか。在野黨が彌次るのは年來の習慣だから仕方がないとしても、政府黨が結束して彌次を愼むとは幹部の決議によりて直に實行し得られることである。私が今議會に對して有する不滿の第一はこれである。

彌次が行はれて居る間は議會に於て大雄辯を聽く望はない。よし雄辯家があるにしても、彼は先ず如何にして彌次に對抗し得るかを考へて置かねばならぬ。勿論彌次の矢に立つて見事これを切拔けるといふことは雄辯家にとりてさ程困難なことではあるまい。然しこれによりて演說の品位が低下するは言ふまでもなく、雄辯家ならざる議員は全く其意見を吐く機會さへも失ふことになる。安達謙藏とか岡崎邦輔とか政界の巨星と考へられて居る人々が陣頭に立つて戰はないのは全くこれがためではあるまいか。

簡單にノー、ノーといふ位ならば別段言論の妨害にもなるまいといふ人もあるが、若しノーといふ程反對の意見があるならば、自ら立つてこれを述べるがよい。他人の演說中にノー、ノーなどいふことも辯士に對する一種の無作法であつて、私共は全然これに反對する。議會は絕對に言論の自由を許すべき所である。然るに議員が團體的行動によりてこれを妨害せんとするのは自家撞着の甚だしきものである。

彌次が彌次に止まる間は尙ほ辛棒が出來る。然し彌次の對抗は遂に腕力の對抗とならざるを得ない。過去に於ける衆議院議員の腕力沙汰は如何であつたか。私はこれを思ふと全く議會政治といふものが厭になる。今後もこんなことが度々起るものと考へなければならぬ。議員が斯の如く下劣であるのはこれを代表させた國民が下劣であるといふことにもなる。勿論腕力に訴へるやうな下品な議員は少數であらう。然しこれを矯正することが出來ないとすれば、議員全體も其責任を負はねばならぬ譯だ。此點に於ては護憲內閣も全く無能である。貴族院の改善も良いが改善は先ず衆議院から初まるべきではなからうか。

私の記憶によれば貴族院には彌次のために喧噪を極めたといふ例はないやうだ。ましてなぐり合ひがあつたといふことを聞いたことがない。此點に於て貴族院と衆議院の差は全く殿樣とゴロツキの其れだ。然しこれを以て兩者の間に其程の實質的懸

隔があると見倣すのは早計である。一人づつに就て言へば貴族院でも衆議院でも大した相違はない筈だ。唯偶然の結果で一方は善良なる、一方は劣悪なる習慣を得たといふに過ぎないのである。卑近な例に就て言へば庭球の仕合は靜粛に行はれて居るに反し、野球仕合には今日も尙ほ可なり多くの彌次馬が騷いで居るようである。然らば庭球選手と野球選手との間に何等か品性上の相違があるかといふに決して左樣でない。唯最初にこうした習慣が造られたとか、或は中途或動機によりて改善が行はれたとか言ふに過ぎない。これによりて考へれば衆議院から彌次を驅逐することは眞に一擧手一投足の勞だ。現在の政府黨が決心さへすれば直に實行の出來ることである。

彌次は味方を應援する有效な手段であると辯護するものがある。今尙ほ運動競技に於て此說が唱へられて居る。然しこれが一種の詭辯であることは明だ。現在の彌次は議會に於ても運動競技に於ても味方の應援ではなく寧ろ敵を妨害することを重なる目的として居る。彌次は數の力を賴み若くは群衆の蔭に隱れて行はれるのであるから、暗打と同じく卑怯なる行爲である。運動競技に於て行はれる彌次は見物人の間に行はれるのであつて、競技者自身の間に行はれるのではない。然るに衆議院の彌次は議員自身の間に行はれるのだから、議員たる者は運動競技者や國技館の力士に對しても赤面しなければならぬ。且つ運動競技者は審判者の審判に服從することを一種の道德と考へて居る。力士ですらも物言ひの生じた場合靜に審判者の判決を待ち、一たび其判決が下れば、よし不平があつても默々として之れに服從することを知つて居る。これに比すれば衆議院は何たる醜態だ。啻に議長の命令に服從しないのみか、時には議長橫暴と叫び、議長は厚顏無恥なりと罵り、甚しきは議長席に迫つて腕力に訴へんとする。自ら選擧した審判者を無視するに至つては實に無節制の極だ。斯の如くして我衆議院が無政府主義や直接行動の宣傳者たらずんば此上もなき幸福である。

私は此臨時議會に對して今一つ失望したことがある。それは政府黨が普選問題や貴族院改善問題につき具體案を持合せて居ないといふことだ。革新俱樂部は普選に關する具體案を有してゐるのではないかと思はれる點があるけれども、果してどうであるか斷言は出來ない。政友會は黨の分裂以前に普選に反對であつたから具體案の準備がないのには多少の理由がある。然し憲政會に具體案のないのはどうしたものか。私は餘りに其悠長なるに驚かざるを得ない。

護憲內閣の組織が短時日に行はれてレコードを造つたといふことには加藤首相も少からぬ誇りを感じて居るらしい。これ

誠に結構であるけれども、早晩政權を握る希望を有して居た憲政會が充分なる時日を有して居ながら重要なる普選の具體案を決定して置かなかつたといふことは非常な手落ではないかと思ふ。若し護憲三派各自に具體案を有して居たとするならば、三派の協定案を作ることは比較的容易ではないか。普選案を臨時議會に提出すると否とは別問題として、政府は何時でも議會に提出するだけの準備をなして居る筈ではなかつたか。中正倶樂部が政府黨を出し拔いて今議會に普選案を提出せんとして居るのは一の大なる皮肉である。政府黨がこれを即決否決するとしても、或はこれを次の通常議會までの繼續委員附托とするにしても、政府黨の面目は潰れる譯である。普選即行の名譽を幾分なりとも他に奪はれるといふことは政府黨のために惜むべきことである。

内閣の生命は個人の生命と同じく今日あつて明日なきものである。普選問題の如きは今議會に於て片附けて置くのが得策ではなかつたか。普選案は種々調査を要する點もあらうが、其れは疾くに研究出來て居る筈である。中正倶樂部の生れたのは總選擧後のことであるのに拘はらず、既に普選案を今議會に提出するまでになつて居るのではないか。政黨員は隨分氣が長い。これでは何事を爲すにも充分な能率を擧げることは出來まいと

思ふ。今日の政黨は既に頽廢の期に近づいて居り、普選案の通過は彼等のために吊鐘となつて響くのではないかといふやうな氣がする。

（十三年七月九日）

公益事業と同盟罷工批判

公益事業と勞働爭議

堀江歸一

一

西部交通勞働同盟大阪市電氣局從業員組合は過般電氣局に對して、勞働時間の短縮、最低賃銀制度の採用、退職給與、公傷給與其他の個條に就て、嘆願書を提出した所、普なく當局者の拒絶する所となつた結果、組合は同盟罷業を決行し、一時大阪全市の重要交通機關を杜絶するに至らしめた。其の後罷業者の裏切者、市電氣局が狩り集めた、俄拵の從業者や、有志と稱する輩に依つて一部分の運轉が開始されたと云ふことであるが、罷業者の大部分（二千五百餘名とも云はれる）は高野山に立籠つて、罷業を繼續する態度を持して居ると云ふことである。

以上は七月八日までの新聞紙の記事に據つた事實であつて、其後局面に如何なる變化を呈するか、殊に勞働爭議に於いて、種々の急變を生ずる我國に於ては、將來の事は少しも豫測するを得ない。本文の公刊されるまでには、存外簡單に解決が付いて、眞面目に論述した者に馬鹿臭き感を與へるかも知れないが、兎に角私は今日までに現はれた事實を基礎として、二三の觀察を試みたいと思ふ。

二

第一に問題と爲るのは、電車の如き公益事業に勞働爭議の起ること、殊に爭議の突發することである。何を以つて、公益事

業とするかと云ふことに就ては、之を見る人に依つて、意見の相違を免かれないであらう。或は之を廣義に解釋すれば社會に存在する諸種の事業は一として社會全體の利益なり、又は國民多數の生活なりに關係しないものゝないやうに思はれるが、其關係の厚薄如何は自ら事業の性質に依つて、定むるものである。今社會公共の利益若しくは國民の生活に深甚なる關係を有する事業に於て、頻繁に同盟罷業が起り、然も其起る度毎に、國民の生活を營む上に必要缺く可からざる物質の供給が遮斷されたり勤勞の給付が中絶されたりしたならば、國民は日常の生活を維持し、又之を繼續して行く上に於て、大なる脅威を覺へざるを得ないであらう。茲に於てか國家は國民生活の安全を保護する爲めに、公益事業に勞働爭議の起ることに對しては、或手段を施すの必要を認めるに至るのである。

然らば其手段とは何であるか。公益事業には同盟罷業であると、同盟解傭であるとを問はず、一切の勞働爭議の起されることを禁止し、事業主なり、勞働者なりが既に協定した勞働條件に對して、異議を持ち、不滿を懷く場合には、之を仲裁々判の議に付して、其決定を待ち、一方に此手續を履まずして、濫に爭議を逞うした者には、課するに嚴罰を以つてすることは、確に一ツの方法として考へられる。唯此場合に於て、問題と爲るのは、仲裁々判の組織法であつて仲裁裁判の判決をして威力あり、又信賴す可きものたらしめるには、審判員の內に、勞働組合の代表者を參加させ、斯くて勞働者の利益を代表し、其主張を徹底するに遺漏なからしめる手段に出でなければならない。此點に於て、從來勞働組合を閑却し來つた我國には大なる缺陷を生ずる道理であつて、仲裁々判を公正なる基礎の上に構成することに、多少の困難を覺へるかとも考へられる。而しながら交通勞働組合の如き既に相當の根據を有し、又多年の閱歷を經た勞働者團體の如きに對しては、政府に於て之を尊重する公共的良心の存する場合には、其存在を承認し、組合代表者を參加せしめて、仲裁々判を構成する位の事は之を成すを得たのである。然も治安警察法第十七條を利用して、勞働運動を壓迫することを能事とする政府に向つて、斯る方針の行はれることは、甚だ無理であつて、多年勞働組合を私生兒扱に爲し來つた缺陷は正に今回の如き事件に接して、暴露され、公益事業の勞働者に罷業を決行する者を生じても、之を如何ともするを得ない。僅に例の如く首謀者を檢束するとか、生活資金の缺乏に依つて、裏切り物の續出するを待つとか云ふが如き、奧の手に訴へることであらうが、斯の如きは要するに勞働政策に於ける政府の怠慢之を然らしめるものと云へる。

三

第二に問題となるのは、公益事業の從事者にも他の勞働者に對すると同じく、同盟罷業は必ずしも嚴禁しない、現行治安警察法に依つて、下される制限は兎に角として、或場合に其行はれることの已むを得ざる事情は之を認めるとしても、尙ほ其突發は之を禁止する、同盟罷業を決行するに就ては、必ず一週間前なり、十日前なりに、事業主並に社會に向つて、豫告を致さしめることゝする。此豫告期間內に於ては、平生の通り業務に從事するが、期間を過ぎて、尙ほ事業主に依つて、要求の容れられなかつた場合に、始めて罷業決行の態度に出ることゝすれば、必ず豫告期間內に於ける社會の輿論は此種の爭議を審判し、要求を爲した勞働者が正しいか、要求を容れざる事業主の態度に誤まりなきかに就いて、自ら公正なる判斷を與へて、事件の解決に資するに至るのである。

四

然しながら此場合に於て、當面の事件に對して、我國の輿論が正しく動くかどうかは、一個の問題である。我國に於ては、社會の全體を通じて、勞働者に對して偏見の行はれるもの、甚だ盛であつて、勞働者の同盟罷業は如何なる場合に於ても、不正背理であるとする意嚮が著しく認められる。殊に交通勞働者の場合に於ては、其罷業が全市の交通機關を攪亂し、罷業其ものに依つて、市民の生活に直接重大の不便を與へる點から、罷業を決行した勞働者の所業の當否を糺す前に、罷業者に憎惡を及ぼす念が甚だ強い。斯る場合に罷業に對する社會の輿論の嚴正であり、又公正であることを望むのは、事實困難であつて、輿論の勢力其ものた藉りて、爭議の解決に資せしめようとする以上は、別に輿論の調子の公正と爲ることを必要とするのである。

更に罷業に對する輿論の不公正であることの一例は今回の大阪電車事件に依つて、暴露されて居る。電車從業員が罷業を決行して、一兩日に及ぶや、學生、在鄕軍人等の內から、運轉手、車掌を志願する者が續出し、兎に角不完全ながら一部分の運轉を遂げるを得たと云ふことである。玆に於てか一方に世間に於ては電車從業員の同盟罷業に依つて、交通の便を絕たれたことに依つて、不便を感じて居るので、斯る學生在鄕軍人等の行動を目して、恰も一種の義俠的行爲であるが如くに、稱揚し、又斯く稱揚される爲めに、一種の義俠家の續出する者を見たようである。

五

然しながら勞働者が生命を賭して、罷業を企てゝ居る場合に、單に罷業から生ずる結果が自己に不便であると云ふ故を以つて、世間に罷業破りをする者が出るが如きは、私を以つて見れば、勞働者に對して、無情と云はうか、非人情と云はうか、感服せざる行動である。如何にも電車の運轉が曠廢したならば、市民は生活上に迷惑を蒙るであらう。然し斯る事態の生じた根本の原因は要するに電車現業員が多年壓迫された勞働條件の下に、勞働することを強いられた爲めである。而して偶々彼等が起つて、勞働條件を改善しようとし、其之を改善する手段として、同盟罷業の擧に出でれば、社會の一部には罷業破りに依つて、此種の計畫を頓挫せしめようとする。即ち斯る罷業破りを爲す人に若しくは斯る行動を是認し、稱讃する人々は公益事業に從事する勞働者は如何なる場合に於ても、罷業を爲す可からず、隨つて如何なる勞働條件を課せられても、之に盲從せざる可からずと云ふ考へを持つものであつて、斯る考へこそ、勞働者に取つて、甚だしく殘酷非道のものと認めざるを得ない。電車の運轉の停止することは如何にも市民全體に取つて、不便であらう。然も此不便は單に一時的に過ぎない。一方に從業者並に其家族は年來非道の壓迫を蒙り、今回の擧に成功しなければ、勞働條件に改善を告げる見込なき破目に陷つて居るのである。果して然らば市民の如き、勞働者に對する一片同情の念を發揮し、暫時の不便は之を忍んで、勞働運動を成就せしめるのが眞に血あり、涙ある人の行爲とす可き所であり、若しも不便に堪へ難くして、一日も早く事端の收拾されることを希望するならば、市民は何故に市役所其ものを壓迫して、勞働者の要求に聽從せしめるの態度に出でないのであるか、其れとも勞働者の要求は何等の誠意を表する能はざるまでに、横暴を極め、不合理を盡して居るものとす可きであらうか。此點まで考へを突き進めず、單に罷業から生ずる自己の生活に覺へる不便を理由として、罷業破りの行動に出でるに至つては、勞働運動の眞精神の解せられざるの甚だしきものである。

六

假に一歩を讓り、勞働者殊に公益事業に從事する勞働者の同盟罷業は其勤勞の繼續的供給を受けなければならない社會に意外の迷惑を及ぼすから、第三者が事件に干與し、罷業者に代つて、勞働に就くことを可なりとするとしたならば、事業主が價格引上又は供給制限の目的を以つて、共同して生産額を縮少し

た場合には、社會は之を何と見る可きであらうか。事業主が同業者間の組合の決議に依つて、操業を短縮するのは、其實體に於て勞働罷業と異ならない。同盟罷業は勞働運用の方面に於て行はれ、操業短縮は資本運用の方面に於て行はれ、互に其行はれる所を異にするとしても、兩者共に社會の希望する程度まで、生産業に從はず其規模を制限して、以つて自家の利益を舉げようとするものである。故に今回の如き有志者が勤勞の停廢を不可なりとして、罷業者に代つて、或る種類の勞働に就く行爲を以つて、正しいとするならば、事業主が聯合して、生産を制限し、操業を短縮する場合に於ても、亦斯る生産の制限に依つて、消費者の蒙る困惑を不可なりとし、有志者は宜しく事業主に代つて、事業の經營に當らざる可からざる道理であり、事業を經營することが一朝夕の間に行はれ難いとすれば、宜しく團體の力なり、輿論の勢なりを以つて、事業主に迫り、彼等の爲さんとする生産の制限を廢棄せしめなければならない道理である。然るに今日に至るまで勞働爭議が起れば、必ず勞働者に不利を齎すような干渉を敢てするお節介者はあるが、事業主に壓迫を加へる運動の行はれるのを見たことはない。日本人は義俠の精神に富む國民であると云はれる。而して今回大阪に於て電車の運轉を志願した人々も義俠家であると云ふことである。然も彼等の義俠的精神は强者を援く用に充てられずして、弱者を虐げる具に供せられるのは、何とした間違であらうか。私は所謂義俠家の爲す所に對して、言ふ可き所を知らないのである。

七

大阪市役所が公營事業を經營する所に當つて、使役する職工勞働者の數は萬を以つて、數ふるの多きに上るであらう。隨つて市役所は常に勞働者に接觸し、彼等の滿足する條件の下に、勞働に從はしめると同時に、市役所としては彼等をして充分なる能率を發揮せしめることとの工風なかるべからざる筈である。殊に市役所が一方の當事者と爲り、勞働者を他方の當事者として、勞働條件を協定する場合には、其適用を受ける勞働者の多數であること、條件其もの、世間に廣く知られることとの二點から、特に公正なる見地に於て、取極めをしなければならず、又斯の如くにして取極められた勞働條件は推して、以つて一般の條件を律する標準と爲る可きものと考へられる。故に市役所に於て自己の雇傭する勞働者を取扱うには、專門の知能を備へる人あつて、條件の協定に遺漏なからしめるは勿論、平生勞働者に接觸して、意思を疏通し、如何なる場合に於ても、感情の背馳することを避ける工風を要する。是等の點に於て、大阪市

役所の平生爲す所に一の遺憾とす可きものはなかつたであらうか。世間には交通勞働事業に關して、罷業を企てたことを非難する聲が高い。然らば同時に從業者をして罷業を起すに至らしめた市役所の態度——少くとも平生の勞働者に對する處理に就ても亦同樣の非難の加へられなければならない道理であるのに、此點に就て、何等の說を耳にせざるは何故であるか。世論の片手落ちも亦甚だしいと云はなければならない。

斯の如くして勞働者に對する一般世間の偏頗なる處置の重なる場合には、結局勞働者をして階級的に團結せしめ、階級的に或る行動に出でしめるの勢を免かれない。勞働者を驅つて、此所に至らしめるものは、即ち世間の勞働に對する僻見であり、偏頗であり、不公正である。大阪の勞働爭議が如何に解決を告げるに拘はらず、其後に生ずる波動に對して、吾人は深甚の注意を拂はざる可からざる次第である。

大阪市電爭議批判

松岡駒吉

一、

自分は先づ第一に、今回の大阪市電爭議を單純なる一勞働爭議として觀察し批判する。自分は今回の爭議の動因となつた大阪市電從業員諸君の要求條項を見て、それが何等不當なものと考へない。歎願書の第一條に、八時間勤務制の實施、第二條に、中休（一日二回出勤制）の全廢があるが、是は今日の電車從業員の勤務狀態を知る者は、何人も當然すぎる要求であることを感ずる。大阪市電從業員は現在甲勤務と乙勤務とに分れて居るが、今甲勤務の狀態を示せば次の如くである。

第一日、午前六時四十五分出勤、午後四時半退所、

第二日、午前四時半出勤、午前十時退所、中休、午後三時半出勤、午後八時退所、

第三日、午前六時出勤、午後三時半退所、

第四日、午前五時四十五分出勤、午前十時半退所、中休、午後四時出勤、午後十時退所、
第五日、午後三時出勤、翌午前一時退所、
第六日、午後二時半出勤、翌午前零時半退所、
第七日、午前十時半出勤、午後半時半退所、
第八日、公休

乙勤務も大同小異である。現在勤務時間は九時間半乃至十時間であるが、それで不規則極まるものであり、且つ百數十萬の人々を有する大都市が僅か一系統の路面電車によつて交通事業を果たさんとするのであるから、從業員の苦痛過勞困憊は察すべきである。かくの如き勤務狀態からして、從業員の衞生狀態は頗る不良を示し、胃腸傷害、神經衰弱、肺結核等は電車從業員の附物になつて居る。去る四月の大阪時事新聞紙上で發表された市電保健課の車掌運轉手に關する疾病統計によれば、車掌の肺炎カタルは實に從業員の五一%に上つて居る。塵埃呼吸と過勞のために、呼吸器の障害を來たすのは當り前である。其他胃腸障害や神經衰弱や心臟虛弱に至つては、殆んど全部がさうであるといつても過言ではない。從つて十年勤續者なるものは曉天の星の如く寥々たるものである。市電從業員諸君が運輸委員會を通じて、毎年夏季に施行せらるゝ身體檢査の結果を發表せよと、幾度か强要しても、當局は常に言を左右に托して其の發表を拒否して居るといふが、當局としてはさもあるべきことである。從業員が斯くの如き勤務狀態の痛苦を當局に訴へて、歎願書を以て八時間勤務制の實施と、一日二回出勤制の全廢を要求したのは、勞働者として何等不穩當な行爲とは言へない。

其他歎願書に現はれた半期賞與の問題、住宅補助料の問題、解雇條件の問題、終夜電車全廢の問題、身元保證の條項問題、慰勞金の問題等にしても、玆に詳しく批判出來ないが、從業員として決して不當の要求と見ることは出來ないのである。

二、

第二に、今回の爭議を公共事業に起つた爭議として批判する。

交通機關、電燈、瓦斯等の事業に從事する勞働者がストライキを行へば、忽ち市民に迷惑を及ぼすことから、彼等のストライキは、他の事業のストライキよりも特に犯罪視せられ、非道なる壓迫を受け、また一般社會から非難を浴びることが普通である。然しこれは勞働階級の立場からすれば、全然意味をなさぬ事である。今日、勞働階級は生存權確立のために、同盟罷工をなす權利を有する。それは資本主義制度の下に於て、私營事業

たると官公營事業たると、公共事業たると然からざるとを問はない。若し勞働階級からストライキの權利を奪ふならば、勞働階級は經濟行動の範圍に於て、全然向上の道を阻止され、生存を脅威され、憐れむべき奴隷狀態に置かれるのである。勞働階級に同盟罷工權を認めることは、今日進步的社會政策論者の誰もが一致して認める處であるが、我國の支配階級は未だ其の迷妄から脫し得ない。就中、公共事業に從事する勞働者の同盟罷工に對しては、頭から之れを危險視し、抑壓し、一般市民にも其の旨を吹聽し、無知なる市民は之れに同じて罷業壓迫を援助する有樣である。公共事業の勞働者は、實に割の惡い立場にある。しかれども如何に公共事業に從事するとはいへ、彼等が人格者であり、國家有用の勞働者である以上、自已の生活條件に關して正當なる要求を主張し、若し容れざる場合にはストライキを行ふ十分なる權利を有する。若しも市當局者が、一般市民が公共事業に於けるストライキを好まないならば、日頃より從業員の待遇を改善し、不平の餘地を無からしめるがよい。公共事業に從事する勞働者なるが故に、之れを酷使し、過勞と健康障害と薄給とに彼等を泣かしめて可なりといふ理由は斷じてない。

抑々公共事業から擧がる收益は、主として從業員の待遇改善とか、電燈料瓦斯料電車賃の値下げとかの方面に向けらるべきである。今日の公共事業就中私營の公共事業の收益が斯くの如き方面に向けられて居ないことは明かである。また電車の開通に依る地價家賃の暴騰の如き、公共事業は間接に地主や家主に利益を與へて居る。斯くの如き不勞所得は、之を適當なる方法によつて徵收して、右に述べたる方面に向けて然るべきである。現在、有產階級は有らゆる機會を捉へて勞せずして私腹を肥やしつゝあるに拘らず、勞働階級は激勞と薄給に甘んじながら社會有用の勞働に從事し、しかして時たま極めて穩當な要求をすれば、過分な要求だとして斥けられ、已むを得ずストライキを行へば、非難と罵詈の裡に權力と飢餓によつて威壓し去られるのである。我々は今回の大阪市電の爭議を見るにつけても、一般社會が勞働階級の同盟罷工權、就中、公共事業勞働者の同盟罷工權の合理性に就き、十分なる理解あらんことを切望するものである。

三、

第三、市電罷工團は七月三日當局に會見して拒絕に近い挨拶を受け、更に四日に會見する約束をしたが、警察官の警戒嚴重を極め、三日に於て春日出車庫の幹部三名を檢束したがために、罷工團の感情が惡化し、遂に三日午後七時天王寺車庫を始

めとし午後九時築港車庫を最後とし、同盟罷工を行ふに至つたのである。之に對し市電當局は四日の會見を待たず、豫告なくして同盟罷工を行ふたことを暴擧だとし、罷工團を以て大阪市民の公敵なりと宣した。自分は、罷工團が四日の會見を待たずして罷業に出でたことに就いては、多少の遺憾を感ずるものであるが、併し、警官側の頑迷辛辣なる取締態度が、罷工團の心理を急變せしめたことにも、十分同情が出來るのである。警官が警官の立場よりして、相當の取締をなすは當然であらうが、由來、官憲の常軌を逸した無法な取締態度が、罷工者の心理を惡化し、延いては勞働爭議自體を惡化した例は枚擧に遑がない。公共事業のストライキと來ては、官憲の神經の尖り方も亦一段と強い譯であるが、今回の如く、市電當局と從業者との間に交涉の運ばれつゝある最中に、幹部を檢束するが如きは實に言語道斷の處置といふべきである。大阪市當局は從業員が四日の會見を待たずして罷工に出たことを「暴擧」だといふが、罷工團の心理を故意に惡化せしめた大阪府警察の態度は、更に「暴擧」ではないか。

自分は警察當局が現在の如く非常識な無理解な態度を持する以上、我國の產業界が不當に混亂し紛糾すべきことを斷言する。勞働組合を惡漢の集團の如く見、勞働爭議を犯罪行爲視する考へ方の根本的に改まざる限り、勞資間の紛議は、必要以上に果てしなく波瀾を生んで行くであらう。これにつけても自分は、政府が一日も早く勞働組合を公認し、勞働運動の健全なる發達を阻害する多くの法制を改廢し、警官の不當なる干涉を廢すべきことの緊要なるを痛感する。

四、

第四に、我々の看過出來ないことは、公共事業のストライキに學生其他の者が飛び出して來て罷工破りをすることである。かつて東京市電の罷業の際にも、早稻田の理工科の學生が就業を申し出て、勞働階級の非難を買つたことがあつたが、今回の大阪市電爭議には、市當局が高工高商の學生に依賴して罷工破りをさせて居る。學生に罷工破りを依賴した市當局の愚昧陋劣は勿論であるが、其の依賴に喜んで應じた大阪の學校當局にも許へすからざる責がある。學生達は、當世流行の社會奉仕でもするやうな調子で喜び勇んで電車を運轉したことであらう。勞働問題の何たるやを解しない時代思潮に無智な彼等は、支配階級の巧妙なる口車に乘せられて、非道非理なる勞働階級抑壓政策に利用されたのである。ひとり學生のみならず、青年團、在鄉軍人團、消防隊の如きもの

を、支配階級は常に階級政策のために利用しつゝある。

我々は彼等に教へねばならぬ。今日の社會の安寧秩序は×××××的安寧秩序であつて、大多數の無產階級の××なる負擔の上に築かれて居ることを。資本主義社會に起る幾多の階級的紛議は、現社會自らの持病であつて、斷じて無產階級が故意に起す波瀾ではないのである。かく考へる時、學生も靑年團も在鄕軍人も亦一般市民も、激務と薄給に苦しみながら大阪市の交通を司へて居る電車從業者の生存を脅威してまで、ブルジョア的安寧秩序を維持することに、疑を持つであらう。そしてブルジョア的安寧秩序を改造して、より公正なる安寧秩序を建設することに協力するであらう。

公益事業と同盟罷業

山川均

□

『……市電は他の郊外電車などとは聊か違ひ純公益の立場にある』。『……今回の擧に出でたことは、暴擧と評して差閊えない……』。（關大阪市長聲明書）

『……西部交通勞働の擧措を糺彈し、彼等社會の惡分子を此の時を期して一掃せんことを……』。（大阪市電爭議批判同盟會の宣言）

『……百五十萬市民の公益を無視したる暴擧にして一點同情すべき餘地なきのみならず、全然正義人道に背反したるものと認む』。（大阪府市部會議員協議會の宣言）

『暗默の裡に事を結び、突嗟の間に我が市民に挑戰したる彼等罷業員の暴擧に對し、吾等善良なる市民は之を公敵とす』。（市民大會の宣言）

『……彼等(勞働者)一流の我利的立場より一般市民の困惑をも顧慮せず俄然同盟罷業の妄擧に出で……警察としては秋毫も猶豫なく最も峻嚴なる處分をなし、以て同盟罷業を一日も速かに解決せねばならぬ……』。(阪本警察部長の聲明)

『ストライキは即ち天人共に怒る暴擧なり』。『大阪市民の公敵を葬れ』。(罷業反對運動の標語中より)

□

最近數ヶ年の間には、隨分數多くの勞働爭議が起つた。そして其度びごとに勞働者側では、傭主の頑強な抵抗に當面しなければならなかつたばかりでなく、當事者たる傭主以外の或る力と鬪ふことを餘儀なくされてゐる。一般公衆の謂ゆる輿論の壓力も、勞働者側に向つて加へられるのが常である。しかし今度の大阪市電の爭議のように、勞働者側が傭主、官憲、一般公衆の輿論といふ三つのものがしつくりと結合した力の逆襲によつて、重圍のうちに陷入つた例めしは稀れである。否な過去數年間の勞働運動の史上に、曾て類例がないと云つてよい。

大阪市電の爭議が、勞働者側に取つて、斯ような不利な形勢になつた第一の理由は、市電が公益事業であつて、その罷業は、市民の害に直接に影響を與へると云ふ事である。尤も今日までに謂ゆる『公益に關する事業』に爭議の起つた實例は幾つもあるが、今度の大阪市電の爭議のように、傭主と官憲とが一般公衆の輿論を背景として、これほどまでに思ふ存分、勞働者側と戰ひ得る形勢をもたらしたことはない。然るに特に今度の爭議に限つて、本來傭主と勞働者との間に起つた爭議が、いつのまにやら全然その性質を一變して、見事に市民と從業者とに敵對に移されてしまつたことには、相當の理由がなければならならぬ。これは直ぐ樣、何人の頭にも『巧妙にして組織的な陰謀』といふ黑い影を暗示する。しかしこゝには故らに此の問題には觸れないでおく。

□

毎日に受けてゐた便益、空氣や日光ほどに當り前のものとして受けてゐた便益、別に有難いとも思はぬほど、それほど普通のことゝして受けてゐる便益が、一朝ぱつたり停止したとする。誰しも不便を感ずるに相違ない。百五十萬の大阪市民が、之は市民の生活を脅やかすものだ、實に怪しからぬと思ふたのは無理もない。そこで昨日までは電車の車掌や運轉手が汗みず

くになつて働いてゐるのを見ても、それは衣食のために彼等が勝手にやつてゐる當り前のことゝして、別段『社會の公益』の名によつて彼等に感謝するの必要をも認めなかつた人までも、俄かに『社會の公益』を擁護するために蹶起するに至つたのは、輕薄を常とする普通の人情の上からみれば、如何にも尤も千萬なことであり、無理からぬことである。しかし吾々は、もつと冷靜に反省する必要がある。

近頃、小作爭議が頻發するにつけ、頑强な地主の中には、小作人から田地を引上げて、そのまゝ遊ばせてゐるものがある。その結果は云ふまでもなく、日本の米の產額を減少する。食料問題は國民的重大をもつた問題中の問題である。それは百五十萬の大阪市民ばかりでなく、六千萬の國民の生活の根底を脅やかすもので、これほど『公益』を無視した『暴擧』はない。大阪市民は曾て彼等の『擧措を糺彈し』吾々國民の爲めに『彼等社會の惡分子を一掃』して吳れたであらうか。

紡績業は日本の工業の中で、最も大きな工業である。そして其の生產物は、國民の生活に一日も缺かされぬ必需品中の必需品である。この紡績業者は、糸の値段を吊り上げておくために、同盟して操業短縮をやる。最近には、運賃吊り上げの目的で、船舶業者の間には謂ゆる運賃同盟が出來てゐる。運賃の吊り上げは、それだけ生活必需品の値段を高くして、國民の生活を脅やかすものである。是等の資本家が『暗默の裡に事を結び』、突差の間にせよ年が年中ちり〳〵にせよ、吾々國民の生活に挑戰してゐる暴擧に對し、善良な大阪市民は、是等の資本家を『公敵』と見做したであらうか。

尤も此點について、私は決して大阪の市民諸君を責めようとするものではない。國民の生活の基本たる土地が私人の私有物であり、農業が私人の收益を目的として行はれてゐる世の中では、そして國民の生活必需品の生產といふ公益が、收益を目的とする私人の企業に一任せられてゐる以上は、斯くの如きは寧ろ當然の結果であつて、現在の社會制度の下では、地主や企業家が『公益を無視した』この種の『暴擧』は、『全然、正義人道』に一致した行爲と認められてゐるのである。

しかしながら實際の上から『公益』に反するといふ點から云へばそれは勿論、五日や一週間、電車の運動が停止して、百五十萬の市民が徒步の不便を忍ばねばならぬことは、到底くらべものにならぬほど、それほど重大な脅威を國民の生活に加へてゐるものである。して見れば、電車の便益を奪はれた爲に吾々が『義憤』を發するのは、必ずそれが社會の公益に反するからではなくて、實は自分自身の眼前の利便に反するからであ

る。若し吾々が地主や資本家より多くの利潤を收得する爲めに、『彼等一流の我利的立物より』六千萬の國民の生活といふ最大の公益を無視した行動をしてゐることには眼を閉ぢて、眼前の不便に對してのみ公憤を愛するなら、吾々は公益の爲めよりも、私の便益と私の感情に動いてゐるものだと云ふ批評を免かれぬ。

□

今日世の中に行はれてゐる生產事業は、一つとして社會全體の『公益』に關係せぬものはない。この點に於ては、紡績事業と、製鐵事業と、瓦斯電流の供給と、運輸と交通事業との間には、根本的少しの差異もない。何んでも皆『公益』に關する事業である。そして『公益』に關する事業が私人の收益の目的に供せられてゐることが、即ち現の經濟制度の特徴なのである。そこで是等の『公益』に關する一切の事業が、私人の收益の目的に供せられてゐる限りは、資本家乃至は傭主側に行はれてゐることは、均しく被傭者たる勞働者側にも許れねばならぬ。從つて今日の傭者社側者との關係と、封建時代の主從關係と同一に考へてゐる人でない限りは、少くとも一般の營利事業の場合には、資本家側に商品を賣るか賣らぬかの自由を認めると同じやうに、勞働者の側にも、勞働力を賣るか賣らぬかの自由——即ち罷業の權利——を認めぬ者はないのである。

尤も生產者から商業といふ通路を經ないで、消費者が直接にその生產物なり便益なりを買ひ取る或る種の生產事業は、消費者と直接に關聯してゐる爲めに、特に公益事業と名づけられてゐる。瓦斯、電氣の供給、交通機關などがそれである。この種の『公益事業』といへども、それが公益に關すると云ふ點では、その他の一般の事業との間に根本的の相異のないことは前述の通りである。從つてこの種の事業が、私人の收益の目的に供せられ、そして收益の打算に基づいて勞働を雇傭することが傭主側に許されてゐる限りは、特に是等の事業に限つて、それが『公益』に關するといふ口實によつて、一般の營利事業の場合に勞働者に認められてゐる權利——罷業の權利——を認めぬ理由はない。のみならず此種の事業は、大抵みな獨占事業である。即ち競爭者の現はれる憂ひがないといふ點で、謂ゆる『公益事業』は特別に有利な立場を與へられてゐるものである。この特權的の事業に對して、勞働者の當然の權利を制限することによつて尙ほ其の上の特權を與へることは、決して公正なこととは云はれない。

□

『然しながら大坂市電の場合は異つてゐる』――斯ういふ人があるかも知れぬ。――『大坂市電は公益事業であるが、只の公益事業ではなくて、純公益事業である』と。現に關市長はそう云はれてゐるし、世の中には、關市長と同じ理解力の水準に立つ人も少なくないだらう。

なるほど大坂市電は私人の營利會社の經營ではなくて、大坂市と名づける自治體の經營である。この意味においては、慥かに『純公益事業』に相違ない。けれどもこの『純公益事業』は果して如何やうな原則の上に經營せられてゐるであらうか。今度の爭議に當つて、勞働者側の要求の不條理を立證するために大坂市の當局者が發表した數字は、何よりも明快に此の問題に答へてゐる。

電氣局の發表した十三年度の豫算を見ると、市電から揚る利益金は約七百五十萬圓であるが、其うち六百萬圓は公債の利子と償却に支出せられるものであつて、市の一般經濟に繰入れられるのは、僅かに十萬圓である。して見れば電車は市の所有であり、市の經營ではあるが、事實に於ては、公債の所有者――即ち資本家――のために、六百萬圓を儲け出すために運轉してゐるのである。そして三千の從業者は、毎日、自分の受ける賃銀に等しい金額、乃至はそれ以上の金額（給料及び材料は九百六十萬圓であるが、其内どれだけが給料であるかは示されて居らぬ）を資本家に引渡すために働いてゐるのである。この六百萬圓を懷に入れる資本家の資格が、株主であるか、公債所有者であるかは、實質の上には少しの相違もない。市電がいくら純公益事業であつても、或は純々公益事業であつても、資本家に引渡すべく六百萬圓の剩餘價値を産出する計算の上に經營せられてゐる以上は、それは公益原則の上に經營せられてゐるものではなくて、營利原則の上に經營せられてゐるものに外ならぬ。

□

とにかく、この種の謂ゆる『公益事業』の停止が、多くの人々に直接眼前の不便を與へることは事實である。これは此の種の事業の性質が特に『公益的』なからではなくて、事業の性質が獨占的だからである。獨占的の事業が停止することは、慥かに不便である。從つてこの種の事業については、出來得る限り罷業を避ける合理的な方法を講じておくことは、固より望ましいことである。けれどもそれ故に、此の方法を講ぜられてゐな

い大阪市電に起つた全責任をまで、勞働者側に負はしめるべき理由とはならぬ。

また或る人は、公益事業の場合には、市民が、相當の準備を整へることの出來るやう、一定の豫告期間の後に罷業を開始しなければならぬと云ふ人がある。今度の罷業には、一般市民に何等の用意もなかつたことは無論であるが、市當局者に充分の用意のあつた跡は明白である。之に反して組合側には、却つて罷業の用意が整ふてゐなかつたらしい。

これは固より望ましいことである。けれども同時にこれは、勞働組合が非常に有力な組織となり、倘ほその上に罷業の權利が完全に認られた場合にのみ初て望み得ることである。今日のやうに、組合に加入することが罪惡視され、復職の條件として組合脫退を强要するやうな野蠻な『檢擧』が平氣で行はれたり罷業勞働者が『社會の惡分子』として『一掃』される心配のあるやうな國柄では、斯ような望ましいことは、先づ近い將來に實現される望みはない。

また或る人は、罷業開始の前に、市民大會を開いて公衆の意見を徴しなかつたといふので、勞働者側を責めてゐる。この市民大會がよく警官によつて蹂躪されず、組合幹部が無事に會場から引揚げることが出來たほど、それほどに日本の勞働者が××の自由を享有してゐると信じてゐる人は、唯だお目出度いといふの外はない。これ等の人々に取つては、活きんが爲めに惡戰苦鬪をしてゐる勞働階級の運動は、到底別個の世界の插話である。

(七月九日)

獨乙シエーベル製藥會社製劑

神經衰弱



精力增進

フエロ・ヴイスチチン錠

■神經衰弱者の恐怖　心身の過勞、過度の勉强、生活難、無理な競爭和憂、煩や其他いろ〳〵な性的原因に伴ひて減的に精神や肉體を衰弱疲勞せしめてゐる人は病氣に對する非常な恐怖を感じなが一日〳〵と深くなつて行くそれは恐しい前途をみつめながら自滅の道へ急ぐものである。

■神經衰弱の光明　然るに從來この恐るべき神經衰弱に對して根本的治療を與ふる方法も藥品もでなかつた。今まで販賣されゐる藥物は對症的療法と云つて便秘に對して緩下劑興奮に對して鎭靜劑と云ふものを適當に合せて賣藥として廣告されてゐるものが多いそれが爲一時的に多少の効果があつ　もの慣性や中毒副作用の爲却て惡い結果を引起すことになる。これは多くの同患者がすでに試みられた苦い經驗である。

■世界製藥界の權威　こゝに世界製藥界の權威である獨逸ドレスデン市シエーベル製藥會社では大戰後獨逸國民の物質精神的に疲弊せる有樣を見神經衰弱者の增加は亡國の一大因なりとのもとに官民協力して根本的腦神經肉體に對する强壯劑の創製に努め苦心の結果本フエロ・ヴイスチチン錠が生れた。

■驚異的新强壯劑　ブレスラウ醫科大學教授ホイルステル博士其他知名の士は擧て本劑の優秀なる事を證明し世界的驚異新强壯劑として聲價を高めてをる。本劑、腦神經肉體の衰弱に對して消耗せし實質を補充するをもつてその効力顯にして永久的である殊に本劑の特長として胃腸病に對してもその効果多大にして在來の藥物にて最も効なき方へ特にお奬めする。本劑日本一手發賣元として弊商會は深き確信を以て之を提供する次第である。

三十日分（二〇〇錠入）徳用　金拾圓
八日分（五〇錠入）携帶用　金參圓

特約店　實業之日本社代理部（京橋區南紺屋町）
講談社代理部（本郷區駒込坂下町）

其他各地知名の藥店にあり品切の節は直接本社へ御注文を乞ふ

（說明書郵呈）
東京驛前丸ノ内ビルヂング三階
日本一手發賣元　阿部貿易商會
振替口座東京六六一二一番
電話高輪四五八九番

早稲田大學教授 ドクトル・オブ・フィロソフィ 高橋清吾編述

歐洲社會制度發達史

菊版四五〇頁 總布函入美裝 定價參圓參拾錢 郵税拾貳錢

最新刊

社會生活は闘爭であるか、または、調和、協力であるかといふことは過去四千年來未だ解決のつかぬ文明の大難問である。しかも現代の社會生活を論ずる者にして、過去に於ける社會制度の變遷と原因を知らないで何を云ひ得よう。本書はこの解決に對して適切なる科學的資料を提供せんがために、太古草昧の時代より現代に至るまでの社會制度の變遷を詳述し、其因果關係を明かにして文明の進路に對して光明を與へてゐる。

東京牛込 振替東京一一二三 名古屋二三四五 大阪六八九〇〇

早稲田大學出版部

(賣捌) 東京堂・至誠堂・北隆館・東海堂・盛文館・星野

文學博士 桑田芳藏著

ヴントの民族心理學

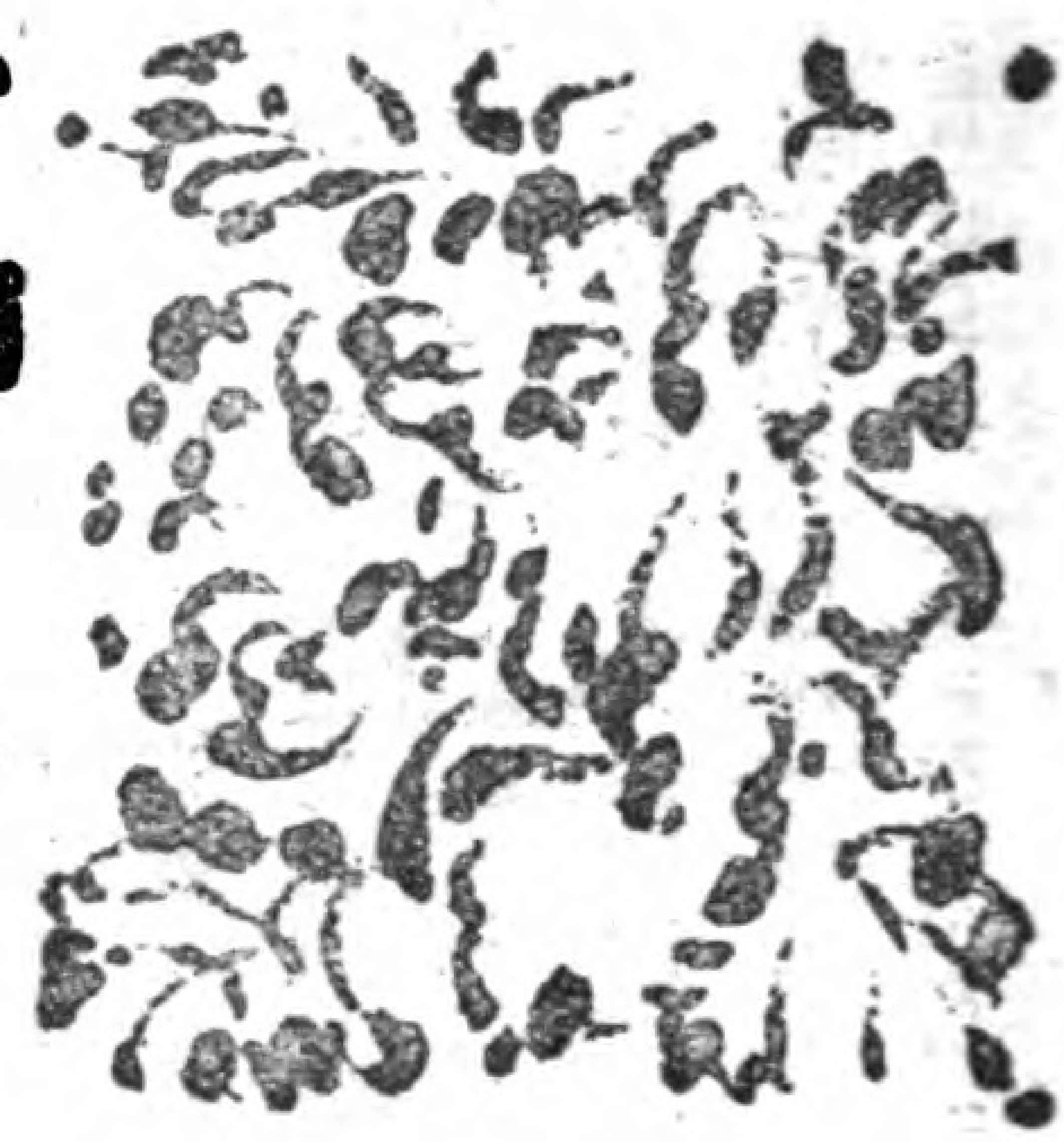
定價參圓五十錢
送料廿一錢

心理學の使命は、個人心理や、實驗心理に限定さるるものでなく、夫は實に社會及文化の心理解剖が尤も重要とさるべきだ。實驗心理の鼻祖にして又、其大成者たるヴントは遂に民族心理に到達したが、而も彼の民族心理學は、坊間の非科學的のものでなく、科學的心理學の體系に於て尤も重要なる一部門をなして居る。これ彼の該博無比なる哲學的心理學的智識の最後の總束であり、又結晶でもある。

著者は、ヴントに親しく師事した新鋭の心理學者である。彼が浩澣なる十數卷は讀むに困難である、此一書を通讀して彼の薀奥なる文化や社會の心理の科學的說明を聞け。

六版發賣

東京 改造社 振替東京八四〇二



戀の藥と愛の妖術

武田孝三郎

一

戀を得て、人世の樂園を現實化せしむる事が出來たと反對に得られぬ戀は、何ぼう人の心を惱ました事か。得られぬ戀は、詩とも繪とも歌ともなつて惱める心から滲み出た。歌にも繪にもならぬ戀心は、空虛なる高き望みに形を變へたり救ふ事の出來ない深い淵に沈むで了つたりした。然し又一方得られぬ戀を望むのが戀の習慣であるとすれば、人の力で求め得ぬ戀を或神秘なる力に賴つて得やうと努めるに至つたのは別に不思議でもない。玆に戀の藥も愛の妖術も生れたのである。限り無き生を樂しまうと蓬萊の島に不老不死の藥を探した人や、小便や火蛇の血に黃金を求めた人に較べて戀の藥愛の妖術の言葉は如何に浪漫的な響きを與へる事だらう。

戀の藥の存在は既にずつと古代の人々の間に信ぜられて居て是れを戀の相手に與へれば知らず知らずの裡に自分に心を靡かせる作用があると思はれて居た。希臘古代の詩人ホーマーも悲しみを忘れて明るい氣持を起させると云ふ飲料ネペンテス。Νηπενθες に就て說明して居る，即ちヘレナはメネラウスの家に於て、テレマハに其の飲料を與へ彼の悲しみを忘れさせやうとした，ヘレナは飲料を製するに用ひた草を所謂「肥沃なる土地が良き又は惡しき合劑の原料たる澤山の藥劑を藏せる」埃及のタウスの妻ポリダムナより贈られたとなつて居る。ホーマーの此のネペンテスなる飲料が果して如何なる成分から成つて居るか、明確には解らぬが何れにもせよリンネに依り N. pehthas destillatoria と命名された錫蘭產猪籠草とは何等の關係も無い事丈けは確かである。或る人はネペンテスは、ナイル河沿岸

の砂漠中に多く生え埃及の僧侶がチフオンと稱へる神の意を鎭めるために用ひた埃及産の非沃斯即ち Hyoscyamus datura 又は Hyoscyamus allus の如きから作られたものであらうと云ひミクエルのホーマーの詩に現はれたる花の考證に從へば、ネペンテスは罌粟から採つたものだらうと云ふ事になつて居る。罌粟の鎭靜痲醉作用に就ては旣にヒポクラテス以前に知られて居たのであるからネペンテスもその性質を利用したのかも知れぬ。

もう好い加減古い事であるが日本の或る宗派の寺で、參詣の信者に罌粟の少量を入れた金平糖を茶に添へて出し、痲醉作用に依て無知覺狀態にある中、あらたかなる種々の御祈禱を試みたと云ふ事が人の噂に上つた事があつた。無智なる信者は說教を聽いて居る中に恍惚と快感を覺えたり、頭痛や齒痛が忽ち治つたり、時には子を授けて貰ひに祈願しに行つた女が姙娠したりするので、當時その宗派は大變に榮えたさうである。玆に罌粟と云ふも罌粟から採取した阿片製劑の意であらう事は云ふまでもあるまい。

他の人は又ネペンテスは印度大痲を煎じて作つたものだらうと說を立てて居る。印度大痲即ち Connabis sativa Linn, Varietas Indica. Cannabis indica Lamarck に人を醉はせる作用のある事は古くから知られて居て、歷史の父と云はれたヘロドットはスキチア人の印度大痲を用ひる習慣に就て報告して居るが、彼等は三本の柱を互に倚り掛らせて立て全體に屋根を張り嚴重に密閉する事が出來るやうにし、何の事はない現今の天幕見度いなものを造り、内部に備へたる桶に燒いたる石を投げ込み印度大痲の種子を燒け石の上に蒔く時は、煙を發し一種の蒸氣が充滿して希臘の蒸風呂にも勝つたよい蒸風呂を取る事が出來、スキチア人はその快感を泣き叫むで樂しむださうである。

現在でも亞細亞や亞弗利加地方に於けるハシツシユ・クルスチエルス又はモラクの如き痲醉劑は、印度大痲草の葉、花、果實等より成るグアッア又はグンヤの如きものより得るのである。現行日本藥局方にも印度大痲草、印度大痲丁幾、印度大痲越幾斯が收載されて居るが「印度大痲草は印度北部に於て果實稔熟の初期に本植物の雌草の枝梢或は其枝梢より拔萃腺毛性葉及稚果のみを採集し乾燥せるものなり、本品の分葉は狹鈹鍼形をなし粗き鋸齒を有し或は破傷し或は落花せる穗本と相粘著して團塊をなす、本品を顯微鏡下に檢すれば夥しき毛茸の外囊石及油腺を認め又葉肉組織中には蓚酸鹽の簇晶を包有せる細胞を見る。本品は臭氣特異峻烈痲醉性にして味顯著ならず」云

云と記載されて居る。

未開人種間に於けるハシッシュ等は、文明社會に於ける酒精性飲料の役目を務めるもので何百萬人とも知れぬ人々がその享樂に浸つてゐるのである、勿論ハシッシュの如きは酒精等よりずつと危險なもので、少量に於ては憂を散じ精神爽快ならしむるけれども、過量に用ひる時は精神錯亂又は強直痙攣の症狀を起す毒性がある　斯うした性質から亞細亞人は、快樂を増すもの性欲を刺戟するもの、親密の楔となるもの、笑を催すもの、をハシッシュと稱するに至つたが馬來邊の僧侶が娑婆の苦難を免れて極樂に入る可と淨化するために用ひたバング又はボンジの類も亦印度大麻製劑の範圍を出ないのである。

以上ネペンテス其の他のものに依て、人の心持を變らせる事が出來るのを知つた人々が、個人的心理的愛情の結晶である戀をも類似の藥に依て得る事が出來ると考へたのは自然である。古代希臘傳說の中に既にさうした戀の藥に關する信仰を見出す事が出來るが、オヂツセウスを迷はさうとした魔女キルツエも亦戀の藥を擬人化したものだらうと云はれて居る。正史の傳ふる所に依ればずつと以前から希臘人間にあつて戀の藥を作つたり賣つたりする事は、特別の生活基礎を成して居たに相違ない。それが段々普及して害する所も大きかつたので當時希臘の立法者リクルグ、ソロンの二人は、戀の藥を作る者はスパルタ又はアテネの都より放逐に處すると云ふ法律を定めたとセネカは記述して居る。是等の法律に依つて見ると、その頃は外國から入り込むだ魔術を使ふ女達が希臘に於て特別の位置を占めて居た事が解る。主に職人や商人が住むで居たアテネの製陶區ケラマイコスにフリジアやテッサリアの卑しい女達が惡い飲料や何かで毒を流して居た他に、戀の藥まで備へて高價に賣りつけて居たと云ふが是等戀の藥は主として痲醉性物質から成つて居たものである

二

然し古代に於て最も流行ッ兒となつた戀の藥は何と云つても地中海沿岸殊に希臘に產した曼陀羅 Datura Stramonium Linn, Datura Tatula Linn （或る書には Atropa mandra ora, Mandragora officinalis, Mandragora Vernalis, Mandragora Autumnalis 等の名が掲げてある）である。その內在する「神秘なる魔の如き」力に依て、既に數千年の昔より知られて居てケルツエの魔酒に對してヘルメスがオヂツセウスに與へたと云ふ草もホーマーが曼陀羅の事を書いたものであらうと思はれる。即ちその草の記述に曰く「根元は黑くして花は乳の

如く、神々はモリヒと名付け玉へり、之を掘り出す事人間には難けれど、萬能の神には易き事なり」云々と。

色黒くして海膽の如き形をした曼陀羅の根は、時に下部二股に裂け毛髪狀を成せる纖維を以て被はれて居る事があるので、人の形に一寸似て居るためピタゴラスは *ἀνθρωπόμορφη.* 即ち「人に似たる形」と名付けコルメルラは Planta semihominis「半人植物」と命名した。維納也の宮中圖書館にある有名なヂオスコリデスの手記の中にも曼陀羅に關する記載があるがプリニウスは「液汁を過剩に服する時は死をも招來す。強弱を計りて適度に服する時は快き眠りを催す。正しき服用量は一キヤストなり、蛇に對し或は外科的手術の前に用ゆれど大低は臭氣を嗅ぎしのみにて眠る」と云つて居る。一キヤトスと云へば五十二リツトル半餘の容積を有する古代希臘の桝メヂムヌスの一千百五十二分の一の容量である。外科的手術の前に痲醉劑を用ひて疼痛を感じさせまいとする事は、此の頃から行はれて居たものと見える。

又フロンチヌスに從へば、カルタゴ人が亞弗利加の叛徒鎭壓のために送つたマルハベルは、曼陀羅の痲醉作用を利用して敵を征服したと云ふ事である。その方法は多量の酒を曼陀羅と混じ、故意に退却して此の毒酒を敵手に委ねるのである。未開の蠻人は是れを貪り飲み深い眠りに落ちて了ふので、容易に捕虜になつたり殺ろされたりして了つたのである。今次の歐洲大戰に於て獨逸軍隊が退却に際して、井戸や飲料水の水源地に鑛物性毒物を投入したと云ふ事であるがマルハベルの故智を習つたのかも知れぬ。

曼陀羅からは現在瞳孔散大の効ある眼科の貴重藥アトロピンを製する丈けあつて、非常に強いものであるからそれに就て古來種々のエピソードのあるのは當然で、傳説のある所又重要なる發見の導火線ともなつて居るのである。ヂオスコリデスプリニウス及び後代の植物學者までが、植物を男女兩性の二種に分別して居るが、勿論現在の植物學から見れば多くは種々の異種を指したものなのであらう。ヂオスコリデス及びプリニウスは、所謂男性の曼陀羅をモリオン・アルゼン又はヒツポフロモンと名付け、女性のものをトリダチアスと命名して居るが、一千四百八十六年にアウグスブルグに於てシエンスペルガーに依て印刷された Hortus sanitatis なる藥用植物に關する古書の中に是等兩種の圖がある。玆に揭げたのがその模寫で右が女性の曼陀羅左が男性の曼陀羅である。

是れに依つても見らるゝ如く、曼陀羅の自然の形へ持つて行つて畫家の空想通り隨分出鱈目の根を畫いたりしてあるのであ



第一圖（右）女性の曼陀羅



第一圖（左）男性の曼陀羅

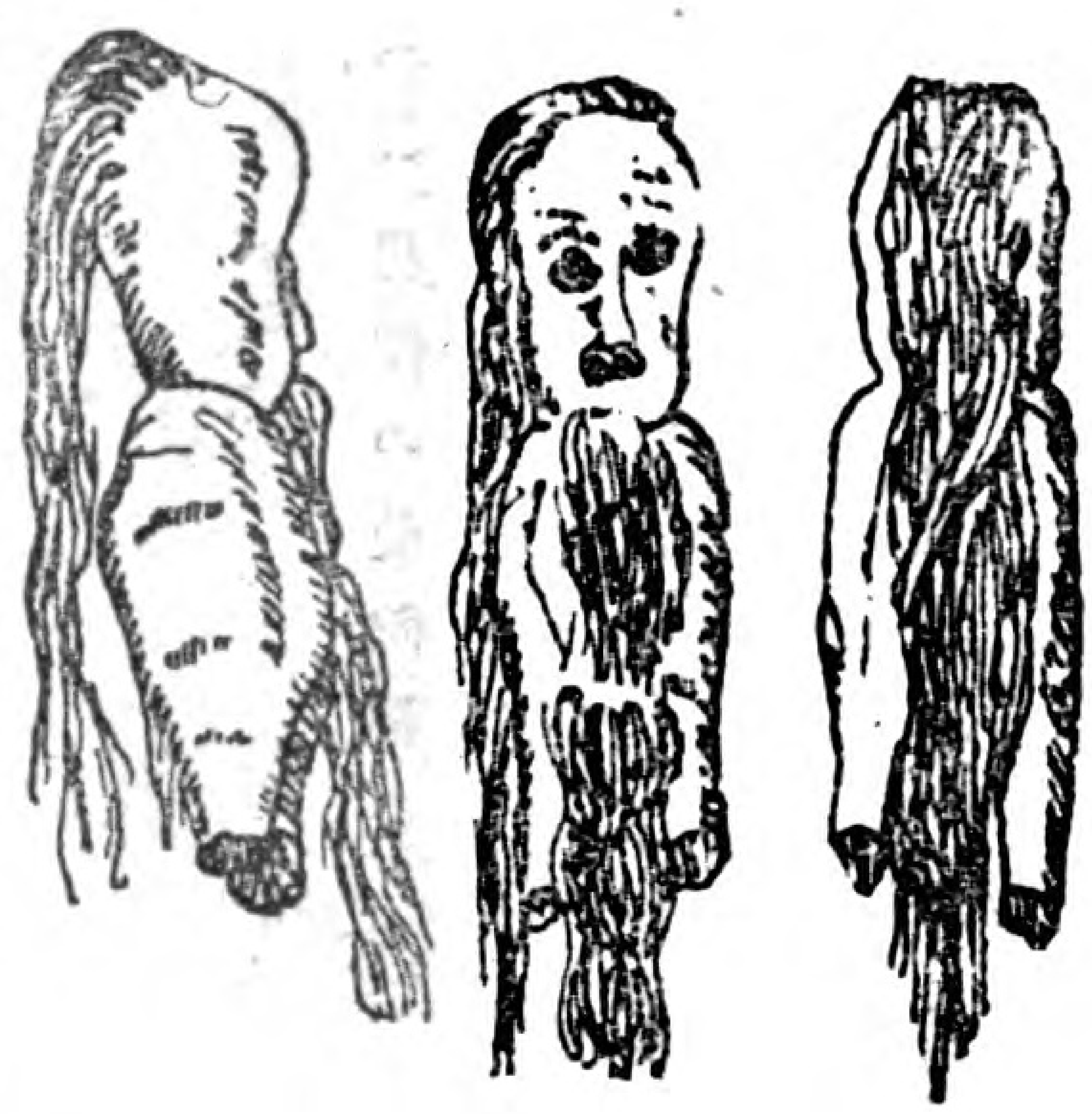
る。

舊約全書創世記第三十章にヤコブの妻レアが、その子ルーベの小麥の收穫時に野より持ち來れるヅダイムを以て、妹ラヘルとヤコブとの仲を割き再び夫の愛を得てその子イサシヤルを擧げる事が出來た、とあるがヅダイムは即ち曼陀羅の事であると云はれて居る。

以上の他種々の傳説秘史に依て曼陀羅は戀の藥として非常なる聲價を得、殊に獨逸に於ては第十六世紀の宗教改革期以前長い間幾多の人々に依て廣く用ひられて居た。

テリアカ製劑を賣る商人や、野師の手に依て販賣され供給されて居たが、彼等は曼陀羅の根を男や女の形に見せるために種々な加工をした。然し大概の場合野師達は眞個の曼陀羅を以てするにブリオニヤの根を以て代用し、人の形を刻み頭部と覺しき所に大麥、黍粒の如きを詰め込み、濕地に埋め暫らくして取り出す時は、穀粒より發せる纖維が毛髮らしく見えると云ふ寸法なのである。斯くして得たる奇怪なる形をしたものを、先づ熱砂の中で乾かし曼陀羅人形 Alraune とか福々小僧 Glückmä-[illegible] とか一寸法師 [illegible]nz lmännchen とか首縊り小法師 の[illegible]とか種々の名をつけ一種の神やお守りに高 値段で賣りつけたものなのである。茲に揭げるのはその曼陀羅人

形を三方から見たもので、一千五百七十五年カイスラーの著 Atnquitates selectae septentri nales et celticae に依たものである。



第二圖　曼陀羅人形（同一物を三方より見たる圖）

曼陀羅の獨逸語 Alraun 又は Alrune は All 即ち ganz なる接頭語と Rune なる語より成つて居るが、後者はアングロサクソン語の runian 古代低獨逸語の rūnon 古代高獨逸語の rūnen 中央高獨逸語の rūnen を經て、發達した囁くの意味の現代高獨逸語 raunen （一方同意味を有する英語 round を派出したが──）や、その源を同うするもので秘密の意味を有するゴート語 rūna より轉じた耳語の意を有する中央高獨乙語 rūne と發達を共にし、一方ルーン字 rune の語を派生したが──既に古代高獨逸語の中に Alrūna の形を見、中央高獨逸語 Alrūne の形を見るのでも曼陀羅の基原の如何に古いものかが解るであらう。

三

Alrune の語は昔こそ廣く用ひられたが、現在ではあまり知られて居らないけれど、それでも現在獨逸文壇で變態性欲家作家として特殊の位置を占め吸血蝙蝠 der Vampir 等に依つて名を知られてゐる、ハンス、ハインツ、エヴエルスの如き一千九百十三年此の語を用ひて一作をなして居る。曼陀羅人形は、その語の示せる如く常に秘密に藏まつて置かねばならなかつたので、食事の時は一々別に御膳を供へ、美しい着物を着せて飾り、土曜日毎に葡萄酒を以て浴みさせたものなのである。そして人々は彼のジーガフレードの隱れ簑の話の如く眼に見えぬやうに身を隱し、持主の戀せる人の心を戀の魔術で捉へて來たり、全ての疫病を治し、不姙症の女に子供を授けたりするものだと信じて語り傳へた。即ち痲醉性成分に依て內用してゐたものが段々誤り傳へられて、唯のお守りとして飾つて置くに過ぎなくなつて了つたのである殊に西北獨逸では殊に此の風が旺んで或

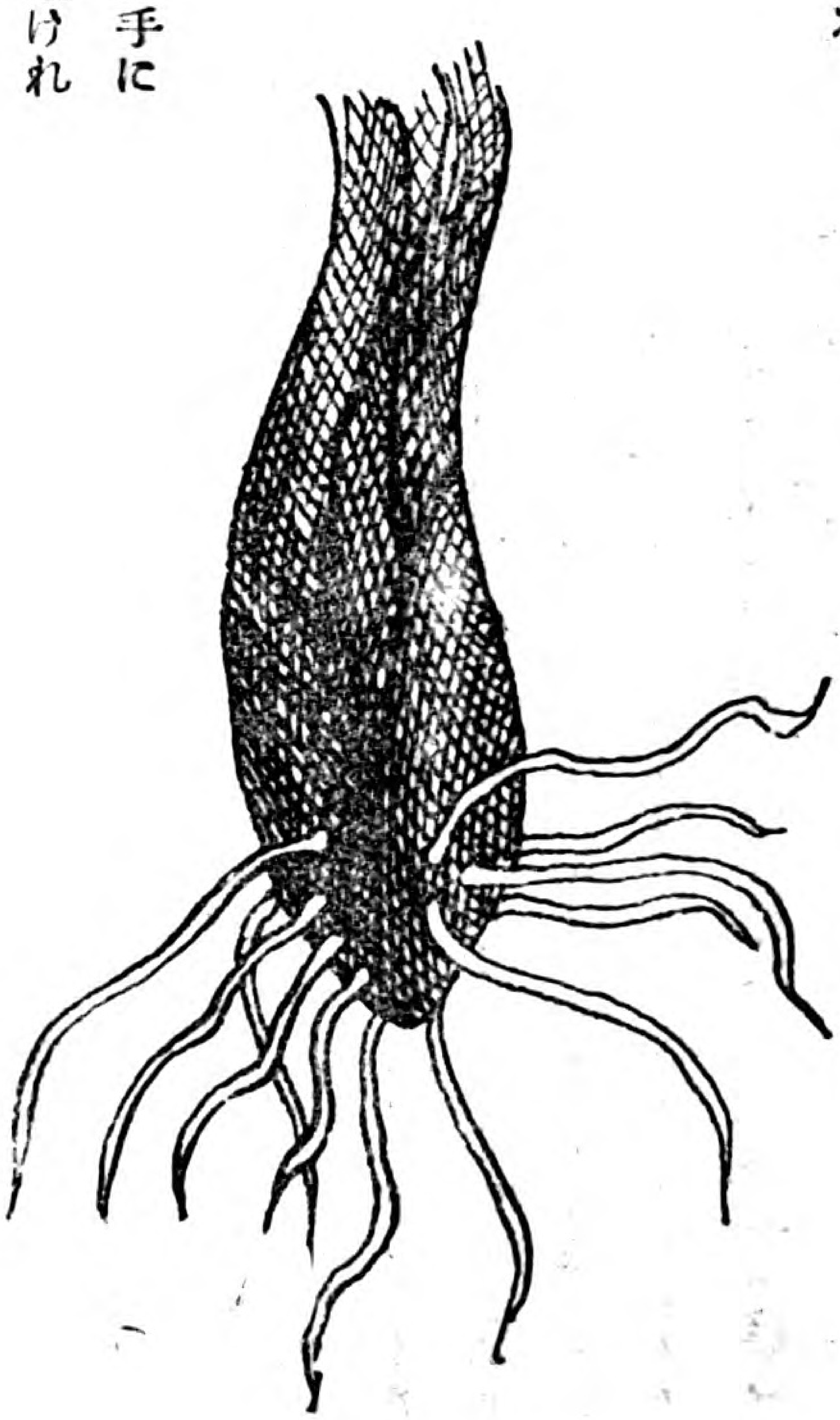
る人々は曼陀羅人形が、植物から出來て居る事等全く知らず、竈の火の赤き色を好み、鳥や犬に形を變へて幸福を齎すと云ふコボルドと同じ位にしか考へないやうになつたのである。

ニユルンベルヒのゲルマニア博物館に、此の曼陀羅人形の古代から傳はつたものが内部に金箔を張り前面に硝子を張つた小さな家の中に陳列してあるが、玆に掲げたのが其の圖である。



第三圖　ゲルマニア博物館藏の曼陀羅人形

鼻の大きな角のある變挺な怪物であるが、何れは野師の手に依つて作られたものらしく、よく觀察すると曼陀羅でもなければブリオニアの根でも無い。網を被つたやうなその下部は、Allium Victorialis の根だと云ふ事か解る、Allium Victorialis は獨逸の山地に生ずる狼毒草に似た植物で、獨逸人は Allermannsharnisch と呼むで居るが、乾燥せる圓錐形の球莖は網の如き苞を被つて居て、藥用には供せられず、彼のトロイ戰の勇者アキレスの如く不死身になるためや、惡魔を拂ふための呪に用ひられたのである。それか誤り傳へられ曼陀羅と混同されたものなのであらう。次に Allium Victorialis の根の圖も掲げて置いたから依て比較され度い。



第四圖　アリウム、ヴイクトリアリス

西洋の曼陀羅に對應するものが、東洋の人參である。萬能藥か戀の藥としての人參か、夢のやうな東洋の昔語りにどの位色彩を添へたか知れぬ。西遊記に孫悟空が、或る長者の後庭に、赤兒の生る樹を見つけて、柿の好きな猿公の性とて捥取つて食

べて見た所が、頰も落ちる程の味がしたか、それは一つ喰へば萬年の壽命を得ると云ふ不老長壽の果實であつたと見えて居る。是れも人參の効を書いたものに過ぎぬ。江戸時代の世話物によくある、落魄れた浪人者の娘が辛い勤めに身を賣つたと云ふ話も、父の病氣を治さうため竹庵の奨めに依て、何十兩の人參を買はうとしたための悲劇である。

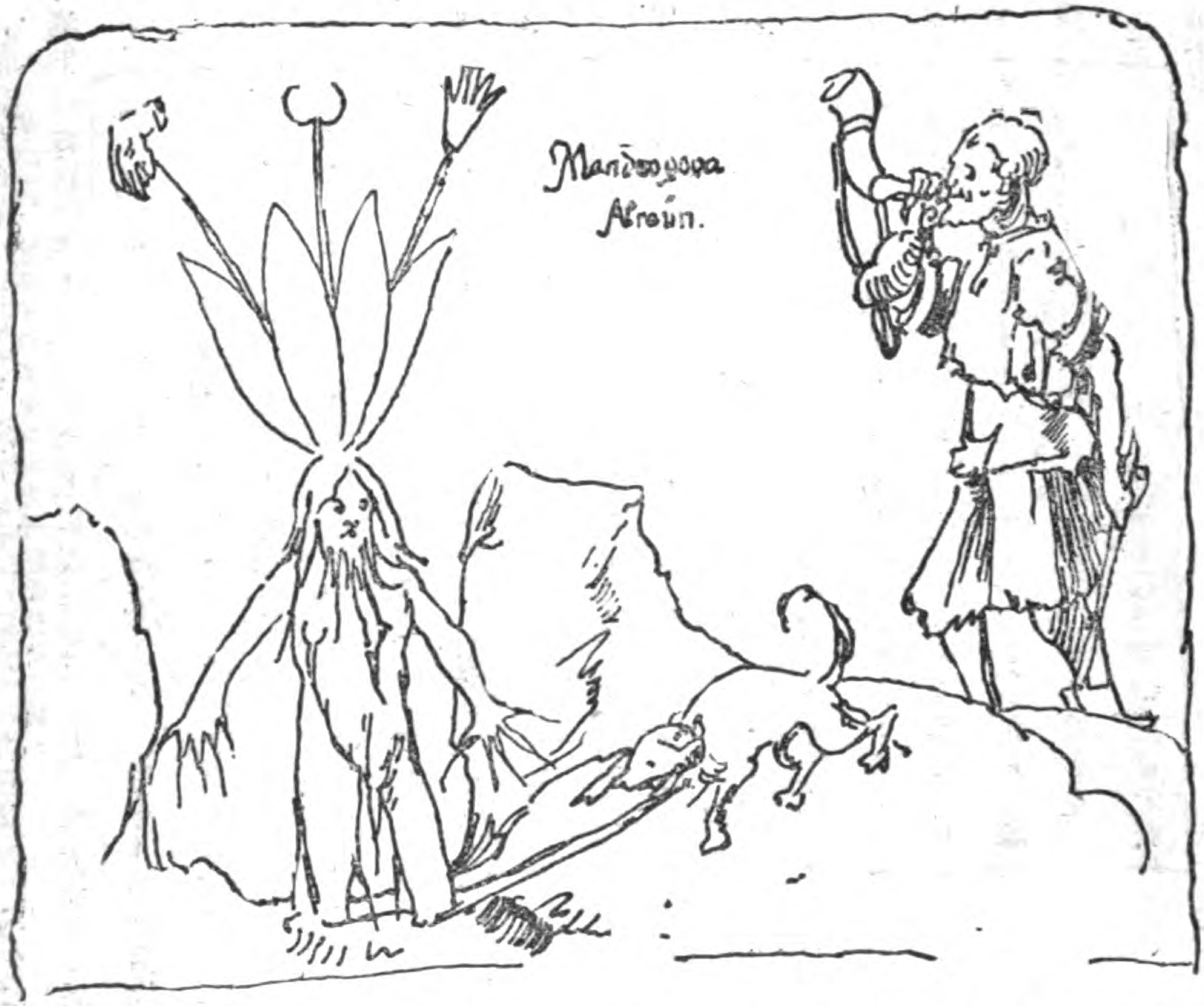
支那では古代から是れを提げて居る時は、總ての邪氣惡魔を拂ひ是れを服する時は、總ての毒を消し病氣を治し又性慾を旺盛にし、及ばぬ戀を叶へ不老不死の効ありとして、とても貴重な藥だつたのである。從つて價は高くその人の形に似て居れば居る程貴くて一千八百六十九年のプラキシンの記述に依れば、一本の人參に二千五百圓の大金を拂ふ者があつたと云ふし、一千六百八十四年のルムプの記述に依れば二十瓦の人參に十五圓を拂ふのを見たと云ふ事である。然し贋物が多くて米國人參が未だに澤山輸入される程である。その米國人參に、ゼネガの根かセルペンタリアの根が混じて居るのであるから、眞の人參を得ると云ふ事はなかなか難かしい事だつたのである。

然し現在では Panax Ginseng と横文字の名前を付けられ、植物學的にはしかじかと分類され、近藤藥學博士に依て藥學的成分を酒井醫學博士に依て醫學的効用を檢明され、近頃は又朝鮮總督府證明とか何とか銘を打つて越幾斯劑を金五十錢の賣藥にまでされて了つたので、人參を買ふために身を賣るやうな事もないが、ために人參のファンタスチックな有難味は大分失せて來た。昔にトラヂショナリストならずとするも、科學の冷い光りに照らされた人參の効價と、太古漠々數千年幾多の傳說を生むだ人參の夢とは全く別なものにして取つて置き度い氣がするであらう。

四

曼陀羅に値打をつけて、高く賣らうと思つて是れを賣る野師か商人達は、曼陀羅は「絞架臺の下に無實の罪に依て絞罪に處せられた人の小便から生える」ものであるとか、「絞罪に處せられた若い未婚の男の精液から發生したものが貴重」である等と愚なる人々に法螺を吹いたものである。故に第十六世紀の頃ライデンに於て醫科の教授をして居たレムベルト・ドドネウスは、彼の有名なる本草書に於て曼陀羅に「Pisdieb」なる和蘭陀名を與へた。蓋し「小便泥棒」の意味である。是れから前記の「首縊り小法師」(Galgenmännlein) の名も出たのである。

曼陀羅を地より掘出す事は、非常に危險なる仕事と思はれて居て、プリニウスの如きも是れを掘出すには「草の周圍に三回



第五圖　ゲルマニア博物館藏曼陀羅採集の圖

圖を描き、風上に立ちて毒氣を避け、陽落つる方に向ひてす可し」と云つて居る　中世紀に至つて市場や寺院開發に飛び出して、曼陀羅を賣つた諸國流浪の野師達は、曼陀羅は是れを掘り出す時非常に恐ろしい呼び聲を立て、誰でも其の呼び聲を聞いた者は、恐ろしさに忽ち死むで了はねばならぬ故、採集者は豫め注意して耳に蜜臘を詰め、音の聞えぬやうにし、黒い犬を連れて行き一本の繩を首へ結へつけて引張り出させねばならぬと、まことしやかに述べたてたのである　此の傳説を繪にしたものが、ゲルマニア博物館にあるが第十六世紀のもので至つて粗末な繪で玆に揭げたのがそれである

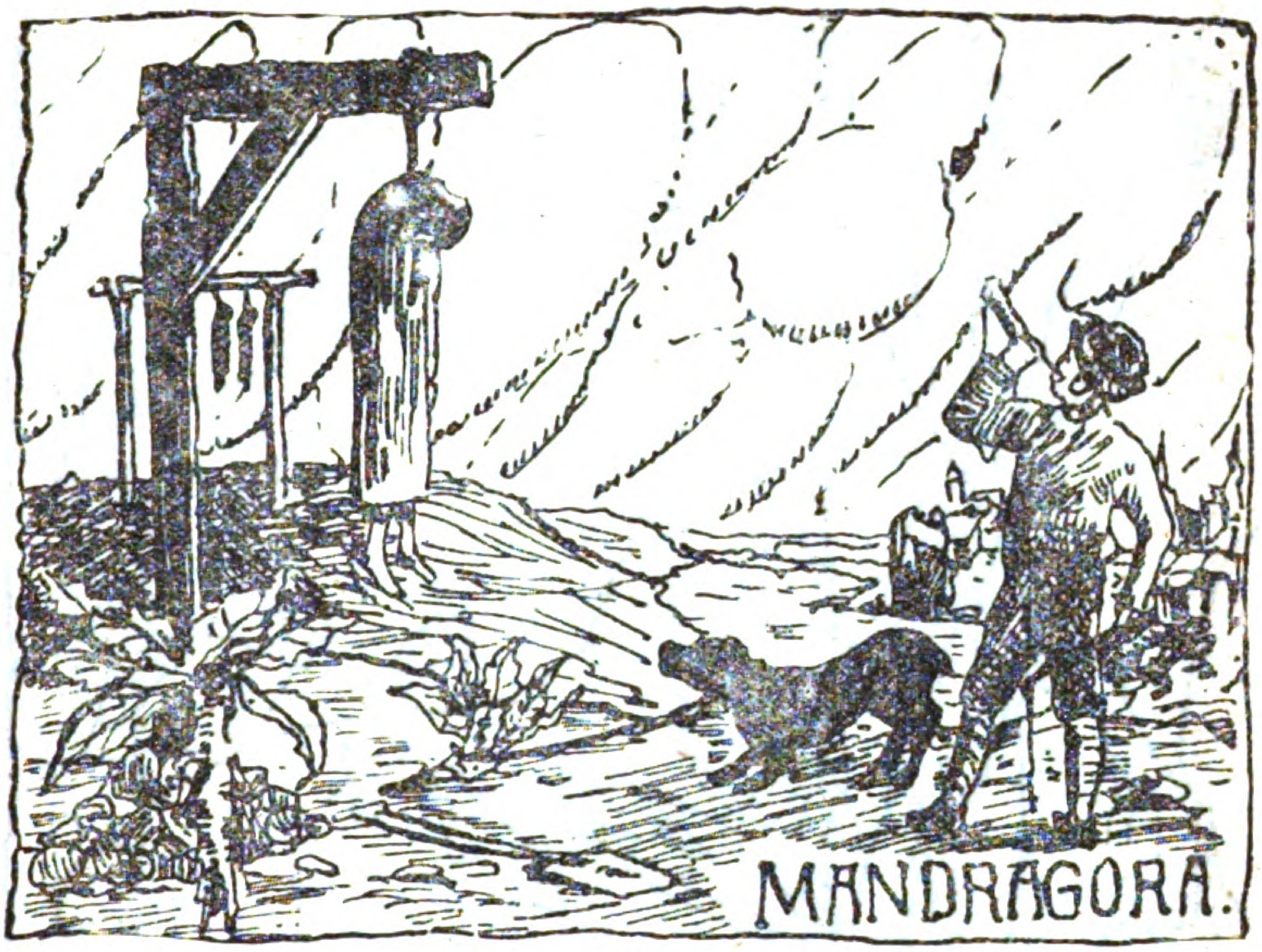
第五圖に見らるゝ通り、採集者は仰々しい用意の他に更に角笛を吹いて居る。是れは死ぬ程恐ろしき叫び聲を負して了ふために掘り出す時吹き立てるのださうである

一千九百年にマリイ・ホイマンと云ふ巾幗畫家がもつと要約的に此の傳説を圖解して居るが、その模寫が第六圖である

曼陀羅を掘るのに黒犬を使ふと云ふ傳説は、次のゲーテの言葉にも見えて居る

„Der eine faselt von Alraunen,
Der Andere von dem schwarzen Hund."

「曼陀羅の事を語るものあれば



第六圖　マリイホイマン女史曼陀羅採取の圖

黒犬の事を談すもあり。」

曼陀羅の信仰者は如何してよいか解らぬやうな生活問題に打突つたり、困つた事に出遇つたりすると、曼陀羅を小箱から出してお伺ひを立て適當な豫言をして貰つたりした

伯林等ではもう見られないが、今でも獨逸の地方の町へ行くと歳の市やお祭りに野師が「デカルトの潜水人形」を持ち出して居るのを見る事がある。「デカルトの潜水人形」は、kartesianiches Teufel, cartesian devil, とか bottle imp 等と種々の名があり、日本へも「沈み人形」とか何とか云ふ名前で子供の玩具に紹介された事と思ふが、口に薄ゴムを張り、水を入れた長い壜に中空硝子製の小さな人形が這入つて居て、ゴムを押すと氣壓の關係で浮んだり沈んだりするのである。田舍娘はその沈んだ形に託して、あわれな戀の運命を占つて貰つたり、村の若者は、希望に輝く身の行末を豫言して貰つたりするのであるが、昔の曼陀羅人形は即ち此の先祖の役を務めて居たわけなのである。

以上の他まだ希臘では、戀の藥としてテッサリアの草カタナンシエを用ひたが如何なる植物であつたか知る由も無い。現在 Catananshe coerulea と云ふ植物があるがヂオスコリデスの所謂 Datisca cannabina であつて、古のカタナンシエトは何

の關係も無い、尤もプリニウスがカタナンシエなる植物に就て簡單に「是れが戀の藥に用ひられるに至りしは、單に萎凋せる時死せる大鷹の爪の如く縮まるがために過ぎず」と說明して居る所から考へて、カタナンシエは今日の Ornithopus compressus 又は Astragalus pugniformis であらうと主張する人もある。ケモス蓋し今日で云ふ Plantago cretica なる植物もカタナンシエと同様の効能があるとされて居た、

五

種々な藥に依て思ふやうな結果が得られず、不滿足を感じた人々は、次に神秘なる妖術の力を借り奇怪なる呪文を唱へ憧憬を遂しやうとした。紀元前三世紀の頃、シラクサに住むで居たテオクリトはその「魔女」と題する陰欝なるモノドラマの中に於て、さうした妖術に就て書いて居るが、それに依るとシラクサの激しき戀の女シマイクは、戀人デルフイスに捨てられ、侍女テスチリスと共に、夜分海と町との岐れ路に來て魔の杯を美き羊毛を以て飾り「溫和に笑める」セレネと「怖ろしき」ヘカテを守護神として呼び寄せ、種々の供物の傍で眞鍮製の獨樂を廻し奇しき呪文を唱へて、戀の妖術を行つたと云ふ事である。

紀元第一世紀の頃、アテネに住むで居た諷刺作家ルチアンは、メリツタとバクチスの對話の中に於て、想ふ人の身につけたるもの、例之上靴の如きを硫黃を以て燻し、鹽を火中に投じ、獨樂を廻し、早口に呪文を唱へて戀を引き寄せると云ふシリアの魔法使に就て記述して居る。古代埃及人が同じく戀の藥や、愛の妖術を用ひたと云ふ事は古い紙の卷物に書いてある種々の呪文に依て、知る事が出來るが埃及の文化並に風俗史研究の權威ゲオルク、エベルスの著「ウアルダ」に老いたる巫女ヘクトの殿館へ案内人パーケルを連れて密に戀の藥を探りに行くの條がある。

「巫女の傍には木にて造れる丈高き腕木の間を廻る一つの車輪ありぬ。小さき鐘もて結びたるオホアリスヒと呼べる鳥ありて是れに止まり彼方此方の車軸を飛び交ひたれば車輪は絕えず動きぬ。

眞黑くして大なる牡猫亦彼女の膝下に蹲踞りて眼を剔り拔きたる鳥と其の頭を嗅ぎ居たり、パーケルの宿に近附く程に巫女の叫ぶを聞きぬ。

――『湯は煮えたかや』――『では猿の眼と紅き[illegible]の羽毛を黑く描ける亞麻の布を入れろよ』――『もう心を結びつけたぞよ、三つは男、四つは女、七つは離れぬぞよ』――」云々

紀元第一世紀の初めチベリウス皇帝の頃、埃及に住むで居に

文法學者アピオンは、アナカムプセロス（Sedum anacampseros）の草に依て失ひたる戀を取り戻す事が出來ると主張して居る。

希臘人は心理的愛情を起さしめる假空なるファンタスチックな藥品や、肉慾的情緒を起すための痲醉性藥品の他に、情緒を刺戟し更新するために種々の刺戟劑を用ひた。殊に男子に於ては尿道を刺戟する性あるカンタリジン含有の藥品を用ひた。カンタリジン含有の藥品と云へば、大名のお家騷動などによく顏を出した斑猫の類で非常に劇毒なものである。彼の伊太利亞丁幾「Tinctura Italiana」であるとか、有名なる Diavolini や Pastilli di Grante 等の成分を成すも是れである。然し使用の結果は豫期の效績を收められず、利尿困難や、血尿を起したり、時に依ると腎臟炎を起したりする故非常に危險である。

その他ヴァニルラ、サフラン、生薑、肉桂、麝香、沒藥の如きまで刺戟劑として用ひられたと云ふ事であるが、中にも最も多く用ひられたものはサチリオンである。

此の名は古代希臘神話にニムフを慕ひ、山羊を姦したと傳へられる淫樂の神、半人半獸のサチルの名から來たもので種々なる蘭科植物殊に Orchis masculata, Orchis latifolia Orchis Morio 等を主成分とするものである。此等植物は自體何等刺戟生物を含有してゐないか、その球莖が男子の睾丸に類似して居るため用ひられるに至つたに過ぎないのである。植物名にまでさうした意味の言葉がつけられてゐるのを見ても、如何にその形が類似して居るかが解るであらう。プルニウスに從へば、人が是れを單に手に持つだけでも作用を逞し酸き酒に入れて飮む時は更にその働き顯著だとある。

Radix palmae Christi 等の名もあるが現在ではサレップ根なる名の下に含有する粘液質に依て、加多兒性疾患等に應用するに過ぎない。然し昔は蘭科植物に對する妄信は、なかなか鞏かつて居て、獨逸等北方の傳說に依れば女巨人ブラナは、戀人ハルフダンに Frimngras を戀の藥として贈つたと云ふし、女神フラヤも亦 Freyagras を贈つたとあるが兩者共蘭科植物に過ぎぬのである。サチリオンには前者の他又（Cratuegis と云ふ草も用ひられた。先人が此の草を、テリゴノス（女子を生むの義）とアンドロゴノス（男子を生むの義）の二種に分けた所から考察して、大戟科の Mercurialis tomentosa と云ふ「やまあい」の類の植物だらうと云ふて居る、或はステルゲトロン（Semperuium tectorum)、ホルミオス、アグリオス（Salvia silvestris）とか繖形科の（Crithmum maritimum）の如

きもプリニウスはそれ等戀の藥の成分として記載して居る。

テオフラストは前年生の小なる乾萎したると、柔くして大なる若きとの二個の球莖を備へた Anacamptis pyramidalis をチノソルヒスなる名の下に說明して居るが、それに依ると「テッサリアに於て、男子達は若き球莖を性慾亢進のために、乾萎せるは是れを制するため山羊の乳に入れて用ひたり、即ち兩者は反對の作用を有するものなり」と云つて居る。

然し第一世皇帝の頃の羅馬程呪文や妖術や詐術が行はれたり、魔術師や魔法使の女が幅を利かしたり戀の藥の調製が發達した事は無い。當時羅馬へは、世界各國の財寶が集まり此の世の榮華を極めて居たのであるから、幾何金を掛けても藥に依つてなり、妖術に依つてなり、望める戀を得やうとするの風が盛んであつたのは容易に思考出來る。斯くて所謂豫言者Sagae等が毒手を伸ばして惡事を行つたが、彼等は大抵墮落せる老いたる卑しき女共であつて、戀の藥を調製して金儲けをするばかりでは無く性病の治療とか、種々の方法を用ひて墮胎を幇助したりした。所謂medica等も斯うした所から出て來たのである。「ほ×××」の類で毒のある Physalis somnifera であるとか「いぬほ×××」の類の Solanum nigrum から製したハリカカブム Halicacabum と名付くる毒汁は常に彼等の汚れたる巣窟内に見出す事が出來た。プリニウスはハリカカブムの猛毒なる事を說いて「一ドラクムを與ふる時は淫慾を起し、妄想を畫き、二ドラクムを與ふる時は狂亂に陷り、尙多量を與ふる時は遂に死す」と云つて居る。

豫言者は夜分になると墓場を彷徨ふてアマトリア Amatoria と名付くる藥を作るために毒草や屍體の骨や髮を集めたと傳へられて居る。ホラツは月光の下エスキリヌスの丘の墓場で名高き豫言者カニヂアに會つたとてその著「妖怪物語」に於てその樣子を記述して居る。カニヂが事に就ては、多くの羅馬の文人が書いて居るがその調製した藥の中で最も知られたのは「望みの杯」と稱するものであつた。然し如何なる成分から成つて居たか殘念乍ら不明である。

六

傳ふる所に依ると、當時羅馬に於て用ひられた大抵の戀の藥は「ヒツポマネ」Hippomane と稱するものを含むで居たらしい。蓋しヒツポマネとは馬の熱情の意で、ヒツポマネの少量泥をじたる合金を以て製せるオリムピアの牝馬の像は近寄れる牡馬を狂奔せしむる程の力があつたと云ふ事である。ヒツポマネの性質及其原に就ては、古代記者の傳ふる所種々であるが、

南米の或る地方に生ずる、その樹蔭に眠つただけでも人を殺ろすと云はれる程猛毒なる植物マンツアニルラ Hippomane Mancinella とは何等の關係も無い事丈けは明らである。テオクリトに從へば是れを喰へば、馬をして狂ひの如くならしめたと云ふアルカヂマの草の事だらうとあるし、プリニウスは「新に生れたる仔馬の額に通常黑くして無果花程の大きさを有せる肉の如き塊あり。母は乳房を含ませる前直ちに是れを喰へど此の隆肉を集め即ちヒツポマネの調製に使用す」と主張して居る。オヴイド及びユヴエナアルもヒツポマネの性質から推して同樣の意見を有つてゐるが、此の意見は珍らしい意見でも無いので仔馬も多くの他の動物と同じく頭から先へ世の中へ出て來るが、胞衣に包まれて居るので、脫出を容易ならしめるため母馬は大低の四足動物がするやうに、是れを食べて了ふのである。此の內部に水を藏し暗色の塊を見出す事があるが是れが所謂ヒツポマネとして用ひられたのであらう。

現在でも佛蘭西製の戀の秘藥として、紅燈綠酒の境に貴重がられて居るものがあるが、或る種動物の胞衣の乾燥粉末を丸劑となしたるものに過ぎない 是れは出產に際して母動物が胞衣を食べると仔動物を愛する心が出るが若し胞衣を取り除いて與へずに置くと愛情が出ず仔動物を嚙み殺ろしたり、食べたりして了ふと云ふ現象に依り胞衣には愛情を起す成分が這入つて居るだらうと云ふ考へから出發したものでヒツポマネの亞流である。

紀元前七十年に生れた羅馬の詩人ヴイルギル Publius Vergilius maro がオク タヴイア ヌスとアントニウスとの不和混亂の裡に、書き上げた四冊より成る教訓詩 (Georgica) の第三冊第二百八十一條より第二百八十三條の間にヒツポマネの由來に就て、別の說明を與へて居るが障る處があるため玆に公開す可きで無いと思つて遠慮する。

動物から戀の藥を調製した事は希臘でも行はれフイルトンと名付け、廣く用ひられたが內容に就ては審かでない。

ヒツポマネが戀の藥としての價値は暫らく措くとするも、恐ろしき毒性のある事は古代の文獻にも見えて居て、ユヴエナアルの如きも「ゲゾニアが顚へる仔馬の額を與へたるネロの叔父の如く汝狂氣とならざるとするも」云々と記して居る 玆に云ふケゾニアとはネロの母少アグリッピナの兄弟羅馬皇帝カリグラの后の事で、正史に依るとチベリウス皇帝の後繼者カリグラはゲルマニクスの子で、暗愚驕恣放蕩を續け遂に狂氣となつたので、帝の果しなき死刑、財產沒收、壓制に抗して羅馬貴族が

陰謀を企て、遂に二名の親兵隊長に暴君を弑させたとあるが、一方傳ふる所に依れば后ケゾニアがヒツポマネを以て製せる毒酒を進めたがため、恐ろしい狂暴性を現はし慘虐を行つたのであると云ふ事である。

その性質から云つてヒツポマネは希臘のサチリオンの如く情緒を刺戟し更新するための催春劑と見る方が正しいであらう同樣なる目的に Aquae amatrices と稱する酒精性飲料も羅馬人に依て廣く用ひられた「戀の火」の意で種々の奇妙なる成分が混入つて居て野猪の臍、琥珀、鯔魚、烏賊、鶏の卵、蜥蜴の類、荒薔、蟋蟀、の如きその一例である　動物と共に植物も成分になつて居てマルチアルに從へばボヴイステの名を有する Lycopereon cervinum や松露及び其他の菌類も用ひられた、との事である　オヴイドは以上の他ザツレヤと稱する毒草、胡椒、蕁麻の種子、薄荷に似たるベルトラム、アルカトウのペラスゲルの町の郊ける蕪であるとか興奮せしめる芥子草、針葉を帶べる松の實、等に就て記載して居る。

斯くの如く得體も知れぬもの等から成つて居るので、Aquae amatrices を使用する事は非常に危險で史傳に依るも多數の犠牲者を出したやうである　其の教訓詩 de rerum naturae (物性論)等に於てエピクロスの快樂主義を謳歌した詩人ルクレツも是れを服用して、恐ろしい色情狂に陷り、遂に狂暴なる發作に依り紀元前五十五年自殺して了つたと傳へられて居る「ルクルスの饗宴と云ふ言葉が出來た程、豪奢なる生活をしたミトリダテス戰役の勇者ルクルスも、彼の解放されたる奴隷カリステネスが愛情を常に保たうとして與へたる Aquae Amatrices のために同樣の運命に陷つたとある。是れに關しては、プルタルクの傳説集第四十三章に審かである。

七

種々の口碑や記述に依て、ずつと昔から獨逸にも戀の藥に關する信仰が行はれて居た事は明らかである。第十三世紀頃ゴツトフリード・フオン・ストラスブルヒの手に依て、有名ナル戀愛詩にものされたトリスタンとイゾルデの戀も、戀の藥を背景として起つた哀れにも美しき物語りなのである。戀の睟言まで大膽に歌つたゴツトフリード・フオン・ストラスブルヒも、その戀の藥の組織原料に就ては全く沈默して居るので如何なるものか知る術もない。

曼陀羅の他に獨逸では菲沃斯 Hyoscyamusniger の根を戀の藥として使用した。勿論その麻醉性作用を應用したのである。ユリウス・ウオルフはその「ハメルンの捕鼠者」 Ratten-

Fänger von Hameln に於て傳説を基礎に普沃斯の戀の藥としての效用に就き述べて居るが、大體の筋は樂人フノルドが鼠を退治た褒美として、若干の禮金の他に特別の望むものを得る事になつたので、市長グルウエルホルトの娘レギナの接吻を求めた所、此の無法な要求は散々に侮辱されて拒絶されて了つた。フノルドは戀の藥を用ひて望みを達しやうと考へ、森へ行つて普沃斯の根を掘り出し、人の形を刻み、胸の所に組合せ記號を彫り、呪ひの言葉を掛け、レギナが常に通ふ道へ密に埋めて置いた所、其の效驗は忽ち現はれて、市の建築師へベルト・デ・ズンネボルネとの婚約式の席上で、レギナは突然戀の發作に襲れるのである。即ち樂人フノルドの怪しき唄に依て、更に蠱惑されて、レギナは花婿の傍を離れて立ち上り

“Warf sich an die Brust dem sänger
und umschlang ihn liebeglühend.”

と云ふ所で終つて居る。

コンラド・メゲンベハクに依て、一千三百五十年に書かれた「自然論」Buch der Natur には種々の草が戀の藥として推奨されて居るが、馬鞭草科の「くまつゞら」Verbeda officinalis 等もその一種である。

中世紀の巫女達は戀に苦しむ男女に種々の妖術を授けたが、多くは戀せられたる者の身に着けたる品、又は最も特性を保持して居る物を手に入れるやうに教へ、毛髮、剪むだ爪、肌着の切れ端の如きが叮嚀に集められると、是れを燒いて灰となし、戀の藥の調製に使つた。身も世もない程戀に惱んで居る男には、戀しい女の身から出た或る不快なものを服むやうにさへ勸めた。戀せる女には、戀しき男に所謂「愛の菓子」を贈る可く教へた。「愛の菓子」とは戀に燃えたる女が全く衣を解き、腰の上に一枚の小板を敷き、小さき竈を置き、その中で燒いた菓子の事で戀の熱が籠められて居るのである。是れを食べたる男は、忽ちにして、心臟に血が跳り入るのを覺え、女の戀と熱とは男の心の中て浸み込むのであると云ふ。

科學の進歩せる今日に於ても、戀の藥に關する信仰はなかなか止んで　何處の國にも所謂家傳藥とか稱して愛を保ち戀を得ると信ぜられて居るものが澤山ある。

北獨逸邊では、現に蝙蝠の血や燕の心臟は貴重なる戀の藥として用ひられ、又は腋の下に暫らく挾むで置いた林檎を、想ふ人に食べさせたりするの風がある。後者に就てはエーガーがヒツプのクロノスコープに依て檢明した所謂「心素」Seelenstoff アントロピンが、林檎に附着して、作用を遲ふするのであらうとエーガーの心理學說を唱へる人々は說明して居るが、アントロ

ピンとは化學者の領分でカペロン酸、カプリン酸、カプリール酸等と稱して居るものなのである。

×　×　×　×

印度洋を越えて歐羅巴へ往來する旅客の埃及カイロを訪ねる時、古の魔術師を思はせるやうな姿をした土人から、必らずは一壜を買はせられるであらう所の戀の藥、御成街道の黒燒屋の老爺が、勿體振つて金看板の裏から出して來る蠑螈の黒燒、偖ては近代醫學に於て廣い用途を有する亞弗利加生ヨヒムベヤ皮の成分ヨヒムビン等數へ立てれば未だ未だ限りも無いがここら邊で一先づ筆を擱く事にしよう。

兎に角効くも効かぬも戀に惱む人々がさうした藥や果敢い妖術にたよる心こそ哀れなものである

（終り）

星使ひの術

稻垣足穗

「吾々は一秒間毎に孤獨であり、存在は只いつ終るとも知れない轉化である。ヒューチュリズムの色彩と音響との目まぐるしく交錯した世界、キュービズムの幾何學教科書の世界、さては　青い月夜に、影のうつらぬ大鏡に向つて、何も書いてない童話の頁をよむといふダダイズムの世界…いや、吾々の要求するのは、もつと奇拔な世界である。もつと〳〵奇拔な……そして、それによつて、このノロ〳〵しい地球の廻轉をもつと急激に廻したい。このあくびに充ちた遊星上の人生を、まばゆい光芒をひいてとぶ彗星上にまで移したい。そこに吾々の理想がある。……」（'The red comet club and its movement" by E. F. C. moore, の序文なり）

最近ドイツのシュピテルスといふ天文學者によつて「銀河といふのは氷塊の集合したもので、吾々の頭上に落ちて來る雹といふのはそこから來るのだ」といふ説がとなへられてゐることは、讀者の幾人かが知つてゐよう。吾々に取つてはXである明日といふものに、どんなにしば〳〵夢のやうな事が實現したかについては、何人も知つてゐるが、この「銀河氷塊説」ほど不思議な意見には又コペルニカス以來接したことがなかつた。尤もさうだからだとて何も吾々の今明日の生活に變化が起るといふのではない。が、もしこんなお伽噺が一般に認められたらそこにどんなことが起つてくるか？……けれども一方から考へると、それは勿論一つの想像説にすぎぬものである。ところが、これと姉妹説をなすもので、近來その荒誕な主張にいくたの有力な理論を裏書されたばかりか、何人のまへにも行はれるおどろくべき實驗によつて、正に人類生活に大革命を起さうとしてゐるものがある。即ち、同じくドイツの天文學者カルル、カイネ博士によつてとなへられたSielsmで、ニューヨークウーオルド紙の所謂 Astero-magicといふ新熟語に代表されるも

のである。かう云ふと、或る人はすぐ思ひ當るにちがひない。が、私の見るところ、こちらの新聞は只三月中旬に東京時事が科學欄に五六行かいた他は、いづれも何事も報じてゐないやうである。尤も今月のサイエンチフイクアメリカンにはこんなことが出てゐる。「Steiis 日 なるものが、幽幻きはまりなき新世界の展開をつたへるのに多くの障害を受けてゐる理由は、説かれるところが余くの空想と考へられやすく、それに關した實驗がまた魔術やエクトプラスムなどいふ聯想を起させるからだ。まことに吾々は如何はしい學説の流行を見ること當今の如きを知らない。だが、それらと最も混同され易い名義をもつたこのAstro-magic が、ペルテリー氏の月世界旅行記や、英國新聞王の亡靈に對するコナンドイル氏の提言と同一視すべきでないのは、只それの眞正な實驗が吾々のまへに行はれた場合に於てのみわかる事だ」と。何にしてもその具體的な記載が今日までなかつた以上、私はこゝにわずかな海外の新聞雜誌から得た智識によつて、少しく述べてみようと思ふのである。

＊＊＊

カルル・カイネ博士、グリンニツチのペルジ教授、北米ウイルソン山のテツプル氏と肩をならべて世界の三大天文學者の一人として知られたその人は、ハルツ山觀測所の主任である。齢すでに七十に近いが、その想像力の豐富なことは當代に比がないと云はれ、トパースの「銀河から來た人」「第七半球物語」などは、すべてヒントを同博士の研究に得たものと云はれてゐる。そんな文藝の領分にまで刺激をあたへたいくたの學説のなかで、一般に知れ渡つてゐるのに「虛無及その傾向としての世界」「間錐狀宇宙發生説」がある。いづれも最近のものであるが、博士は後者である奇拔な宇宙形體についての論文を出した次の年である千九百廿一年に、星の光線に關したこれ又科學小説中の架空事のやうな説を發表した。

それは、一言にして云ふと、星から來る放射線によつて、地球上の物體にさまぐな作用が及されるといふのである。太陽中の黒點や月火星その他の遊星の盈虧によつて、地表のアトモスフエヤーに何等かの影響が起る事は、早くからペルジ教授その他によつても説かれてゐるが、カイネ博士の意見によるとその作用はもつと具體的な方面にまで入りこんでゐる。地球に近い最大の星と云へば勿論太陽で、この星が強い光によつて、地球といふ一圓球上に幾億萬年この方さまぐな現象を生滅させ、遂に今日見らるゝ自然や文明を形造つたことが事實なら、吾々から遙かに距つたところにある太陽である星からも、やは

りそれに似た働きが及されてゐるのを認めないわけに行かぬ。たとへば、太陽の光線が植物の花を咲すものなら、星の光線でも同じだ。吾々の心や身體が結局太陽によつて造られたと云へば、星によつても又似たものが育てられる。尤も太陽にくらべてそれは微力である。が、太陽の作用が單一的で、それによつてもこんなに錯然とした萬物が出來たのにくらべ、さまぐ\な色と光度とその複雜な配合をもつた星によつてもたらされる變化は、もし嚴密な眼で觀察したなら、太陽のそれに幾萬倍する面白いものにちがひない。實際に又、それが晝よりは夜の方に適當な生活條件をそなへてゐる者の場合には、彼等が月や星に受ける影響は太陽よりも甚しい。或る月見草や夢遊病者や蛾や瓦斯燈は夜が更けるのと共により盛んな活動を初める。これは他のあらゆるものについても云へる事で、現に千九百十七年八月にヘルクレス座に現はれた變光星が、ガソリンモーターに對して反應を及ぼしたのはライン氏によつて確められ、先年中部フランスにクリスマス近くに一面アネモネが咲きみだれたのは、その附近を通過したビー三號といふ小慧星の電氣が感應したせいであるとコポール博士に解明された。まことに、一つの慧星が地球に近づきつゝあるとすると、その慧星の振動に對して最も共鳴を起し易いAの都市には、忽ち奇妙な現象が生じてくる。舞踏病やインフルエンザ患者が續出したら、それはその波動を感じやすい身體をもつた人が眞先にやられたのである。競馬會で番狂せが生じたら、その弱い馬に慧星のリズムがのりうつゝたからだ。人々がもう一度その馬を勝たさうとしたら失敗である。變幻不測の慧星は、その瞬間には、隣國の都へ談判に行つてゐる代表者の頭に作用して、外交問題に大いな障害を與へるであらうからだ。慧星が出ると革變が起るといふ昔の人の云ひ草も又迷信とは云へない。このやうに、星からの作用は、常に、普遍的でそして合理的な太陽のそれに反對の方向に働く傾向を持つてゐる。だから、吾々が歴史及日常を通じて知つてゐる何から起因を發したとも知れない大小の事件、それから、この現實の滋味としてある夢といふもの、その他の多くの朦朧とした事柄を生み出す神祕の夜といふことは結局「神祕の星」といふ問題になる。今日の吾々に不思議なこの見解も、古代人にはきはめて普通の事であつた。アッシリヤ、バビロン、ペルシヤなどに代表される國々の學者は、夙にその非凡な洞察力によつて、所謂原因結果の方則にある筈の地上に發生する異端的現象が、天上界の星に起因してゐる事を看破して、そこに星卜學——即ち、アストロジイなるものをこしらへてゐた。そして、そのなかの或る者には自ら星の魔力を應用することさへ

出來たのであるが、この價値ある學問は、やがて異常な力をもつて擡頭して來た「太陽方面からの研究」即ち今日の天文學の開祖をなすところのものに壓倒されてしまつたのである。しかし、さうして荒唐無稽なるものとして古代星卜學が退けられた現代にも、なほ吾々の智識でとき難いものが絶えない以上、「太陽から出發したサイエンス」と共には「星から出發したサイエンス」も認められなければならない。いや、白晝よりも夜間が美しいものとすれば、淋々とした太陽よりも月と星の光がローマンチックであるとすれば、單調な太陽下の文明に飽いた吾々は、こゝに晝夜を轉倒して、より永遠的な星光下の文明を建設すべきではないか。……

これが所謂 stelism の大要であるが、發表當時この意見は、一般は勿論、さうした問題について最大の同情者であるペッケル博士からも一笑に附せられ、同博士は、その心理學的見地によつて、それは思ふに今まであまりに明徹であつたカイネ博士の頭腦が、漸く老齢に及んで安全瓣を突破したのによるとさへ推斷した。ところが、それから二年を經過した一昨年の秋に至つて、この童話的理論が正しくおどろくべき眞理をつたへてをり、そこに發見された新事實がもし適當な方法によつて研究された曉には、あるひは提唱者の云ふところと一致するかも知れないといふ事が一般に知れ渡つたのである。と云ふのは、stelism の可能に關する何人も否認出來ない證明が、當時彗星のやうにドイツに現はれたシクハード・ハインツエルなる不可解な人物によつて行はれたのである。

いち早くその荒誕な學説に見出された價値をつたへたドイツの科學雜誌によると、シクハード・ハインツエル氏は、千八百九十三年にゲッチンゲルに近いフラムスケードといふ都會に生れた。幼時から世の常ならぬ事に少なからぬ憧憬を抱いてゐた彼は、土地の工業學校を卒へると同時に、意を決して、先年物故したバーマン、ケラー兩氏とならび立つ魔術の大家であつたジャンモーラヌ氏をパリーに訪れ、最初は助手として後には高弟として五年間歐米の各都市を巡遊した。歐洲大戰の初まる前年、スイスの山中で逢遇した自動車の奇禍によつて測らずも恩師を失ふに至つたが、それは何事にも先人の追隨を快しとしないこの若い天才魔術家の轉機となり、彼はかつてアムステルダムで會つた一印度の僧侶から聞された東洋の妖術を研究する目的で、單身インドに渡りラホール近郊の廢寺に七年間こもつた結果、遂に何人にも氣付かれなかつた恐るべき魔法の原理を會得するに至つた。木葉に記された言葉の上からは豫想しないでもなかつたそれが、いよ〳〵自分の手によつて實現した時、さ

すがの彼も茫然たる他はなかつた。かうしてやがて地球を手玉に受る意氣込でヨーロッパに歸つた彼の行爲が「アラビヤンナイトの魔鬼の再現」として喧傳されることになつたのである。しかも決して從來の廣告的意味に用ひられたのでないその評言は、各國の科學者間に問題を引き起す元にもなつた。まことに、單な舞臺上ではなく、たゞ白晝を除いた他はいついかなるところをも問はないシクハード氏の魔術は、嶄新と呼び驚異と喚ぶるさへ愚である　ボール紙を切りぬいた鳥が遙かのツアイライトの空に舞ひらせ、黑板に描いた汽車の煙突から煙を吐かせ、トルコの旗の三日月を拔いて眩ゆい金色に輝かせるなどはお慰みとして、この神祕の人は、家屋や煉瓦塀の側面を歩むこと吾々が水平に於けるが如き姿勢であり、街角をまがる電車のなかの人を花束に變へてしまふ。又、雨の降る夜空に發砲してそこを一瞬にして晴朗な星の世界にする。しかもつけ加へたいのは、「廿世紀の奇蹟」と呼ばれそれを行ふ人へ世界を通じて二人とも定められたスターメーキングを、最も簡單に行ふ事にある。このスターメーキングについて、知つてゐる人が案外尠いやうだから一言してみると、マルセイユのボロといふ人が千九百廿年に發明した一種の仕掛花火である。が、それがそんな驚異として迎へられたわけは、目擊者には只これが人間業に爲される事かと呆然としてしまふ程壯絶をきはめたことであることである。で、原理としては、只、小さな鋼鐵の圓筒に、ファンタシユームと名づけられる新しい原素その他を入れてすてゝをくと、程經て上部に突出してゐるパイプから、所謂それが空中千メートル乃至五千メートルの高所に上つて、一定の時間を持續的に輝く光玉を擊ち出すといふ以上、何の說明も下されてゐないのである。――この星造りの花火をも最も手輕に行ふシクハード氏は、なほその上に、發明者である。ボロ氏ならびにその高弟であるカスミイ氏も企て及ばない惑星までも造り出し、その圓筒から生れた虹のやうな尾や金色の光芒を引いた人工の火龍は、眞暗な夜、しばしばフランス、オランダ、イタリー、スカンヂナビヤの夜空に現はれて人々を驚喜せしめた。まことにこの童話にもない夢の世界へ現代ヨーロッパを飛躍せしめたシクハード氏の行ひは、すぐる數年前に提唱されたカイネ博士の理論を新らたに思ひ反させるに充分であつた。しかもこの時、何人にもわからぬその魔術の解釋が、當のカイネ博士自身の手によつてつけられたのである。ベルリンの上空に燦爛たる人造の星々が咲きみだれた一夜、夢を說くその老博士は夢を造る若い魔術士に會見をした。これこそ吾々が接し得た幻想的場面の最たるにちがひなかつたが、この時はさすがのシクハード

氏も、カイネ博士が數時間にわたつて述べたところを聞いて、近代科學の進歩と、なほかくの如き事すら推理し得る頭腦に只おどろいた。何故なら、彼が廿世紀の文明と絶縁したヒマラヤ山の奥にある高い絶壁の中間を切り開いた石の街で、そこに集る多くの妖術者について修業したアルバニガニストラこそは、そして、そこに於ける偶然の緣からスマトラのカスミイ氏に習つた奇怪な煙火術こそは、彼の前にゐる眞顏の天文學者の説くStl sm の理論をそのまゝ實行にうつしたものだつたからである。こゝに至つて以上もはや私にすべきでないと覺つたシクハード氏の告白によると、そのアルバニガニストラの奥義は、かつて十九世紀の妖術師として文明國にも名を知られてゐるハツサンカ一派の使用したものであり、それは又杳かに數千年の昔にさかのぼつて、ペルシヤのメージであつたアルバニガニストラが開いた云はゞ現存せる世界唯一のアストロジーである。そして、その一派の者が常に呼び出してゐるジンとは 他ならぬペーメ教授の聲明によつて最近天文學上の問題となつてゐる蝎座の一等變光星アンターレスを指す。現代の専門家があらゆる機械を使用してなほ靴をへだてゝ痒所にふれる觀があるのに反して、アルバニガニストラより受け傳へてゐる呪文によつて直接にそのリズムを把へる時は…と云ひかけたシクハード氏が、早口に不可解な發言を下すと、俄然頭上の電燈が物凄い眞紅色に變じて、轟々たる旋風と共に部屋中の器具が目まぐるしい廻轉を初めた。――カイネ、シクハード、ボロ、メルツ、アインスタイン、ペーメ、ペツケルの發起人を筆頭にウエールス、ロツヂ、ベルグソン、メーテルリンク、フラマリオン、ミンコフスキイ、ロマンロオラン等の名工の名をつらねた所謂「全世界をフエアリーランドに化さうとする運動」靑薔薇敎會が組織されたのは、それから半年の後である。云ふまでもなく、目的とするところは、この世界を今までとは根本的に異つた文明にまで轉換させることにあつて、その動機をあたへた光榮あるAstro-magicianの始祖であるシクハート氏は、大統領にまねかれて全米國を幻惑の渦中に投ずるために出發し、一方、カイネ博士の一行はインドにあつて詳細な研究資料を集めてゐると、最近のドイツチエツアイツング紙は報じてゐる。

ついでに云ひそへるが、ハツサンカといふのは、この間まで東京府下大森にゐたインド志士ミスラ氏に關係があつて、即ちミスラ氏の祖父がその弟子であつたといふところから、ミスラ氏自身にも幾分か所謂ジンを使ふ事が出來た。で、それに關した興味ある實驗談が、谷崎潤一郎、芥川龍之介兩氏によつて書かれてゐると云へば人々は思ひ當らう。それからシクハード

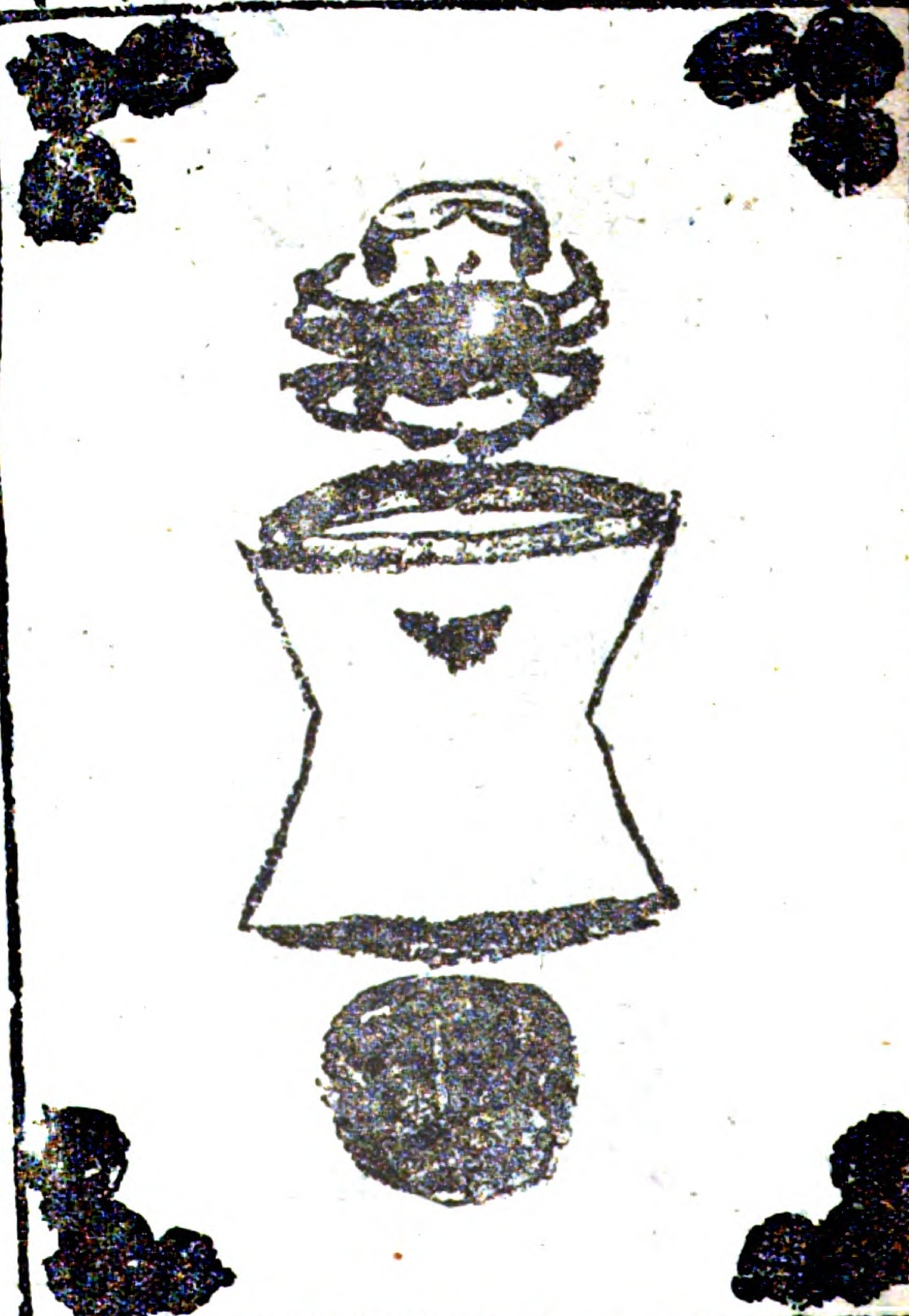
氏、これも面白いことには一昨年の春神戸に滞在してゐた同名の紳士を指すのである。インドから歸りに、研究の整理とバンチヤブ高原の空氣にいためられた身心の保養方々その都へ來てゐたその人について、私は一度婦人公論に書いた。叙するのに物語の形式を採つたから、人々はお伽噺と見すごしたかも知れないが、その時神戸市の隨所に起つた不可思議が、あの部分的な記載に幾十倍してゐたかは、神戸に居合した人にたづねてもらつたらわかるだらうと思ふ。ところが奇縁と云ふべきは、試驗的と云へ世界最初に Astromagic に接した神戸市は、又、今回日本最初に Stelism の實驗が行はれるところにもなつた。それは、この市街の背後にそびえてゐる六甲山頂にある天文臺で、來る七月三日の夜、慧星學の世界的權威として知られた星野博士の手によつてなされようとしてゐる。即ち、當夜地球附近を通過するボン慧星の光波を誘導し、そこに一種の幻影を發生させようといふ大仕掛なものであるが、こゝに四月廿六日の神戸クロニクルは Mysterious in Kobe といふ見出しで、左の意味の記事をつたへてゐる。

　その北米のク・クラックス・クランを偲ばすやうな秘密結社は、ほゞ卅名と推定される内外の紳士から成立したもので、彼等はその上にある黒頭巾のエコードと呼ばれるこれ又連續映畫に現はれる怪人のやうな裝ひをした人物に統率されてゐる。そして、いづれも赤色の假面をつけたそれらの會員は、毎週金曜日の深夜を定めて、中山手通四丁目のＹＭＣＡの上の坂の角に立つてゐる三階建の石造館に集合して、蠟燭のともつた圓テーブルや、黒猫のついたタペストリーや、異形な極彩色の偶像のならんだ部屋で、妖術教めいた神秘な儀式を行ふのである。最初の入會者は或る複雜にして困難な人物試驗の後、まづ目かくしをされて螺旋形の階段を導かれ、天井も床も壁もひとしく眞暗な、只三本の蠟燭のともつた正方形の室に案内される。そしてその四隅に無言のまゝ佇立してゐる物々しい中世紀の甲冑をつけた武士の監視のうちに、中央の卓上にあるガラス瓶に入つてゐるアートペーパーの本、クラブトラツプ博士宣誓書なるものゝ下に署名をする。そのちやうどアランポオの物語にある海賊の暗號のやうな羅列にはどんな意味がふくまれてゐるか？或る筋から傳はるところによると「吾々は地上に夢の結晶を造らうとする組合である。そんな事が第一章に書かれてあるさうだ。又「未來の藝術は煙火術にある。吾々は眞空管のなかに赤色の慧星のモデルを製造して、夏の夜の空

に打ち上げん事を要望する」そんな下りもあると云ふ。さて、サバットの大廣間に、ピタゴラスの魔の四角の位置にならべられた圓テーブルの上に載つてゐるのは、ブリキ製の蛾、黒い三角旗、髑髏、ビール瓶、さまぐに着色した木片、骰子などで、そんな奇異な物品を前にした會員間に交される論議も「一本のビール瓶のなかに何箇の月と何箇の星とを入れることが出來るか？」「慧星上の拋物線に反逆する楕圓は月に對して如何なる戀愛上の關係を有つたか？」などいふ荒誕きはまる事のみで、しかもその間には、洗練された歐米の魔術大家の舞臺や、最も進歩した交靈會の席上に於けるが如き不可思議が頻々として發生するのである。

もつて星野博士の世に限りなくファンタスティックな實驗の下準備とは、如何なるところから初められてゐるかの一班をうかがふ事が出來よう。その具體的說明については、いづれAstero-Banceの理論的方面と共に、日を改めて詳說することを約束して、私はこゝにこの散漫な記述のペンを一まづおかうと思ふ。

むかしの
そしめよう
信ミ数年
里ミのゆ
太やきなの
川ちわる悲ん
のくそうにえ
ゑわしくかかし
なりし
ぜしそつきう
せいるんめく



むかしの童話
しんぱん
猿蟹合戦

ひけのおやぢ
なかもち
ま〳〵
めし屋雛の
妻とむまき
さうちやん
ひとしおのこ
とうぞ
かどまで
送るしろ
ものす



遠
紅葉し
ぬ川奈
くたれか
おと気
ため
まきう
めし

「あまたいくう
おや
ほく
りつ
てくって
ちれく
そい
くめ
あーーあ



と
おくあくん



とある所には
あかゞの
猿之助
はとこの
めく
やくざ
もの
親分が酒
をのんでおる
ゆあ〳〵し酒をのむ
一さかずきあれた
つてやゝ〳〵
近知とおもふ
と立ちのける



さるの助と蟹右衛門はつれだち行き会ふ
猿が有りしのく
さるのすけにて助
おむすびをもちして
を中まなげんと
持ちて来て柿の
たねをはなればうそ



そあとみて
かつてしまをあ
いやのなかれ
いはむすびに
眼暮らで柿かし
てうそれとる
かれはいらん
あまりめもいく
〜わるけ奴くへ金ふなるが
こつちのさいさん
柿やろいく気の毒な
やいの柿の種をくれ
おけいは生へやし
おしみあつふく
おつかけみと呂

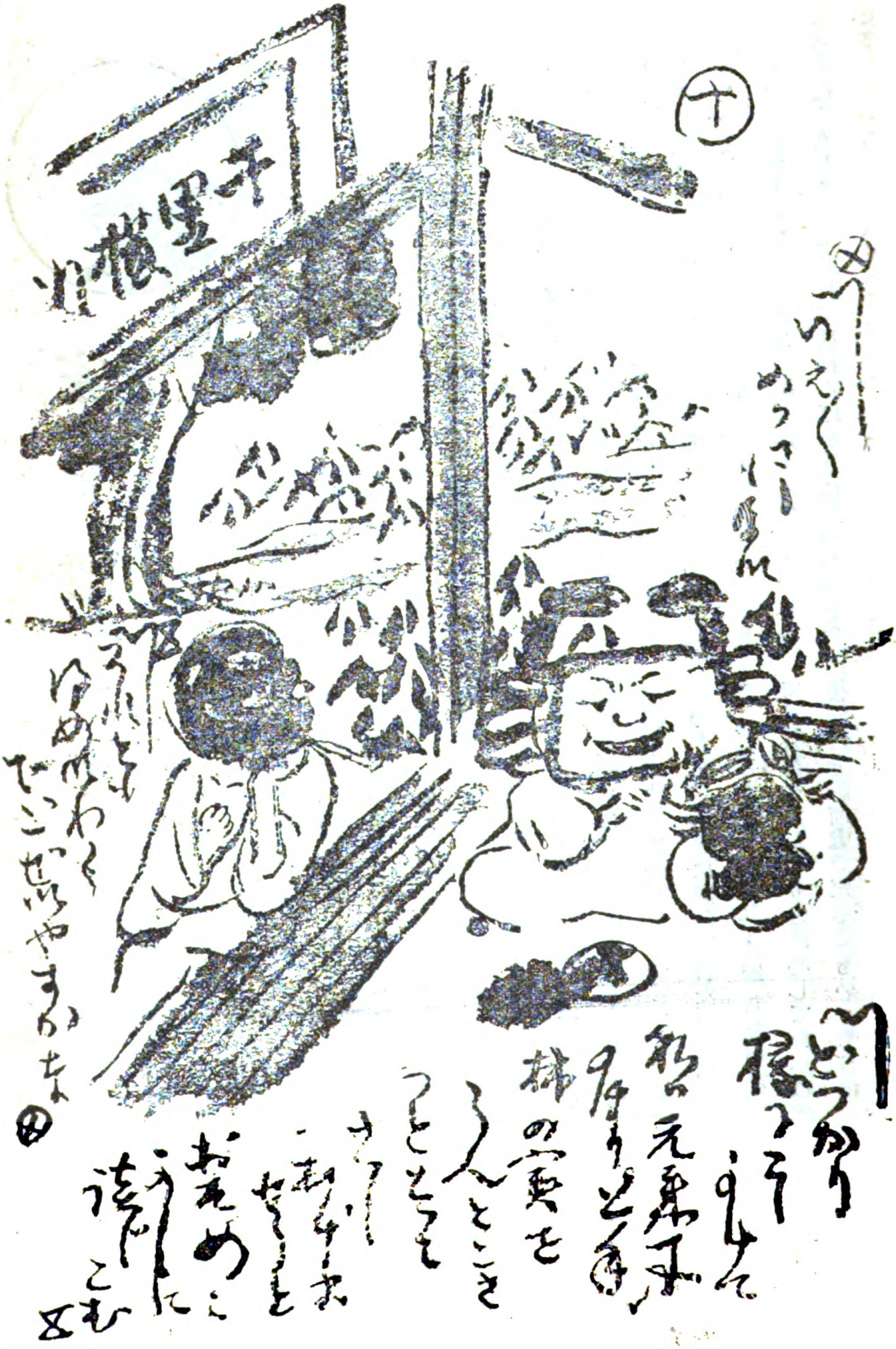


かに合戦
庭にまきたる
柿の種
〽はやく芽を
出せかきの種
〽出さぬと
はさみで
ちよんぎるぞ
〽早く大きくなれ
柿の芽や
ならぬとはさみで
ちよんぎるぞ
〽早く実のなれ柿の木や
ならぬとはさみでちよんぎるぞ




桃くり三年柿八年
この秋から


指南
鑿の家
ギヨロリと
にらんだ師の





家を離れて

荻原井泉水

闇に梅の咲きすがる家を離れる

此一句を懐の手帖に書いて、私は家を出た。夜はまだ明けてゐなかつた、私の家の狭い庭の、枯木ばかりの中に梅が一本、まだすつかりは散りきらずに、其乏しい花の白さが夢のやうに浮いて居るのを、しみ〴〵と見て――。其梅はずつと以前には鉢に植ゑられて、祖父からひどく愛されてゐたものだつた。私が七つか八つの頃だつたらう、何か悪戯をして梅をいためた爲に叱られた時だつたか、或は、梅が祖父の愛を鍾めてゐることに輕い嫉妬を感じた故か、其は忘れたが、「おぢいちやんが梅さへ好ければあたいなんかどうなつたつていゝんだ」と云つて、「馬鹿め！」と云はれた事を覺えてゐる。祖父が死んでから、手を掛ける者もなく久しく捨てられて枯れるばかりになつたのを、此家に移つてから、母が根を土におろさした。それから、不思議な事には、鉢植の時にしだれてゐた枝が皆上向きになり、伸びもし、茂りもしたが花はつかなかつた。其が今年はじめて、かなり多くの蕾をもつた。今年こそ何か此家に佳い事がある兆かな、長く床に就てゐる母でも少しは佳くなるのかな、などゝも思はれたが、反對に、母が死に、私はその遺骨を持つて、家を出たのである。家の者には――と云つても今は叔母一人だが――遺骨を御山に納める爲に旅に出るといふ事にしておいた。然し、私の心の中には或る決意をもつてゐた、私は此家を、いや家といふものから、永遠に離れて居たいと思つた。その私の願が果して許されるかどうか、其は解らないが、兎も角、自分一個として、其事をしかつりと決心しておかねばならなかつた。私は此後、自分が何處で死んでもいゝやうに、後に整理せねばならぬ事の仕末に對する私としての希望をこま〴〵と書き其を封じ、

上に「後事」と記して、机の抽斗に入れて置いて、さて、母の遺骨と、少し許りの手荷物とを持つて、春はまだ淺く、夜の明けるのゝ遲い朝の家を出たのである。

×

御山に母の骨を納めてから、私は京都に來た。京都には知已友人が少くはないが、今度は誰にも知らさなかつた。俥に乘つて宿を求めさした。こちらは前日から降續いてゐた雨が上つたばかりのところだと云つて、廣道の泥濘に宵の店の美しい灯がにじんで居た。俥は、それから灯影の乏しい小路にはいつて、北へとかぢをむけるらしい。空も暗かつた。星がたつた一つ、行手の空に出てゐるばかりだつた。

私が京都に來たのは、寺に入りたい爲めだつた。私は自分が過去に犯して來た罪業の如何に深く恐ろしいものであつたかといふ事に慄へてゐると云つても其應報を懼れるのではない、若しも法律を犯した罪のやうに或る體刑を課せられて、それで赦されるものならば、其程たやすくて、ありがたい事はあるまい、又、若しも私が未來に地獄に墮る事によつて自分の罪の決濟がつくといふ事が、私に信じられるならば、其も亦ありがたい、私は喜んで地獄を待ちたいが、地獄極樂の話だけは、悲しいかな、私には信じられない。私は、自分の罪惡に對する意識を離れてゐさへすれば、からだは安らかに自由に生きてゐるのである。で、あれほどの惡人である私が斯うして安穩に生かされてゐる事が、私には氣が咎める、間違つてゐるやうに思はれる。私はまだ誰にも一言、其を懺悔した事もなし、謝罪した事すらない、私が自分の罪惡を物に書いて世間に發表したならば、其は立派な懺悔にはならう、然し、其ゆきさつを一般にうなづいて貰へるやうに書くには、私は如何に慘忍にも弱い妻の感情を虐げて來たか、如何に無情にも老いた母の恩愛を裏切つて來たか、その消息をかなり精細に書かねばならないが、其は私の傷づきぬいてゐる心臟をピンセツトでつつつくやうなもので、私はそれを書きながら昏倒してしまふだらうと思ふ、又、其を世間に對つて懺悔したところでつまらない、私の惡業は、妻が死に、母が死んだ今となつては、獨り佛だけが知つてゐる事である、私はたゞ〳〵佛に向つて

『私が惡うございました、御免下さい』

と云ひたいのである。而して、若し其の罪をつぐなふ爲めに何かしなければならぬ事があるならば何でも致します』と云ひ、且つ、佛に近く居て其をさして貰ひたいのである。

『いや、お前が佛にすがらうとする心、其心によつてお前は既に罪から免されてゐる、佛の眼から見ればお前の罪は小

い、といふよりも佛の本願はそんな罪をもかしきる程に大きく强いのだ、お前のからだが如是にして安かである事、それこそお前が免されてゐる證據ではないか』

斯ういふ風に、若し、佛が私に云ひかけて下さつたならば、私は其時

『ほんどうですか、しんから免されたのですか』

と、私は再び佛に問ひかけて、私の耳にしつかりと、間違なく、『さうだ』といふ佛の言葉を聞きたいのである。法然上人を通じ、親鸞上人の言葉を通じて、私は佛の大きな慈悲を想像する事は出來てゐるが、さうした間接の消息でなく直接に、佛自身の口から私の心へ、ぴつたりと其眞實を受入れたいのである。

私が寺に入りたいと思つたのは――佛に近く住み、親しく佛の言葉を聞き得るほどに自分の心を淋しく正しく澄ましたいと思つたのは――かうした譯である。

×

何處の寺へ、どういふ風にしてはいるか、又、寺の方で私のやうなものを入れてくれるかどうか――其に就ては、不確かではあつたが、寺院が多く、修道をしてゐる者の多い京都に來さへすれば、何とか其道が求められるであらうといふ位に考へて、兎も角、未知の故郷へ戻るやうな氣持で、私は京都へ來たのであつた。尤も、法然上人及び親鸞上人の教が、今の私には一番慕はしく思はれるので、出來るならば黑谷の寺に置いて貰ひ度いと思つた。其爲めに私は東京に居る頃、然るべき人から黑谷の本山への紹介を得たいと思つた。黑谷と同系の增上寺には舊い知己である(其後無沙汰をしてゐるが)神林周道氏が執事をして居られる事を聞いて、私は幾度か尋ねた。「神林さんは御留守です、いつ御歸りになるか、そんな事は解りません」、受付の僧が云ふ言葉はいつもきまつてゐた。旅に出てゐられるならば知らして欲しいと云つたが、其も解らぬといふ事だつた。又、出直して行つた時、「又、神林さんか、いつ來ても駄目だと云へ」奥の方から僧の聲が取次の小坊に斯ういふのが聞こえた。三門を出しなに振返ると、說教の貼看板が下げてゐる、立札には法然上人の言葉が書いてある、來れ、門に入れ、道を聽けといふ風である、そこで、爰に私のやうな一介の貧しい道を探ねる者がたよりを求めて行けば、すげなく、受付から乞食のやうに追拂はれる、是はどうしたことだらうか、然し、是はたゞ〳〵私の機緣が熟してゐないからである、或は、かの乞食が食を求める程にも、私の道を求める心が强くないからこそである。私自身を恥づるより外はない。且つ私は嘗て、自力門をたどつて座禪入室をしてゐた頃、鈴の一振を以て追拂はれるのには慣れ

てゐる、そんな事でへこたれはしないぞといふ悲しい我慢の心を養はれて來てゐる。私は友人のI君から紹介を得て、同じ增上寺に、同じ執事の大西信道氏を訪ねた。氏は幸に逢つてくれ、又親切に話してもくれた。寺院生活の內部といふものは、外から想像される所とは大分違ふ、殊に黑谷の如き大きな寺では、靑年の僧が澤山集つてゐる、其を一つの道場であるかのやうに考へて行くと、或る幻滅を感じられることがあらう、と。又、ほんとうに僧となるには、先ず一人の師を賴み、其師から證明を得て、一定の試驗を受ける、其が通つた後に「行」をする、其の試驗と「行」とに依つて、十數等の階級を下から順次に上つて行く譯だが、それは身の階級が良くなければ好い階級の寺に住職となる事が出來ない爲なのだ、と。さうした話を、氏は打とけて腹藏なく語られ、自分のやうな者も此本山の役についてゐると、事務が實に繁忙であつて、心靜かに念佛を申す暇さいも少い、とも云はれた。而して、兎も角、私が黑谷といふ所が何となく好きであるといふ事から、氏は「大本山增上寺」といふ大きな名刺に、紹介の言葉を書いてくれた。其名刺をもつて、私は黑谷の金戒光明寺に、執事の稻岡圓敎氏を尋ねたが、此度も、幾回か無駄足をさせられた。宗祖大師六百五十年の大法會準備の爲めに、黑谷の山內は非常に忙しいらしい、事務局では大勢の僧達が手を揃へて、何か發送の物を整理してゐた、電話がひきりなしに掛かつて來た。稻岡氏は大阪の方へ矢張り其用件の爲めに出向いてをられるらしい。つまり、黑谷では今、宗祖遠忌に何萬人といふ信徒を參拜せしむる爲めに、道を修し堂を淨むる事に全力を擧げてゐる。而して、其とは沒交涉な一人の佛にすがらうとする此の私を顧る暇もない程、忙しいのである。いや、是は決して私の皮肉ではない。やはり、私の機緣が、まだ／＼熟さないのだ。さう思つて私は引きさかる外はないのである。

×

昔は、出家したいと思ふ者は、自ら髻を切りさへすれば其で好かつたのである。自分で世間を捨てる、其人を佛が取上げて下さる、其が本當の佛の道のやうに思はれる。今は、さう簡單には行かぬ、傳統を得ねばならぬ、試驗を受けねばならぬ。念の間に合ふ事ではない。私は東本願寺で、誰にでも其を望む者に、剃刀を受けさせるといふ事を思ひ出した。「猿蓑集」に

友たちの六條にかみそりした
たくとてまかりけるに
　影ほうしたぶさ見送る朝月夜　伊賀卓袋

といふ句がある。此句で見ると、昔はほんうに髻を切つたやう

に思はれる、今はほんの剃刀を當てる眞似をされるだけだといふが、よしや、ほんとうに剃つたとても、髮の毛の伸びる力まで殺ぐ譯には行かぬのだから、つまり同じ事だ、要は、さうした形式に對する、こちらの心の持ち方一つにある。單に兒戲に類するまね事だと見る人にあつては實にまね事にすぎない、佛の前で懺悔する心の唯一の表白としてではない。しかも形式て、其形式にすら生命を感じなければ、一切の宗教的形式は悉く無意味なものともならう、形式を本質化する心がある時、それは既に所謂形ての象徴とし式の尊さである。——私はさう考へた。東本願寺には句佛上人が居られる。私は上人を訪うて名刺を出した。こゝも亦、宗祖遠忌の爲めに山内は雜踏してゐて、上人も閑がなくてをられるといふ事ではあつたが、私は俳人として上人とは舊識であるといふ緣故から、容易に引見される事が出來た。私は、今、俳句をすら捨てた氣持でゐるが、其俳句が此場合に私を佛に導く唯一の機緣にならうとは、「藝が身を助ける」といふ、あの哀しい諺を思はせられた。

×

句佛上人は、私の境涯に就て、既に其大體を知つて居られたので、私の希望をもすぐさま容れてくれた。此の頃は毎朝、大師堂に於て上人の御剃刀をいたゞくものが澤山にあるのだが、其と一緒でもいけまいから、暫く待つてくれゝば、私の爲めに特別な時間を作つて其式を擧げてもよろしい、とも云つて下さつた。けれども、私は、今、しきりに無常の迅速なる事を痛感してゐる、先きの事では心もとない、强て願ふやうであるが、明朝直に許されるものならば許されたい、衆人と一緒である事は却つて喜ばしい、と云つた。それから私は、自分が身を置くべき寺に就て、御世話を得たいと乞ふた。岡崎の別院が今明いてをるかどうか、若し明いてゐるならば其處に居る事は差支ない、といふ上人の言葉だつた。岡崎の別院といふのは黑谷にすぐ續いた地で、親鸞上人が初めて庵室を構へられた舊跡である、私には最も慕はしい所である。其事もよろしく賴み上げて私は退つた。法然上人を祖とする淨土宗と、其弟子親鸞上人の眞宗と、即ち黑谷と六條とは、其教儀の委曲から云へば相違があり、或は乖離さへあるのかも知れない。然し、人間の悲しい惡業に對する佛の慈悲を信ずる其根本の信條は一つのものであると、私は思ひながら——。

×

四月五日の早曉、私は東本願寺に赴いた。けふは清明の節である。此地の櫻はまだ綻びもしないが、春は空の色にも熟して、麗朗たる光は、ほた〳〵と滴るやうであつた。白い蝶がひ

らく／＼と一つ、私の先になり後になつて飛んでゐた。前日、打合されてゐたやうに、私は内事局のN君に案内されて、長い廻廊のやうな所を過ぎて、大師堂に連れられた。そこには既に百人餘りの人々が數列になつて佛前に並んでゐた。是等はみな地方から佛の膝下を慕うて出て來た所の醇朴な男女であらう、近代的な思想も持たず、科學も知らず、目に一丁字の無きものさへあるであらう、しかも此人々の純一な、絶對的な信仰の强さはどうであらう。私は其點で、とても此人々の足元にも及ばない、私は此人々の如く凡愚にしてこそ一視平等に救はれる心持を憧憬する者である。前日、私が上人に、衆人と一緒に列なことこそ却て喜ばしいと云つたのは此譯である。私はN君の指圖するまゝに、白い法衣を着、額にも白いきれを付けた。如何にも死者の風態である。「お前は今死んだのだ」「お前の罪業も亦今消滅する」、さういふ氣持を髣髴となし得るだけでも、私には嬉しい事であつた。祖像の眞正面には第一列の首端たる所が、わざと私の爲めに明けてあるらしかつた。私はそこに座らせられた。暫くして、上人は堂の奥暗く法燈のかんがりとうるんでゐる邊より歩を運ばれた。一偈か誓文の如きものを誦し上げる聲がきこえる。私は合掌瞑目した。やがて頭顱にじかと、冷かな剃刀の三たび程觸れるのを感じた。

×

東本願寺のN君が私の宿に來て、岡崎の別院の方を尋ねて見たところ、其處は今、布教師養成所に宛てゝあるので、都合がつかぬから惡からず、といふ事を傳へられた。止むを得ぬ事である。私はもう一度、黒谷へ行つて頼んで見ようと思つて出掛けた。金戒光明寺の塔頭に上雲院といふ寺がある、そこの住職のM氏にも私は紹介狀を貰つて來て居たので、けふは先づ上雲院を訪ふた。M氏は快く、親しく、話を聞かしてくれた。其話に依つても、黒谷の本山内に入れて貰ふ事はむづかしいらしく、且つ山内は人が多くしてかなり騷がしいといふ事である。M氏は又、斯う云つた。山内で宗門の雜誌を出してゐる、其編輯の方の事務を、若し私が取らうといふのならば、其方に世話してあげられぬ事もない、と。私はM氏の好意を謝する。然し、東京の家を離れて、爰に來て、如何に自分の望む山内に居られようとも、雜誌の編輯にたづさはらうとは思はないのである。雜誌の編輯をしてゐたい位ならば、東京に於て私が長らく關係してゐる其仕事がれつきとしてある。其を捨てゝこそ私は出て來たのではないか――。

×

舊友のO君に逢つた。此人は、俳句の上では甘んじて私の先輩を受けてゐるが、一高時代からの友人で、大學を卒へて後、某保險會社の契約課長として久しく勤め、又、朝鮮に於ける或創立會社の支配人として腕を揮つて來たが、物質計數の世界のくだらぬものだといふ事を感じて、其地位や慰勞金などを弊履の如く擲つて、全く無一物となつて、西田天香氏の一燈園へ飛込んで來た。そこから托鉢の爲めに、諸方へ行つて働いてゐるうちに、知恩院内の或寺に懇意となり、今では、そこに常住あ寺男のやうな托鉢生活をしてゐる。此O君の談に、一燈園には其に附隨した一つの財團がある、その管理をしてくれないか、と天香氏から賴まれたさうである。多分、O君が法學士で、其方の知識もあり經驗もある點を信賴しての爲めであらう。所がO君の言葉を其まゝ引くと、『馬鹿にしてらあ、ねえ、バランスがどうの斯うのといふ事に浮身をやつしてゐる位ならば、わざわざ朝鮮から出て來やしないよ、僕だつて算盤をはじいてゐれば月に五六百のサラリーは貰つてゐたんだからね、其がいやだからこそ一燈園へ來たといふ事は天香さんだつて解りさうなものぢやないか……』といふのだ。私は、黑谷の寺で、雜誌の編輯をする氣はないかと云はれた話をして、二人で笑つた。然し、是は決して笑ひ事ではない。天香氏や黑谷のM氏は決して間違つてゐるのではない、それは如何にも常識的なのだ。但し、私達には其が餘りにも常識的に過ぎる點をあきたらなくは思ふが——いや、是は私達の頭の方が常識のけたを外れて譯なのである。

×

私は幾度か黑谷へ往復したりしてゐる間に、身分として別に考へさせられる事もあつた。私は寺に入り、佛に近づいて、安心を得たいといふ一念に凝つてゐた。私のやうな悲しい經驗を持つた者が出家せずして、世の中に何人が出家しようぞとも思はれる』然し又、私のやうな性格的な罪業を犯して來た者が、單に出家するといふ形式を以て完全に、手とり早く救はれようなどゝは、餘りにむしの好すぎる考ではないかとも思はれる。お前は寧ろ、一生苦しむべきものだ、苦しみながら懺悔すべきものだ、黑谷の寺に入れられないといふ事は、お前の機緣が熟さないといふよりも、お前の道は其外にあるといふ事を敎へられてゐるのではないか、と考へられもした。私は佛の道を敬慕する、此の敬慕する情念が私の氣まゝな心を叱咤し又端正にする、若し私がほんとうに其道の人となりきつたならば、大きな安心は得られるかもしれぬが、私の氣まゝな心は其安心に抑れて、佛の淸淨な道を汚すやうにならぬとも限らぬ、私は其を恐れる。私は京都に來て、僧侶の內面生活がどういふものかとい

ふ事をも親しく見、又、寺男をしてゐる○君からも、かなり穿つた話を聞いた。私は其を批難がましく、放逸とか無衛とか許することは愼みたいが、かなり驚くべきものがある、いや其は人間の赤裸々な姿として格別驚くには當らぬ事であるが、而して其をも佛は許してくれてゐるには違ひないが、彼等は何としても佛であるといふ事の爲めに、其を法衣の袖に包み隱さうとする、そこに虚僞が作られる。彼等は最初からあまりに安易に救はれてゐるが故に永遠に救はれる道がない、と斯う云ふ事も云ひ得ると思ふ。――あゝ、私は餘りにたやすく救はれやうとあせることを自ら誡むべきである、眞に救はるべき時が來れば自然にして救はれるであらう、早く救はれたい／＼ともがくが故に苦しいのである。私は少年の時、三崎に遊んで其處で聞いた話をふと思ひ起した。三崎通ひの三盛丸が暗礁に觸れて沈沒した、浪のない穩かな日であつたが陸からはかなり遠い所なので、自分で泳ぎつかうとしたものは疲れきつて沈んだ、救助船が來た時、船の側に老婆が一人、生きたまゝ浮いてゐた、老婆は泳ぐすべを知らなかつた、あゝ往生の時が來たと思つた、ありがたい事であると念佛を申して、手や脚をもがいたりせず、たゞ安らかに身を浪に任せてゐた、其故に人體の比重は水（殊に海水）よりも輕しといふ大自然の法則に依つて、安全に浮いてゐたのである。私は此の舊い話を憶出して尊く思つた。私は今まで餘りにもがきすぎてゐた、私が多少は泳げるので其が却ていけなかつた、而して自分の力では到底駄目だと氣が付いたが故に、私は浮袋でも板子でも何でも自分を救ふべきものを求めやうとあせつたのである。東本願寺で、御剃刀を受けた事も、溺れるものが藁にすがらうとした其心持にも似てゐる。私は今、かの老婆の氣持になりたい。もと／＼家を離れて來た自分である、今夜に死なうとも私には少しの執着とするものもない、死せば凡てが滅却する、完全に救はれる、しかも其救ひの來る事が決定してゐるありがたさよ。何も、急に救はれようとして、あせるにも當らなければ、もがくにも當らない。私は强て寺に入らうとする念求をも捨てる、佛の膝にもたれかゝらうとする欲情をも捨てる、私は今あるがまゝでよろしい、私としては作られたまゝでよろしい。私として經なければならぬ業を經、私として與へられた路（其は貧しい文章の路ではあるが）に依つて其業を懺悔しつゝ、生かさるべきものであるならば、生かして貰はう――さう私は思ふやうになつたのである。

京都は、然し、私の氣持によく合つた土地である。獨り靜かに物を思ふにも、靜かに自然に親しむ爲めにも、いや私の傷ついた心をのどかに養つて貰ふにも、京都は好い所である。東山東福寺の塔頭の寺で、單に座敷を貸すだけではあるが、私を置いてもよいといふ事が、此地の知己の親切に依つて傳へられたので、私は喜んで、其の緣に從ふことにしたのである、

馬場辰猪自傳

馬場孤蝶

(五)

七八歳に達すると若き辰猪は、木の茂つてゐる森のなかへ行つて、終日其處に居ることが屢であつた。時には年上の童子等と喧嘩したことがあつたが、さういふ際には、彼は何時も腰に帶してゐた小さい劍を直ぐ拔きかけるのであつた。

註の一——とら子の物語つたところに據ると、辰猪の幼時は、童兒としては可なり大膽な兒であつたらしい。五歳位の時のことであらうと思ふのだが、祖父源馬の主管してゐる砲の鑄立場——高知市外西部——へ、或る日、辰猪は若黨某につれられて遊びに行つた。少したつて、若黨が氣がついてみると、今までその邊で遊んでゐた辰猪の影が見えなくなつてゐる。若黨はそこらを一應は探がしてみたのだが、矢張り何處へ行つたか分らぬので、少し聲を高くして

『とうさま、とうさま』

と二た聲三聲呼んでみた。『とうさま』とは『ぼつちやま』の意味の方言である。さうすると、何處からともなしに、

『應』

といふ返事が聞えて來た。何だか地面の下からでも聞えて來るやうな聲の響きであつた。若黨は、あたりをキョロ／＼見廻したが、更に辰猪の居さうなところが思ひつかれぬので、

『とうさま、何處においでゞございますか』

さうきくといふと、

『うん、此所に居る。今出て行く』とひどく落ちつき拂つたやうな聲が、地の下から來るかのやうに聞えて來た。若黨が一體何うしたことであらうかと心配してゐるうちに、そのあたりに置いてあつた砲の一つの口から、辰猪が後じさりに這ひ

出て來た。何うしてそんなところへ入つてゐたのだときくと、

『外はこれでちやんと分るが、なかが何ういふ風になつてゐるものだか見たいと思つたので、這ひ込んで行つて、見て來たのだ』

辰猪はさう答へた。

註ノ二——これはもう少し大きくなつてからの話であらうが、辰猪は友達の家へ遊びに行つて、夜十二時を過ぎて、可なり遠い路を平氣で悠々と歸つて來るのであつた。

註ノ三——或る時、兄源八郎と一緒に、庭の杏か何かの果實を落しにかゝつたのであるが、兄の方は竿で落さうとしてゐるところへ、性急な辰猪は可なり大きい石を持つて來て、枝を目がけて投げ上げた。すると運惡るくも、それが落ちて來る時に、源八郎の額に當つて、顔が見る〲はれ上つてしまつた。辰猪はさすがに自分でも飛んでもないことをしたと恐縮したと見えて、座敷では人々が源八郎の怪我に手當をしてゐる間、台所の隅で、如何にも濟まなさゝうな顔をして坐はつてゐた。叔父の氏連——源馬の第二子　が戯れに辰猪に向つて、

『兄さんがあれで盲にでもなれば、お前は何うするか』

と問いた。辰猪は重い口で、

『腹を切る』

で、叔父が

『それでも、お前は何時も暴れるので、おぢいさんに刀を取り上げげられてゐるのだから、腹を切らうにも何も刃物がないではないか』

と云ふと、辰猪はます〲澁つた聲で答へた——

『れん木(摺こ木)で腹を切る』

註ノ四——辰猪は隨分激しい氣象であつたので、家來や女中などが、何か冗談でも云つて辰猪にからかう場合などは勿論、主家に對する影口でもきいてゐるのを耳にした時などは、無禮な奴だ、手討ちにすると云ひだして、直ぐ腰の脇差しを拔いて、追つかけ廻はすのであつたし、又外へ出ては、遊び友達に對しても、拔劍の虞れがあつたので、祖父源馬が懇々訓誡した上で、短刀を取り上げてしまつた。無刀では外出ができないのであつたから、何うするのであらうと、家人は少なからぬ興味を持つて見てゐるといふと、辰猪は一向平氣なもので、何處からか古い鍬の柄をさがし出して來て、それを腰にさして、外出しようとする。母とら子が見兼ねて、引留めて、

『そんなものをさして外へ出ればお前の恥になる。おぢいさんによくあやまつて、脇差しを頂いておいで』、さういふ風に諭すといふと、

『イヤ、刀を取り上げたのは殿さまではなくつて、源馬のおぢいさんだ。鍬の柄をさして外へ出て咎められたら、刀をぢいに取り上げられたから、丸腰ではゐられないので、こんなものをさして居りますといふ積りだ。恥ぢになるものならば、刀を取り上げた方のおぢいさんの恥ぢになるべきもので、取り上げられた方の私の恥にはならぬ。上から叱られるものなら、刀を取りあげたおぢいさんが叱られる筈だと思ふ。わたしは何うしてもおぢいさんにはあやまらぬ。おぢいさんの方で刀をさゝしたければ、刀をくれるがいゝのだ』

さういふやうな理屈を云つてさらに屈しなかつた。母が祖父にその話をすると、何うもそれではし方がないといふので、ひどく錆びたとても切れさうもない脇差しを渡すことになつた。辰猪はその脇差を受け取ると、池のそばへ行つて、汀の庭石でごし／＼とぎはじめた。

註ノ五――辰猪の幼時はさういふ風なきかぬ氣なところもあつた代りに、またやさしい心持にもかけてはゐなかつた。これは前記の時代より少し前のことであらうと思ふのだが、或る時、知人のところから、あひるの子を二羽貰つて來た。それを池へ放つて、それが游ぎ廻はつてゐるのを、面白がつて緣側に立つて、何時までも見て居た。飯時になつてもなかなかうちへ入らない。家鴨の番はしてゐてやるから、食事をしろと、うちの者がときすゝめたので、やう／＼承知して、なかへ入つて食事をした。食べ了はつて、出てみると、家鴨がゐなくなつてゐた。辰猪は食事の間、誰か番をしてゐてくれる約束だつたのに、その約束に違つて誰も見張りをしてゐてくれなかつたので、家鴨がゐなくなつたのだから、何うしても探してくれと云つて承知しない。それで、あたりを皆して探してゐるうちに、池の汀の石垣が怪しいといふので、崩してみるといふと、鼠にでも引き込まれたものと見えて、二羽の屍骸が出て來た。辰猪は飯を食ひに入りさへしなかつたら、家鴨は死にはしなかつたらうにといふ心持をあり／＼顏へあらはして、死んだ家鴨の子を如何にも惜しさうに撫でながら、何時までもその傍を離れずに居る。家人の一人が、

『家鴨の子は又貰つて來てやるから、諦めなさい』

と慰めると、辰猪は

『死んだ家鴨がむごい』

さう云つて、ワツと泣き出した。むごいとはかわいさうだ

の意味の方言である。

註ノ六——祖父源馬は源八郎及び辰猪に童話や歴史物語をしてやつたのであるが、辰猪は或る時祖父に、

『おぢいさん袖搦とは何うするものだ』

ときいた。祖父が、それは盗賊の衣服の袖を搦んで抑へつけるものなのだと云つて聞かすと、

『盗人が着物を着てゐなかつたら、何うするのですか』

ときく。祖父が、その時はたぶさ（髻のこと）へ搦んで捕へるのだと答へると、辰猪は、

『では、おぢいさん、坊主の盗人が裸でやつて來たら、何うするんですか』

ときいたので、祖父は笑ひだして、

『成る程、その時は困るなア』

註ノ七——十歳位になると、よく兄源八郎と取つ組み合ひの喧嘩をやつた。母は止めに行くと、突き飛ばされて、とてもかなはないので、物干竿を振り上げて、『喧嘩をよさなければ二人の間をたゝく。間を叩くのだから、どちらへ當るか知らない。さア、その積りでおいで』と云ふと、辰猪は

『兄さん、おつかさんがおこつたから、喧嘩は駄目だ。兄さんはそつちへ逃げなさい、わたしはこつちへ逃げる。喧嘩はあとにしよう、後にしよう』と云つた。『喧嘩は後にしよう』といふのだから面白いではないかと云つて、母とら子はよく笑つてこの話をした。

註ノ八——辰猪は幼時何時の間にか友だちから推されて餓鬼大將になつてしまつた。よく友達の少年が二三人たづねて來て、自分たちの仲間が他の組と喧嘩を始めた顛末を述べて辰猪に出て來てくれと賴むのであつた。

辰猪さん、何うしても、あなたが出て來てくださらなければ、此方の組が負けになつてしまう。こちらのした事はこれこれなんだが、さきの方はこれ〳〵のことをしたのだ。何うです、さきの方が無理に違ひないでせう』

さういふ風に少年たちが、説きつけにかゝるといふと、その時まで默々として聞いてゐた辰猪は、徐ろに口を開いて

『いや〳〵兩口聞いて下知をなせといふ言葉がある。お前たちのいふところだけ聞いたのでは、まだ事情を十分に盡くしたとは云へない、又さきはさきで相當の云ひ分があるかも知れぬ。それでは先づ出かけてさきの云ひ分を聞いた上のことにしよう』

さうさも分別くさい顔で云つて、少年たちと共に出かけるのであつた。

喧嘩の時には、何時も身を挺して進み出て、『馬場辰猪これにあり、我と思はんものは、出て來て、一騎打ちの勝負をしろ』といふやうなことを云つて、敵を追ひ拂うのであつた。

註ノ九——高知市の南を流れてゐる鏡川は平常はさう大きい流れではなかつたが、洪水の場合には、隨分水かさが增して、水勢もなか〱急になる。辰猪が十一位の時であつたといふのだが、さういふ洪水の時に、友だちと一緒に高知市側の土手で水を見てゐたのが、誰かゞ此の水を向ふ側の天神の森まで泳ぎ越すものはないかと云ふ。誰もそれを冗談位に聞てゐるうちに、辰猪は『宜しい、俺が泳ぎ越して見せる』と云て、着物を脫いで、濁つたすさまじい流れの中へ泳ぎ出た。何しろ上流の山川から一時に押し出して來る水のことで、水勢は恐しく急になつてゐたので、少年の辰猪は大分流されたのであつたが、それでも、かなり上はてから水に入つたのだから、川を斜に泳いだわけになつて、首尾好く向ふ土手の大きい樹の下へと泳ぎあがることができた。家の者は、そんなことは少しも知らなかつたのだが、知り合ひの者が來て、その話をし、『もう飛び込んで助けに行かうかと思つてゐるうちに、首尾好く彼の大木のところへ泳ぎついた。斜めに泳いだのは、さすがに巧みな泳ぎ方であつた』といふ風に云つたので、家の者は始めて辰猪のさういふ冒險を知つたのであつた。

註ノ十——辰猪などの幼時の土佐藩の青年間の風俗は宜しくなかつた。兄源八郎は先づ美少年の部であつたので、その十三四歲の時分には、青年の訪ひ來る者が多かつた。辰猪は兄に代つて、さういふ訪客に應接して、追ひ歸へすのであつた。

さういふ訪客は大抵頰冠りをしてやつて來て、源八郎に逢はせろと云ふのであつた。さういふのが來ると云ふと、辰猪は

『兄さん、あなたは家に取つては大事な人なんだから、引つ込んでおいでなさい。わたしは浪人なんだから、何うなつても構はない。わたしが逢つて追ひ歸すから』

さういふ風に云つてづか〱と玄關の口へ出て行つて『用があるなら、こちらへ上がれ』と、さも橫柄に云ふ。さきが玄關の次の間位なところへ上がつて座はるのを待つて、先づ姓名を聞く。客の方は名を知られると一寸困るので、何か云ひまぎらして、名を告げない。それは辰猪の待け設けてゐたところらしく、

『貴樣のやうな、一體名をはつきり名乘ることのできないやうな、何處の馬の背やら分らぬ奴には、俺の家の大事な後つ

ぎの兄を逢はす譯には行かん。ぐず〳〵云はずにとつとゝ歸へれ』

といふやうに怒鳴る。客の青年の方は、それでも、腹は立てずに、『辰猪さん、まアさうおこつたものではなからう。一寸でいゝのだから、源八さんに逢はしてください』などゝいふ。辰猪は

『馬鹿を云へ。貴樣のやうな、他人の家へ來て、冠り物も取らずにゐるやうなそんな禮儀を辨まへぬ奴に、俺の兄を逢はせる譯には何うしも行かん。先づ第一に、その頰冠りをとり、丁寧に住所姓名を告げてからのことにしろ』

と、云つて、睨み詰めてゐる。客が少し躊躇してゐると辰猪は『貴樣はそれほど作法を知らないのなら、俺がかうして敎へてやる』

と云ふが早いか、いきなり飛びかゝつて客の頰を足蹴にして置いて、頰冠りを引張りのけてしまう。それでも、さきは何れも二十歲以上の若者であるのだから、いくらひどいことをされても、十歲位な子どもを相手に怒ることもできないので衣服を破ぶられ、髮をむしられたりしながらも、苦笑ひをして、すご〳〵と歸つて行くのであつた。物影でその樣子を窺つてゐた母親が、あんな亂暴なことをして　むかうがおこりだしたらどうするつもりなのか』と云つて、辰猪の粗暴を誡めても、辰猪は『高が少年の後ばかり追つて、うか〳〵暮らして居るあんな奴等に、怒るだけの氣慨があるものか』

と、云つて、何うしても、母の言葉に從はなかつた。

辰猪十三歲位の時分、兄源八郎の友だちが二三人、源八郎の部屋で雜談をして居るうち、そのうちの一人が『俺が辰猪さんを世話をしようか』と云ひだした。世話をするとは男色の相手にするといふ意味であつた。兄源八郎は、『さういふことは當人の意思によることとで、兄と雖も指圖する譯には行かぬ』と云つた。其所でとにかく當人を呼んで聞いてみた上でといふことになつて、當人の辰猪を呼ぶといふと、辰猪は言下に次のやうに答へた。

『貴樣は他人の家の子を世話しろと云つて主人から扶持を貰つて居るのか。俺には親も兄弟もある。他人の貴樣の世話なぞになる必要は少しもない』

聲を勵ましてさういふ風に云つたので、その世話しやうと云つた若者は呆然としてしばらく何とも云ひ得なかつた。

註ノ十一――土佐藩では次、三男を浪人とゝなへて輕蔑した。「浪人のひや飯食ひ』などと云つたものである。辰猪に向つて冗談に『冷や飯食ひ』と云つてからかうと、辰猪は『今

に見て居れ、ぬく飯食ひになつてみせるぞ』と云ひ〳〵するのであつた。藩の方では藝能ある者は、長男にあらざるも、別に扶持を與へて擧用するのであつたし、又我が家に在つては、長男にあらざるものも、それ〳〵の能力に從ひ、學問なり、技術なりを學ばしめるといふ傳統があつたのである。

註ノ十二――祖父源馬は源八郎と共に辰猪にも漢書を教へようとしたが、辰猪は一向覺えようとしないので、祖父が小言をいふと、辰猪は悄然として、

『貴樣に習はなくつても、覺えたいと思ふやうになれば、誰にでも習う』

さう云つて、本を祖父に投げ付けたこともあつた。

兄源八郎の方は非常に覺えが早かつたが、辰猪は覺えが遲かつた代り、一編覺えるとなか〳〵忘れなかつたと、母は語つた。

辰猪は十三歳の冬の或晩、母の傍へ行つて『おつかさん、何うも少し字を知らんでは都合が惡りい。いろはを教へてください』と云つた。これが辰猪の字の習ひ始めであつたといふのだ。

註ノ十三――祖父源馬の死んだのは、辰猪の十三歳位の時分であつたのだらうが、祖父の死んでまだ日柄の立ぬうちのこと、東隣り邸の小八木といふ家の方から、夕方になると石が飛んで來る。その邸には狸がゐて、夜半になると怪しきの眞似をするといふ評判の邸なので、今その邸の方から石が飛んで來るといふのだから、家の召使ひなどは皆薄氣味惡るがつてゐた。辰猪は或る夕方石が飛んで來だすといふと、玄關の前の地面へ出て、兩の拳よりも大きいやうな石を取り上げて、

『何者なれば他人の家へ石を打ち込むのだ。よし、馬場辰猪が投げる石を受けて見よ』

さう大きい聲で怒鳴つて、隣邸の方へと、その石を投げ込んだ。母は、辰猪をば『おぢいさんがおなくなりで、うちは愼み中なんだから、そんな大きい聲なんぞ、出すのではない』と云つて誡めたのだが、それぎりで隣り邸の方から石の飛んで來ることはやんでしまつた。

彼の家から少し隔つたところに[illegible]といふ土地があつて、其所に辰猪の祖母と伯父とが住んでゐた。辰猪はその人々からさまざまな親切な世話を受けた。此の伯父が辰猪に日本の短歌を作くることを教へた。若い辰猪は自作をした。十三歳の時に作つたのは――

散り行きし花のさかりは惜しけれど又來る春を待ちて暮らさん。

十四歳の時に作つたのは――

　時來れば深山を出でゝ夏の夜の雲井にまどう山時鳥。

註ノ一――浦戸灣は、中ほどのところで兩方――東西――から山が突き出して來て、くゝれたやうになつて居るのだが、その突き出てゐる土地の東の方を東孕といひ、西にある方を西孕といふのであつて、吾々の祖母と伯父とが住まつて居つたのは、その西孕の方であつた。

註ノ二――母とら子の里方葛目氏は百石には足りない小身の士であつたやうであつたが、世々學者の家であつたらしく思はれるゝ。とら子の祖父位の時分から浦戸灣口に近い御疊瀬といふ村へ移り住み、それからずつと後になつて孕へ移つたのらしい。とにかく、とら子は御疊瀬で生れたのであらうと思はるゝ。とら子の母は鈴子と云つた。とら子の兄悦次郎は學問好きな非常に堅い男であつた。若い時分、高知市から郊外の家まで歸る路を孟子を暗唱しながら歩いたことが度々であつたので、友だちから『孟子』といふ綽名をつけられた。辰猪がこゝに自ら記する通り、此伯父の感化も幾分辰猪をして學問に志さしめるのに與つて力ありしものと見て宜しいであらう。

序に記して置くが、吾々の家は一称以來學問を貴んだので、姻戚も相當教養ある家々であつたやうである。一称氏信は妻を二人失つたらしいのだが、三番目の妻は仙石氏の女清子であつた。この仙石氏は今の仙石貢氏の家である。源氏綱の妻即ち吾々の曾祖母は谷氏の女世津子であつた。世津子は谷丹内眞潮の妹であつた。

舊約の所有觀念

穗積重遠

一　法律書としての舊約全書

舊約全書を法律書として讀んで見た。そして聖書の內容が此方面にも豐富なことに今更ながら驚歎した。尤もさういふ讀み方をするについての第一の前提は、舊約全書各部の記述編纂の年代、內容の時代及び民族記錄としての價値如何の問題であるが。それ等は聖書研究專門家の教を仰ぐことにして、今こゝでは舊約全書の內容を、史實としてよりも寧ろ、法律觀念として取扱つて見たい。舊約全書の內容は法律觀念の殆どあらゆる方面に亘つて居るが、其中差當り最も法律的な部分として財產觀念が眼に著く。財產といふ中には、家畜其他の動產的財產もあり、又債權的の財產もあつて、それ等についても多少の材料が見出されるが、舊約書中に最も重きを措かれて居る財產權は土地の所有權であるから、專ら土地所有の觀念について述べて見たい。

二　せちがらくない財產觀念

私は先づ舊約の財產觀念が極めてアッサリしたコッタリしたものであることに驚く。ユダヤ人即ち欲張りといふ先入

觀念があるからである。例へば利息を嚴禁し質と差押とを制限する條々（出埃及記二二章二五―二七節、レビ記二五章三六、三七節、申命記二三章一九、二〇節、二四章六、一〇―一三、一七節）を讀むと、一寸シャイロックを聯想しにくい。尤もユダヤ人は慾張りであり高利貸であるからさう云ふ禁令があるのだとも說明される。併し刑法方面で、殺傷には常に死刑其他重刑を科して居るのに（出埃及記二一章、レビ記二四章一七―二二節、民數紀略三五章一六―二一、三一節、申命記一九章一一―一三節）、窃盜横領家畜殺傷等の財產侵害は刑事問題と云はんよりは寧ろ損害賠償乃至贖罪金の問題になつて居る所を見ると（出埃及記二二章一―一五節、レビ六章二―七節）、やはり舊約時代のユダヤ人は割合財產に執着が薄かつたのではなからうかと思はれる。それは兎も角舊約の土地所有收益の觀念が頗るアッサリしユッタリして居ることは、左の本文に著しく現はれて居る。（以下引用の本文は、もとより邦譯聖書其儘であるが、たゞ讀下しの便宜のために送り假名を附けた所がある。）

レビ記一九章九、一〇節――汝その他の穀物を獲るときには、汝等その田野の隅々までを盡く獲る可からず。亦汝の遺穗を拾ふべからず。また汝の菓樹園の菓を取りつくすべからず。また汝の菓樹園に落ちたる菓を斂むべからず。貧しきものと旅客のためにこれを遺しおくべし。我は汝の神エホバナリ。

レビ記二三章二二節――汝らの地の穀物を獲るときは、汝その獲るにのぞみて田野の隅々までをことごとく獲りつくすべからず。又汝の穀物の遺穗を拾ふべからず。これを貧きものと旅客とに遺しおくべし。我は汝等の神エホバなり。

申命記二四章一九―二二節――汝田野にて穀物を刈る時、もしその一束を田野に忘れおきたらば、返りてこれを取るべからず。他國の人と孤子と寡婦とにこれを取らすべし。然かせば汝の神エホバ凡て汝が手に作すところの事に

祝福を降したまはん。汝橄欖を打落す時は、再びその枝をさがすべからず。その遺れる者を他國の人と孤子と寡婦とに取らすべし。また葡萄園の葡萄を摘みたる時は、その遺れる者を再びさがすべからず。他國の人と孤子と寡婦とにこれを取らすべし。汝誌ゆべし、汝はエジプトの國に奴隸たりしなり。是をもて我このことを爲せと汝に命ず。

即ち現代の所有觀念から云へば、所有物である以上所有者が獨占して殘る所なく利用收益し他人には指一本差させないのが當然とされるのであるのに、そのせちがらさに對する何と云ふ好對照ぞ。

三　財產神授の思想

所でこのノンビリした所有觀念はどこから出て來るか。明白に財產神授の思想からである。財產殊に土地が神からの授り物だと云ふ考へ方は勿論珍らしくないことであるが、エホバ神に導かれてエジプトを脫出し、神の指定地たるユダヤの地に落附くことになつたイスラエル民族に取つては、土地神授の觀念は最も自然なことで、然かもそれが、左の本文に現はれて居る通り、頗る具體的に考へられて居た。

民數紀略二六章五二—五六節 — エホバ・モーセに告げて言ひたまはく、この人々にその名の數にしたがひて地を分ち與へて、これが產業となさしむべし。人衆きには汝多くの產業を與へ、人寡きには少しの產業を與ふべし。即ちその核數られし數にしたがひておの〱產業を受くべきなり。但しその地は鬮をもて之を分ち、その父祖の支派の名にしたがひて之を獲べし。即ち鬮をもてその產業を人衆き者と寡き者とに分つべきなり。

民數紀略三三章五三・五四節——汝らその他の民を逐ひはらひて其處に住むべし。其は我その地を汝等の產業として汝等に與へたればなり。汝らの族にしたがひ鬮をもてその地を分ちて產業となし、人多きには多くの產業を與へ、

人少きには少しの產業を與ふべし。各人の分はその鬮にあたれる處にあるべきなり。汝らその先祖の支派にしたがひて之を獲べし。

民數紀略三六章二節——言ひけるは、イスラエルの子孫にその產業の地を鬮によりて與ふることをヱホバわが主に命じたまへり。吾主またわれらの兄弟ゼロペハデの產業をその女子等に與ふべしと。

この土地を分配するのに鬮を以てすると云ふことは、今日の抽籤の樣な偶然的な意味ではないのであつて、即ち神意による分配である。舊的全書中の法律部分即ち所謂「律法」の原語はヘブライ語のtorahであるが、それが「籤を引く」と云ふ動詞から出た言葉だと云はれる位である。而してこの土地の神意分配はモーゼの後繼者ヨシュアの時に完了された樣にヨシュア記に書いてある。

ヨシュア記一八章二—一〇節——この時なほイスラエルの子孫の中に未だその產業を分ち取らざる支派七つのこりゐければ、ヨシュア・イスラエルの子孫に言ひけるは、汝らは汝らの先祖の神ヱホバの汝らに與へたまへし地を取りに往くことを何時まで怠りをるや。汝ら支派ごとに三人づゝを擧げよ。我これを遣はさん。…………その人々ゆきてその地を經めぐり、邑にしたがひて之を七分となして書に描き寫し、シロの營に歸りてヨシュアに詣りければ、ヨシュア・シロにて彼らのために鬮をヱホバの前に掣けり。而してヨシュア彼所にてイスラエルの子孫の區分にしたがひて其地を分ち與へたり。

四　地の安息

斯樣に土地は神から授かつたものであるから、その利用收益についても所有者たる個人の自由に全然任かさるべきで

はないのであつて、そこでエホバは前掲の通り所有地の收益を餘りせちがらくするなと誡しめた外に、『安息の年』なる制度を設け、丁度第七日を安息の日として休日とする如く、第七年を『地の安息の年』として農耕を休ませた。この休耕には農業技術上の意味合も必ずあることであらうが、聖書の上には、土地の利用收益を所有者の獨占ならしめない趣旨のみが左の通り明白に云ひあらはされて居る。

出埃及記二三章一〇・一一節――汝六年の間汝の地に種播きその實を獲りいるべし。但し第七年にはこれを息ませて耕さずにおくべし。而して汝の民の貧しき者に食ふことを得せしめよ。其餘れる者は野の獸これを食はん。汝の葡萄園も橄欖園も斯のごとくなすべし。

レビ記二五章一―七節――エホバ・シナイ山にてモーセに告げて言ひたまわく、イスラエルの子孫につげて之に言ふべし。我が汝らに與ふる地に汝ら至らん時は、その地にもエホバにむかひて安息を守らしむべし。六年のあひだ汝その田野に種播き、また六年のあひだ汝その果園の物を剪伐みてその果を斂むべし、然れども第七年には地に安息をなさしむべし。是れエホバにむかひてする安息なり。汝その田野に種播くべからず。またその菓園の物を剪伐むべからず。汝の穀物の自然生へたる者は獲るべからず。また汝の葡萄樹の修理なしに結べる葡萄は斂むべからず。是れ地の安息の年なればなり。安息の年の產物は汝らの食となるべし。すなはち汝と汝の僕と汝の婢と汝の傭人と汝の所に寄寓れる他國の人ならびに汝の家畜と汝の國の中の獸みなその產物をもて食となすべし。

即ち其年には其土地の收益を、たゞに所有者以外の同國人のみならず、他國人にも、奴隷にも、而して禽獸にまでも均霑させやうと云ふのである。

五　永代賣買の禁

更に又、土地は神が各人の所謂『產業』即ち生計立脚の地として各人に割當てたものであるから、各人が勝手にそれを他人に讓渡してしまうことは出來ないのであつた。

レビ記二五章二三—三一節——地を賣るには限りなく賣るべからず。地は我の有なればなり。汝らは旅客また寄寓者にして我とともに在るなり。汝らの產業の地に於ては凡てその地を贖ふことを許すべし。汝の兄弟もし零落れてその業を賣りしことあらば、その贖業人たる親戚きたりてその兄弟の賣りたる者を贖ふべし。若しまた人の之を贖ふ者あらずして己みずから之を贖ふことを得るにいたらば、その賣りてよりの年を數へて之が餘の分をその買主に償ふべし。然せばその產業にかへることを得ん。然れどもしこれをその人に償ふことを得ずば、その賣りたる者は買主の手にヨベルの年まで在りて、ヨベルに及びてもどさるべし。彼すなはちその產業にかへることを得ん。人石垣ある城邑の內の住宅を賣ることあらんに、賣りてより全一年の間はこれを贖ふことを得べし。即ち期定の日の內にその贖ひをなすべきなり。もし全一年の內に贖ふことなくば、その石垣ある城邑の內の家は買主の者に確定りて代々ながくこれに屬し、ヨベルにもどされざるべし。然れど周圍に石垣あらざる村落の家はその國の田畝の附屬物と見做すべし。是れは贖はるべく、またヨベルにいたりてもとさるべきなり。

この本文に『限りなく賣るべからず』とあるのは、『永代賣買』即ち永久的に手放してしまふことである。斯樣に土地の永代賣買を禁ずると云ふことは、舊時代には珍らしからぬことで、現に我國でも明治五年二月十五日の太政官布告第五十號で初めて

『地所永代賣買ノ儀從來禁制ノ處自今四民共賣買致所持候儀被差許候事』

と云ふことになつた次第である。この德川時代の土地永代賣買禁止は封建制度から出て居るのだが、眞正の所有者は上に在つて所謂所有者は實は預り主に外ならぬと云ふ根本觀念に至つては同じことである。而して永代賣買は許されないが、金融のための一時的の賣却は已むを得ない。併しその賣却は買戻を前提として居る。即ち本文によれば賣主本人又は其親戚がこれを買戻すべく、もし買戻せなくとも第五十年毎の所謂『ヨベルの年』には農村の土地は舊所有者に當然復歸する。此制度が果して實際行はれたものかどうか知らないが、土地兼併防止自作農維持の方策とも考へられる。

六　所有權の尊重

斯様に所有者に對して各種の制限があるが、それでは各人の所有權は尊重されないのかと云ふと、決してさうでない。それは其筈で、神が各人に割當てられた財産なのだから、御互に他人の分を侵害してはならぬ。既にかの十誡中に

『汝盗むなかれ』(出埃及記二〇章一五節、申命記五章一九節)

『汝その隣人の家を貪るなかれ、又汝の隣人の妻およびその僕、婢、牛驢馬ならびに凡て汝の隣人の所有を貪るなかれ。』(出埃及記二〇章一七節、申命記五章二一節)

とあるのは今更云ふまでもないが、土地の境界線の尊重すべきことは更に左の數箇所に力說されて居る。

申命記一九章一四節——汝の神ヱホバの汝に與へて獲させ給ふ地の中において汝が嗣ぐところの產業に、汝の先人の定めたる汝の隣の地界を侵すべからず。

申命記二七章一七節——その隣の地界を侵す者は詛はるべし。民みな對へてアメンといふべし。

箴言二三章一〇節――古き地界を移すことなかれ。孤子の畑を侵すことなかれ。

而して次の一段は、前掲レビ記一九章九・一〇節等と對應して、他人の所有權の尊重と他人の所有物からの享益との適宜な限界を示し、例のノンビリした所有觀念が發露して居る。

申命記二三章二四・二五節――汝の隣の葡萄園に至る時、汝意にまかせてその葡萄を飽くまで食ふも宜し。然れど器の中に取りいるべからず。また汝の隣の麥圃にいたる時、汝手にてその穗を摘み食ふも宜し。然れど汝の隣の麥圃に鎌をいるべからず。

七　財産狀態の理想

要するに舊約の所有觀念は前掲レビ記二五章二三節の

『地は我の有なればなり。汝らは旅客また寄寓者にして我とともに在るなり。』

と云ふ一句に盡きて居る。ヨブ記四一章一一節にも

『普天の下にある者はことごとく我有なり。』

とある。詩篇二四篇『ダビテのうた』一節にも

『地とそれに充つるもの、世界とその中にすむものとは、皆ヱホバのものなり。』

と歌はれて居る。そのダビテ王がヱホバの神殿を造營して七珍萬寶を寄進する際、王の宣べた左の式辭にも、この考へが力強くあらはれて居る。

歴代史略上二九章一四――一六節――我ら斯のごとく自ら進んで獻ぐることを得たるも、我は何ならんやまた我民は何ならんや。萬の物は汝より出づ。我らは只汝の手より受けて汝に獻げたるなり。汝の前にありては、我らは先祖等

のごとく旅客たり寄寓者たり。我らの世にある日は影のごとし望む所ある無し。我らの神ヱホバよ、汝の聖き名のために汝の家を建てんとて我らが備へたる此衆多の物は凡て汝の手より出づ。また皆なんぢの所有なり。

而して豫言者達は、此根本精神に違背して土地を獨占し其收益を壟斷し自己に不用の分をも他人には與へざらんとする者を、左の如く痛烈に非難した。

イザヤ書三章一四・一五節――ヱホバ來りておのが民の長老ともろ〳〵の君とをさばきて言ひ給はん。なんぢらは葡萄園をくひあらせり。貧しきものより掠めとりたる物はなんぢらの家にあり。いかなれば汝等わが民をふみにじり貧しきものゝ面をすりくだくやと。これ主萬軍のヱホバのみことばなり。

イザヤ書五章八節――禍ひなるかな、かれらは家に家をたてつらね田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず、己ひとり國のうちに住まんとす。

エゼキエル書三四章一七―一九節――主ヱホバかく言ひたまふ。汝等わが羊よ。我れ羊と羊の間および牡羊と牡山羊の間の審判をなさん。汝等は善き牧場に草食ひ足をもてその殘れる草を踏みあらし、又清みたる水を飲み足をもてその殘餘を濁す。是れ汝等にとりて小さき事ならんや。わが群汝等が足にて踏みあらしたる者を食らひ、汝等が足にて濁したる者を飲むべけんや。

而して財産狀態の理想は過不足なきにあるとされたこと、左の通りである。

箴言三〇章八・九節――我をして貧しからしめず又富ましめず、唯だなくてならぬ糧をあたへ給へ。そは我あきて神を知らずといひ、ヱホバは誰なりやといはんことを恐れ、また貧しくして竊盜をなし、我が神の名を汚さんことを恐るればなり。

八　己の物は人の物

この舊約の所有觀念は新約にも傳承された。左の二箇所にそれが著しい。

ルカ傳三章一〇・一一節――衆人ヨハネに問ふて曰ひけるは、然らば我儕何を爲すべき乎。答へて曰ひけるは、二の衣服を有てる者は有たぬ者に分與へよ。食物を有てる者も亦然かすべし。

使徒行傳四章三二節――信者はみな心を一にし意を一にして、誰一人その所有を己が物と云ふことなく、凡て之を共に有てり。

この『共に有てり』と云ふのは、今日の所謂共産制度だらうか。多分さうではないのだらうと思ふ。各人に『その所有』は承認され保護されて居るが、各人はそれを『己が物』と主張しないのである。元來神の有なのだからである。私は此點を面白く思ふ。今日の財産制度の禍ひは、各人自ら自己の所有權は極端に主張しつゝ、他人の所有權はやゝもすれば無視せんとすることにある『己の物は己の物』だと云ふ。『己の物を己が使ふのに誰が何と云ふか。どう使はうと、又使はうと使ふまいと、己の勝手だ。』而してそれが昂じると、『人の物も己の物』と云ふことにしたくなるのである。私は今これだけの材料で私有財産制度對共産制度の難問題に深入りしやうとは思はない。併しかう云ふことだけは云つて置きたい。問題は結局所有制度にあるのではなくて所有精神にあるのではなからうか。『己の物は己の物』と云ふ精神に基くから私有財産制度が咀はれるのである。その同じ精神其儘で共産制度を行はうとするから共産制度が危險なのである。『己の財産は己の腕一本で拵へ上げたのだ』と誇る。果してさうだらうか。成程其人の腕も一要素ではあつたらう。併し神の恩寵乃至國家社會の施設保護なしに『腕一本』が財産を造り出せるだらうか。我々はどうかモット謙遜になりたいものだ。自分は『旅客また寄寓者』であるとは考へられないだらうか。信心な人達は、財産を神佛からの預り物と考へるがよい。それ程信心でない人々は、財産は國家社會からの信託物と觀念すべきである。而して神佛乃至國家社會が財産を幸にも自分に割當てゝ呉れたのは、單に自分一個人に私するのではなくて人類共存の利益の爲めである。それ故『己の物は己の物』ではない。『人の物は己の物』にあらざること勿論である。『己の物は人の物』と云ふ方面をモットモット考へねばならぬ。私はこれが我々の財産制度を救ふ唯一無二の途であると信ずる。舊約はヱホバの命に從はゞ『汝の日長からん』と云ふ。これは單に宗教的因果應報だけではない。人類共同生存の當然の理法である。

餘技と趣味

餘技界のギルドに對する叛逆者

長谷川如是閑

餘技といつてもイザ鎌倉の場合には、それが唯一の命の綱となることもあるのだから決して馬鹿には出來ない。鐵砲が本職の軍人でも、軍縮で失職すれば、鐵砲なんかは自殺の役に立つばかりで、算盤の餘技位持つてゐないデクの坊軍人は慘じめなものである。だから日頃心懸けのいゝ人間は、本職はそつちのけで餘技に精を出す。從つて多くの人は餘技の方が本職よりもうまい。

その餘技なるものをいくらやつても、何年やつてゝも依然として餘技的餘技で、とても命の綱の綯ひあがらないのは私である。といつても澤山の餘技を勉强して見た譯ではない。勉强しやうといふ志だけは起しても、精神作興に過ぎないので一向實績が擧がらない。

それには私自身にも罪はあるが、一體餘技界のあらゆる方面に於て中世紀式の排他的ギルドが成立してゐることが、私をして餘技界に入ることを避けしめる重大な原因なのである。餘技界にはそれ〴〵ギルドがあつて、碁將棋でも、書畫でも刀劍でも、弓でも馬でも、ボールでもテニスでも、そのギルドに入らないものには決してその技能を傳授しない。そこには親方弟子があり、免許皆傳があり、禮儀作法があり、幹部があり、陣笠があり、嚴重な階級制度が出來てゐて、その人達の風采、態度、言語、擧動までがそれ〴〵型にはまつて、まるで人形燒といふ和製ワツフルのやうな人間にならないと餘技の達人とは云

はれない。しかもそのギルドに入らないものには、決してその技藝が行へない。その鈍挺な文化人にならないと餘技は習へない。何種の餘技でも苟も餘技の通人といはれる人の言語擧動を見るがいゝ。キザにあらざればオツ、オツにあらざればプンと臭つて、禪坊主の坊主臭いのと同じく鼻持のならない臭氣がする。餘技といふものほど人間を糠味噌漬けにするものはない。

餘技界のギルドは即ちその糠味噌桶である。私は狐にでもばかされない限りそんな糠味噌桶に首まで漬けていゝ氣持になつてゐることは出來ないので、つひぞ正氣を失つたことのない今日まで、とう／＼餘技界の何れのギルドにも屬することが出來なかつた。

尤も一技一藝に通ずる爲めにはその位の辛棒もせにやならんといふものもあるが、我々の一身はそれでなくとも鑄型に押し込められてゐるのに、せめて餘技位は、型なしの人間として自由にやらせてもらひたい。その型なしの人間さへダダイズムなんて窮屈千萬の型に嵌まつて凉しい顔をしてゐるのだから大正時代は全く幕末の纖細時代に還元した型だ。しかも此餘技界の典型化は全く、その餘技をギルドの專有物として、それを私有物とし、それを私有財産化しやうとする無意識的乃至意識的の企圖に原因してゐるのだから技藝の上から云つても禍である。昔の天文家が日月星辰を自家の專有物と心得たやうな工合ひに、餘技界のギルドマンも、その技藝は俺達の專有物と心得てゐる、これ全く私有財産發達の過程と關聯した現象なのである。

餘技の話が餘談に變つてしまつたが、私にも實は、二三餘技がある。無論、大きな聲で餘技呼はりの出來るやうな餘技ではないが、少さい頃から健康が余りよくなかつたので何かしら運動をつゞけないと工合がわるい。少年時代にはたゞ無暗と歩いたものだが、もう少し運動らしい運動をと思つていろ／＼考へた。が元來私は他人と勝負を爭ふことが子供の時分から大嫌ひだつた。然し勝負を爭つてはいけないとなると、人間の仕事は頗る限定されてしまつて、殊に遊戯に於ては、勝負を爭ふものを排除すると殆んど絶無になつてしまふ、そこを以て見ても人間といふ生物は最も野蠻な動物であることがわかる。どの動物だつて、人間見たいに平和な遊戯に於てさへ他人を打ち敗かすことを以て唯一の喜びとするやうな淺ましい根性を持つたものはありはしない。そこへ行くと私といふ人間は動物に近い方で、すべて人と勝負を爭ふ遊びは、擊劍、柔道、相撲、ボート類、テニス、

競走、腕押し、などを始め、圍碁、將棋、カルタ、花札、ジャンケン、睨めくらの類に至るまで一切決してやらぬ。やらうとしても出來るやうにならない。碁將棋なんぞは、いくら講釋をきいたりやつて見せられたりしても、ちつとも呑み込めない。たゞつまらないといふことだけが頗るよく呑み込めるばかりだ。ベースボールなんかも見に行つたことはあるが、敗けた方の學生がオイオイ泣いたりするのを見ると、此方もむやみと悲しくなつて、涙を流したりして、きまりがわるくて仕方がない。さうして結局、ベースボールといふものは大變悲しいものだといふことだけがよくわかつただけで、外の理屈はわるくこみ入つてゐて終ひによく解らない。

で私は自分の運動にやるものでも、相手の要るものをやることは出來ない。で漸く見出したのは弓であつた。これは一人で出來るのが何よりうれしい。がこれも手ほどきだけでも習はうとなると、やつぱり變挺なギルドに入らねばならぬ。然るに弓術道場へフリで入つて行つても、何うしたら、あの臙がさした佛のやうな恰好で弓をひくことが出來るのか、誰れも敎へてやらうといふものもない。それを敎へて貰はうとすると、型に入れて押し出したやうな弓術家なる外國人の國に歸化しなければならない。今でこそ學校などで弓術部なんてものがあつて、その生徒は人格を改造せずとも弓術の稽古は出來る筈だが、それでもその弓術部なるものが、もう既に中世式排他的ギルドになつてゐて、その部の生徒といふと、——野球部や柔道部ほど甚しくはないが——やつぱり型にはまつたワツフル人種になつてゐる。私の少青年時代の學校にはそんなものさへ無かつたから、私も、仕方なしに、市中のワツフル連中の仲間に入つて行つたが、ろくに入れてもくれないうちに、もういやになつてハネ出してしまつた。それ以來、絶對獨修主義を守つた。今のやうに弓術に關する活版本なども殆んどなかつたので、御家流の寫本なんどを探して來て讀んで見たが、第一その字が皆目讀めない。苦心慘憺して辛らじて讀んでも、何だかまるで意味のわからないテクニツクばかりが列んでゐて、弓の本だか彫術の本だか見當もつかぬ。

で卷藁の作り方だけが辛うじて解つたので、それを作つて、家で毎朝射てゐるうちに五分位の弓がひけるやうになつた。さうして二三年は獨りで卷藁をつゞけた。その頃は深川にゐたので、時々越中島の原へ行つて、堤に的を置いて射た。御家流の寫本を、ラテン語でも讀む氣で少しづゝ飜譯しては、その意味を埃及文字を解釋するやうに辛うじて解釋して、押手や、勝手や、離れなどといふテクニツクを覺ると同時にその工合などを

研究した。そのうちに、自己流で、弓術は、生理學と物理學と心理學との綜合技術だなんてことを考へて、押手と勝手の工合を研究するには手や肩の骨格や筋肉を研究せねばならぬと考へて解剖學の書物まで買ひ込んだのを覺へてゐる。大風が吹いたので箱屋を開業するといふ昔話しのやうだが、當人頗る眞劍だつたのだ。さうして弓の彈力や矢の行き方を研究するには物理學が必要だと思つたが、これはとう／＼手が廻らなかつた。所がその後日本新聞で、あの村田銃の村田中將が、弓に關する物理學的研究によつて、矢の重量の中心關係で中りを正確にするといふやうな理論を發表したので、こいつは村田中將に先を越されたと思つた。

そんな風にして、十何年の間、斷續はしたがとにかく全く獨學でやつてゐた。その後大阪で生活するやうになつた時、天下茶屋に住んだが、その近邊に、これも亦弓はやりたいがギルドに入るはいやといふつむじ曲りの連中がゐて、全くの素人だけで、獨立の弓場を作らうではないかといひ出して、そのうちの一人に金を出させ弓場を作ることになつた。が悉く素人では第一弓場の作り方もわからぬ。そこで此方が向ふへ行く代りに向ふを此方へ出張らせることにして、武德會の准範士とか何とかいふ老人に來て貰つて、とにかく相應のものが出來て、此の素人軍が始めて反ギルドの氣勢をあげた。

然るに人間といふものは淺ましいもので、始めは皆一樣の素人だつたが、段々やつてゐるうちに技倆の進むものと進まぬものと出來ると、出來るものと出來ないものとの間に、すぐと人格的階級を作らないと承知しない。で私はそこで始めて知つたのだが、月々に會を開いて、何寸の的に何本中つたものは、何寸の的を持つといふことにして『持的』といふものをきめる。出來るものほど小さい的を持つて、いつまでも大きな的にマゴ／＼してゐるものを睥睨しやうといふのである。さうなると、全くの素人ではあるが、何年かの間稽古を射てゐた私は、忽ち五寸的を持つやうになつて、外の人達のカラ下手に乘じて最高位を占めることゝなつた。すると不思儀なことには――或は當り前のことかも知れないが――それがやつぱり私に嬉しい事であり、鼻の先へぶら下がることであり、先生に煽てられて、先生の道場で時々開かれたる關西何とか大會に出場しろなんて云はれると出たい氣にもなる。がそれぱかりはとう／＼一度も出ずにしまつた。

同じ氣分は皆にも出かゝつたらしく、その結果、素人心理では理解の出來ないゴタ／＼が出來るほど皆が道や半道になつてしまつて、とう／＼その弓場も閉鎖してしまつた。

それ以來、私は又もや元の卷藁の獨り稽古に歸つて、とにかく今日に及んでゐる。此二三年はそれもやめてゐるが、然し卷藁だけは物置の隅に保存されてゐる。有島君の生前に、同君の邸内の弓場に何度も招かれて、何時も行く／＼といつてとう／＼一度も行かずにしまつた。から、今日まで弓をかついで他の道場破りなんかに出かけたことは一度もない譯だ。いやたつた一度、これも素人ばかりが集まつて、西宮の寺の構內に弓場を作つた時の弓場開きに招かれて出かけたが、これはその反ギルド主義が氣に入つたのと、武德會の神戸支部の岡內師範といふその時七十歲だとかいふ餘技でない本職の老人の禮射があるといふから、それを見やうと思つて行つたのであつた。

その岡內師範は見た所六十歲にも見えぬ位の矍鑠たる老人で酒は三升位飮み、弓はその歲で八分位の强弓を苦もなく引くといふ豪傑だ。何分老人なので、その强弓を引くと、勝手の拳がまるでバネ仕懸のやうに振動してゐて、あれで何うして矢が離れるかと思つてゐると、ヒユウと離れて見事に的の中心から少し下の方へ中る。次ぎの乙矢は上の方へ中つた。それが作法なのださうだ。大概な先生でも禮射となると中々うまく中らないものださうだが、此の老人のは此の歲で、いつも決してその作法を外づれないといふことだ。その時の老人の話に、十六歲位の時分から每朝飯前に射る矢數だけでも決して千本を下らなかつたといふことだ。さうして修業しても、六十歲を越へるまでは決して師範となるだけの技術は出來上るものではないといふ話だ。朝飯前の千本だけとしても、年に三十六萬五千本、五十年の間には一千八百二十五萬本といふ矢を射なければ先生にはなれないのだ。

これはつまり、私の所謂弓術の生理學的要素と物理學的要素とは早く完成されるが、心理學的要素が、それだけの年數とそれだけの體驗とを經なければ完成されないからだ。然るに、その心理學要素が完成される頃には、大抵の人間は生理學的物理學的要素を缺くやうに老ひぼれてしまふ。此の三つの要素が完成されるまで老ひぼれない人間だけが師範となる人なのだ。だから昔からさういふ人は千人に一人も出來ないと老人のいつたのは尤もな理屈だ。とその時つく／＼その岡內老師範の話に感心した。

次ぎに私の始めた餘技は寫眞だ。これもやつぱり健康上からだつたが、後には商賣上の役にも立つた。これ亦二十年ほどつづけてゐるが依然としてアヒル取の域を脫しない。のみか、機械は十年一日の如く、その昔巴里で買つた古物のホーカルプレーンシヤツターなので、コダツクなんぞのフアインダーを覗い

てうつすのがうまく出來ない。最近にもK君と旅行した時、河口湖の前面に大空を壓して聳へる富士山を寫さうとして持ちつけぬヴエストコダツクのフアインダーをいくら覗いて見ても、富士山の姿が見えぬ。とう／＼閉口してK君に寫してもらつた始末だ。然し私の古機械では可なりいゝものが出來たこともあるつもりだ。嘘だと思ふなら、何年前かに出した『倫敦』といふ書物にそれが澤山立派な網目版になつて入つてゐるのを見るがいい。尤もその本はもう絶版でどこにもないから安心である。よしあつたつてちつとも困らないほどよく出來てゐるのだ。

此の寫眞界も亦恐しくギルドの世界で幅を利かしてゐるらしく、ギルド同志の間に美術家の喧嘩のやうな喧嘩が絶へ間ない。私は寫眞をうつす爲めに寫眞をやるので喧嘩をする爲めに三脚を振り廻す氣はないから、決してギルドにはいらない。從つて何時までたつてもアヒル取りに停滯してゐる。

次ぎに私の習はうとした餘技は乘馬だ。所がこれも、少しでも稽古しやうとなると、『何とか乘馬何とか』といふやうなギルドに入らねばならぬ。それに入ると全然人格改造が必要で、第一服裝から言語擧動のに末至るまで一定の型式を備へたフオースマンシツプとかいふ軍艦のやうな人間にならねばならぬ。そこへ我々のやうに、肥桶でも擔ぎ相な風采態度で入つて行つて、『馬に乘せて貰へませんか』なんて氣の利かない口上で依賴に及びでもすると、『あなたが馬に乘るのですか、豚の間違いぢやないですか』とでもいひたさうな顏をして人の風采をジロ／＼見てゐるばかりで碌々相手にもしてくれない。そこに居るホースマンシツプ連中も、飛んだビツグマンシツプが入つて來たので自分達が侮辱されたやうな氣でもするのだらう、空いてゐる馬を態々引張り出してのり廻して此方に乘らせまいとする。

がそれで追ツぱらはれゝばまだ仕合せなので、もし不幸にして馬を貸して貰へると益大變である。もう十年も床屋に行かない私の頭のやうに蓬々と毛の生へた馬を引張り出して來て、『サアお乘り下さい』といふ。まるで物貰ひのやうな風采の馬だとは思ふが、賴んだのだから乘らぬ譯に行かない。で悄然とそれに乘つて歩き出さうとすると、どうして／＼、手綱を引かうが、綏めやうが腹を蹴やうが撫でやうが、泰然自若として所謂馬耳東風、一寸だつて進まうとしない。大に焦つて馬の上で地たんだを踏んでも馬は凉しい顏をしてゐる。此方は、反之、大汗になつて、一寸も歩かないうちに十里も歩いたやうにへト／＼に疲れてしまう。『此馬はちつとも動かないぢやないか』といふと、ギルドの親方はセセラ笑つて、私を降して自分が乘つて、少し何うかすると馬は勢よく歩るき出す。『それ此の通り歩きま

す』と空嘯く。『でも僕が乘ると動かない、外の馬を貸してもらへないか』といふと『いくら馬をかへても乘手が同じでは同じことです』などゝ、尤も千萬のやうでしかも少しも尤もでないことをいつて冷やかす。『失敬なことをいふな』といつてやりたいが、此方に自信がないので それが果して失敬なことであるや眞實のことであるや判斷されないから、蟲をころして引下がる。しかも料金の段になるとギルドの仲間の拂ふ倍も拂はせられる。

凡そ初歩のものほどよく調教された馬に乘せていろ／＼注意を與へてくれるのが馬を貸す商賣冥利といふものであるべきは無論の事、陸軍のやうなオツカない所でさへ、陸令第三號『馬術教範』第一節第一章第三條に『新兵教育に用ゐる馬は可るべく從順にして調教可良なるものを選定すべし』とちやんと規定されてゐて、決して未熟者は成るべく不從順で調教不良の馬に乘せて高い料金を取るべしなんてことは規定してゐないのである。彼等は實に軍閥にも劣る不心得者である。

實は私が馬を習はうと思ひ立つたのも、大阪に居た頃その親切な軍閥出の一人の調馬師と一人の下士とにすゝめられたことに因つてゐるのである。その人達は或る馬車屋の馬のうちから軍隊式に調教されてゐた馬を見つけ出して來て、私に教へてくれたのである、軍閥も、一人／＼軍閥ギルドから引離すと大概いゝ人間で、その調馬師も、その馬車屋の御者であつた下士も馬に對するその待遇ぶりによつてもいゝ人間であることを知り得たのである。殊に調馬師の方は、いゝ人間過ぎて頗る好男子であつた爲め不良青年化して肺病をやんで間もなく死んでしまつたが、それは即ち軍人も亦並の人間と變つた人間でない證據である。たゞ一つの變つた點は其男の左の手の拇指の先きが半分に減つてゐたことである。何うしてそんな指をしてゐるのかと聽いたら、多年馬を調教する職務の爲めに左手に手綱を取つて、それを拇指の先で強く抑へてゐるので、ついにこんな風に拇指が半分に減つてしまつたのだといふことである。足を摺木にしたといふ形容詞はきいてゐたが、實際指を押し減らした例は始めて見た。それほど苦勞しても、御用濟みとなると、廢馬同樣拂下げになつて、——馬の方は相當の値段もつくが、人間の方は全くロハの失職者になつて——その男はつひに不良青年となり肺病やみとなつて死んでしまつたのである。

此の不良青年が、馬に向ふと全く別人になるのには驚かされた。平生はグニヤリシヤナリと青白くにやけて、ぶら下つた糸瓜のやうな男だが、一朝馬がそこへ現はれると、顏の筋肉から、身體中の筋骨が電氣にでもかけられたやうにシヤンとして、恐ろしく型にはまつた嚴格さでしかも溫い血の氣の溢れたやう

な、いはゞワツプル燒の人形に血を通はしたといふやうな工合の人間になる。さうして下だらないその馬車馬をつかまへて、根氣よく教育を施したり、馬と二人で、女の子が小猫と遊ぶやうに遊んだり、飴を買つて來て馬と二人でたべあつたり、恩威幷び行はるゝ事一方ならずである。

それを見るたびに私はさう思つた。こんな美しい性質と、珍らしい能力とを持つた男を、不良青年にし肺病やみにしたのは、全く世の中が、此人間のさういふ性質なり能力なりに對して、それが人間の社會に如何に立派に役立つても、それに相應した尊敬も代償も拂はないからだ。馬だつて性質と能力とを尊重しないで、その上食ふに困らせれば不良になるか病氣になるかにきまつてゐる。などと憤慨せざるを得なかつたのである。

話が岐路に外れてしまつたが、私はギルドに入つて技藝を私有財産化する手傳ひなんどするのはいやだから、馬もそんな風にして、軍人出の親切者に教へて貰つたのだが、不自由な思ひをしてポツ／＼やつてゐるので一向進歩もしないし永續きもしない。節を屈して何處かのギルドに加はらうかとも思つたが、馬の一頭位持たないで、そんな仲間に入つても幅が利かない。幅なんかてものは、電車に乘つた時に他人の妨げをするだけで何の役にも立つものではないが、幅で人格を計算する仲間に入つて幅のメートルが足りないと人格をも無視されるにきまつてゐる。そんな連中に無視されたつてちつとも困る人格ではないが、無視されない方がいゝにはいゝ。其上何千圓といふ馬を持つてゐて、東京に乘馬會でもあると、態々汽車で其馬を東京に送つて、會場をポン／＼驅け廻つて得意がるやうな人間が專横を振つてゐる『何とか乘馬何とか』といふやうな仲間に、我々が入つて行かうといふのは、水戸黄門光圀卿の現はれる能舞臺に、田吾作が一役引受けたいと申出でるやうな話だ。それは七八年前の大阪でのことだが、恐らく今日も同じだらうし、東京も同樣だらう。

で、私は、馬には乘りたし、乘せては貰へずといふので、今日では、時々地方を旅行する時、汽車も電車も通はぬといふやう所を、馬で通ふのを唯一の樂しみにしてゐる。つい此間も、K君と二人で、富士の裾野を精進湖から大宮に出るのに七里程の道を馬に乘つたが、馬齡將さに二十歲になん／＼とする馬に乘せられて岩角路で幾度もすべつてヒヤ／＼させられた。翌日三島から箱根を新らに出來た新道を上る時、農家に談判して馬を借りて芦の湯まで上つたが、その馬はやゝ馬らしい馬だつたの頗るいゝ氣持になつて、何度か見馴れてゐた途中の景氣までが今までになくよく見えた。その上ついて來る馬の持主に『旦

那方は馬がお上手だ」と見へすいた空世辭を云はれたのまで嬉しかつた。

私の餘技は、かくの如く、何時まで經つても上達しないが、不思儀に、一技について一回づつ賞められた經驗を持つてゐる。馬は箱根でほめられたが、寫眞は先年その古機械をぶら下げて北京郊外の萬壽山の大理石の船の上で休んでゐたら、そこにゐた英吉利人が私の機械を見て、珍らしい良い玉だと大にほめ立てた。所が此玉はウナーツアイスといふので、巴里の某會社でそれを買つた餘程前、二十世紀の始めに、もうその種類の玉は作つてゐないと云はれた古玉なのだ。そのいぎりす人は、それを欲しがつてゐるやうに頻りにほめて値段をきくから、十年前に巴里で六十法で買つたといつたら、それは安い今では數十磅するだらうと云つた。それから弓でも、例の岡内師範に會つた時に『私は十何年間巻藁ばかりやつてゐます』といつたら、先生は感心だといつて賞めた。何が感心なのだかわからないが、それでとにかく私の三つの餘技は、一回はほめられことになる。尤もほ賞められたのが鏡玉であつたり、巻藁であつたり、空世辭であつたりして、やゝ心細いが、賞められたのは賞められたに相違ない。殊に此の箱根の馬の場合は、ビッグマンシップの扱ひをうけてゐる私やK君が、九天直上式に賞められたのだから、潜在意識でだけでも嬉れしからざるを得ない。此潜在意識がK君の與へた少しばかりの增賃となつて馬主の手に渡つた時に、馬主が直立不動の姿勢で軍隊口調の鄭重のお禮を述べたので、K君が大に面喰つて、直立上下動の姿勢でそれに答禮したのは、滑稽ではあつたが、豚に乘せられ面喰つた時ほど不愉快には見へなかつたに違ひない。何にしても、ちつとも動かない馬に乘せて此方のカラ下手を暴露させて高い金を取つてせゝラ笑ふ乘馬ギルドの連中と、よく動く馬に乘せて此方の下手を隠してくれて、一二三でお禮をいふ地方人とが同じ日本人であることは不思儀だ。いかに組織が人間を悪化せしめるものであるかは、此餘技界のギルド組織の結果を見てもわかる。

素人畫禮讃

河田嗣郎

同じ素人藝でも漱石先生の南畫くらゐに行けば本物だが、私の油畫や南畫風の日本繪などは、まだ々々ものになつて居ない。漸く形や色彩の上でまねごとをするだけのことで、藝術的の含蓄がないからだめだ。

固より素人畫だからとて素人畫たる理由で一概に價値なしとすることは出來ぬ。文人畫の如きはもと素人畫から發達したもので、又その素人臭い所に味があり、玄人の及び難い所があるのだ。だから文人畫も後に段々職業化して南畫といふ一の傳統的な流派が出來上るに至つては、却つてもとの素朴と醇眞とを失つて、匠氣たつぷりのものになつてしまつた。

獨り繪畫に於てばかりでなく一般に素人藝の面白い所は、技巧に捕はれず、心のまゝに表現して行く所にある。其所に眞實なる生命の流露があり、潑溂たる靈の閃が覗はれる。それが玄人になつて來れば、ほんとの藝術家ならば固より益々深く眞實に喰入り大精神を體現して來るが、藝術家としての十分の天分なき者に於ては、徒らに傳統に捕はれ技巧に拘泥し、又は時流の好みに媚びるやうになつて、形骸ばかりの整つた、香氣の失せた、生命なきものとなつてしまう恐がある。特に私はその傾向の現代日本畫に於て著しきものあるを思ふ。

そんな意味から私は、子供の書いた繪が好きであると同時に、素人畫を禮讃するものである。

畫匠の手に成らざるほんとの文人畫の好いものは支那には澤山あるが、その本物に度々接することは、私などのやうな境遇に在る者には六ケ敷い。たゞ複寫などに依て其の風韻の一部分を味ひ得るに過ぎぬ。然し我國に在つても高僧達の書き遺されたものゝ中には隨分面白いものが澤山あつて、其等には時々接する機會がある。そして之等に接すれば洵に胸襟を披いて古人と語る感がある。

畫道に於ける素人藝としては、我國に在つてはどうしても文人畫風のものでなくてはならぬ。彼の院畫の傳流たる狩野派は申すに及ばず、圓山派の寫生や四條派の趣味畫にしても、それ等は技巧に重きを置くものたるが爲めに、素人畫としては不向きである。尤も四條派に至つては、寫生以上に俳味、茶道味其他の主觀的要素が多分に入れられてあるから、そして其れは多く日本人固有の趣味性より湧いて出たものであるから、素人藝にも全然不向きといふ譯ではない。然しその趣味は技巧の妙に依て發揮されんとする風があり、其風特に時代の經過と共に著しくなつて、今日では殆んど技巧中心になつてしまつて居るから、中々素人の入り難い所がある。京都の高貴なる桑門の人々の中には、隨分四條派の繪で鳴らして居らるゝ方々もあるが、然し其作品を見れば、吾等の謂ふ素人畫ではなくて、素人のした玄人の模倣畫たるに過ぎぬやうである。衒氣と俗氣とで練り上げたもので、しつこい羊羹の味がする。

之に反して南畫が素人畫に向く所以は、そが元來文人畫から發達したものであり、その文人畫は極めて主觀的で、技巧は幾ら拙くとも、所謂氣韻の生動を主眼とし、主觀の表現を專らとする所に存する。筆致は淡枯でも潤澤でも、それは主觀の要求のまにまに何れでも構はない。たゞ内に養はれて溢れんとする所のものが、紙と筆とを藉つて其所に具象表現さるゝに過ぎぬ。色はあつてもよし無くても亦可也。彩色を用ゐればとてそれはたゞ人の感覺に訴へて美感を刺戟せんが爲めばかりのものではない。やはり之に依て主觀の表現を爲すことが眼目である。從つて淡彩なるを多しとする。線の如きも亦遒勁なるもよし、纎妙なるもよし、心の往く所に從て自ら成るを以て足れりとする。又物の形態にしても、多少歪むで居やうが崩れて居やうが、多く拘泥する所でない。精神さへ露はるれば形は之に從て自ら正しくもせられ、又整へられもするのである。

唯然し乍ら、此等の一派の南畫家といはるゝ人々のやうに、其の主觀に於て何等藝術的要求も有たざるに、たゞ南畫家たるが故に、又古人は斯くの如くしたるが故にといふだけで、猿眞似に、殊更に妙な形のものを畫き歪むだ形を製造して、好むで奇々怪々なものを書いて得意がつて居るやうなのは、畫匠としてはそれでも飯が食へるか知らぬが、素人畫人は組せざる所である。鐵齋翁が當今南畫會の第一人者であり、その鐵齋翁の畫は人の頭が胴よりも大きかつたり、關節が杓子に見へたりするからとて、直ちにこれに眞似て、あれだけの藝術的良心のない者が、そんな變な形のものを畫くことを以て能事終れりとしたなら、どんなものであらう。とても二目と見られないものであら

う。然るに素人ならざる今の世の畫家中には仙厓和尚の眞似をして和尚の遺した圖上の形骸ばかりに似た繪を書かうとする樣な不心得者もあるのである。然し此等は又素人畫人の組せざる所である。

素人畫人はそんな意味の模倣をしたいとは思つて居らぬ。若し素人畫を畫くものにしてそんな模倣を專らとし之を爲すだけで滿足する人あらば、それは暇潰しとして之を爲すものに限り、敢て他から彼此いふべき限りではないが、素人畫人としての堂には上ぼり得ざるものである。

斯くいへば如何にも私自身が素人畫人として堂に上ぼり得たるが如くにも聞ゆるが、どうしてどうして、私自身は堂に上ぼるは愚かなこと、まだ門內にも入り得ざる者である。漸く眞似事をして門前をうろついて居るに過ぎぬのだ。然し私はたゞ眞似事をするを以て能事終れりとは心得て居らぬ。十分心を養つて內に溢れるほどのものを持ちたいと祈つて居る。そして其爲めに修養怠るなからんと努めて居る。そして又それは何も畫家として專門の藝術家としてといふのではなく、たゞ人間として心を豐かに思を深くし、思想と感情とを十分に養つて、然かも之を人格的に統一する工夫を凝すことが、必要だと信じて居るといふに過ぎぬ。之が充分に行はるれば、私の學問も生きて來るであらうし、餘技として繪を書いて見ても彫刻をして見ても、きつと面白いものが出來る筈だと信じて居る。さればそれは繪を書かんが爲めにではなく、人間とならんが爲めである。

然らばなぜ私は時々繪を描くのかといへば、それはたゞ繪が好きだからである。私は自分で書くことが好きなばかりでなく、人の畫を見ることが何よりも好きである。私は殆んどあらゆる事に興味を持つて居る一種厄介な人物であつて、芝居がすき、淨瑠璃がすき、彫刻がすき畫がすき、古建築を觀ることも好きなれば骨董品や古道具の類にも興味を持つて居る。盆栽いぢりもやれば野菜も植へる。家には犬と小鳥と鷄と蜜蜂とが飼つてある。然し其等の中で何が最も私の趣味の中心を爲して居るかといへば、それは疑もなく繪畫である。畫を見るためには食事も忘れて居る位である。若し私が繪に對するほど學問に熱心になれたならば、もつと私の學問は上達するであらうにと常に思つて居るほどである。

然しそれほど好きな繪畫だけれど、一方に專門の職業があるものだから、全く畫のことばかり沒頭するわけに行かず、從て畫道にかけてはいつまでも門前の小僧たるに過ぎぬ次第である。然らばなぜ畫道を專門に志さないで、經濟學のやうなものを專門に修めることになつたのだと問はるゝならば、それは好

きな道必ずしも上達すべき道とは限らないからである。つまり私は子供の時分から畫は大變好きだつたけれど、さればとて專門の畫家になる決心をするだけの自信はなかつたのである。そして私はやはり繪畫を專門としないで學問の方へ志を定めたことを幸だと思つて居る。若し私が專門畫家になつて居たならば今時分は毎年の帝展か院展かに出品しては落選し、嘸かししよげ返つて居ることだつたらうと思はれる。それを思へばせめて素人畫人たらんとして這んな素人畫論でもやつて居る方がましである。

所で又元へ戻つてその素人畫論だが、洋畫は日本畫に比すれば素人に入り易いやうに見へて實は中々さうでない。入り易いやうに見へるのは、元來洋畫は寫實畫として發達し、然かも日本畫のやうに線を基調とせず色を基調として居るものだから、一寸眞似をして見ても、どうやら似たやうなものが出來るからである。所がそれは一見左樣に見へるだけであつて、實は決してさうでない。洋畫を寫實一點張とのみ思込むで、實物の形と色彩とを模寫するだけのことが出來れば、それで洋畫が書けると思つたら、それこそとんだ見當違である。そんなつもりで素人の眞似た洋畫、即ち實物模寫一點張りの洋畫風の繪は水菓子屋の看板のペンキ繪のやうなものにしかなり得ない。それはほんとの『繪』ではないのである。

洋畫に寫實的に這入つて行つて『繪』になるまでに書きこなさうとするには、中々素人では手にをへぬ技巧の習練を必要とする。其點日本畫に於て圓山派や四條派の寫生風で然かも藝術品として價値あり品格あるものが、素人藝に適せないのと相似たるものがある。素人畫にしてはどうしても表現的な傾向のものでなくては、面白味がないのだから、洋畫に於ても亦素人が之を試みる場合には、近頃の表現派的の傾向のものに於て其の領域が見出されねばならぬ。併し表現的なる洋畫に於て素人畫として面白味のある氣品高く風格あるものを生み出さんことは、中々容易なことでない。我々日本人としては、やはり文人畫風のものゝ方が扱い易いやうである。素人で表現派的な洋畫をかけば、たゞ色と線との亂舞する奇怪なものとなつてしまう。さればとて印象派的のものをかけば繪具の見本のやうなものになるか、然らざればモザイックのやうなものになつてしまうのである。

そんな風だから、私も、留學中正宗さんや足立さんに手ほどきをして貰つて洋畫を始めて見たが、爾來今日に至るまで、とんと上達しない。今以て看板屋の下稽古をして居るに過ぎぬ樣な有樣である。所が昨冬來津田さんが京都へ來られて懇意にな

つたのが機會となり、此頃では津田式の日本畫から這入つて行つて、文人畫風の日本畫をやつて見る氣になつて、既に一二枚書いて見た。書いて見ると拙い技巧ながら何かしら自己のものが表現され得て、大變な愉快を感ぜずに居られない。これだ、之れで進むで行つて一種の新式な文人畫として我流の素人畫を完成して見たいものだなどといふ野望が湧いても來たやうな次第である。だといつてあまり繪にばかり凝つて居る暇を有たぬ身だから、とてもものになりさうにはないが、せめては漱石先生の程度まで位には進みたいものだと祈つて居る。そして飽迄素人畫らしい所で押通して行きたいといふのが、私の希望である。

最後に今一度私の一言したいことは、素人のかく畫やその他素人の藝術を、素人の餘技として頭から輕蔑することは、止めて貰ひたいといふこと之である。素人の藝術でも其の態度が眞劍であるならば、それは生命の發露である。其所には、不眞面目なる匠人の技藝以上に貴いもの〻含まれたるを、承認して貰はねばならぬのである。

云ふべきことなければ

里見弴

餘技としての、長唄に就いて何か書け、と云ふ。無論女の改造に載るのだらうと思つて訊くと、男の改造との答へだ。晝寢の蠅よけに、顔の上に載せられる運命をもつた八月號とは云へ、書かせる方もいい加減だらけたもんだが、それをまたきつぱり斷らなかつたこつちの間拔さと來たら、腹が立つくらゐだ。昨日電報で催促されて思ひ出し、うんざりしてゐると、今日、四時間もか〻つて新聞の一回分やつと出來あがり、これから散步がてら町のお祭でも見に行かうかと思つてゐるところへ、改造社につきもの〻やうな、鹿兒島辯のヨカチゴさんが原稿を取りに來た。汽車だけで三時近くもか〻る往復を思ふと、まさか空

手で歸せない。まだ陽があるから、早く行つて海にはいつて來たまい、と、猿股や手拭を持たせて出してやつたが、……さて、もと〳〵書くことなんぞありはしないのだ。

一體私は唄が好きなわけでもなんでもない。やるくらゐなら、義太夫よりほかにやつてみたいものはない、と云ふのが兼ての持論なのだが、所詮ものにならう氣支はなし、何によらず下手でよからう筈のないなかにも、殊に義太夫の下手と來たひには、自他ともに難澁この上ないくらゐはちやんと心得てゐる拙者故、間違つてもそんな氣は起さずにゐたところ、八年ほど以前、うちでは「吾八さん〳〵」と稱へてゐるところの畫友、畫家の山内神斧君とうちの女房とが結託して、長唄の稽古を始める相談が成立したのだ。先達主婦の友の口繪で紹介されたところによると、師匠は吉住小三郎と云ふことになつてゐたが、あれは同誌記者先生の思ひ違ひか、それとも景氣よく與太をとばして置いたのか知らないが、兎に角事實無根で、お弟子の小十郎、と云ふよりは江本舜平（現在は山田姓を襲ふ。）と云つたら一番通りがよからうと思ふ、有名支那樂の研究家で、河東、一中、さう云ふもの〻方が本格なのだが、姑く世の好尙に從つて長唄で立つてゐるといふ御仁、その江本さんに出稽古をして貰ふことになつた。當時、山元町一町目の、變電所裏の拙宅といへば、二階八疊六疊の階下は八疊一間、あとは玄關と二疊半の女中部屋があるきりの家、そこで當然二階の八疊が稽古場になるとすれば、とても隣の六疊にゐたゝまれず、勢、階下の茶の間にでも、つまらなく一人くすぶつてゐなければならないわけ。え〻それくらゐならいつそのこと俺もやるかな、と、——これが長唄を習つた動機なのだから、ちつとも賴母しい弟子ではない。江本さんには内證だが、これが正直僞りのないところだ。

そんなわけで始めたのだが、然しやつてみればなんだつて面白味のなからう筈はない。一時相應熱心になつて、毎月研精會にも欠かさず聞きに行つたりして、勸められ〻ば臆面なしに、御師匠さんの、先方から掬ひ込んでくれる三味線でなしに、見も知らぬ他人の、そんな削りなんぞあらう筈のない三味線でも、滿座のなかで、平氣で脱線藝を演じたものだ。それでおよろしかつたら、今すぐにでも聞かせてあげる。なに別に惜がるほどの藝ではなし、決して御散財はかけないが、その代り、長唄について何か話せ、は困る。なんにも知らない。それでも強いて云へなら、我が田に水で、小三郎が一番うまく、同派の長唄が、上品でもあり、味も深い、とかなんとか、令孃がたでさへ御承知のことを、大雜誌改造の誌上を以て御吹聽に及ぶとし

ようか。

その後、逗子、白醉亭に隱棲するや、惜げもなくよして了つたのだが、地震後、また東京住居をすることになり、今度も吾八さんと女房との先棒で、また／＼江本さんをお願ひしたところ、間もなく鎌倉にほどよい家が見附かつたので、そこへ落つき、止むなく女房はよしたが、お願ひしたばかりですぐまたお斷りするのも惡いと思つて、私だけは毎週一度づゝ態々そのために上京してゐる次第。然し、實のところ、長唄には大ぶん飽きが來たので、今度は……、よさう／＼、天機洩らすべからずだ。うつかり口を滑らすものなら、また餘技として××のお話を、と來るだらう。危し、危し。

——丁度ヨカチゴさんも歸つて來た。聞けば、大きな龜が二匹、網にかゝつてあがつたよし、ヨカチゴさんが背なかに乘つてみても平氣でゐたよし、酒をのまして放してやるのだと人々云ひ合つてゐたよし。こゝらで私も放して貰つて、龜にあやかり、一杯やるとしようか。

七月七日、夕刻鎌倉にて

能樂

高濱虛子

私が能樂を嗜むのは唯嗜むのである。が、強いて理由をくつゝてけ見れば理由のない事もない。

私が數へ年八歲より、以前、即六七歲の事であらう。父が村の百姓に謠を敎へる場面を朧氣ながら記憶の鏡にめ止て居る。何でも村の若者等が五六人屛風の引廻してある座敷にづらりと並んで坐つてゐる。父が一人此方に坐つてをる。たゞ其だけの場面である。どういふものだか、其が謠を敎へる場面だといふことを承知してゐる。父の聲も若者の聲も聞こえぬ。

同じく八歲より以前、父が松山より歸つた時、父の傍へ來いといふのに、私は母の傍を離れかねて、はにかんで行かなかつた。其が松山にお能があつて、其お能をしに父が出向いた。二三日か四五日か留守にした。其揚句に家へ歸つた時であつた。

私は寢起きであつた。晝寢の目を覺まして見ると父が居つた。父が來いと言つたが私は父の傍に行くのを耻かしく思つた。逡巡として行かなかつた。父と母とが笑つた。其笑つたことがよけいに羞耻の念を私に與へた。其時が松山にお能をしに行つて歸宅した時であつたといふことをどうして知つたのか、私はさう記憶して居る。

八歳より以前といふのは八歳の時に別府村の百姓生活を見限つて父は松山の城下へ歸つたのであつた。

私は炬燵に眠りつゝある。其時に耳元に謡の同吟が鳴り響く。美妙な樂器を奏する如く鳴り響く。私はだん／＼と眠りに落ちて行く。ほの／＼と暖い炬燵の溫氣は體中に漲り渡つて、百花が亂れ咲いて居る花園にだん／＼落込んで行く如く快い眠りにつきつゝある。耳元には同吟の謡が、五色の色絲が一絲亂れずにわがねられつゝほどけつゝ延びて行く如くに響く。

これは私が九歳か十歳の頃の事である。私の家には謡會があつて、座敷には父の謡の友が十人許り來て居る。茶の間の方は其客もうけの爲めに混雜して居る。眠くなつた私を布團を敷いて寢かす遑がなかつた。其で私は炬燵に足を突込んでうたゝねをしつゝある。其時耳元に座敷の同吟の謡が響いて來た心地よい記憶である。

大勢の友達と一緒に能のある東雲神社の高い石段を走り登つてゐる自分がある。櫻の花の盛りで打ち仰ぐと松の間に花の雲が見える。石段を登りつゝあると鼓の音が響く。時々風の具合か聞こえぬことがある。時には又手に取る如く聞こえる。其音色は黄色い色である。さうして打晴れた音である。これは大鼓の音である。

何百段かある石段を登り詰めると、其所には幕が引廻してあつて、其幕が風にあほりつゝある。其幕の間から人が出這入りしつゝある。私は友達と一緒に其幕の外面を通つて、神社の前にある大きな鐵の天水桶の傍に行つて、其天水桶の臺になつて居る石の上に登つて、天水桶の環につかまつて見る。能舞臺は五六間先に見えて其舞臺の上には地謡の中に父を見出すのである。

古びた能舞臺の上には美しい衣裳をつけたシテやワキが出て居る。其がだれそれであるといふことを私は知つてゐる。又囃子方や地謡の人々が誰であるといふことも知つてゐる。其等の人は皆屡々宅へ見える人等である。私は其能に演ぜられるところのものを見るよりも其等の知つた人々がシテやワキに扮してゐるといふこと、又地謡や囃子方に坐つてゐるといふことの上に興味を覺えるのである。又見所を見渡して見ると、其處にゐ

る人も大概知つた顔である。どこそこのおちさんおばさんを始め私の幼な友達である多くの男の子や女の子がゐる。其等の人は皆家族連で、辨當を持つて來てゐるのである。春の日永をこの場に一日暮さうと思つて來てゐる人々である。舞臺の人も見所の人も同じやうな心持で、お能といふ坩堝に溶かされて、此一日を樂しまふとして來てゐる人のやうに見える。

其は私の十歳から十五六歳迄毎年くり返されたことである。

始めて笈を負ふて京都に遊んだ時、折節京都に來た兄に誘はれて西陣の何とかいふ小屋にかゝつてゐる今様能狂言を見に行つた。今様能狂言といふのは照葉狂言の流れを繰んで男女が能狂言を演ずるもので、能の或部分に三味線を加へて今迄嚴肅な能であつたのが急に踊りに變るやうなものである。其今様能狂言の大夫はお作と言つて三十七八の女であつた。其大夫の娘はお房と言つて十五六の小娘であつた。其小娘の外に二人の弟子があつた。何といふ名であつたか今は記憶しない。兄はよく知つてゐたので樂屋に行つて話した。私も兄について樂屋に行つた。其時私は小便を催したので便所は何處かと聞いた。女弟子の一人が立つて手に手燭を持つて私を便所に導いた。其女弟子は甃下地に結つて着物は今衣裳を脫いだ儘の白の胴着のまゝであつた。其が艶な姿に私の眼に映つた。

其翌年であつたか、夏休みに歸省した時、折節京都の南座にかゝつてゐるお作に或物を屆けてくれるやう崎山といふうちから頼まれた。此崎山といふうちはお作の一座が松山に來た時分特にお作をひいきにして其以來大變心易くしてゐたのである。私は其ことづかつた物を持つて南座に行つて見ると倜儻とした樂屋にお作やお房や二人の女弟子や其他男が二三人ゐた。お作は長火鉢の前に坐つて煙管で煙草を飲みながら話した。私はどんな話をしたか記憶しない。唯薄汚い樂屋にしよんぼりとゐる彼等一座のものを哀れに覺えて歸つたことだけは記憶に殘つてをる。

後年星ケ岡の茶寮でホトトギスの新年俳句會を催した時分、此一座のものを招いて餘興を遣らせた事がある。其時私は大皷を打つて、お作が小皷を打つて、お房が太皷をうつて何か一番囃子をやつたことがある。

鎌倉に能舞臺が建つて、其處で素人能が催ほされて私がはじめてシテをやつたのは私が四十一歳の年であつた。

それから昨年の大地震まで丸る十年の間、年に數回素人能を催した。昨年の震災で能舞臺が倒壞した。これからは年に二回東京の細川家の舞臺を借用して同じく素人能を續けやうと思ふ。

自分が親しく舞臺で演じて見ると、子供の時分、若い時、播

れの眼を以つて見たお能とは多少違ふ心持もある。

室生九郎とか梅若實とか、桜間左陣とかいふ人との能もしばしば觀た。其等の人のやつたやうな藝が素人の私に出來るものとも考へない。が素人藝といふものは玄人の目から見ると一種の道樂にしか過ぎないであらう。しかし素人の書いた小説とか繪畫とかいふものに玄人の眞似の出來ない味はひがあることもある。金をもうけてやるものと金を貰つてやるものとが玄人素人との差別であるといふ以外藝術の上に玄人素人の境を設ける必要はあるまい。三間四方の狹い舞臺の上で古い型にはまつた藝術を演ずる時に私の血が湧き立つことがある。この血潮の湧き立つ音には永久の響きがあるやうに思へる。「滿目青山は心に在り」といふ弱法師の一節の科白をする時の心持は何百年前の人の心持と私の心持とがぴツたりと一つにあるかも知れん、又た違つた心の昂奮狀態に置かれてゐるのかも知れぬ。子供の時分などに能を見る度に、一つ自分でもやつてみやうかな、といふやうな考がおこぬこともなかつた。しかし强ひてやつて見ようといふ程の熱心もなかつた。が、遂に自ら立つてやつて見るやうになつた。

もし誰人の心の底にも、ものに扮してわざおぎめいた事がやつてみたいといふ考があるものとすると、それが自然に私を能樂の道に驅つたものかも知れない。

淨瑠璃の文句の一節を心の中で繰り返へしてみるのが、人々の通有性だとすると、それが私をして謡をうたはしめた原因かも知れぬ。顏にお白粉をつけて、唇に紅を塗つて、振袖の着物を着て、十七八の小娘になる代りに、小面の面をつけ唐織を着てお能に出て來る女性に扮するのである。顏に紅隈を塗つて、大きな太刀を挾んで、「えいつ」と掛聲をして手を擧げると、二三十人もゐる奴が一度に背宙返りをするやうな、荒武者に成る代りに、大べしの面をつけて撞木を携へてあるのである。

一は婬靡浮華、一は閑雅素朴。一は今様の世能人情を示し、一は幽玄蒼古の古態を旨とするの相違がある許りである。

私は能樂の流儀といふことに少しも重きを置かない。其には議論があるがこゝには止める。

エイ・シャク・バイ

——れんれつれつれ——

辻　潤

山犬の資夫が時々俺のことを「エイ・シャク・バイ」と云つてからかふが知らない人間にはなんのことだがわからないのはきまりきつた話だ。昔と云つたつてツイ七八年も前の話だが下谷の稲荷町の裏長屋に燻ぶつてゐた時分、俺は苦しまぎれに「英語、尺八、ヴァイオリン教授」と云ふ看板を出したものだ。ところが英語の方は多少僕と云ふ人間を知つてゐる若い連中が道楽半分、遊び半分に集まつて來たが、尺八の方の御弟子は一人も來なかつた。その時の連中はさすがに先生の薫陶よろしきを得たせいか、今では錚々たる社會運動家になつてゐる者もあれば、立派な詩人や批評家やドラマチストになつてゐる者もある位だ。

場所が場所だから仕方もないが、あの時分俺のところへヴァイオリンを習ひに來ない奴は馬鹿みたない者だ、ヴァイオリンの先生は勿論俺ではなかつた、日本でも有數な提琴家の佐藤謙三が仔細あつて敎へに來てゐたのだ。その仔細を饒舌つてゐると長くなるから略すが、彼は四年ばかり前に一挺の提琴を携へピヤニストの妻君をつれて藝術修業の爲めに歐洲へ出かけたが俺は彼が無事に彼の藝術を完成して歸へつて來る日をひそかに囑望期得してゐるのだ。彼こそは稀れに見る藝術家魂の所有者だ、彼こそは上野のアカデミイの奴隷になるにはあまりにも強い個性の持主だつた。

ところで、その時は彼の以前からの御弟子のドラビンズ・テガールとかなんとか云ふ印度人が一人來ただけで誰れも習ひに來る者はなかつた。俺は佐藤の來る日を樂しみにして、稽古が終るとよくウイニヤウスキイだのショパンだのと勝手な註文をしては彼を困らしたものだ。結局、彼のヴァイオリンも俺の尺

八も商賣にはならなかつた。

「僕は全體、文筆で生活しようと云ふ意志を少年の時から一度だつて起したことはなかつたのだ。唯だ十四五歳の時、始めて尺八を吹いて身を立てようと云ふ考へを起したとがある――」と俺は「浮浪漫語」の序詞にも書いて置いたが、俺が尺八を吹く位なことは御存知の人がおることだと思ふ。が實は評判程の代物でないことは聽いた人ならわかる筈だ。これは別段謙遜して云つてゐるのではない、俺は自分の吹く尺八がうまいかまづいか位の判斷の出來ない程、それ程下手クソではないと云ふ自信があるからだ。

　尺八の音にひきつけられたのは俺が七八歳位の頃からだ。その頃、俺のおやぢは三重縣廳の俗吏を務めてゐたが、俺の住んでゐた隣りに尺八の名人がゐた、この人も裁判所かなにかに務めてゐた人だが、兎に角今憶ひ出してもたしかに素人としてはうまかつたと思ふ。土曜日の晩などに俺達はよくその家へ呼ばれて行つた。妻君は京都の人で主人の尺八に合せて簡單な地歌の四ツ五ツ位はひく人だつた。俺のおふくろは江戸の女だから地歌は知らなかつたが長唄がかなり達者なので、その妻君と長唄と地歌の交替をやつたり、長唄物の合奏を受け持つたりした。俺のおやぢは氣が向くと下手な一中節を唸つたりしたが、よせばいいがと子供心にもよく思つたことだつた。

　俺はその時始めて地歌の「雪」と云ふ古風なリードを聽いたのだが、今でもおふくろとその歌を合奏する時にはその頃のことを思ひ出さずにはゐられないのだ。

　樂器で一番始めに手にしたのは手風琴と銀笛だが俺達が伊勢から東京へ歸へつて來た時で神田の佐久間町に住んでゐる頃で俺が十か十一の時だと記憶する。その頃俺達は叔父の借家をかりてゐた、從兄弟のところに手風琴があつて、彼はおやぢが留守になると、ひそかにその手風琴を藏からとり出してひいたのだ、その手風琴は從兄弟の所有物ではなく、その家が昔質屋をしてゐた時分にとつた、質の流れなのだから滑稽だ、今考へてもいたづらに腹が立つが、そこのおやぢ―つまり俺のおやぢの弟――などは頑冥不靈の代物みたやうな唐變木のワカラズやの、小人の模範的人物で、苟しくも子供が樂器などをいぢくることは不具戴天の一大罪惡であるかの如く心得てゐた、そのくせ自分だけは時々あまりうまくもない謠を唄つて得意になつてゐた――つまり彼の理屈によると謠は胸禁をひらいて衞生の爲めになると號してゐたが、まつたく彼は腹ごなしの爲めにやつてゐたに相違ない、しかしどう云ふ量見だか娘だけには琴を習ふことを許してゐた。

俺達は叔父が留守になると手風琴や銀笛や石油の空罐などを叩いて樂隊の眞似をして遊んだ。日清戰爭がすんだ間もなくの頃で、大捷軍歌と云ふのが流行してゐた。あの中には中々いいのが澤山あつた、日本で出來た軍歌としてはまつたく傑作の方だ、中でも「雪夜の斥候」などと云ふのは歌も節も兩方ともいい。「鷄の林に風立ちて」とか、「煙りも見えず雲もなく」とか今俺は書きながら頭の中でそれ等のメロデイを歌ふとさすがに懷かしい感じがして來る。

全體、歌の節とか、物の臭ひなどと云ふものはかなり人間の sexual instinct に關聯してゐると見えて、俺は今でも「青葉しげれる櫻井の――」と云ふ節を田舍などで聽くと、きまつて十二歲時分に角筈の銀世界で見た御下げに結つた美しい少女が忽然として俺の眼前に浮んで來る。彼女はその時、その顏を實になんとも云はれない情趣のこもつたきれいな聲でうたつてゐたのだ。

どうも餘計なことを饒舌る癖があるが許して呉れ給へ。

學校から歸ると俺は包もとかずに尺八を吹いてゐた、かねてからの望みを愈々實行してゐるのだ、なんでも下谷あたりの古道具屋でめつけて二三十錢で買つて來たのだが、ボー〳〵云ふ音の出る尺八と云ふ名ばかりの竹ヅツポオであつた。吹いて經驗のある人なら說明の限りではないが、なにが厄介だと云つて尺八位厄介な樂器は恐らく世界中探してもあるまい。始めはまるでピーともプーともスーともなんとも云はないので、それからいくら音樂の才能がある人間でも唇があまり厚かつたり、齒並が變だつたり、息が弱かつたりしては尺八を吹く資格はゼロだ。つまり色々な條件が備はらないと尺八は吹けない、だから誰れにでも吹けると云ふ樂器ではないのだ。

やつとどうやら自分の知つてゐる唱歌位が曲りなりにも吹けるやうになつたのは始めてから半年位は充分かかつた、それも殆んど每日欠かさずに吹いてゐてだ。勿論、俺は誰れにも敎はつたわけではなく、獨り稽古などと云ふ怪しげな手引草を先生にして自己流にやつつけてゐたのだ。御陰で、學業の方はまるでおろそかにして尺八に夢中になつてゐた。

俺はその頃高等二年（今の尋常六年）を出て、開成中學に通つてゐた、しかし俺の怠惰と家庭の事情――つまり經濟狀態で――中學の二年を修業せずに退學してしまつたのだ。

兩親とも子供にはかなり甘い方だつたが、敎育のことなどに就てはまるで無方針だつた、全體どんなことを考へてゐたものか今思つてもまるでわからない、しかし俺は自分のわがままをかなりな程度に放任してくれてゐた兩親に感謝せずにはゐられ

ない。

學校をやめたので俺は益々いい氣になつて尺八に沒頭した。おやぢはそれでも時々見兼ねて小言を云つたが、おふくろの方は至極呑氣なもので、俺の趣味を暗々裡に助長する傾向があつた。

「じゅんちゃん　おまへがそんなに竹が好きなら、いつそどこかいい師匠さんのところへ習ひに行つたらどうだい」と、或る日のことおふくろがきり出したので　俺は〆太と心の中で思つた。おふくろは自分でも暇さへあると三味線を出しては歌つてゐたが、内々俺の尺八の進歩を喜んでゐたのだ。

俺は早速おふくろの忠告に從つた。どこかにいい先生があるかと尋ねると、おふくろはしばらく考へてゐたが　——

「さうだね、此處から遠くない處ろなら先づ代地にゐる御師匠さん位なものだが、あすこはおまつりのやうな子供の行くには少し上等過ぎるが、どうせ習ふならいい御師匠さんのところへ行かなくつては損だから、あすこへ行つてみるか？——私が一緒に行つてあげてもいいが少しめんどうだから——」と云つた。

その代地の御師匠さんといふのは今の荒木古童氏のおとうさんで、晩年には竹翁と云はれた人だが、その頃はまだ古童と云つてゐた。おふくろは娘時代から、度々おさらひでその師匠に會つてゐるので竹翁が尺八の名手であることを知つてゐたのだ。

俺は隨分シャイではあつたが、尺八を習ひたさの一心から或る日勇氣を出して、代地の竹翁先生の門を訪づれた。俺はその時、塾へでも入門でもする氣かなにかで、規則書を拜見したいのですがとかなんとか多分云つたに相異ない、今でも記憶してゐるが、その時取り次に出て來たのは今の荒木古童夫人で、その時は恐らく御嫁さんに來たての時だつたに相異ない。如何にもやさしい感じを與へられた。

飛白の短筒をきた少年は彼女から使ひの書生とまちがひられたのだ。俺はその時キツト顏面を赤くしたにちがいない、實に今思ひ出しても恥かしいやうな調子でやうやく自分が習ひたいのだと云ふことを說明した。若しあの時、彼女が意地のわるい女だつたら俺は玄關拂ひを食はせられてゐたに相異ない。

「少々御待ち下さい——」と云つて彼女はひつこんで行つたが、やがて竹翁先生自身が出かけてきて、更に角座敷へ通された。

竹翁先生はその時もう七十近かつたのだと思ふ、頭はビンズル尊者のやうに光つて眉が半白になつてゐた、少し前屈みになつていつも絹綢の道行をひつかけてゐた。客座敷の傍にある三疊位な部屋は先生の工房で、暇さへあると其處で、仕事をしてゐたらしい。——つまり尺八の製作に從事してゐたのだ、その

通のテクニックで云へば「竹を開いて」ゐたのだ。

稽古日は三の日と八の日で、——今なら、月水金とか、火木土と云ふところだが、その頃の遊藝の師匠はみんな「三八」とか「二七」とか云ふ言葉を使つてゐた。御弟子はみんな中流以上の人達ばかりで　相當年配の人が多く俺のやうな年少者は一人もゐなかつたのでみんなから珍らしがられた。相弟子の中すには師匠が「ゴゼン、ゴゼン」と呼ぶ殿樣などもゐたが　子供心にもその「ゴゼン」と云ふ音が如何にも可笑しな感じを與へたので、腹の中では笑つてゐたが、師匠が「ゴゼン」と云ふのだから　やつぱり「ゴゼン」と云はなければわるいのだらうと思つて俺もその人と話をする時は「ゴゼン」と呼びかけてゐた。しかし、その「ゴゼン」案外ひらけた平民的？——の「ゴゼン」で俺のことを「君君」云つてチョクな話し方をする氣持のいゝ人だつたが、尺八はあまりうまくなかつた。

俺はタチがわるくなかつたので、師匠から隨分と可愛がられた。半年位通つてゐる間に、愈々熱中し始めて俺は專門家になつてやらうと云ふ決心が起つたので、一方經濟上の都合もあつたから內弟子に住み込んでやらうと或る日その希望を師匠に話したところ、懇々とその不心得を戒められた。その理由はつまり、尺八で生活することの困難、時勢の推移、年が若いからこれから先きならうと思へばなんにでなれるから、奮發して學問でも勉强し、尺八は樂しみに吹けばよろしいと云ふやうなことだつた。しかし俺には尺八吹きにならうと云ふ以外にまるで目的も學問の見當もつかなかつたのだ。

荒木家は琴古流の實家で、門弟で一家をなして師匠になるとみんな「童」と云ふ字を號の下へつける、——たとへば流童、銀童無童と云が如きものだ。

琴古流では曲目を本曲と外曲との二つに分けてする。竹翁先生のところでは本曲をやらないうちは決して外曲を敎へなかつたものだ本曲と云ふのはつまり尺八本來の曲の意で、虛無僧によつて昔から傳へられたものだがメロディは至つて單調で出來るだけ長く引つぱつて吹くのだ。餘程名人が吹かない限り、素人が聽いては一向に面白くないものだ、だから大抵の人間が本曲ばかりやらせられると閉口してやめてしまふ。「吟龍虛空」だとか、「巢鶴鈴慕」だとか、「志津の曲」だとか、名前だけ聽くと嚇かされるが別段たいしたものではない、しかし古傳の三曲と云はれてゐる曲の中の「虛空鈴慕」と云ふのは隨分と好きな曲だつた。比較的短かくしてよく黃昏の感じを出してゐる。「夕暮の曲」などは蓋し本曲中の傑作なのかも知れないその中には晩鐘の凝音をとり入れてあるのだと師匠が講釋をしてくれたことを

俺は末だに記憶してゐる。

やれと云ふなら、ペダントリイの種ならまだいくらでもあるからやつてもいいが、そんな風な智識なら、謡曲類纂とかなんとか云つたやうな専門の書物にいくらでも精しく書いてある筈だから特志の人は圖書館へでも出かけ給へ、序に思ひ出したから云ふが俺はその頃、博文館で發行された「琴曲獨り稽古」といふ本をしきりに愛讀したものだ。これは多分通俗百科全書と云ふシリーズの中の一冊だつたと記憶するが、この本を讀んで琴の彈けるやうになつた奴は恐らく一人だつてあるまい、なんだつてあんな表題を付けたものかわからないが、俺はその本の御蔭で日本音樂の（[illegible]）を得ることが出來た。それは寧ろ「日本音樂概觀」とでも云ふべき種類の本で、琴曲に關する智識を主にして書かれたといふ迄に過ぎない、しかし俺にとつては實にインテレスティング本だつた。

尺八と云ふと素人は一口に「鶴の巣籠り」とか、「追分」だと云ふが追分の方は兎に角として「鶴の巣籠り」などと云ふもの本を常に聽いた人間が今迄に一體何人あるのだと云ひたくなる。これは恐らく忠臣藏の九段目で本藏の吹く奴が「巣籠り」なのでその邊から名前だけがイヤにポピュラアになつたものに相違ないと思ふが、尺八の方で「巣籠り」と云ふのは先つき一寸擧げた「巣鶴鈴慕」の俗名なのだが、尺八の曾でも誰れもそれを滅多に吹く者はない、本曲と云へば大抵「鹿の遠音」と云ふのをセイ／＼連管で吹くことに相場がきまつてゐるのだ。それから「巣鶴鈴慕」と云ふのは名人が吹いてもあまり面白いものではない、鶴の啼聲を模倣したやうな音をやたらと並べたものにすぎないのだ。

しかし、若し吹いて面白く聽かれる「巣籠り」があるとすれば、それは胡弓の方の「巣籠り」で、その方には簡單な歌がついてゐるのだから、俺は何しろ後にも先きにも唯だ一度だけしか聽いたことがないのだから、あまり自信をもつては云へないが、その方ならたしかに聽いて面白い、しかしその時俺の聽いたのは尺八の方ではなく胡弓を主とした三曲合奏なのだから、尺八の方でどの位な味ひが出るかは聽いて見ない限りわからない、なにしろ餘程厄介なものらしいと見えて今迄に吹いたのを聽いた試しがない、しかし昔はきつとそれを充分吹きこなした名人がゐたに相違ない、また一つには明治になつてから胡弓を彈く人が少なくなつて、完全にそんな曲を記憶してゐる人が少ないこともその原因の一つだと思ふ。今では一體誰れがゐるのだか、ゐたところでたいした名人がゐると思はれない。先づ山室千代子と云ふ人位なものなのか、――その人の胡弓も隨分昔しにき

いたきりだから、漠然とした記憶しか俺の頭に殘つてはゐない。俺のきいたその「巣籠り」の胡弓と云ふのはたしかにお千代さんと云ふ人のおとうさんが彈ひたものだつたと思ふ。

外曲と云ふのは主として琴曲のことなのだが、たいていは尺八が伴奏樂器になるのだから單獨で吹くべきものではない、尺八を聽かせるなら三味線二挺に尺八と云ふのが一番移りがいい、琴古流では權式を重んじて端唄や長唄や、流行唄などを俗曲と稱して吹くことを嚴禁したものだが、俺は勝手になんでも吹いた、殊に追分とか米山甚句などと云ふ民謡は單獨で吹く場合一番尺八に適してゐる、それをやかましく云ふのはつまり音樂上のブルジョア意識と云ふ奴さ。俺は耶蘇になつてゐた時は盛んに尺八で讃美歌を吹いてゐたものだ、これなどは全く異端外道の類ひだ。兎角、俺は昔から藝術上の惡趣味にかぶれ易いので遂にダダイズムなんかをふりまわすやうになつてしまつたのだ。

師匠が今戸へ越してから、俺は間もなく通ふことをやめた、俺の精神的狀態に危機がやつて來たのだ、俺は呑氣に尺八などを吹いてはゐられなくなつた、もつとシリアスな問題が頭の中をカチャ／＼に掻きまわし始めた。俺は自分の好きな文藝を一切放擲して勇敢に走つた、――原因はさう簡單に片づけるわけにはいかない。その話は又他日に讓る。

中絶した尺八を再び吹き始めたのは俺が二十一二歳に達した頃だ、四五年やめてゐたのだがやはり俺の本能は尺八を吹かずにはゐられなかつたと見える、――その頃が恐らく一番うまく得意になつて吹いてゐた時だつたと思ふ、音樂會に呼ばれて行つたり、方々のおさらひなどによく出かけたものだ、二度目についた師匠は竹翁門下の高弟で可童と云つた人だつたが永井荷風氏もたしか昔その人の門下生であつたことがあるやうに記憶する。その人も俺が知つてから二三年して病死したが、その時まだ五十歳にはなつてゐなかつたと思ふ、今、俺の手許にある笛はその人が拵らへたもので、竹翁の書いてくれた譜本と一緒に故人を記念すべき唯一のかたみである。

宗家の荒木古童は別として、俺が今迄聽いたうちで一番感服したのは鈴田倉之助の尺八だ。彼はたしかに斯道の天才と云つても差支ひないと思ふ、惜しかな、彼も亦故人の一人である、彼の死んだのは今から約十年程前でたしか彼の三十歳前後の時だつたと思ふ、音樂學校のヴアオリン科の出身でオーケストラのある時はいつでもフリュートを吹いてゐた、三味線も少しは彈いた、しかし、それ等は彼の餘技で、とても尺八とは比較にならなかつた、ユンケルも彼の尺八には驚歎してゐたと云ふ話

だ、——實にその音色は天下一品で尺八をあれ程デリケートに吹きこなす人間は先づあるまいと思ふ。しかし、今更こんなことを云つたつて親しく聽いたことのある人間でなければまつたく話は通じないのだ、——音色の點から云へばヴアイオリンを除いて尺八位優婉微妙な音の出る樂器は先づ他にはあるまい。

俺はずいぶんしばらく尺八や琴の會へ出かけないから、現代の趣勢がどんな風になつてゐるかまるで知らないが、本居氏の新らしい邦樂運動で、尺八が果してどれ程の新味を出してゐるかに就ても知りたいと思ひながらつい無精をしてゐるが、どう考へてみてもビルデイングや、アパアトメントやキヤフヱとは緣のない樂器のやうに思はれる、——さう云へば三絃でも、琴でもさうだが、腰をかけて譜見臺を前にしてやるべきものぢやない。

尺八ではマーチは吹けない、樂器の中でも一番ガイストリツヒで、諸行無常の哀音を傳へるに最も適してゐる、樂器の最も風流なるものだ。

著音器に非ざる限り、樂器は凡て夜聽くべきものだ、殊に尺八に於て然りとなす、太陽直射の下に奏でられる尺八などと云ふものは到底考ふべからざるものだ、だが孰れにせよ、早晩、亡びるべき運命を持つた樂器だと思ふ。

俺はだが今でも旅に出る時は必ず携へることを忘れない——勿論人にきかせる爲めではない、いくら古い樂器でも、藝は拙劣でも俺自身の旅情を慰さめるには足りる、ないよりも遙かにましだ。時代錯誤の風流人と言はば言へ！「總領は尺八を吹くツラに出來」とは夙に江戸の川柳子の喝破したところだ。（一九二四、六六）

犬の趣味

高畠素之

神經的な犬

元來が朴念仁に生れついたせいか、聊かもその風流を誇るに足るべき餘技は持ち合はせてゐない。本職としてゐる仕事が、

可成根氣のいる反覆勞働であるところから、心身の疲勞を補給する上に於いて娛樂的變化を必要とし、好んで芝居見物に出掛けたり、活動寫眞を見たりすることはあつても、これは趣味といふべく、余りに受動的な享樂である。强ひてそれらしいものを求めるとすれば、先づ犬道樂を數へなければなるまい。

　考へて見れば、僕の犬道樂も久しいものである。今のところ土佐一頭、秋田一頭、土佐ブル一頭、都合三匹の鬪犬を手許に飼つてゐるが、その朝夕の運動から食物の世話に至るまで、一切を人手に依らず、さら臆劫がりもせず始末してゐるのだから、風流要素の趣味は暫く別として、道樂熱度だけは淫するといふに近いらしい。何事に限らないが、僕の趣味としては靜的であるよりも動的であるが向きである。その好みはやがて趣味品を選ぶ段になつても、書畫骨董といふが如き死物よりも生物、同じ生物でも植物よりは動物、鳥よりは獸、猫よりは犬といふ風に作用して來る。犬の最も愛すべきは、喜怒哀樂を直ちに外部に表す點である。嬉しい時には全身を投げかけて飛びついて來るが、叱られれば尾を垂れ首を俯げ、文字そのままの哀願に傾けて只管に宥恕を乞ひ願ふ。その表情は如何にも神經的でまた交感的である。表情ばかりではなく、性狀そのものが俊敏で、驚ろくべき臭覺と聽覺を以て本能的に人間の感情を吸み分ける。呂律のまわらぬ人間などと對談するよりも、犬を相手にしてゐる方がどれほど助かるか知れない。感情の直截的な意味に於ては、寧ろそんな人間よりも犬に對して、遙かに同類意識を持ち得るといつていい。

特種犬の要素

一口に犬とはいふものの、その特色的に發達した技能に從つて、番犬、獵犬、玩犬、鬪犬等の品種に分けられてゐる。夫々を愛寵すべく珍重すべきであるが、中でも僕は鬪犬を最も好めるものとしてゐる。理由とするところを平たくいへば、その爭鬪に際しての如何にも洗錬された技巧、勇氣、力倆を又なきものとする故である。鬪犬に就いては後段に改めて說くつもりであるが、鬪犬に限らず、すべて特殊の技能を有つ犬に取つて、必須的に缺くべからざる要素をなすものは、品種、飼育、訓練の三條件である。その三條件の一つでも缺くことがあれば、特殊犬としての資格が失はれた譯である。

　先づ品種の方からいへば、通例番犬ならテリア、秋田、獵犬ならセツター、ポインター、玩犬ならクオツクステリア、コリー、鬪犬なら土佐、ブリテリアといつたところに指が屈せられる。いづれも純種を守り、而も親犬の優秀なることが大事であ

る。これは原則的に、種の不純に比例して技能が減じ、親の劣悪が直ちに子に及ぶものであるから、殊に注意を要すべき事項である。しかし種の良否だけで、犬の優劣が決せられると考へるのは早計である。たとひ種が純粹であつても、その飼養にして誤りがあれば駄目であり、更にまた飼養法に宜しきを得、發育が充分であつたにしても、訓練を怠ればそれだけ技能が減殺され、特殊犬としての存在價値が稀薄なものとなる。つまりその間に幾多の缺點が生じ、普通の野良犬の水準に墮して行くのである。勿論野良犬といつても、警察あたりで謂ふところの野犬を意味するのではなく、途上に喧囂する凡百の雜犬を總稱するのである。これらの雜犬は種混亂し、飼養惡しく、訓練を缺き、全く取柄のない與太犬である。特殊犬の與太犬に近づくことは、天上より下界に墜ちたにも等しき墮落を意味してゐる。故に特殊犬としての犬をなさしめんとすれば、品種、飼育、訓練の三身一體說を、嚴格に遵守すべき必要がある。

鬪犬の飼養法

特殊犬を飼養する上に於て、最も禁ずべきは放し飼である。中んずく鬪犬にあつてはそれが絕對的である。もし放置して顧ない時は、單に拾ひ食して胃腸を害するといふに止らず、本來の戰鬪技能を忘却し、野良犬級と平均化する危險がある。これを防ぐには、箱の中に入れて嚴重に監禁し、運動や食事の如きも規則的たらしめることである。

運動は犬の大小又は品種の如何に依つても相違するが、十貫前後の土佐犬なら、少くとも朝夕に二時間宛、都合四時間の運動は一日に必要とする。食事は運動後三十分ぐらゐ經つて、これも朝夕二回に亘つて與へる。しかしその食事にしても、肉類の如き美食は却つて不必要な贅肉を奬勵し、肝心の土俵で活殺の妙技を振はしめる自由を殺ぐ嫌ひがあるから、脂肪分の少ないものを、月に二回ぐらゐやるやうに止めた方がいい。平常はニボシ又はカツブシに少量の鹽を混ぜて煮沸したものに、白米飯を入れて與へるのである。特に白米飯と限定した理由は、南京米、玄米、麥飯等は、何れも下痢を催さしめる虞れがあるからに外ならぬ。その他は時々野菜物を飯の中に混じて與へるといつた風でいい。

尤もこれは犬がある程度まで成育してからの注意であるが、生後八ケ月以內はなるべく廣いところに放し、勝手に遊ばせて置く方が丈夫である。その前後もしくは生後一年半以內には、必ず一度は例のヂステンパーに襲はれ、十中の八までは命を取られてしまふ。これには特別な豫防法といふものはないが、平

素の運動を充分ならしめて抵抗力を涵養し、發病の徴候があつたら保暖に注意し、消化のよい粥や牛乳を與へることが大事である。尙ほ犬の特殊病として、糸狀の蟲が血管を走り、心臟に巢を喰ふといふヒラリヤといふのがある。これは大抵二歳過ぎに現はれる病狀だが、僕は過去に於いて何れもこの厄介な病氣で殺してしまつた。この難病に罹つたら最後、殆ど助かる見込みはなく、よし助つたにしても、鬪犬としては使用に堪えなくなつてしまふ。

鬪犬の様々

現在鬪犬として持て囃されてゐる犬には、土佐、秋田、ブル、ブルテリア等を始め、一代雜種ともいふべき新土佐（又は新秋田）、土佐ブルの如きがある。然し何といつても、鬪犬の王は土佐犬である。

土佐犬は秋田犬と異り、日本にクリエートされた日本犬ではなく、在來の日本犬を台にして、西洋種鬪犬殊にブルドッグの骨格を採用したものである。その意味に於いて、土佐犬はヂヤパン・クリエーテツトでなくて、ヂアパン・メードといふを得る。元來いはゆる日本犬なるものゝ特色は、例へば秋田犬に見る如く、戰鬪に際して口が早く、動作が機敏だといふ長所はあるが、惜しいことには咬まれれば鳴き、敗になれば逃げるといふ傾向がある。土佐犬はこの長所を台にして、西洋種の耐久力と執拗性を加へ、鬪犬として間然するところなきやう新に製作したものである。これが製作されてから僅か四五十年に過ぎぬ事實に見ても知られる如く、全く日本に於て新鬪犬として育成したものである。

ブルドッグといへば、世間の人々は最も强暴な猛犬と考へてゐるやうだが、實は鬪犬といふよりも玩犬に近い位である。元々これも矢張り猛獸殊にライオンに似せて淘汰したもので、一種怪奇な面貌は日本の狆と同じく、愛嬌に供へる爲と解して差支えない。しかしブルの狆に異る點は、相容ばかりでなく、骨格筋肉の組立までライオンに似せたものとて、胸の張りといひ、トモの踏ん張りといひ、戰鬪用としては申分なく出來てゐるが、口遲く動作鈍きため、秋田犬の如き俊敏なものと組ませると、始終喰はれ通しである。而も尙ほ瘁むことをせず、執拗にいつまでも鬪つてゐる。土佐犬はこの兩者の强味を打つて一丸とし、體軀には幾分マスチーフの如き强大なものを加味せしめたのであるから、眞に鬼に金棒といつていゝ。

同じブルの混合種にしても、ブルテリアの如き、テリアの敏捷性と神經性を加味せしめ、比較的土佐犬に近似するやうな種

類もあるが、遺憾ながら體軀が小である。これに比し土佐犬は小は七八貫より、大は十四五貫あつて、機敏、耐久、勇氣、その他一切の戰鬪資格を備へ、喰へば放さず、喰はれても鳴かず、よく二十分三十分の戰鬪に耐える。東西兩種の粹を一身に兼ねたる新種をヂヤパン、メードしたことは、餘談に亘るか知れぬが、わが文物もかくあらまほしとでもいひたいくらゐである。

勝敗の決定條件

犬鬪は慘酷だといふ非難もあるやうだが、鬪犬そのものは本能的に血を流して咬み合ふことを必要としてゐるのだ。從つてそれを鬪爭させることは、鬪犬の生理的必要を充足させることであつて、慘酷といふやうな非難は當を失してゐる。それに鬪爭そのものも、いはゆる犬の喧嘩でなくて、立派な眞劍仕合である。全身全力を盡し、火花を散らして鬪ふ有樣は、鬪爭藝術の最高なるものを表現してゐる。これを趣味として見る時は、瞬間に於ける眞劍さの燃燒である。

それは兎に角として、鬪犬の勝敗は如何にして決定されるかを一言したい。鬪犬といへば、唸り立て吠え立てるもののやうに考へられてゐるが、これは飛んでもない誤りである。鬪犬にあつて最も嫌ふは聲であり、聲があれば無條件に敗けである。向ひ聲と雖もこれがある時は、他の資格に於いて優秀にしたところで三役犬とはなれぬ。その他敗戰と決定する條件には、攻め立てられて逃げること、三分以上押へ込まれること、毛を立て歯を剝き出すこと等が數へられる。窮處とするは耳と足で、その他の無駄なところを嚙むことも嫌はれてゐる。故にもし耳を喰ひ切られ、足を折られたとあつても、以上の如き弱點を示さない限りは敗戰とされないのである。

勿論、この晴れの土俵に出場するには、約二十日前から朝夕の運動を倍時間に延長し、數日前から次第に減じて、それと共に食物も少なくして行く。鬪犬自身もこれらの準備を心得、殺氣縱橫といふ槪を示して來るから面白い。尙ほ鬪犬の訓練法等に就て書き殘した點もあるが、茲には割愛することにしよう。

蒐書

芥川龍之介

元來僕は何ごとにも執着の乏しい性質である。就中蒐集と云ふことには小學校に通つてゐた頃、昆蟲の標本を集めた以外に未嘗熱中したことはない。從つてマッチの商標は勿論、油壺でも、看板でも、乃至古今の名家の書畫でも必死に集めてゐる諸君子には敬意に近いものを感じてゐる。時には多少の嫉惡を交へた驚嘆に近いものを感じてゐる。

書籍も亦例外ではない。僕も亦商賣がら多少の書籍をも藏してゐる。が、それも集めたのではない。寧ろをのづから集まつたのである。もし集めた書籍であるとすれば、其處に何か全體に通ずる脈絡を具へてゐなければならぬ。しかし僕の架上の書籍は集まつた書籍である證據に、頗る糅然紛然としてゐる。脈絡などと云ふものは藥にしたくもない。

では全然無茶苦茶かと云ふと、必しも亦さうではない。少くとも僕の架上の書籍は僕の好みを示してゐる。或はいろいろの時期に於ける好みの變遷を示してゐる。その點では――僕と云ふものを示してゐる點では僕の作品と選ぶ所はない。僕は以前架上の書籍を買ひ入れた年月の順に記し、その書籍の持ち主の一生の變化を暗示する小品を書いて見ようかと思つた。が、西洋人の書いたものに餘り似寄りの話を見た爲、とうとうそれなりになつてしまつた。それなりになつてしまつたのは勿論天下の爲に幸福である。しかし架上の書籍なるものの鏡のやうに持ち主を映すことは兎に角何か懷しい、さもなければ何か氣味の惡い事實であると云はなければならぬ。（この故に賣り立てに「さしもの」をするのは他人の作品に筆を入れるのと同じ位道徳的に不都合である。）

蒐集家のみの知る喜びや悲しみはかう云ふ僕には恵まれてゐない。何しろ本屋をひやかしてゐたり、或はカタロオグを讀んでゐたりする内に目にとまつたものを買ふのであるから、感激も頗る薄い譯である。大金は勿論出したことはない。

是でも本道樂の話になるかどうか、其邊は僕にも疑問である

芝居見物

美濃部達吉

私が芝居を見て多少とも鑑賞的の見方をするやうになつたのは、明治二十八九年頃、私が大學の學生であつた頃からだと憶えて居る。それより以前にも時々は芝居を見たことがあり、斷片的には記憶が殘つて居るが、どの役者がどれ程うまかつたといふやうな事に付いては判然たる記憶が無い。今でも明に覺えて居る時代はもう團十郎、菊五郎の晩年時代で、其頃は一圓か二圓あるとゆつくり平土間で見物することが出來たもので、金の無い時には一幕見で我慢するが、月に一回か二回かぐらゐは、どうにか學資のやりくりをして、二圓ぐらゐの餘裕が出來ると、恐しいぜいたくな氣分で平土間見物に出懸けたものだ。其の頃は團十郎と菊五郎との二人はとても素人の批評を許さない程神聖視せられて居たもので、吾々は唯劇界の偉人を仰ぎ視るやうな心持で、鑑賞するよりは、寧ろ崇拜に近いやうに、唯感嘆して見物してゐたものだ。吾々の批評眼は—團菊二人は別物にして、主として其の以下の人々に向けられたもので、團十郎の弟子で其の後繼者にもならうと思はれて居た新藏や、菊五郎の養子で聲はわるかつたが藝の馬鹿に善かつた菊之助などは、吾々の最も好きな役者であつた。其外では私は先代秀調、先代片市などに感心して居た。菊之助が死に、續いて新藏が死んだ時には、吾々は何といふ情ない事だらうと痛歎したものだ、政治家が元勳などの死ぬのは少しも惜しいとも思はなかつたが斯ういふ藝人の亡くなつて行くことは、實に惜しいと思つた。今でも眼に見るやうに覺えて居るが、明治三十年頃だらう、歌舞伎座で助六を中幕に出して、團十郎の助六、芝翫の無休、福助（今の歌右エ門）の揚卷、權十郎の廿酒屋で、其頃での大芝居だつたが、新藏はもう其頃は不治の目の病に罹つて居り、餘命幾何もないと言はれてゐた頃で、それでも病を推して福山のかつぎに出たが、片眼は黑い片で蔽ひ、何か言つては痛たさうに片手で眼を蔽ふやうにして居たのは、如何にも痛々しい感じがした。新藏はとう／＼それを最後に舞臺に出ずに死んでしまつた

と覺えて居る。實際惜しい事をしたものだ。團十郎と菊五郎とは、唯感心して見るばかりで、批評眼などは更に無かつたが、私はどちらかと言へば團十郎よりも菊五郎の方が一層好きだつた。市村座で菊五郎が今の松助の家主長兵衛を相手に髮結新三をした時や、歌舞伎座で野崎村を出して家橘（今の羽左工門）の久松、榮三郎（今の梅幸）のお染で久作をした時など、唯感にたえて見てゐたものだ。何所で何時やつた事かは忘れてしまつたが、先代秋の裏表で、菊五郎が小助をした時には、秀調の下女お竹、片市の惡醫者が馬鹿に善かつたことを覺えて居る。

明治三十二年から三十五年までは、西洋に行つて居て、暫く日本の芝居を見る事は出來なかつたが、西洋では隨分見物した。面白くは思つたけれども、藝としては到底比較にならない程日本の方が發達して居るものと思つた。三十五年に日本に歸つてからは、又隨分頻繁に芝居を見だした。團十郎も菊五郎も衰へながらもまだ舞臺を努めて居たが、もう以前程には感興を得るわけには行かなかつた。唯菊五郎が一の谷の芝居に敦盛をして、六十何歳の老人でありながら、後ろ付から聲色まで全く十六七歳の青年と思はれたのは、如何にも藝の至妙に驚かされた。間もなく菊五郎は死に、團十郎も續いて死んでしまつて劇界は遂に寂しくなつた。

先代菊五郎が好きだつた影響かも知れぬが、私は今の役者の中でも菊五郎系統の人が一體に好きだ。一時は梅幸殊に榮三郎時代の梅幸が最も好きであつた時代もある。團菊が亡くなつてから暫くたつて、歌舞伎座に八百藏（中車）、梅幸羽左工門の三頭目が引籠つて、東京座の歌工門、幸四郎段四郎などの一座に對抗して居た時代が有つたが、其頃の歌舞伎座は活氣が有つて、頗る面白かつた。今の菊五郎、吉右工門なども其頃は歌舞伎座に若手の相棒をして列んで居た。村井絃齋の酒道樂か何かで、梅幸と羽左工門とが大にハシャイダ時には、菊五郎と吉右工門とは藝者になつて、三味線を引いたり何かしたものだ。

今の菊五郎と吉右工門とが市村座に立て籠つて、青年歌舞伎を看板に奮鬪するやうになつてからは、私の芝居見物は市村座を中心とするやうになつた。今の菊五郎は丑之助時代から絶えず見物して居るが段々うまくなつて、物に依ると先代よりも勝れた腕を見せるやうになつたのは、何だか自分の子供がゑらくなつたやうな感じがする。惜しかつたのは菊次郎で、梅幸の若い時を見るやうな好い役者だつたのに、全く惜しい事をしたものだ。入谷の寮の三千歳や、牡丹燈籠のお峯、其外數へれば無數にあるが、菊五郎の無二の相手が亡くなつてしまつて、菊五郎の爲に如何にも遺憾に堪へない。

一時は青年役者の全部を網羅したやうに盛んだつた市村座も、勘彌去り、吉右エ門去り、三津五郎亦去つて、今は菊五郎が獨り孤城を守つて居るが、三津五郎はさて措いて、勘彌も吉右エ門も市村座を去つてからは段々藝が荒んで行くやうな感じがするのは、自分だけの僻目であらうか。

勘彌の文藝座、猿之助の春秋座を始め新しい芝居も時々見物することがあるが、新劇となると、役者の藝よりも主として脚本の善し惡しが影響するもので、好い脚本の少ないのを恨みとする。新しい脚本の中で比較的善いと思つたのは、綺堂氏のものでは、鳥邊山心中、尾上伊多八、帝劇でやつた雨月物語(蛇性の淫)、菊池氏の父歸る、屋上の狂人、岡鬼太郎氏の今樣薩摩歌、谷崎氏のお國と五平くらゐを今思ひ出す、長田秀雄氏の織父の子」もチヨツト「父歸る」に似て善く出來て居ると思つた。誰の作か知らぬが、猿之助が有樂座でやつた「俊寛」に至つては唯不愉快に堪へなかつた。脚本の選擇をもう少し鑑識眼の有る人に頼みたいと思ふ。

綠の野へ

久保田万太郎

綠の野へ。――わたしのかうしたみだしをつけたことをあなたはお笑ひか知れない。何をいひ出したと思召すか知れない。――が、わたしの部屋、いまゐる日暮里のうちのわたしの部屋からみ下すことの出來る市外の町々。――蜘蛛手に線路の入交つた田端の汽車みちを越して遠く荒川の果まで擴つてゐる町々のところ／＼を埋めてゐる草の平ら。――隅々まで、濃く、一ぱいに、同じいろに塗りつぶされてゐる田圃の名殘をみては、このごろ、そこまで行つてみたいと毎日のやうにわたしはさう思つてゐるのである。

何の雑作のあることぢやアない。うちを出て、崖を下りて、踏切を越して、尾久のはうへ行く街道をその街道のみちびいてくれるまゝ町のなかへ入り、さらにそこを出抜ければそれでい

い。道のりにして十町ほど。――ことによつたらもつと少いかも知れない。――朝いつもより三十分早く起きれば。――でなければ、夕方、湯に入つてからの時間を何とか、なじめば、わけなく、いさくさなしに出來ることである。――何のことでもないことである。

それが出來ない。――何でもないことのそれがわたしに出來ないのである。

いふならば、これは、いまにはじまつたことではない。いまのうちへ越して來た當座。――その時分は、まだ、冬のとつつきの、水のやうに深く澄みつくした空の下に、濃くおの〳〵のかげを重ねた町々や、夢のやうに光るところ〴〵の溜池や、しづかに烟を吐く遠近の烟突や。――わたしの部屋からみえるかぎりのものは、すべて、暗い、枯れ〴〵ないろにつゝまれてゐたが、わたしは早く身のまはりを落ちつけて、以前のやうにまた午後の散歩をはじめたいと思つた。

以前といふのは田原町の生れたうちにゐた時分のこと。――その時分、わたしは、願にかけて毎日、雨さへふらなければ、午後、うちを出てあてもなくどこかをほツつきあるいたのである。――たとへば、馬道から聖天町を拔けて今戸まで伸すとか、千束町を東町へ出で吉原の裏を龍泉寺町のはうにまはるとか、でなければ、うまやばしを向ふへ越して横網河岸を兩國驛のはうへ切れるとか。――ときには、また、向島だの、かめゐどだの、深川の木場だの、さうしたあたりまで遠う走りをすることもあつた。

駒形へうつる前後にあつて、いつとなし、わたしのての慣習はわたしから離れた。わたしの方のまはりはだん〳〵こと繁くなつた。日に〳〵友だちはふへた。――いたづらに附合の擴つたことが、わたしに、わたしだけの「ひとりのおもひ」にふけることを許さなくなつた。

で、十年の月日は經つた。

これよりさきわたしには道樂といふものがない。あるやうにみえて何一つない。――畫もかけなければうたもうたへない。寫眞もうつせなければ釣も出來ない。旅に出ることは性得何よりもきらひである。――といつて道具いじりも出來なければ女といはれなく交渉することも出來ない。――勝負事といつたら將棋の駒のうごかし方一つ知らない。――わたしほど無器用に出來上つてゐるものもないだらう。

うまいものを喰べること、あてもなく外をほツつきあるくこと。――强ひていへば――强ひてわたしのよろこびとするところをいへばたゞその二つである。

たゞその二つ。

十年まへも十年あとも——むかしもいまも、それだけはかはらない。——それだけにはかはりはない。

が、うまいものを喰べることのはうは贅澤をいつて「相手」を必要とする。——氣ごゝろの知れた「言葉がたき」を必要とする。——所詮は無駄をいふのが主で喰べるはうは從である。——逆に、あてもなく外をほツつきあるくはうのことは、どこまでもわたしは一人でありたい。

つまりは、で、まへのよろこびをうける機會が多くなつたにしたがつて、あとの、手間暇のかゝらないよろこびをうける場合がだん／＼わたしに少くなくなつた。——いひかへると、それは、わたしといふものゝ生活をわたし自身のはうへ惹きつけるのでなしに、わたしの生活のはうへ反つてわたし自身が惹きつけられるかたちにだん／＼なつたのである。

地震あつたゝめにわたしはいまのうちに住むやうになつた。いまのうちに住むといふことは、そのまゝ、「東京」と緣を切るといふことだつた。「東京」と緣を切るといふことは、そのまゝ、いまゝでのその日／＼と緣を切るといふことだつた。——少なくも[illegible]しは自分にさう信じた。——なればこそ、わたしは遠い町[illegible]のはうをみて、早く身のまはりを落ちつけたい、さうして以前のやうにまた午後の散歩をはじめたい。——わたしはわたしのうへにはつきりしたあるみとめつけをようとした。

とはいへ身のまはりを落ちつけるまもないうちに年は替つた。冬は去つてまたゝくまに春は來た。——思ふにまかせない仕事の運びに追はれたわたしは、今日こそその麗さに浸つたといふことのまだ出來ないうちに、退つ引ならないことでたま／＼「東京」に出たかへり、夕方、わたしのうちのはうへ道灌山の長い坂みちを上るとき、うす闇をこめて微かにさくらの雲のやうに白く、散りしいたのをみた。——春のいのちのあまり果敢ないのをわたしは驚いた。

さういふうちに嫩葉のいろは日に／＼濃くなつた。常夏がいつか咲いて灯かげがしづかにうるんで來た。

……とう／＼また夏になつた。

さもあらばあれ綠の野へ。——で、いつになつたらわたしはわたしだけの「ひとりのおもひ」にふけることが出來るのだらう？——いつになつたらわたしといふものゝ生活をわたし自身のはうへ惹きつけることが出來るやうになるのだらう？——それよりもいつになつたらわたしはやりかけた仕事のすべてを綺

麗さつぱり片附けることが出來るのだらう？

餘技としての小說

德田秋聲

今でこそ生活の藝術化といふ言葉まではやるくらゐ藝術、殊に文藝が一般に持囃されるやうになつたけれど、日露戰爭時分までは小說なぞは、全く人性の餘技とせられてゐたのである。日本は昔から藝術國で、時代の政治や學問思想と密接な關係をもつた藝術が發達してゐた。繪畫にしろ彫刻にしろ建築にしろ、陶器にしろ、若しくは演劇音樂なぞ、國が貧寒であつた割には、國民の趣味が、今から考へると、ちよいと不思議に、思はれるほど發達してゐた。その中では、日本の文化として、世界に持出せるものがいくらかあるし、世界に理解されるに至らなへとも、日本人のものとして、自から樂しんでゐられるものも少なくはない。音樂にでも、西洋のものをいくらか味はつた上で、反射的に自國のものを振返つてみると、たとひ線の旋律だけであるにしても、づいぶん驚くべき發達を遂げたものだと思ふ。西洋に發達した近代の科學を除いてみる日になれば、日本にも相當文化の發達があつて、どつちが豪いか俄かに判斷もつかないであらう。しかしその中では小說なんかは、最近までは新聞などでは閑文學、又は軟文學なぞと輕蔑されて、ほんの一部の物數寄ものか兒女の玩弄くらいにしか思はれてゐなかつた。紅葉さんなんかの作品も、やはりさう云ふ點で人氣があつたので、少しむづかしいものになると、やつぱりさう人氣にはななかつた。今が男女學生で文藝を解しないものは殆んどない。敎科書にまで、現代作家の作品の見本が載つてゐるくらゐで、小說家も外の職業並みに幅をきかし、他から羨望され憎まれるほどになつたが、硬いことの好きな私は小說など書きはじめた頃には、それは全く人生の餘技であつた。人生の餘技であつたからこそ、私なぞのやうな怠けものが興味を感じてやる氣になつ

たので、今のやうな職業的になるものと知つてゐたら、やらなかつたかも知らない。餘技だから笑顏といふんではない。一般社會からは餘技視されてゐたところに、却つてひねくれ者の私などに興味があつたので、私自身に取つては矢張り眞劍であつたのである。

小說を書く以外に、私には餘技と名づくべきものはない。今でも餘技的に小說を書いてゐるので、その他に何の藝能もない。色々なことに趣味は感ずる方で、金があつたら遣りたいと思ふことは非常に多いが、先づ控へ目〳〵にとするより外ないので、好きな字一つ習つたこともない始末である。語學は幼年時代から好きで、その方に一番向いてゐると思ふが、それも遣る暇も氣力もなかつた。何かやりたいと思ふのも、止むに止まれない人間の慾望で、政治や學問も總てその人の道樂であつてこそ、興味があるのであるが、現代のやうに宗教や藝術までが商賣意識に支配されるやうになつては、面白くないと思ふが、經濟に支配されない生活のありやうがないのだから、それも止むを得ない。私は書くことを純然たる餘技にするだけの經濟上の餘裕を作りたいと思つてゐるが、さうするには今の三倍もの努力が必要で、單に空想にすぎないことが、よく解つてゐる。

海鯛先生の淸玩論

岸田劉生

江賀海鯛先生のところに或る日、雜誌「海象」の人が來た。そうしてしばらくもぢ〳〵してゐたあげく、誠にこんな事を云つては御氣を惡くするだらうがと前おきして、何故先生が骨董を買ふのか、餘技として、又は道樂としての骨董蒐集といふ樣な事をかれそれと云ひ出した。そして骨董集めを餘技だの道樂だのと極めてかかつて誠に御氣を惡くするだらうが、何分、社長の山彥氏がさう申して來ましたのでと大に恐縮して頭をかいて居た。

海鯛先生はこれに對して決して氣を惡くする事はない旨を答へた。海鯛先生の考へは、骨董を漁さる事は勿論、道樂であつて、今日の語で云へば遊戲なのである。それが、仕事のためになるとか、それによつて心を淸められるとかいふ效能がよしあるにしてもとも角も古い畫を漁つたり、買つたり眺めたりする事は道樂でさしつかえないのである。のみならず我が海鯛先生は近來自分の本職の方の畫描き渡生をも一種の道樂だなどと、云ひ出してゐる位で、先生の說に從ふと、畫描きなどゝいふものはうまくなればなる程、人にはその眞が通じないものであつて、結局一番うまい畫描きは自分一人だけのために畫をかくのでつまり自分一人で遊んでゐるも同然、ただのゴクツブシで、今日の多事多忙のあたじけない世の中にあつては正に無用の長物なのである。といふ樣な事になるらしい。この說をうかがつてみると先生は餘程御自分の畫をうまいと思つてゐるらしい樣子だが、それとも拙いのでそんな事を云つてごまかしてゐるのかもしれ

ない、

とも角海鯛先生は自分が畫を買ひ度いと思つたり、畫を買つたりする事を道樂でないとは思つてゐないので、この旨を「海象」の人に答へて安心をさせた。さうして結局原稿の方も承諾して、海象」の人を歸した

しかしから書いてみると我が海鯛先生は大した骨董蒐集家の様に見へる。がこれは海鯛先生にとつては少々擽たい話で蒐集などゝ云はれる程にものを買へる海鯛先生は身分ではない。

○

さて次は海鯛先生のかいた一文である。

「海象」の人が來て吾輩が何故骨董を蒐集するかを書けといふ。吾輩を一かどの蒐集家にしたものもおかしい。それはまあどうでもいゝ。何分いつ迄たつても貧乏畫かきで、欲しいものも中々買へず、買い度い／＼で暮してゐるが、先づ、氣持の上から云つたら吾輩等は、蒐集家としては日本一とも云つていゝ譯で「海象」の山彥さん其他から一かどの蒐集家と思はれたとて敢てきまり惡がるにもあたらぬといふ事にしておかう。

事實吾輩の、物の買ひ方は少々普通ではない。金持はお小遣で買ふが、これは不問、大ていの好き者でも、收入の何分の一かで物を買ふのが定まりである。ところが吾輩のは收入の大部分を買ひものにつかうので、或る時は右から左、うけとつた金を書畫屋へ拂つて、何ケ月來憧れてゐたものを身受して來た事もある。

たしかにこれは、極道である。放蕩に類する行ひであらう。或る人は畫家が古畫を集める事は、第一に金の掛りことなる事、從つて濫作をする事、第二は古畫に溺れて、新鋭の氣を缺く事、第三に蒐集に勞して製作を怠る事、第四に氣

持が鑑賞的になり製作的にならぬ事、藝術上に受動的となり發動的とならぬ事、等の理由を擧げて、難じてゐるのを吾輩は聞いた。これ等の事は一應尤もの事ではあるが、吾輩はそれ等の事は百も承知でそれ以上に、鑑賞といふことを考へて居るのである。

以上の四つの理由による非難は、蒐集といふ事を「製作參考の爲」にといふ功利上の立場から見た見であつて、未だ眞に蒐集鑑賞の眞義を知らぬものゝ言であらう。

夫れ、畫を愛し、美を愛す、いづくんぞ畫工のみあらんや、とか言ひ度いところだが吾輩元來漢文が出來んから平たく言ふ。つまり、この世で、畫を一番愛し、美を一番愛するのは結局、畫工だけだといふことである。少くとも吾輩は畫は好きだ。畫工は畫を製造してこれを人類樣に捧げ、民衆殿に御くばり申すもので、畫などを鑑賞するのは僭上の沙汰と申されゝば、もとよりしがない暮しの吾輩たち故、默つて引込む迄の事だが、吾輩に云はしむれば、畫工は他人より畫が上手だから畫を書く役目がある。と同樣、他人より畫を解し、畫を愛すから、畫を所持し、畫を玩賞する役目がある。役目とは變だと云はうけれど、吾輩は敢て權利とは申さぬ。何となれば、鑑賞といふ事はそれ自身で人類への奉仕となるからである。

この言は稍奇警に似てゐる。しかし本當のつもりである。

一人の個人があつて、それが誰れもこれ迄味識出來なかつた樣な深遠な神氣なり美なりを賞してゐるとするなら、それはとりもなほさず、此迄未だ味いなかつたものを人類に味はしてやつてゐる事で否人類が味つてゐる事で、この點畫工が製作を生み出すのと何のかわりもない譯、つまり吾輩に云はしむれば、創造も、鑑賞も、結局個人なり、人類なりの美」に對する獲得慾の滿足、知慧の實への滿足であつて、鑑賞が稍ともすると創造よりおとしめられるのは、眞に鑑賞

出來る筈はどうしても創作家でなくてはないからで、創作家は世間から見る時は鑑賞家としては現はれないからの事で、普通の觀賞家が創作家に輕じられるのはこの理によるものと吾輩は思ふのである。

誠に觀る事玩する事の境地は深い。作る事を最として觀る事を其の上に置かぬものは要するに功利の徒である。物を造つて殘さなくては世のためにならぬと思ふものは未だ、美事、雅事を深く解するものとは云へない。

造る事が尊いのは勿論「殘す」からである。後人のため、世界の文明のため等、何等の自己以外には以上のものゝために役立つが故である。しかし、それ以上に造る事の眞の價値を認め得ないものは眞當の事を知らぬものである。何等かの意味に於て、自己以外又は自己以上のものは喜びにあづかり得ない行爲は要するにエゴイズムであつて、それ等の喜悅を如何に個人が深刻に味つても、それで人類が、永遠的な喜悅を感じる譯には行かない。個人の一人でもが少し瞬間でも愉快であり得るといふ事は人類の一つの喜びにはちがいないけれど、それによつてもし他の個人がそれ以上に苦痛を感じてゐるとしたらそれは人類の喜びにならない。さういふ意味で、一個人が如何にすぐれた美を鑑賞してゐても、それは要するに一個人の悅樂で、それによつてその個人以外のものは喜悅をうける事は出來ない、かかる故にその喜悅が如何に深いものにしても、それはエゴエズムであつて人類の喜びにはならぬといふ考が生じさうに思はれる。

しかしこの場合注意す可き事はその喜悅そのものが自己以外のものの喜びになり得るものか否かを省察する事である。個人以外のもの否それより、個人以上の或る意志なり欲望にとつて、その行爲が喜ばれるものか、否かを考へなくてはならない。即ち美の鑑賞と云ひ美術の創作と云ひ、その最も深い處に於ては『他の個人』と、交渉のなくなるものでなくてはならない。即ち最も深い美を摑むものは、その時に於て、他のあらゆる個人に見へないもの解りかねるものを識るので、その時は勿論一面に於て甚だしく淋しくなければならぬものである。そのかわり、それを摑んで人類にみ

せて、人類に一つの新しき智惠を與へるところの祝福を感ず可きである。

こゝに於て一つの問題が生じる筈である、即ち、創作と鑑賞の比較である。即ち鑑賞は古人の摑みたる美をもう一度摑んでみる事であるが創作は前人未到の美をはじめて摑む事であるから鑑賞より創作の方が人類にとつて喜びでなくてはならぬといふ考である。しかし、こゝに一つの高い〳〵美を盛つた作品が千年の昔に作られて、保存されてあるとする。代々の畫工がいろ〳〵の心持ちを以てこれを鑑賞したとする、或るものは深く或るものは淺く、そして何百年かの後、そこにその畫を作つた畫家におとらぬ深い美を見る事の出來る畫家なり鑑賞家なりが生れて、それを見るとする。古人のその畫を描いた畫工ははじめて、己れの描いたもの、己れの見たものを感心してもらへる。勿論その畫工はもう世にはなく意識も亡びてしまつたのだから、そんな事は知らう譯もないが只人類はその事に大なる喜悅を感じる譯である。のみならず、その美が眞に再び味はれ認められる時は必ず、此處に、それを描いた古畫家も知らなかつた或る美も味はれてゐる譯で、これは深き鑑賞者の主觀の力である。ところで、もう一つ考ふ可き事は、古畫の鑑賞に於ける美的觀照の深さと、創作的に見る自然に對する美的觀照に於ける美の深さとは必ずしも後者が深いとはいひ得ない。要するにこれはその作家同志の問題であるが、美術史といふ奴は意地の惡い奴で必ずしも進化論の法則に從つてくれぬので困る。只後者の方が新鮮で、何等かの意味で時世的に進んでゐるといふ事はあり得るがそれが美の深淺高下の問題を直ちに解決はしてくれない。先年吾輩は或る男に古畫を探してゐる事で叱られたが其の男の云ひ分に「古畫を探すのは古畫が自分よりいゝと思ふからで要するに貴方は大した畫工ではない」との事であつた。吾輩は必ずしも古畫家より畫が下手と極めては居ないが他山の石は又他山の石で自分として致はるところも樂しめるところもあるのだと答へやうと思つたが面倒なので止めておいたが、しかし、大した畫工でない事になつてもどうでもいゝが、古畫はたしかにいゝ。吾


河鋼先生
清玩図



輩だつてこれで中々自惚れは强く、他人が來て御前の畫は古畫に及ばぬとか何とか云へは、「ヘ、ン」位には思へるみそは持ち合せてゐるが、しかし、古畫の何とも云へぬ美には心から感服してゐる譯で。實感から云つて、自然の美を靜觀し、それを寫す事と、古畫の美を靜玩してこれを味得し樂しむ時と、心の深さに變りを見ない。

つまり要するに吾輩の言はうとするところは鑑賞は必ずしも創造に美的觀照として劣るものではない。人類的な喜びとしても、鑑賞が必ずも、創造に劣りはしないであらうといふ事を吾輩の經驗から申した迄である。

がらにもなく大分「人類」などといふむつかしい事を言ひ出して議論めいたが、事の序でにもう少し、蒐集、淸玩について演べさしてもらうとしやう。

一體この蒐集といふ事は造形、創作等と等しく、やはり、人類的本能の一つと見る事が出來やう。伊勢屋が御金をためて夜になつて、錢勘定をするのを樂しみに生きてゐるといふ等も立派な蒐集欲の現象で、夜これをいぢくり廻して樂しむのは一種の淸?玩である。

今日當海象社をはじめとして、澤山な本屋さんから奇麗な書物が賣り出されるが、青年があれも買ひこれも買ひするのは、一つは勉强のため修養のため娛樂のためもあらうがこれには多分の蒐集欲淸玩欲が混じてゐると吾輩は思ふ。とも角も金錢を持つこと何か買ひたくなるといふ「心理」に當海象社其他澤山の書物屋さんは多大の御かげを蒙つてゐる事を拒んではいけない。吾輩のカイタイ欲も甚し、昔はおもちやカイタイ、少年世界カイタイ、から進み、ゴッホの本カイタイ、泰西名畫寫眞カイタイの欲に至り、結局今日の江賀海鯛先生に相成つたので、顧ると、此處に一貫した蒐集、玩賞の本態が生長發育して來てゐるのを見るのである。

ところでこの物を蒐めるといふ本能の是非なり、價値なりはどんなものだろう。人類的本能として、如何なるもので

あらうか。簡單に云へば、一、紛失より救へる事、二、物の價値を新たにし、眞に定め得る事、三、玩賞に便なる事、從つて眼の肥へる事等であらう。

とも角も、物を蒐めやうといふ本能は有目的に人類の大始からあつたらしく、人類以外の他の生物の本能としてもこれを見る事が出來やう。がその目的は結局、缺乏にそなへる爲めが最初であり、次にその本能が意識的となつて趣味を生じたものであらう。即ちこの本能が物質的から精神的に進んだのが蒐集及び玩賞の欲である。かくて蒐集欲には何等かの意味で美意識ともなる事が大てい普通である。

彼の伊勢屋の金錢蒐集玩賞欲は、この蒐集本能をもう一度物質境に引き下ろしたものとも見られるが、更に細かくこれを省察すると、彼が蒐集してゐるモテイフは必ずしも「使へる金」即ち「食へるもの」ではなくて、むしろ「使はぬ金」即ち「使へぬ金」であつて、又一個の美術品なのである。彼が夜獨行燈の前でこれを愛撫し、吾子に物言ふ如く、これに語るといふのは、つまり彼がその金錢の上に一個の物質以外のイマジネーションを造つてゐるのであつて、たゞ迄くると金錢蒐集にも一種の「味」が生じて來る。只この場合、他の眞の藝術品蒐集に「玩賞」と異るのは、その心理がどこ迄も「異常」に立脚してゐるので、その心理の中には或る特異な物質以外のものに列する處があるけれど物質以上のものにそれがない。異常と云つたのはその理由であつて、藝術の玩賞には「美」が必ずともなうけれど、伊勢屋の玩賞には「美」はなく、むしろ一種の「鬼氣」がある。其の上何と云つても、その鬼氣に迄至る經路の出發點には物質に對する熾烈な愛着と欲望とが根據となつてゐるのだか、どうしてもその至つた鬼氣にも物質の愛執といふやうな、下品さをともなふ、結局これは尊まるべきものではない。同じ理由に於て、何等の美を知らぬ骨董蒐集は論ずることが出來るけれど、この場合は事によると、伊勢屋の金錢を愛玩する程に物質を超越して、集めて骨董を玩賞するものはゐなかろ

う。欲から出た骨董蒐集は蟻が食料を蒐集するよりもつと物質的と云ふことが出來やう。何にしろ清玩のともなはない蒐集は、盲目的で物質的な感じを持つといふことが出來る。

い丶ものを見たら欲しくなり、持ちたくなる。これが藝術品蒐集欲の最も根本的な動機であらうが、この事は前に載せた樣な三つの別を生じる。その三つの別の中に吾輩の殊に感ずるところのものは第一及び第二の、紛失より救ふ事はものに價値を新たにし、眞にするといふ條である。本當に美を愛するものは又多く本當に美を解するに至る。さう云ふ人によつて、市井にかくれてゐる人に顧りみられないボロ〳〵になつた名品が探し出され、繕はれ、裝幀され、大切にされる。この事は深き人類の喜びでなくてはならない。

この幸運に會はずして市井の塵の中にうづもれ終に亡びてしまつた名品珍寶の如何に多き事か、この事を思ふと、畫家が蒐集に浮き身をやつす事を惡くは云はれぬ筈であるどころか、深く感謝す可き筈である。吾輩をして少しくミソを云はしむれば、吾輩金二十圓にて宋代の花鳥の名品を買つた事あり、又ボロボロになつた寛永時代の浮世畫の名品を拾ひあげし事あり。これ等のものは吾輩に會はなくば、いづれこ丶二三十年中にはこの世から消へてしまふ事であらう。

事實美術品の蒐集といふ事には一つの個人的以上の意志がある樣である。吾輩は別にそんなモツタイをつけて蒐集をもう一層欲張るなど丶いふ野心は持たぬけれど、まあ云つてみればそんなものではないかといふのである。

清玩については既に述べた事で充分であらうが此處では特に清玩といふ古い支那人の考へ出した言が面白いからこの事を少し言つてみやう。實に清玩とは讀んで字の通り清く玩ぶ事である。この境では藝術品は神樣ではなくなり一種の弄玩品となり、遊び友達となる。誠に藝術品の鑑賞の境地は其處が本當である。藝術品にしても、それが本望である。靜かに眺めては居れど心の中ではあそこを撫し、こ丶を撫し、樂しみにひたるのである。さういふ友を得てこそ美術品

は眞に喜ぶ筈である。弟子にのみ仰がれる事は決して美術品の喜びではあるまい。

吾輩も一時は自分の畫なんか描かなくてもいゝ、畫を本當に味つてくらせたらそれでも充分だと思つた位だ。しかし何分まだ仕事を半分もしてゐない若い身だからやはり仕事の欲はおこる。當分はやはり創作第一鑑賞第二といふ事にして置かうと思つてゐる。

だから吾輩から蒐集及び、清玩の樂しみを奪ふ事は、仕事を奪ふに次ぐ可なりの痛た事だとまあ思つて頂き度い。

正直のところ吾輩の生きて行く樂しみの半分以上（わり引きして）は古畫蒐集にある。吾輩はこの點正に道樂ものと云はれても致し方がない。女道樂酒道樂をする人とその欲の心持ちに於てはちがはないのである。

實　三十歳過ぎてからはことにこの道樂といふ事に對する生存的欲望が生じるらしい。心理的にか生理的にか先づ兩方からであらう。これは正に活動期の頂點に達した次に生じる衝動であらうか。

女道樂は、女といふものにして對して、蒐集欲、この場合は漁渉欲玩賞欲を感じるから生じる事であつて、二十代をこへ女房などが古びて來ると大ていこの欲望を生じるやうである。

此處へ行くと吾輩は若いくせに古畫などをひねくるのであまり女が氣にならずにすむ。とも角も男子には道樂といふ事は必要の樣である。吾輩などが女房が畫を買ふのに文句を言ふと、そんなら道樂をしてやるからと云つて恐迫するのである。事實吾輩からこの道樂を奪ふ事は生存の樂しみの半分を奪ふことである。吾輩が苦しい中からでも何かとると買ふのは止むに止まれぬ道樂だからである。

しかし、吾輩とても借金は早く返したい、近來は不景氣だし、近頃中にカイタイものが買へず、心もとないのである。へんにあぢ氣ない感じがしたけれどこの頃では又たほつた。

道具屋輩の卑俗、野卑なるは全くいやだがこれも仕方がない。「一心」を持たぬものはやり切れないが、そんな力を應用しなくては世の中といふものは又いろ／＼の事は出來ないのだ。

海鯛先生の清玩論この邊でおわりとしやう。

大正十三年七月七日記

漁父詞の作者

露伴道人

西塞山前白鷺飛
桃花流水鱖魚肥
青篛笠　綠簑衣
斜風細雨不須歸

此は是唐の張志和の作るところの漁父詞にして、辭美はしく調清らなれば、古より人々これを喜び、畫の如き詩なるをもて畫題ともなり、歌ふ可き調なるをもて歌曲ともなりしものなり。漁父詞の一體は、およそ七言絶句に似たれども、其第三句に七字を用ゐずして必ず六字を用ゐ、其六字は又必ず三字づゝ相對し、且又末一字はは必ず韵を押すべきを約束とす。轉句是の如くなれば、結句に至りて、七字句を用ゐれども、其平仄の法は時に七言絶句と同じく、又時に絶句のとは同じからず。七絶の結句は起句と同じきを常とすれど、西塞山の詞は却つて承句と同じくす。聲律の法、おのづから當に是の如くなるべきもの有りて此の自由あるなり。志和の作るところの漁父詞猶數章あり、志和の兄鶴齡の作るところ一章あり。漁父詞一體漸く行はれて、唐人のこれを作るもの少からず、我邦にても平安朝初期より詞客の倣

ひて製するものあり。今に至りて彼我とも才藻の士、間々此の逸調を追ふもの無きにあらず。

因にいふ。西塞山は讀みて西灑山となすこと、古來の傳承なり。

張志和は唐の中葉の人、年十六にして明經に擢でられ、肅宗皇帝に賞重されしといへば、また是一箇英靈漢なりしなるべし。左金吾衛錄事參軍を授けられ、名を賜はりしによつて始の名の龜齡といへるを改めしほどなるが、事に坐して貶せられし以後、復び仕へず。自から烟波釣徒と稱して、優遊自適、一生を江湖水雲渺茫の間に送れり。父もと莊列二子の學を好みて撰述するところありしが、志和もまた恬淡自足し、玄眞子、太易等を著はせり。其鸑鷟、蕭之靈の二文、載せて全唐文卷四百三十三に在り、歩を屈宋に接し、蒼潤閎麗、讀み易からず。蓋し其の好むところを縱にして、人を顧みざるなり。傳には善く山水を圖すとあれども、其畫憾むらくは傳はらず、想ふに逸氣人を欣ばしむるものならむ。酒酣なれば或は鼓を擊ち笛を吹き、興來れば或は筆を執り詩を成す。またことに天才獨自に樂むものなりき。兄鶴齡その飄然出遊して還らざらむを恐れ、爲に室を越後の東郭に築き、茨くに生草を以てし、椽棟に斤斧を施さず、すべて志和の意の適するにまかせ、嫂も爲に躬づから績織して大布をつくり裘を製しければ、志和も其の詩に感じて遠遊せず、暑熱の時も布裘を解かざりしといふ。心廣く神ゆたかにして罣礙するところ無く、嘗て事を解せざる縣令ありて、志和をして渠を浚はしめしに、悠然として忤色無く、畚を執りて役に服したり。其の人となり是の如くなれば、高才淸德を慕ふものも又少からず、觀察使の陳少游は、其居を表して玄眞坊と曰ひ、門隘ければ爲に地を買ひて之を潤くし、回軒巷と號し、門前の流水に橋無かりければ、橋を架して阻を通じけるにぞ、人これを太夫橋とよびける。怪奇なる詩人にして茶を愛したる陸羽、方正の大官にして書を善くしたる顏眞卿、これらの人皆志和の談論の友たり。嘗て天子志和のために奴婢各一人を賜はりて仕へしめけるに、志和これを配して夫婦となし、漁童樵青と號びたりといふ。風

說、人をして以て顧せしむ。

志和の傳は唐書卷一百九十六に見ゆ。大槩上記の如し。中に記す、釣を垂るゝ每に餌を設けず、志魚に在らざれば也と。高士詞人の釣を垂るゝ、もとより漁翁の必ず魚を獲んと欲するが如くなるべきにあらず。されども志和の餌無きの釣を垂れしは、陶淵明の絃無きの琴を撫したるが如く、たゞ其趣を得るを取りしのみ歟。それ絃無きの琴は必ず響を發せざるべし、然も餌無きの釣は魚を獲可からざるに非ず。蓋し志和が釣に餌を設けざりしは、當時の傳見聞の事實にして、志魚にあらざればなりの一句は後人の忖度の言辭ならん。卒然として釣を垂るゝに餌を設けずといふを聞けば、釣を知らざる者は疑ひて以て異も亦甚だしと爲す、是に於て志魚に在らざればなりの一句を注して、以て自づから解するのみ。これ所謂小兒の事を解するを爲せるものにあらずして何ぞや。

志和が漁父詞の一に曰く

青草湖中　月正に圓なり、
巴陵の漁父　櫂歌連なる。
釣車子、橛頭船。
樂は風波に在り、仙たるを用ゐず。

釣車は釣竿に附して、綸を收め又は出すの具、其製異なりと雖も、歐米釣客の「リール」といふものなり。淵明無絃の琴を撫するが如くならば、何ぞ釣車を要せんや。同じ唐の時の人の徐正字が釣車を詠じたるの詩の句に、

軸は駢角を磨きて、氷光滑らかに
輪は春絲を卷きて、水面平らかなり。

とあり。跡角は色赤き牛の角なり。釣車の體裁想察すべし。又同じ唐の時の一大詩人陸龜蒙が人に寄せて釣車を乞ふの詩あり。釣車の要用推知すべし。是の如きの釣車を用ひたる志和の、釣に餌を設けずといふと雖も、魚を致すことを全く意とせざりしにあらざりしは明らかなり。又志和の漁父詞の一に曰く、

釣臺の漁父　褐を裘と爲す、
兩々三々　舴艋船。
能く櫂を縦ち　慣れて流に乘る。
長江の白浪　曾て憂ひず、

これ漁父を詠ずるの辭にして、自己の態を敍するにあらずと雖も、他を假りて自を道ふ、志和もまた長江の白浪曾て憂ひざるまでに櫂を使ひ流に泛びしこと知るべし。さればこそ兄の鶴齡（或は松齡に作る）も

樂は是風波　釣は是閑、
草堂の松徑　已に攀づるに勝へたり。
太湖の水　洞庭の山、
狂風　浪起らば　且須らく歸るべし。

とは諷したるなれ。志和既に橛頭の船に櫂を縦つて長江の白浪を憂ひず、兄をして狂風浪起らば且須らく還るべしと云はしめ、綸を抛てば絡緯の聲を爲すところの（絡緯は蟲の名、綸走り車鳴りて絡緯の鳴くが如き聲發するなり、唐詩の語）釣車を用ふ。志もとより魚にあらずと雖も、全く魚を意はざることあらんや。其人品の高きよりいへば、漢の嚴光は志和の下にあるものならず。嚴光の釣りたる七里灘といふところは、唐の方干の幕に七里灘を發して夜嚴光臺下に

泊すといふ詩の句に

　　一瞬　即ち七里
　　箭馳　猶是難し。

とある句に徴しても知るべく、流のいと急なるところにして、光は其の急流の下のやゝ澱みたるところに綸を垂れしこと猜すべし。李白の詩の句に

　　何ぞ歎ぢむ　七里瀬の
　　我をして竿を垂れんことを欲せしむるを。

とあるも、七里瀬即ち七里灘にして、嚴光の故事あるより、垂竿を欲せしむるをとは作りたるなり。かゝれば陸龜蒙と友として善くして且釣侶たりし晩唐の大家の皮日休も

　　七里灘の波は　喧しきこと一舍、
　　五雲谿の　月は　靜かなり三更。

といへる其の爽涼なる一聯の佳句を發したり。波は喧しきこと一舍とあれば、川瀬の激き想ふ可き是の如きところの下に嚴光は釣りしなるが、光もともとより志魚に在るほどの人にはあらねど釣に餌を設けざりしといふこと無くて、且其の地を擇べるさまを考ふるに、必ずや特に魚の鉤に來らざるの處に竿を垂れしにはあらずして、魚の來るべき急灘の下の緩み澱むところに綸を投じたるなるべし。夜嚴光臺下に泊すとある方干の詩の題によりて、嚴光が釣臺の下の急水ならざるを知る。如何となれば水流衝激の地は夜泊などす可くもあらぬこと、繋留の定律、情理の必然なればなり。凡そ急流の前後、流やゝ緩むところは魚を釣る可く、滯水の上下、水やゝ動くところも亦魚を釣る可し。嚴光の釣臺、七里

題の下なることは、方干の詩題にて明知すべければ、其釣臺の好漁地なりしことも明知すべし。志魚にあらざるも、持竿不顧の樂を取る以上は、嚴光と雖も好漁地を擇みて坐せしなり。李德裕は志和を稱して、嚴光の比と爲せり。志和の釣に餌を投げざりしもの、豈たゞ志の魚に在らざりしが故のみならんや。

或は吾が饒舌を笑はん。吾今唐書の烟波釣徒志不在魚也の五字を例りて、改めて自適耳の三字と爲さんと欲す。

漁父詞中の西塞山前は、全唐詩の註に西吳記を引いて云ふ、湖洲磁湖鎭の道士磯即ち是なりと。鱖魚は吾邦の何魚に當つべきや明らかならず。貝原益軒は訓みて「さけ」と爲したれども蓋し非なり。すべて水族に屬するの文字は、和漢古今甚だ相淆亂訛語して、字に就て物を擬するも、物に就て字を擬するも皆甚だ難し。中村敬宇淸儒を會したる時、大なる鯛を示して字を問ひしに、皆答へて明らかなる能はず、和名抄載するところの「鯛」字を擧げて質したるに、又皆含糊して確答する者無かりしと云ふ。まことに鯛字は漢書に覯ゆること稀なり。彼我鱖の碩學猶且是の如し、正字の訛用、俗字の妄用、紛紛として談ずるに堪へず。「さけ」を以て鱖を訓ずるも、「さけ」は北魚なり、鱖は南魚なり。邦俗鮭を「さけ」とすれども、「ふぐ」の類なり。鮎は「あゆ」とすれども、「鯰」の正字なり。鰉は京都あたりの「ひがい」とすれども、「さうさめ」なるべし。蜆は「しじみ」とすれども、「小えび」なり。鮃は「ひらめ」と俗字妄用すれども、吾邦の古は「ふな」としたること新撰字鏡これを證す。鱖魚は漁父詞の畫題となれるを以て、圖上にこれを見ること多けれども、描いて明らかならず。支那に往來する人これを味はひしことあるを云ふ者あれども、語つて精しからず。其名をだに知らず、況んや其性をや。たゞ吾ひそかに鱖魚もまた餌無くして釣るべき魚の一たるを想ふのみ。

凡そ魚を釣るの道、其の當に備ふべきの具、曰く竿、曰く綸、曰く鉤、曰く沈、曰く泛曰く、撫網或はガッフ、曰く笭箵。魚を致すの道、其の應に設くべきの物、曰く裝鉤餌、曰く撒底餌、曰く撒流餌。これ皆有用欠き難き者なり。然れど

も笭箵は魚を得て後の用なり。これ無きも魚を得るを碍げず。黨網は魚を鉤にして後の用なり、又これ無きも魚を鉤にするを碍げず。泛は魚の鉤に到るを知るの具なり、但泛なきも亦釣るべし。ぶつこみ釣、こづき釣、曳き釣、中天釣、ぽかん釣、ずゐこ釣、手釣の類、皆泛を用ゐず、泛は其要少きものなり。沈は鉤を沈むるの具なり。但し沈無きも亦釣るべし。はたき釣、蚊鉤釣、角釣等、沈を用ゐざるの釣も亦多し。

竿なくして魚を釣るべき耶。曰く、釣るべし。それ竿は釣の要具なり。作竿を用ゐるものは、拙漁も巧獲し、微綸も大魚を得べし。此故に釣客の作竿を得んとするは、勇士の利劒を思ひ、美人の明鏡を重んずるが如し。されば半井卜養が狂歌集には、三十六節の釣竿を賞して「ふしはろく／＼のびず縮まず」の歌あり、唐の時の放縦なる詩人として、品行の蘇ならざると、才思の群を抜けるとを以て有名なる温庭筠の詩集には、竹林に釣竿を探ね求むる希有なる題目の一長篇さへ遺し留めたり。されども竿無きも亦釣るべく、手釣は手を以て竿に代へ、櫂釣は櫂を以て竿に代ふ。手釣の與の竿釣に勝るは、猶肉彈の絲彈に勝るが如く、櫂釣の功の竿釣に勝るは、猶偃月刀の小太刀に勝るが如し。

鉤無くして魚を釣るべき乎。曰く、釣るべし。それ鉤の釣に於けるや、蟹眼の扇に於けるが如く、心の身骸に於けるが如し。されば丹吉鉤は土州に誇り、ペンネル鉤は英國に跳き、ノンストライクは鳳鏤の寶劍、骨喰の太刀にも比して尙ぶべし。されども奥州松島の「はぜ」は鉤なくして釣るを定法とす。藻多くして鉤の便惡く、魚愚にして餌を放たざらば、何の地にても無鉤釣を利とす。鰻は鉤を用ゐざるも針をもつて釣るべし。太公望直針を以て魚を釣るの事は、其の本づくところを知らず、節用集の鼇頭などに見えたるとなるが、呂尙果して直針を用ゐしならば、不老の劑として鰻を獲んとしたる歟、人をして笑を發せしむるに足る。すゞご釣、櫂釣、皆鉤を用ゐず、鉤を用ゐざることによりて魚を收むること捷利敏活、而して一夜に數貫を得るなり。凡そ魚を釣るに、其の逸せさらんことを欲する者は、其鉤を深

出し、其鉤を凸起す。鉤は鉤距なり、「あご」又は「もどり」「かゝり」など稱するものなり。然れども魚を鉤より脱するに當つては、鉤高ければ速疾なる能はず、時費へ魚傷つく。此故に多獲を期するものは、其鉤を小にし、或は鉤を除くに至る。鰹釣其他海魚の釣に鉤なきもの多し。鉤を減して足らず、終に鉤を去るに至る。櫂釣の如きは綸もまた殆ど無し、たゞ麻絲横さまに魚齒にかゝるのみ、而も能く魚を得。漁者の智も極まれりといふべし。

餌なくして魚を釣るべき乎。曰く、釣るべし。撒底餌は貴紳の釣なり、これ無きももとより釣るべし。撒流餌は老漁の釣なり、これ無きも亦もとより釣るべし。古の兵家曰く、「

香餌の下　大魚あり、
重賞の下　勇士あり、」

此言眞に世態人情を盡す。然れども香餌無きも亦以て釣るべし。

餌無くして釣るの道三。曰く、擬餌釣、曰く、友釣、曰く、眞の無餌釣。擬餌釣の道は甚だ多岐なり。蚊鉤釣は鉤を裝ふに鸚鵡孔雀錦雞山雉其他種々綺麗の羽毛を以てし、金箔銀箔泥粉を用ゐて、蚊蠅小蟲の類を擬し、而して淡魚を釣る。これ世の洽く知るところなり。羽毛、魚皮等を用ゐて、蚊鉤の如くにしてやゝ大なるものを作り、以て海魚を釣る。これを「ばかし釣」といふ。これも亦世の周知するところなり。初は眞餌を以て釣り、魚多く到るに及んで、獸角骨等を裝へるの鉤を以て釣る、鰹釣烏賊釣の如し。これを角釣といふ。これも亦人の知るところなり。桐の材片を火焦し、修治して蝦兒の形をつくり、以て烏賊を釣る。これを烏賊木（イカギ）釣といふ。これも亦人の知るところにして、百餘年前既に薩摩に烏賊木評隣の書ありといふ。其の古より發達したること知るべし。

歐米諸國もまた此等の擬餌鉤を造ること甚だ多し。ミンノー（はやの類）に擬して、ゴムを以て作るもの、銀色黄色

黒色雜彩色其類甚だ夥く、又ゴムを以て蚯蚓其他諸蟲の形を模するものも少からず。これ我の無くして彼の有るところたり。

別にスプーンといふものあり。一釣客あり、舟中より過つて銀食匙を落し、其の水裏に旋轉したるを看るに、魚有り來つて之に銜觸す。是に於て創案して匙鉤を作る。これより匙鉤漸く世に行はれ、今其類幾百種あるを知らず。これ擬餌釣といふにあらずと雖も、亦一種の「ばかし釣」ならずとせず。

友釣は魚の雌雄相愛し、或は雄と雄と相爭ひ、雌と雌との相憎むの性あるに乘じ、活魚に附するに利鉤を以てし、銜觸撫拉するあれば輙ち鉤に上らしめて此を捕ふるなり。溪魚の類、これにより釣るべし。外觀は詩的畫的なりと雖も、所謂「をとり魚」の疲憊せるを視るに、興其半を殺ぐ。これ無餌釣といふと雖も、おのづから一別科に屬す。

張志和の釣に餌を設けざるもの、必ずや蚊鉤釣にも「ばかし釣」にもあるべからず。又ファントムミンノー釣スプーン釣にもあるべからず。友釣ならざることも又自づから明らかなり。然らば則ち眞の無餌釣ならんのみ。眞に餌を設くること無く、羽毛角骨金銀ゴム等を用ゐて裝ひ誘ふことなく、又雄魚若くは雌魚を「をとり」となさずして而も魚釣るべき乎。曰く、釣るべし。

かつて磐城濱に一漁夫あり。延蝿（ヘエナハ）をもて生計とす。一日爛醉して、鉤頭未だ餌を設けざるものを海に布く。翌日自づから悔いて、撫然としてこれを收む。然るに空餌の鉤に時に魚の上れるものあり。一魚又一魚、これを數ふるに得るところも亦少からず。是に於て赤鉤（スベリ）も亦魚を得べきを思ひて、復試みに醉餘の爲せるところの如くす。翌日また魚を得たり。これより日々是の如くにして日々に魚を得、習ひて以て常と爲す。他の漁夫もまた漸く之れを學びて勞少く功多きを得たり。これ今の俗に「じらいか釣」といふものゝ起源なり。「じらいか」は「自來家」か、將「ちらいくは」にして

「地雷火」か知る可からずと雖も、陶淵明の詩の句に

　　君まさに醉人をゆるすべし。

といへるがあり。造物爺々も亦醉漁翁を容して、これを哀愍せるものか、非耶「じらいか」の事、今猶行はる。赤鉤の魚を得べき是の如し。延縄は人ありて魚の觸るゝを候ふにあらざるなり、而も猶魚を得、況んや人ありて竿を持し魚を候ふをや。

張志和の餌を投けざるの釣も亦魚を獲るの時ありしなり。赤鉤にして魚を得ば、彼の必らず魚を得んことを欲して、美ならざるの小蟲等を鉤端に装ふもまた他事ならずや。陸龜蒙が

　　枯蚌に魚餌を盛る

といへる如きは實際の描寫なりと雖も、それ又美ならざる哉。予もまた前年より餌を設けざるの釣に親しむ。魚を獲る未だ多からずと雖も、興を得るも亦少なからず。私におもへらく、釣は餌を設けざるに至つて妙を極むと。

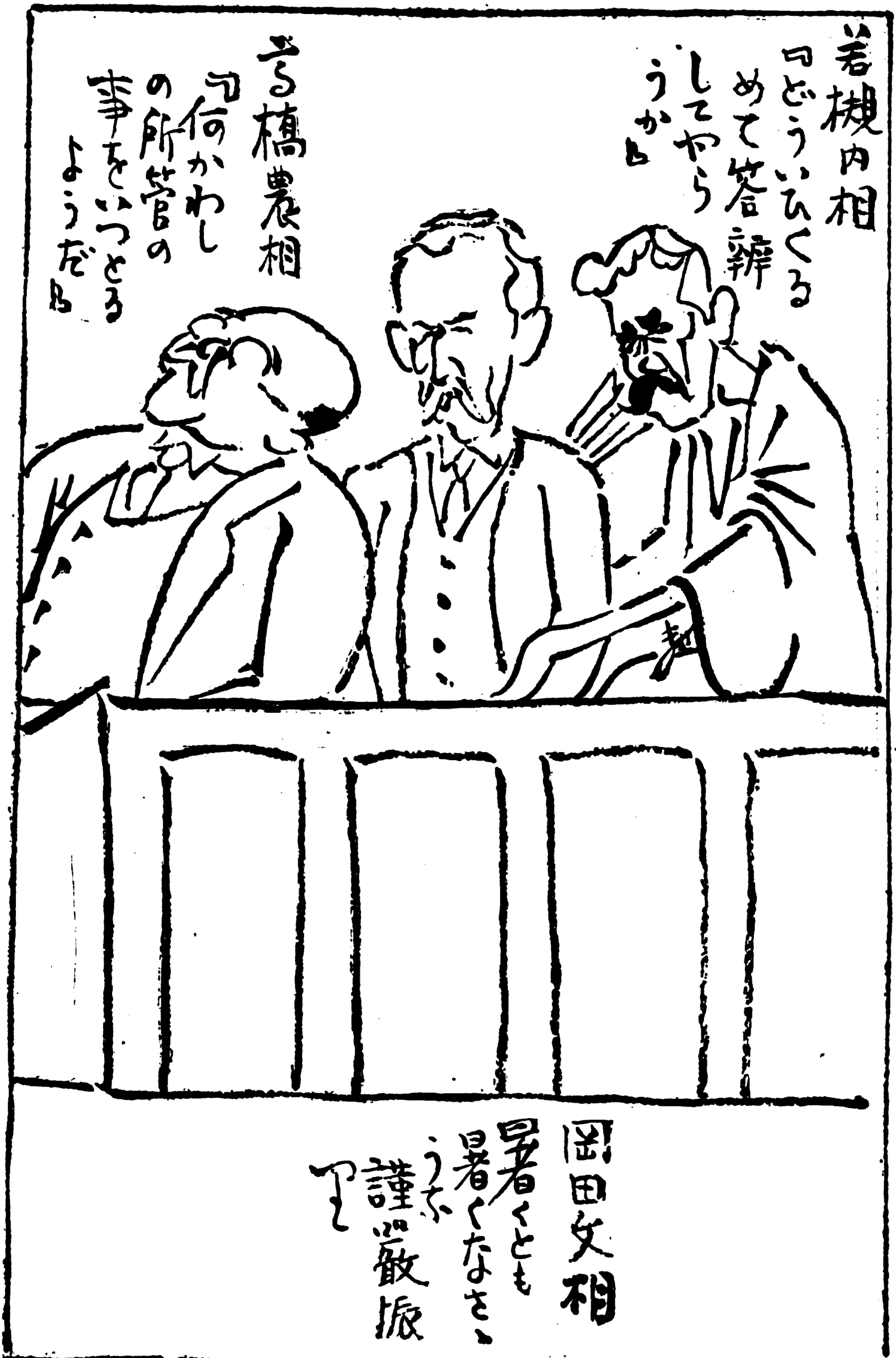
玄眞子歌つて曰く、

　元化は　靈なる哉。
　碧虚は　清き哉。
　紅霞は　明らかなる哉。
　冥たる哉　茫たる哉。
　惟　化之工や。
　彊　無き哉。　(末句三字句)

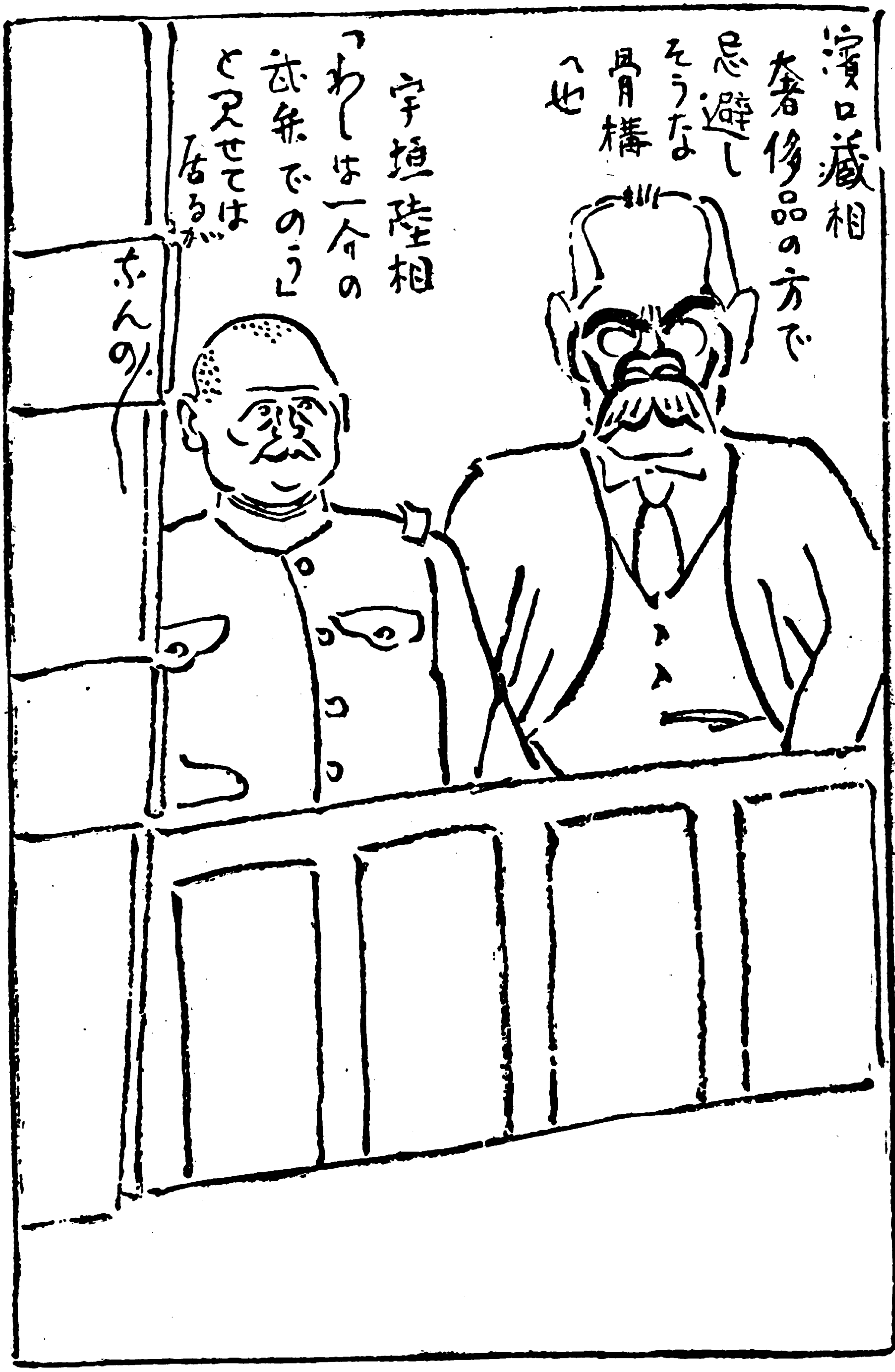
又其の作るところの空洞の歌に曰く

無自にして然り、
自然の元なり。
無造にして　化す、
造化之端なり。
廓然たり　愨然たり。
其形や　團欒なり、
爾の視を反し、
爾の思を絶さば、
以て　觀る可し。


仙石鉄相
調和役は人目に立たぬ後の方がよい
財部海相
この議会ではおいの所まで砲弾は来まっしせん
横田法相
大臣学第一課
神妙に
犬養逓相
新代議士の殖へて多少禿頭が減つたよ
うぢやーなぞ数へてゐる横着おやぢ
一平


若槻内相『どういひくるめて答辯してやらうか』
高橋農相『何かわしの所管の事をいつとるようだ』
岡田文相暑くとも暑くなさゝうな謹嚴振つて


加藤首相
いつも
「無償な事を
いふ奴だ」といふ顔
ようえんゆ
幣原外相
「兄貴あれ
はこうし
こういふ事を
いうとるのです」
と教へて居るようなふり


濱口藏相
奢侈品の方で
忌避し
そうな
骨構
へせ
宇垣陸相
「わしは一介の
武弁でのう」
と見せては
居るが
ぶんの



風呂桶

徳田秋聲

津島はこの頃何を見ても、長くもない自分の生命を測る尺度のやうな氣がしてならないのであつた。好きな草花を見ても、來年の今頃にならないと、同じやうな花が咲かないのだと思ふと、それを待つ心持が寂しかつた。一年に一度しかない、旬のきまつてゐる筍だとか、松茸だとか、さう云ふものを食べても、同じ意味で何となく心細く思ふのであつた。不斷散歩しつけてゐる通りの路傍樹の幹の、めき／＼太つたのを見ると、移植された時からもう十年たらずの歳月のたつてゐることが、またそれだけ自分の生命を追詰めて來てゐるのだと思はれて、好い氣持はしないのであつた。しかし津島のやうな年になると、死に面してゐる肺病患者が、通例死の觀念と反對の側に結構脱れてゐられると同じやうに、比較的年の觀念から離れがちな日が過せるのであつた。闇雲に先きを急ぐやうな若い時の焦燥が、古いバネのやうに弛んで、感じが稀薄になつてゐるからでもあるが、一つは生命の連續である子

供達の生長を悦ぶ心と、哀れむ心が、自分の變ひを容赦してくれてゐるのであつた。

その朝津島は一人の來客と無駄話をしてゐた。そんな時に彼は、それが特別な興味を惹くとか、親しみを感ずるとかいふ場合でない限り、氣分が苛々して來るのであつた。いつもさう感じもしない時間の尊いことを、特別に思ひだしでもしたやうに、取返しのつかない損をしてゐるやうに感じて、苛々するのであつたが、しかし其の人が遠慮して歸りさうにすると、思ひ切りわるく引止めたくもなるのであつた。津島は其の時ふと、妙なことが氣になつた。それは其の來客と何の係りもないことだが、それが氣になり出すと、もう落着いて應答してゐられないのであつた。彼は浮の空で話のぱつだけを合してゐた。それは板塀一つ隔てた、津島の書齋から言へば、前の方にあたる一つの家の臺所で、ちやうど其の時やつて來た大工に何か指圖をしてゐる妻の作子の聲が、妙に彼の神經を刺戟したのであつた。

津島はその頃、やつとその家を明けてもらふことが出來て、いくらか助かつたやうな氣がしてゐた。彼は年々自分の住居の狹苦しいのを感じてゐた。勿論十人の家族に、疊數でいへばわづか二十帖か二十四五帖の手狹な家なので、何うにも遣繰のつかないことは、女達に言はれなくとも、今まで住居などには全く何の注意をも拂はなかつた、又た拂ふ餘裕もなかつた津島自身が痛感してゐるのであつた。この二三年、子供達がめき〳〵生長するにつれて、その問題は一層切迫して來た。

津島はその頃長らく住んでゐた自分と、土地の都合でそれに附屬してゐる、今一つの家とを、思ひがけなく自分のものにすることができた、彼はさうする前に、自分の家が新らしい家主に渡りかけたところで、明け渡しを迫られたが、借家の拂底なをりだつたので、家が容易に見つからなかつた。彼は多勢の子供をひかへて家を追立てられる悲哀と、借家を搜す困難とを、その時つく〴〵感じた。そして友人の助力などで、とにかく其の古屋に永久落着くことになつて、一時吻

としたのであつたが、それだけの室數だけでは、何うにも遣切りのつかないことが、その後一層彼の頭腦を悩ました。彼は家を増築するか、別に一軒家を借りるか、するより外なかつた。入學試驗をひかへてゐる子供に、近所で部屋を借りてやつたりして、忙しい時は自分でも旅へ出たり、下宿の部屋を借りて出たりしてゐたが、それよりも前の家主時代から、彼と同じ借家人である、前の家を明けてもらつた方が、何んなに便利だか知れなかつた。その家は二つに仕切られて、二組の家族が住んでゐた。津島はその一方だけでも立退いてもらふつもりで、交渉してみたけれど、普通の交渉では、迚も明渡してくれさうになかつた。そして數回の折衝を重ねた結果、到頭法廷にまで持出されることになつたのであつたが、法律家の手に移されてからは、問題は一層困難に陥るばかりであつた。ちやうど泥沼へでも足を踏込んだやうな形で、彼も借家人も、全く抜差しのならない破滅に引込まれた。

津島が板塀の節穴などから、間取りの工合などを、時々覗いてみてゐた其の一方の家へ、足を容れることのできたのは、二年の後であつた。わづか一夜で、他の辯護士がそれを片着けてくれたのであつた。

その家は荒れ放題に荒れてゐた。子供達が机でもすゑるやうになる迄には、可なり手がかゝつた。でも津島たちは、いくらか寛ぐことができた。

「一時こゝを湯殿にしようか。」津島は或る日、台所へ入つて見て、ふとそれを思ひついた。

彼は現在物置になつてゐる湯殿が破損してから、幾年もの長いあひだ、洗湯へ通つてゐた。多分第三回目の妻の姙娠のとき、津島は彼女のために中古の好い風呂桶を見つけて來て、それを湯殿へすゑることになつたのであつたが、それから二三年たつてから、知人が特別に作らせて、その後家の都合で不用になつた厳丈な角風呂が、持込まれることになつたのであつたが、湯殿が破損してから間もなく、その桶にも隙ができてしまつた。

彼は洗湯のなかで、色々の人と顔を合したり、挨拶を交したりするのが、年々煩はしくなつてゐた。偶には子供も洗つてやらなければならなかつた。髪の毛などが白くなるにつれて、それが何となし惨めくさく感ぜられた。何よりも湯殿の必要を、彼は先づ感じた。

「譯はありませんよ。」妻も同意した。

だから、今彼女が自分で頼んで來た大工に、この台所を何う云ふ工合に湯殿に直せるかを相談してゐるのに、不思議はなかつた。そして少しばかりその聲の調子が高かつたからと言つて、さう氣にするほどのことでもなかつたが、ちやうど其の時、妻に對していくらか不機嫌になつてゐた折だつたので、そんなちよつとした手入れをするのに、朝つぱらから、今の一つの借家人や隣家へも間ぬけに聞えるやうな調子で、何か話してゐるのが、いつもの彼女の安價な虚榮心でないにしても、職人などに對して、何かひどく氣の利いた風を示さうとでもするやうな淺果敢な悧巧さだと思はれて、わざとらしい其の調子が、何うにも堪らない氣がしたのであつた。勿論それは津島のみが感じ得ることかも知れなかつたが、年を取つてから出て來た彼女の厭味の一つかも知れないのであつた。男は年を取るに從つて、洗練されて來る。しかし女はその反對だと思はれた。

「何だつてあんな大きな聲を出すんだ。」

暫らくしてから、さく子が此方の家へ來て、茶の間の縁先きで、そこに干してあつた足袋の位置をかへてゐると、津島が座敷の縁へ出て詰つた。

さく子はちよつと驚いたやうな顔を、こつちへ向けた。二人は昨日から口を利かないのであつた。

「何です。」

「あんな調子づいた聲を出して、どんな湯殿を作るつもりなんだ。」
「別に大きな聲なんか出しやしませんよ。」
「こゝまで間ぬけに聞えるぢやないか。隣りぢや何んな普新をするかと思つたに違ひないんだ。」
「可いぢやありませんか。別に惡いことをするんぢやないんですもの。」作子はさう言つて部屋へ入りかける、「あゝ煩さい」と眉に小皺を寄せた。

　津島とさく子が不快を感じ合つてゐたといふのも、今までも善くあつた、彼女の弟のことからであつた。その弟が、津島に對して金錢上で、ちよつと狡いことをやつた。預けたものを質へ入れて、放下しておいたのが、津島の氣を惡くした。その不正なことを、さく子も腹を立てゝゐたけれど、其れ以外にも少し金錢上の取引きがあつて、そんな事には頭腦の働きの鈍い津島に、さく子はいくらか弟の非を蔽ふやうな說明を加へたのであつた。津島はその弟に可なりな補助を與へたこともあつたけれど、利き目のないのに懲りて、さうした交渉は作らないことに決めてゐたのであつたが、ふいと虛につけ込んで小股をすくはれたのが、腹立しかつた。さく子も弟の惡いことは十分知つてゐた。大袈裟に津島の惡を弟に着せたりすると、それが津島には擽つたくもあつた。しかしその時は、幾らか體裁を作るためにか、それとも氣づかずにか、とにかく曖昧にしようとした。が、其よりも差當つて質に入れられたものを、津島は取返さうとした。そして終ひに自分で金を拂つて、漸く取り返すことができた。その金は僅かだつたけれど、人を舐めたやうな彼の態度が、憎かつた。彼はさく子にも當らずにはゐられなかつた。そんな場合に、子供に甘い作子たちの母親か、誠意をかいでゐることも津島を不快にした。

　津島はさく子に移されて行つた不快が、まだ滓のやうに腹に殘つてゐたので、さうしたさく子の調子が、忽ち逆上性

の神經を苛立たせてしまつた。

津島は二言三言應酬してゐるうちに、さく子を打つた。いつもの通り、さく子はそれを避けも逃げもしないのであつた。人が止めるまで打たせるのであつた。自分で手を上げることも、さう珍らしくはなかつた。

津島は猛烈に打つた。彼女がいつも頭惱を痛がるのは、自分の拳のためだと意識しながら、打たずにはゐられなかつた。近頃の彼に取つては、それはをかしいほど荒れた。そして人々に遮へられたところで、床の間にあつた日本刀を持出して、抜きかけようとさへした。本統にそんな事のできる自分だとは思へなかつた。子供じみた脅嚇に過ぎないのを愧ぢてもゐたけれど、そんな事を遣りかねない野獣性が、どこかに潜んでゐるやうにも思へた。彼はそんな時、幼少の折犬に咬まれて、その犬を殺すために、長い槍を提げて飛出して行つた老父の姿を思ひ出したりするのであつた。づつと年を取つて、體の起居の自由が利かなくなつてから、まるで駄々ツ兒のやうに、煙管を振りあげて母を打たうとした父の可笑しな表情も目についてゐた。母は悦けた手つきで踊りのやうな身振をして、却つて父を笑はせてしまつた。

さく子しかし剽輕な女ではあつたけれど、決して踊りはしなかつた。蒼くなつて反抗するのであつた。

夕方になつてから、津島は大工が張つて行つた、湯殿の板敷を鍬で叩きこわしてゐた。

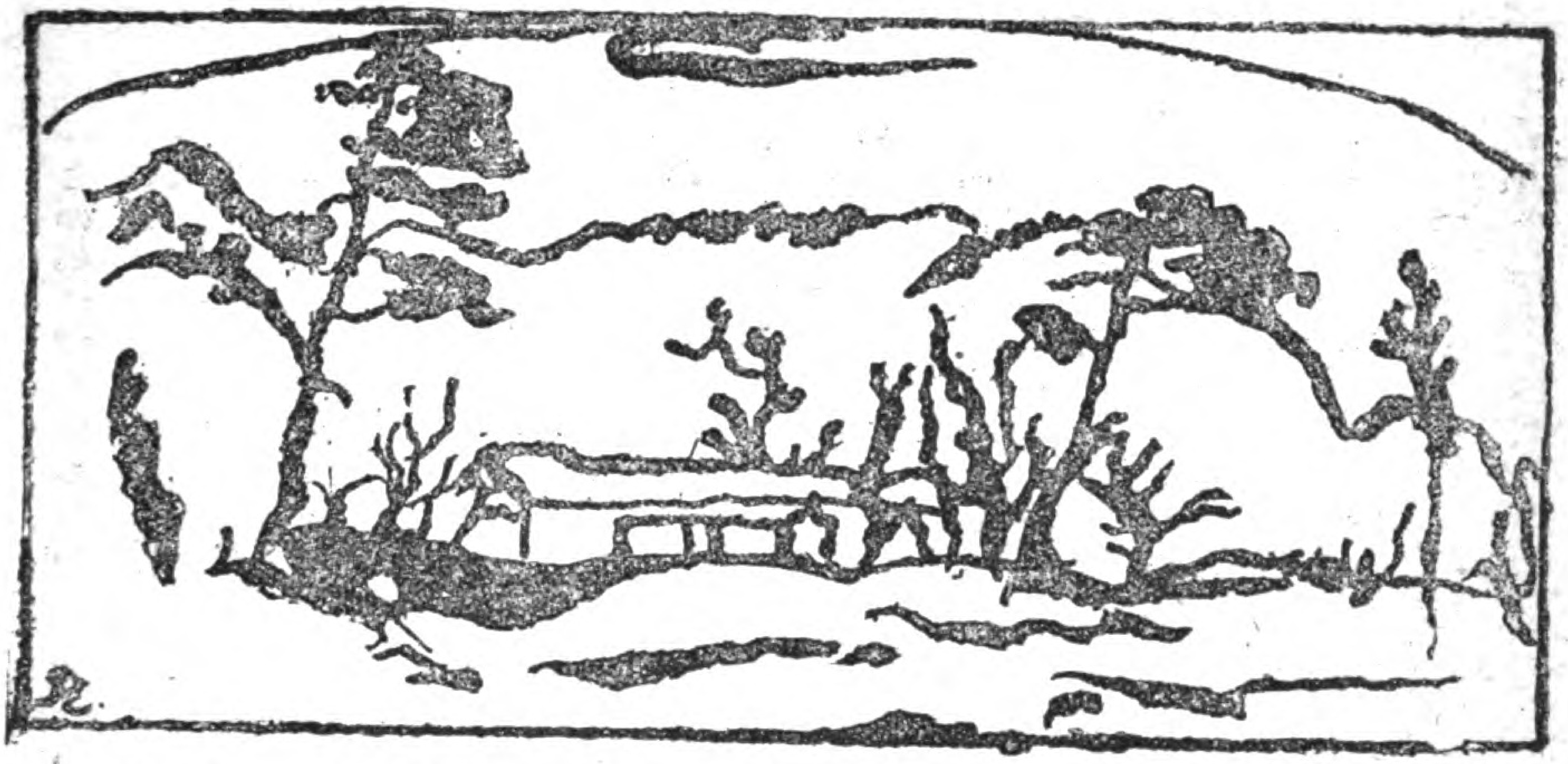
津島がやはり湯殿を利用した方が得だと思つて、妻と一緒に風呂桶を買ひに行つたのは、それから半月もたつてからであつた。そして其の翌日風呂桶が据けられて、急拵への煙突なしで、石炭が焚かれた。

津島は久しぶりで、内湯へ入ることができたが、周圍が小汚いので、氣持は餘りよくなかつた。それに廣々とした湯殿へ入りつけてゐたので、さうやつて風呂桶のなかへ入つてゐるのが窮屈であつた。

「この桶は幾年保つだらう。」彼はいつもの癖でそんなことを考へた。

「おれが死ぬまでに、この桶一つで好いだらうか。」と、さうも思つて見た。

すると其が段々自分の棺桶のやうな氣がして來るのであつた。



叔母

悦田喜和雄

1

まだその時分はわけは知らなかつたが、私は父がかう云つてゐるのをよく聞いた。

『わがまゝをしやがつて、あんな者についてうせて！』そんな時、祖母は父の顔をジロ／＼睨てゐた。そして、反向る時は泣きさうな顔をする。

春であつた。私が眼を醒した時はもう家の中は明るかつた。一緒に寝てゐた祖母はゐなかつた。

私は目映ので布團の中へ頭をひつこめた。そして、こんなことを考へた。――こんど叔母が來る時なにを買ふて來て呉れるだらう？バイ（こま）だけかいの？バイ買ふて來て呉れるとよい！富ちやんも重さんも、誰も持つてゐないやうなやつを！鐵砲もえゝ、鳥射つのに！この次には鐵砲を買ふて來て貰ふ、それから私は叔母が

いつ叔母來るか?を考へてみた。なか〳〵いつ來るか考がつかない、バイなたのんだのはもうずつと前のやうでもあり、つい五六日前でもあるやうに思へた。

『茂はおたへが大きくしたんぢや、大人になつたら、精出して働て、おたへにうまいもん買ふてお呉れよ!』と叔母が云つたことを思ひだして嬉しくなつて來た。大きくなつたら叔母をうんと喜ばせてやらう?と思つた。

起きたが目映くて眼が開けられない、トン〳〵走つて爐の間へ行つたが誰もゐない、淋びしくなつて泣きたくなつて來た。しかし、泣けない。眼をこすりながら立つてゐた。と、祖母が土間を、水手桶を提げて這入つて來た。爐の間と土間とはあひだに障子がないのでよく見える。祖母は流の裏の水がめへその水をうつした。

『バヽ(祖母)バア(叔母)いつ來るんぜ?』私はかう叔母の來る日を訊いた。

『ナニ!あんな奴、親に心配ばかりかけるやつ、こんな方がえゝは、來たつてなんすりや!』祖母はかう怒つた。

私は悲しくなつた。眼に涙がたまつて來た。

祖母はそのまゝ、又水手桶を提げて出て行つて了つた。

私は聲を出して泣き出した。そこへドカと折れたやうに坐つた。足でトン〳〵床板を鳴らしながら、ウワツ!と、あるだけの聲を出して泣いた。

祖母は又水手桶を提げて這入つて來た。

『ナニ泣くんな大けななりして、清吉弟見い!遊びに行つたは、それに、兄やのなりして泣くつちやあるか、何んで泣くんな!アホ!早よう飯たべ!』祖母は手桶を提げて土間を歩きながら私の方を睨んで怒つた。

『飯たべるは!飯たべるは!』私はかう云つて泣き出した。

『泣き味噌、しようたれ！弱味噌！』祖母はかう云ひながら私に膝を揃へて呉れた。

私は泣きやんで飯を食つた。

2

雨がシト／＼降つてゐた。もう父母達は田植の用意に、雨が降つても田に出てゐた。

其日、私と弟は雨が降つて遊びに出られないので、家の中でカクレンボーをしてゐた。

弟は隠れるのが非常に上手であつた。中の間の一竹を一本横に吊つて、それへ着物をかけるやうにしてある。そのかけた着物のたれてゐる中へもぐり込んで立つてゐたり、古い冬の仕事着物を投げちらしてある戸のない押入の中へ行つて、父の仕事着物を冠つて寝てゐたりした時にはなか／＼見つからなかつた。しかしそれも二回目にはさう云ふうまい手にはのらなかつた。

私の隠れる番になつた。私は客室の疊を積んである、私の脊より三尺も高い疊と壁との狭い間へ、身體を横にして這入つた。坐るに着物のすそは巻き上つて寒いので少し脊を縮めて、巻き上つた着物を尻の方へ引き下げたりした。トン／＼弟が來る足音がしたので息を殺してゐた。すぐ傍まで來て疊の間を覗たがすぐどこかへ行つて了つた。コソリと云ふ音もしなくなつた。だん／＼私は面白さがなくなつて來た。尻が寒くなつて來た。もう出やうと云ふ氣になつた。又急に父母達が正午飯に歸るまでかうしてゐらうか？といふ氣がして來た。丁度頭の上へ、疊の上に置てある着物らしい物が垂れてゐるので、それを引きおろして尻へ敷く心算で片手で引てみた。何だか、重い物が疊の上で壓してゐるやうでなかなか下らない、一尺位い下りたやうだがもうそれ以上は肘が壁につかへて力が入れられない、その耳のあたりまで垂れ

て來た着物から叔母の匂ひがした。私は鼻に押しあてゝ、叔母だけが持つてゐる、乳臭いやうな匂ひを嗅でみた。暗いので見えないが、これは確に、家へ來るといつも叔母がねまきにしてゐる着物だらうと思つた。私は叔母がバイ（こま）を買つて來てやると云つたことを思ひ出した。――二つかいの？三つかいの？三つ買つて來て呉れたら、一つは濟吉にもやるが、二つ買つて來て呉れたら濟吉にみられないやうに隱して置かう！とこんなことを考へたりした。

晝の間から出て行つて見ると、弟はごろりと横寢になつて、ずつと前に叔母が買つて來て呉れた繪本を見てゐた。そして、私が行くと、私の顏を見上げて、

『俺のバイ何處へやつた？』と泣くやうな顏をして云つた。

『バア（叔母）が又買つて來て呉れるんじや、もう三つ寢たら來るんじや！』私は昨日富ちやんや重ちやんとバイの勝負して、弟のバイまで負けて了つてゐたのでかう云つた。

『又負けたんだらうが、もどせ、もどせ！』弟は身體を搖ぶつて云つた。

『バア（叔母）が買ふて來て呉れたらお前にみなやるは！』私はかう云つた。

『今でなけらいらん、今でなけらいらん！』弟はかう云つてだゞをこねだした。

3

秋だつた。土間には籾を揩つて、それを唐箕にもかけずそのまゝにして、父母達は田へ出てゐた。中の間の上り口には出來上つた米を五六俵積み、その横には米の一杯入つたフゴが四つ五つ置てあり、そのあたりには米が落ちて居た。俵の上に置た着物には白いほこりが積んでゐた。實に、ほこりつぽい、狹苦るしい感じがしてゐた。

私が隣家の重ちやんと一緒に栗拾ひに行つて歸つて見ると父母達は歸つてゐた。私は拾つて來た栗を三つ四つ弟にやりそれから祖母のすぐ傍へ行つて坐つた。

『家の山へ栗拾ひに行くのなら他家の子をつれて行かいでも淸ちやんをつれて行つたれ！』と云つて母は私を睨んだ。

『そしたつて？』と云つて私は赤い顏した。

私は、弟は足が不達者なばかりでなく、家へかへつて色々つげごとをしたり、氣まゝなことばかり云ふので一緒に他處へ遊びに行くことは好かなかつた。弟と一緒に行くと、何だか自由に、したいほうだいに遊べないやうな氣がするので逃げることが出來たら逃げるのであつた。

父がなんだか怒つてゐるやうな顏してゐるので私は怖かつた。

『俺も行くは兄や、今度何處へ行く？』弟は栗の皮を剝きながら訊た。

『……』私は父が今にも怒鳴出しさうなので、弟の問ひに答へもせず、祖母の身體の蔭に隱れるやうにして小さくなつてゐた。

『何程働いても働いても働き精がない、家に盜人飼ふてあるやうなものじや！』父はかう云つた。祖母も母も默つてゐた。私はたまらなく怖くなつた。しかし、何を云つてかう怒つてゐるのか見當がつかない。母も祖母も、皆が怒つたやうな顏をして居る。

『まだ、じように（澤山）落ちとるか？』弟が又かう云つた。——もう栗のこと云はねばよいのに又云つた。そんなに云ふな、云ふたら父たら（父の敬語）が怒るんじや、と心の内で云つたが聲には出さず默つてゐた。

『よう俺つれて行つて呉れよ、泣けへんは！』弟は又云つた。

『……』私は默つて俯向てゐた。

『人間がずぼらするつてほどがある。犬や猫でも口すぎ（食ふて行くこと）しとんのに！』父は又から云つた。私は悲しくなつて泣いた。

『あほ！お前でないんじや！』母が笑つてから云つたが私はやはり悲しいので聲を出して泣いた。

『オ、！お前でないんじや、バア（叔母）のことじや、泣くなア！泣くなア！』と祖母は私を抱くやうにして、私の頭へ額をつけて云つた。私は祖母の眼に涙が溜つてゐるのを見た。私は一層悲しくなつて來て泣いた。

私が泣き止んで飯を食ひ出した頃、父はもう飯を濟して戸口に行き、戸口の閾に跨つて煙草を喫つてゐた。その父の眼はやはり私の方を見てゐるやうなので、私は父の方を見ないやうに茶碗の中ばかり見て食つた。そして、食つてしまふとすぐ中の間の戸棚の蔭の父の見へない處へ行つた。祖母はなぜか、爐の傍に坐つたまゝ何かを考へてゐるやうであつた。

百姓はり（利益）が少ないもんじやのに、二軒の世帯がなかなか出來ようかいの、どんなに精を入れて作つたつて、底なしの桶へ水を入れるやうなもんじや、あほらして働けん！』父は大きな聲で顏を赤くして云つた。

『そんなに云ふな、あれじやつて子供もあることじや。子供でも大きくなつてみい！來い云ふたつて來えへんは、』と祖母は云つた。

『やるのつて來るんじや、わしが作つたりだけお前があれにやつて了ふんじや、いつまでやつたつてきりがあるければそれをあてにしてゐやがるんじや』父は又云つた。

『そんなに云ふな、あれじやつてかなりの百姓へでも嫁入つて見い、荷物は持つて行かにやならんし、子が出來りや子が出來て、やれ初着じやの、名つけ祝ひのお餅じやの、お賀だのと云ふて大變だぞ、今のおすみのやうに子が出來たつてハガキ一つ出さずに知らん顔してるわけにいかんぞ。』と祖母は云つた。

『ナニ！そんな家へ嫁入とつたら後で世話がかゝらんわいな、ありやど盗人じや、兄の脚かじりじや！』父は齒痒さうにかう云つた。

『もうえゝはいな！』母が土間で慰めるやうに云つた。

『がアきや、腹のたつ、すり（盗人）じや、拵へた米を片つ端から賣りくさる、うんなぐつてやつてもあまりがない！』父は一層齒痒さうに云つた。

祖母は顔を眞赤にして土間へ下りて戸口の方へ行つた。私は怖々俵と戸棚の間から父の方を見た。

『だうでもせ！さあだうでもせ！うんなぐつて呉れ、殺して呉れ！』祖母はかう云つて父につめよつてゐた。父は默つて戸外の山の方を見てゐた。

私は悲しくなつて、又さつきの父の見えない戸棚の陰へ行つた。そして弟に見られないやうに筵へ顔をくつつけて聲を出さずに泣いた。

『あら！泣いたんじや、泣いたんじや、泣き味噌よ！』弟は私の顔を覗いてから云つた。

私は頭を上げて弟の頭を毆つた。

『イヤン、イヤン！』と云つて弟は私にたゝきかゝつて來た。

4

私が尋常二年生になつた時、叔母は私に帽子を買つて來て呉れた。私は非常に嬉しかつた。私は使ひをしてお賃を貰つたり、父からセイボだと云つて十錢貰つたり、五錢貰つたりして、三年も前から溜めて、五十錢になると父の五十錢銀貨に替てもらつて持つてゐた五十錢銀貨を二枚出して來て、默つて叔母に出した。

『それだうすん？呉れるんか？』叔母はかう云つた。私は恥かしい氣がした。默つて頷いた。

『ありがたう！』叔母はかう云つてから、少し離れてゐる祖母の方へ、手の腹へ入れた五十錢銀貨を見せるやうにして、

『これ、これ茂が呉れた！』と云つた。

『……』祖母はそれを見て微笑したが何にも云はなかつた。

『オヽ！茂はやさしい者だ！』かう云つて叔母は私の頭を撫でて呉れた。そして、貰つたまゝまだ冠りもせずに持つてゐた帽子を私の頭へ冠らせて呉れた。

私は帽子を冠つて戸外を歩きまわつた。家の上の蜜柑畑へ行つて、そこの一番上の、隣村へ越す道の見える處に立つて、

『オチ二、オチ二、』と大きな聲で掛聲して、學校で習つた運動をして見たりした。

少しして家に歸ると、お金を數へる音がしてゐた。

私は帽子を脫で家へ入り、爐の間へ行つた。そこの薄暗い處に叔母と祖母とは默つて坐つてゐた。そして、叔母と祖母は私の顏をジロ〱見た。

『帽子は？』叔母はかう云つた。私は物を云はずに、持つてゐた帽子を差出して叔母に見せた。叔母はすぐ前に置てある風呂敷包から赤い紙で包んだあわおこしを一つ出し私の方へ差出し、『帽子あした學校へ冠つて行けよ！』と云つた。私はあわおこしを貰つて又家を出た。

新しい帽子を冠り、赤い紙で包んだあわおこしを持つて門口へ出て行くと、丁度弟の清吉に出介つた。清吉は私をジロジロ見て泣きさうな顏をした。私は持つてゐたあわおこしを二つに折つて

『バア（叔母）來とんぞ！』と云つて一つを清吉にやつた。

清吉はあわおこしは食べやうともせず、やはりジロジロ私を見た。私はあわおこしを一口かんで、弟と肩組して家へ歸つた。

祖母と叔母はやはり爐の傍の薄暗い處にゐた。叔母は又あわおこしを出して、私と清吉と二人に一つづゝ呉れた。

『清さんには今度來る時兄やよりえゝ帽子買ふて來てやるぞ！』と叔母は清吉の顏を見て云つた。

私と清吉は中の間へ行つて腹這ひになつてあわおこしを食つた。

『今度來る時、兄やよりえゝ帽子を買ふて來てやる云ふた！』清吉はあわおこしを食ひながら私の冠つてゐる帽子を見て云つた。

あくる日の朝私が起きて行くと、父は爐の間からかう云つてゐた。

『ド盜人、もういせな、三日にあげず小使とりに來やがる！』

『もう來いいふたつて來へんは！』叔母は中の間に坐つてかう云つた。

『オゝ！うせな、來なかつたら結構ぢや、うせるな！』父は又かう云つた。

叔母と父との喧嘩だと思ふと、私は悲しくなつて來て、中の間の着物を吊つてある中へもぐり込み、誰にも見つからないやうに涙を拭いた。

5

私は、叔母と父とがなぜあんなに仲が惡いかを考て見たがどうしてもはつきり解らなかつた。叔母のむこさん（夫）が巡査だから父が好かないのかも知れない、父もやはりチョンマゲ頭だから洋刀を吊つたり、洋服を着たりする人は嫌なのかしら？と考へたりした。

ある日だつた。私が尋常三年になつたすぐだつた。

『明日習ふところを讀んで來い……』と先生に云はれたので、私は家に歸ると、中の間の障子の傍へ机を持ち出し、そこで讀本を讀む練習をしてゐた。知らぬ字へは參考書を見て、釘で假名をつけたりしてゐた。

『今日は！』誰かゞ戸外でかう云つた。父母達は家にゐなかつた。祖母は聞えなかつたのか返事しない。私は障子を開けて覗いて見た。

『お偉いなア！御勉强じやなア！』ザルを擔だいつもの女の魚屋が私の傍へ來てから云つた。

私は默つてゐた。

『バヾ（祖母）さん居るかへ？』魚屋はかう云つた。私は默つて頷た。

『うち（中）に居るかへ？』魚屋は戸口の方へ向ひた左の手をあげて云つた。私は又頷いた。

魚屋はそこへザルを置き、戸口の障子を開けて這入つて行つた。私は障子を締めて又讀んだ。いつも十五錢ぐらゐ

じ處を讀むことにしてゐるので左の指で回數をかぞへながら讀んだ。

祖母と魚屋はブツ／＼何か話してゐた。

三回目指を折りつくしたので一寸休んだ。と、祖母達の話が止んでゐた。もう歸つて行つたのか知ら？と思つて障子を開けて覗いて見た。ザルはさつきのまゝ置いてある。不思議なのは一つのザルに米の入つたやうな袋が入つてゐる。それが蓋をしてあつても袋が大きいので蓋をもち上げてゐる。と、戸口の障子が開いて、魚屋が又大きな重さうな袋をかゝへて出て來た。そして、私の顏を見ると、顏を赤くして、少しためらうやうにし、も一つのザルの蓋を取つて、その袋を入れた。私はそれを凝つと見てゐた。

祖母が戸口から首を出したが私をチラと見てすぐひつこんで了つた。そして戸口の障子を締めた。

魚屋は默つて、ザルを擔いで去んで了つた。

私は障子を締めて又聲を出して讀みだした。二回ほど讀んでふと後を見ると祖母が立つてゐた。

『さつきのこととたう（父）やかゝ（母）に云ふなよ！』祖母はかう云つて、カキ餅の焙つたのを入れた盆を私の方へ差出した。私はカキ餅の入つた盆は取つたが何のことかわからないので默つてゐた。

『あれなう！あの米、魚屋さんに買ふて貰ふてそのお金をバア（叔母）の處へ送つてやるんじや、とたうやかゝに云ふたら怒るのつて云ふなよ！』祖母はかう云つた。私は默つて頷いた。

私はカキ餅を食ひながら、叔母が貧乏で困つてゐることを想像したりした。すると叔母が可哀相に思へて來た。——自分が大人だつたらうんと働いて、儲けたお金を全部送つてやるのに！と思つたりした。

私は今の魚屋が持つて行つた米のことから想像をめぐらし、やつと、父と祖母とが折々評するのや、叔母と父とが仲

が悪いわけを知つたのである。

6

入梅頃だつた。眼をさますと父は土間の隅で藁を打つてゐた。そのトン〳〵と云ふ音と雨垂の音は私の身體をグニャグニャにして了つた。起きて行かうと思つても、雨垂の音と藁を打つ音は、丁度脊負つた子供を寢つかす子守唄のやうに私を眠らせようとした。眼を開けると目蓋が痛いのですぐ眼を閉じる。と、ウツラ〳〵夢には入つて行く、と又眼を開けようとする。いくら目蓋へ力を入れても垂れ下つた目蓋はなか〳〵上らない。父の藁打音に雨垂の音が微に聞えてゐる。沼のやうな、中へ落込んで行く、周圍から澤山の人が『オイ！オイ！』と呼んでゐる。しかし、私は手も足も動かない、口は開いてゐても舌が動かない。眼を開けようと思つてもだうしても開かない、一生懸命に踠いた。と氣がついた。やはり雨垂の音はしてゐる。父の藁打音もしてゐる。私は眼をこすつた。欠伸が三つ四つ續けて出た。やはり體はダルい、今日日曜であればよいのにと思つた。

『電報！』と云ふのが聞えた。父の藁を打つ音はやんだ。私は胸をダク〳〵させながら起きて行つた。

『しようのない奴じや、家には何程でもお金があるやうに思つてゐやがる。』父は土間につツ立つて電報を見ながらかう云つた。そして私を一寸見て、又電報の方へ眼をやり、頭をガリ〳〵搔いた。私は父が怒つてゐるやうなので怖々父の前を通つて戸口に出た。

『おばあさん（祖母）——父や母はいつもかう云つてゐた——又おすみ（叔母）からお金送つて來て呉れ云ふたぜ！』

父はかう云つた。

じ處を讀むことにしてゐるので左の指で回數をかぞへながら讀んだ。

祖母と魚屋はブツ〳〵何か話してゐた。

三回目指を折りつくしたので一寸休んだ。と、祖母達の話が止んでゐた。もう歸つて行つたのか知ら？と思つて障子を開けて覗いて見た。ザルはさつきのまゝ置いてある。不思議なのは一つのザルに米の入つたやうな袋が入つてゐる。それが蓋をしてあつても袋が大きいので蓋をもち上げてゐる。と、戸口の障子が開いて、魚屋が又大きな重さうな袋をかゝへて出て來た。そして、私の顏を見ると、顏を赤くして、少しためらうやうにし、も一つのザルの蓋を取つて、その袋を入れた。私はそれを凝つと見てゐた。

祖母が戸口から首を出したが私をチラと見てすぐひつこんで了つた。そして戸口の障子を締めた。

魚屋は默つて、ザルを擔いで去んで了つた。

私は障子を締めて又聲を出して讀みだした。二回ほど讀んでふと後を見ると祖母が立つてゐた。

『さつきのこととたう（父）やかゝ（母）に云ふなよ！』祖母はかう云つて、カキ餅の焙つたのを入れた盆を私の方へ差出した。私はカキ餅の入つた盆は取つたが何のことかわからないので默つてゐた。

『あれなう！あの米、魚屋さんに買ふて貰ふてそのお金をバア（叔母）の處へ送つてやるんじや、とたうやかゝに云ふたら怒るのつて云ふなよ！』祖母はかう云つた。私は默つて頷いた。

私はカキ餅を食ひながら、叔母が貧乏で困つてゐることを想像したりした。すると叔母が可哀相に思へて來た。――自分が大人だつたらうんと働いて、儲けたお金を全部送つてやるのに！と思つたりした。

私は今の魚屋が持つて行つた米のことから想像をめぐらし、やつと、父と祖母とが折々諍するのや、叔母と父とが仲

が悪いわけを知つたのである。

6

入梅頃だつた。眼をさますと父は土間の隅で藥を打つてゐた。そのトン〳〵と云ふ音と雨垂の音は私の身體をグニヤグニヤにして了つた。起きて行かうと思つても、雨垂の音と藥を打つ音は、丁度脊負つた子供を寢つかす子守唄のやうに私を眠らせようとした。眼を開けると目蓋が痛いのですぐ眼を閉じる。と、ウツラ〳〵夢には入つて行く、と又眼を開けようとする。いくら目蓋へ力を入れても垂れ下つた目蓋はなか〳〵上らない。父の藥打音に雨垂の音が微に聞えてゐる。沼のやうな、中へ落込んで行く、周圍から澤山の人が『オイ！オイ！』と呼んでゐる。しかし、私は手も足も動かない、口は開いてゐても舌が動かない。眼を開けようと思つてもだうしても開かない、一生懸命に腕いた。と氣がついた。やはり雨垂の音はしてゐる。父の藥打音もしてゐる。私は眼をこすつた。欠伸が三つ四つ續けて出た。やはり體はダルい、今日日曜であればよいのにと思つた。

『電報！』と云ふのか聞えた。父の藥を打つ音はやんだ。私は胸をダク〳〵させながら起きて行つた。

『しようのない奴じや、家には何程でもお金があるやうに思つてゐやがる。』父は土間につツ立つて電報を見ながらかう云つた。そして私を一寸見て、又電報の方へ眼をやり、頭をガリ〳〵掻いた。私は父が怒つてゐるやうなので怖々父の前を通つて戸口に出た。

『おばあさん（祖母）――父や母はいつもかう云つてゐた――又おすみ（叔母）からお金送つて來て與れ云ふたぜ！』父はかう云つた。

『何程え〻？』祖母は何氣ないやうに訊いた。

『おすみにかゝつたらすぐ目が白くなつて了ふんじや、お金でも送つて呉れつて云へばえゝかと待つとんじや！』と父は腹だゝしく云つた。

『なんじや、そんなことがあらうかいの、おたへお金つて一文も持たんもん、儲けんもんだア！』祖母はかう云つた。

『ナンにしても五圓か十圓ならえゝが五十圓てあら〳〵しい、そんなお金ない〳〵！』

『ナンて云ふて來たんぜ？』祖母は訊いた。

『クビキレルカネ五〇エンヲクレ、つて、なに！首が切れたつて、こちらやつてそんなに送りよつたら首が切れるやうになるわいな、知らん〳〵』と父は云つた。

『送らいでえゝはいな、何程送つたつて、あれは千圓持たせて置たつて三日もあれへんないのがましじや！』と祖母は云つた。

私は戸口の小便處へ小便をし、顏を洗つて家に這入つた。爐の間へ行くと、祖母は膳をこさへて呉れたが飯を食ふ氣がしなかつた。――叔母が本當に首が切れるやうになつとんか知ら？それに父は呑氣な、祖母までが呑氣なことを云ふ、首が切れる、と云ふことは何か外のことか知ら？と思ひながら祖母の顏を見た。祖母は心配らしい顏をしてゐる。土間へ莚を敷いて、その上に胡坐し、前へ藁を置て、用意は出來てゐるが草履を作らず、スッパ〳〵煙草を吸つてゐる父も心配してゐるやうであつた。

『早よう飯たべて行かんと後れるぞ、今日はこんなんでももう遲いぞ！』と祖母は私の顏を見て云つた。

――本當に叔母は困つてゐるのだらう？家から送らなかつたら本當に首が切れるのかも知れない……祖母は五十圓く

らひは持つてゐるだらうから送つてやるだらう？……ないかも知れない、送つてやらなかつたらバアはだうするだらう？と思ふと、お金がなくて皆が食はずにゐる處や、叔母が病氣して、お金がなくて、醫者に看て貰ふことも出來ず困つてゐる樣が頭に浮んで來て涙が出て來た。私は顏を茶碗で隱すやうにして飯を食つた。

『早濟んだんか？』私が茶碗を膳箱の上へ置くと、祖母はかう云つた。

私は默つて頷いた。

『よう食べて行かんと腹がへるぞ！』と祖母は云つたが私は返事もせずに中の間へ行つた。物を云ふと泣き聲が出さうなからであつた。

『しようのない奴じや、二十圓でも送つてやろか？』父はかう云つた。

祖母は默つてゐた。

『送つてやらにや困つとんだらうげ！』母は爐の方から云つた。

父は土間から上つて奥の間へ這入つて行つた。私はやつと安心した。二十圓でも送つてやればえゝ、と思ひながら本を風呂敷に包んでゐた。やがて父は出て來た。

『こら、これなう、これ五十圓郵便局へ行つて爲替きつて貰つて送つてこい、まてよ手紙書くのつて、』と云つて、父は十圓札を五枚出して私に見せてから、木綿の大きいしまの財布に入れてそこへ置き、又奥の間へ這入つて行つた。私は嬉しくて又涙が出た。父にうんとお禮を云ひたいやうな氣がした。

『何程送るんな？』祖母が私の傍へ來て、小聲で訊た。

『五十圓！』私も小聲で答た。

祖母はすぐ他へ行つて了つた。私はそこに坐つて足を搖振りながら――局へ行つたら何んと云つたらよいだらう？『爲替してつか？』つて云つてたのめばよいのだらう？とこんなことを考へて、郵便局で云ふことを練習した

7

七月だつた。もう夏休みが近づいてゐた。學校は午前中だけで午后からは休みにしてゐた。

二時間目の算術の時間だつた。ふと先生が私の机の傍に來て

『小山君、君に用があつて家から呼びに來てるからもう了つて歸りなさい！』と云つた。皆は私の方を見た。私は恥かしい氣がした。

私は皆に顔を見られないやうに俯向いて腰掛の上で本を包んだ、

室外に出ると隣の小父さんが淺黃の股引に、尻切の仕事着物で廊下に立つてゐた。そして云つた。

『ババア（祖母）がぐわいが惡いのつて云ふて來たんじや！』

私は默つて小父さんの後について學校を出た。

町へかゝると、小父さんは後へ向て、

『俺市のバア（叔母）に電報打つて來るのつてお前さきに去ぬか？』と、云つた。私は默つて頷づいた。

私は町を出て村道になると泣きながら歩いた。誰も人のゐない處は頭を上げて歩いたが人に逢ふと俯向た。走らうと思つて少し走つても息が苦るしかつた。

――もうバヽア（祖母）は死んだのだ、俺を一番可愛がつて呉れた、あのバヽアは！……もう物云ふたつて聞いて呉れ

ない、と思ふと歩けなくなつて、立ち止つて大きな聲を出して泣いたりした。

歸つて家に入ると、

『茂さん、早よう來てバヽア見てあげんせ！』と云つて隣の小母さんは私のあとからついて來て、一緒に祖母の傍へ行つた。

祖母はいつも私と一緒に寢てゐた間に、新しい布團をあて、仰向に寢てゐた。その周圍には、隣村へ養子に行つてゐる叔父や、父の從弟や父と母が坐つてゐた。

『オヽ！茂戻つたか、こゝへ來てバヽア（祖母）呼んであげ、お前可愛がつて貰つたのでないか！』と父は私の顏を見て云つた。私はぼんやり立つてゐた。

『お祖母さん、茂來たぞへ！お祖母さん茂戻つて來たぞへ！』父は泣き聲で祖母の耳の傍へ口を持つて行つて言つた。

私はかなしくなつて立つたまゝで泣いた。

祖母の足の方にゐる父の從弟は祖母の着てゐる布團に顏を抑あてた。母は顏を反向けた。

『こゝい來て坐つて撫でゝあげ、茂！』と叔父は眼をこすりながら云つた。

私は叔父の傍へ行つて坐つた。

祖母は眼を開けてゐたが其眼は動かなかつた。呼吸をするたび、自然に開つた口は顎とともに、コクリ〳〵と、ゼンマイ仕掛の人形のやうに不自然に動いてゐた。

『やつぱり變らんかへ？』學校へ私を呼びに來て呉れた小父さんが來てから云つた。

『かわらんがなア！こりやだうしても駄目じや、醫者が云ふのに、この腦溢血はたいがいは倒れた處ですぐ死ぬもんじ

やつはへ、老母さんはまだ倒れた處ですぐ死ななかつたゞけでも嬉しいんじや云ふわえ!』と叔父は云つた。

『息のあるうちにおすみさんが來るとえゝが親子で死に目に逢えんぢや情ないわいな!』小父さんがかう云ふと、

『電報のかへしは來なかつたかいな?』と父は訊いた。

『わしや一時間位待つたけんとかへしはこなんだ。局の人に來たらすぐ待つて來て呉れるやうにたのんで來た。』と小父さんは云つた。

『遠い處へ行つとりや親の死に目にも逢へんと覺悟しとらなア!』と父の從弟は云つた。

『そりやさうよ!こゝのお老母さんももう孫も十三にもなるし、末子の孫の二人も見たんじや、いつまであつても親じや、生きてゐて貰ひたいが、さういふわけにもいかん、まア!えゝ佛さんじや!』と小父さんは云つた。

『えエ!さうよ、いつまでも生きてゐて貰ふわけにはいかんはいな!』と父の從弟は云つた。

隣の小父さんが歸つて行つてから皆が相談して、もし叔母がおかしいみなりで來たら村の人達に恥かしいから、と云つて、汽船場まで、私の母の着物を持つて、父の從弟が叔母を迎に行くことにした。

祖母はやはり悪くもならずよくもならなかつた。

『老母さん、もう少しの辛抱じや、もうじきおすみも來るぞへ!』と叔父は祖母の耳に口をつけて大きな聲で云つたりした。

汽船は來たが叔母は來なかつた、と云つて父の從弟は歸つて來た。

『來るなら來る、來んなら來んと返事でも打てばよいのに!』と父は怒るやうに云つた。

『汽船にまにあわなかつて、かちかち(徒歩)で來よんやらわからん?』と父の從弟が云つた。

暫時して又皆が相談して、今度は返信料をつけて局待で打つことにし、其役を又父の從弟がひきうけた。

——遲くても叔母が來ればよい……歩るいて汗しつぼりになつて叔母が來たのを想像してみて、——來るやうに、遲くてもよいから、と私は心で祈つてゐた。

夜の十一時頃父の從弟は歸つて來た。

『アヽ〳〵たう〳〵え〻來んはいな、子供が病氣とか云ふて、』父の從弟は祖母の寢てゐる間へ入るとすぐから云つて叔父にその返信を渡した。

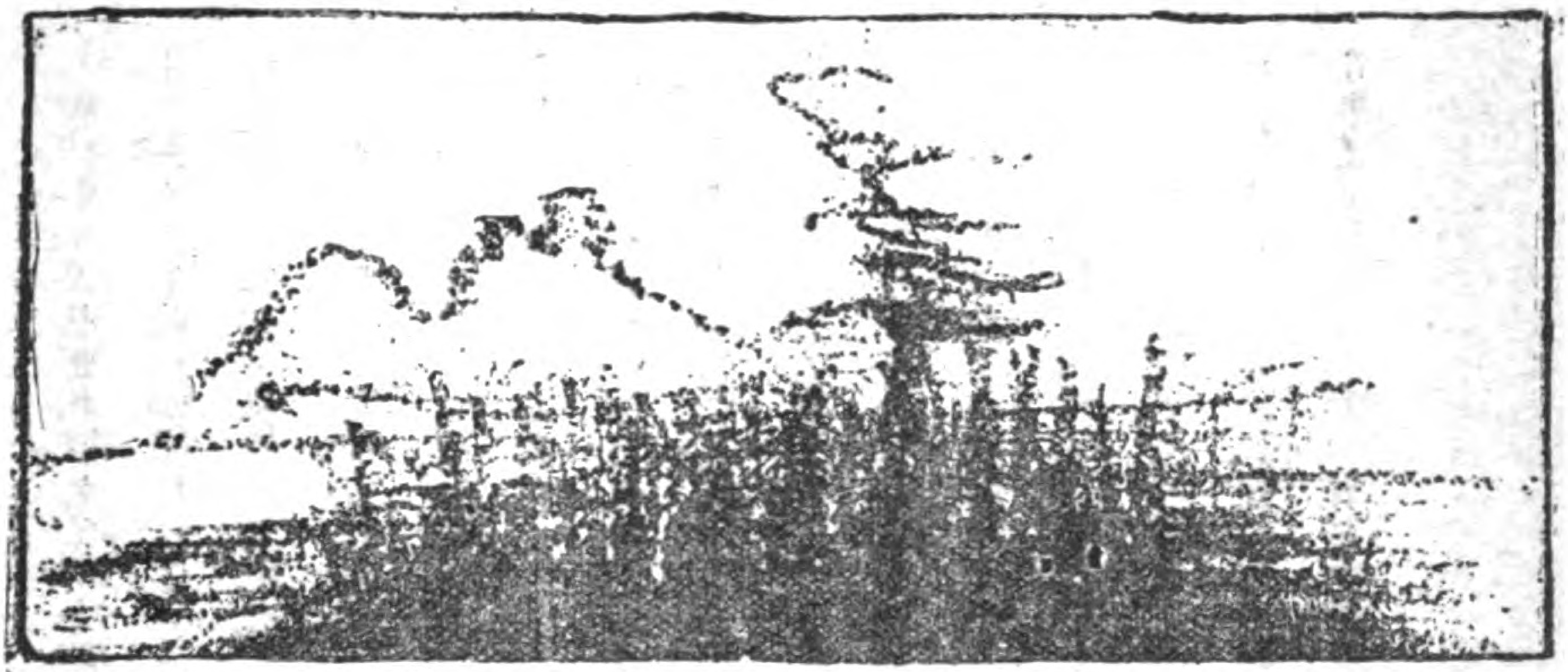
『あれだけ親に心配させて、おまけに死に目にもえ逢ん、不孝者じや！』と父は涙をこぼして云つた。

『もうおすみ來たつて云ふてあげようかなう？そしたら老母さんも寛ぐだらう、おすみおすみと心配しとろのつて息が切れんのだらうんないか？』と叔父が小聲で云つた。

『オヽ！もうどんなにしても助からんもんなら早よう死んだらえ〻だらう、見る眼が可哀相だソ』と父は云つた。

『老母さん、おすみは來たぞへ！皆こ〻へ來とんぞへ、安心せんせよ！』と叔父は涙をこぼしながら祖母の耳へ口をつけて大きな聲で云つた。私は悲しくなつて泣た。父も、父の從弟も母も、皆が泣いた。しばらくして、

『お老母さん、安心せんせよ、岩夫（叔母の子）も靜子（叔母の子）も家へ呼んで學校へ入れてやるのつてなア、楽せすに、え〻、佛さんになつてつかよ！』父が泣きながら又から云つた。又皆が泣いた。祖母はそれから一時間位して息を引きとつて了つた。（五月十四日了）



鐵橋

小川未明

私は、都會を愛しました。轟々といふひゞきと、渦卷く、黒い煙と、日光のきら／＼と反射する、街の光景を。そこには、光つた、塔のやうな建物や、遠くから見ると、四角なマッチ箱のやうな建物が、凸凹に重なり合つて、また押し合つて並んでゐるのです。

私は、この都會の中を歩るいてゐながら、もつとよく、この都會を、はつきりと意識し、且つ眺めたいと思ひました。廣い野原の中に入つたとき、その野原の廣さが、よく分らないやうに、ある間隔を離れてでなければ、それは分らないものです。

藝術はそれを全的に示してくれます。だから、よく私は、繪畫展覽會に行きました。そこにあつた、都會の風景を描いた繪の前に立つて、いつまでも、ぢつとそれに見入つてゐました。

會場の片側は、壁で、片側は、硝子窓になつてゐました。窓の外には、青々として、木立が繁つて居り、小さな枝さきは、風に搖られてゐます。曇つた、空から洩

れる、柔かな光線は印象派風の繪の面に、細かな光りのある屈折を見せてゐます。――その繪は、S鐵橋の上から見た、都會の風景でありました。――三角形の家、黒い渦巻いてゐる煙突の煙、雲、海、遠くの地平線、私は、その前に、釘付けにされたやうにぢつとしてゐました。

私はその畫面に感動されたといふよりは、都會に限りない感激を受けたのでした。私は、會場を出てから、坂を下りました。街にはもう燈火が點いてゐました。都會は、淡白い霧の裡に、まどろんでゐます。私は、カフヱーにはいり、椅子に凭りかゝりながら、熱い紅茶の香りを嗅いで、先刻見た、繪を思ひ出してゐました。

私は、限りなく、都會を愛します。都會のどういふところを愛すかといふことは、はつきり、自分にも分りません。この都會には、秘密、罪惡、虚僞、殘忍………あらゆるものが伏在することを知つてゐます。それだのに、私は、今的として、この都會を愛するのです。

私は、もつと、都會に觸れたいと思ひました。街の中を歩るきながら、まだ、それに觸れない憾みが感じられるのです。私は展覽會で見た、あの繪のことを思ひ出しました。

私は、S鐵橋の上へ、わざ／＼行つて見たのであります。この都會に來てから、私はまだ間がありません。

S鐵橋の上に立つた私は、繪が感動を與へた以上に、こゝの景色が好きになりました。當時、私はゴルキイの作を愛讀してゐました。私は、獨り、この鐵橋の上に立つて、チエルカシユを想ひ、ボルガ河の景色を想像したりしたのであります。

私は、また、日本海に面した、小さな港の景色をば思ひ出しました。私は、よく、其の港の河口にかゝつた、長い鐵橋の上に立つて、港の入口に輻輳した船や、海の上の光景に見とれたものです。

古綿のやうな、時には、大きな海鳥の汚れた翼のやうな、帆をかけて、船が、ぼんやりと、青い、青い、海の上に浮んだかと思ふといつの間にか、其の影は、どこへか消えてしまふ。次には、赤い、石竹の花よりも濃い、鮮かな色をした旗を立て、小さな汽船が、勇ましげに浪を切つて入つて來る。私は忘れてゐたやうに、すぐ眼の下の鐵橋に着けて停つてゐる艀や、帆船などを見下しますと、そこには、地上に生活する者には、考へられないやうな、さま〴〵な生活の有様が見られたのでした。洗濯物の布が、繩にかゝつてゐる。それを沖の方から吹いて來る風が、無數の小旗を飜すやうに、ひら〳〵となびかせてゐる。子供が手に茶碗を持ちながら、大きな口を開けて、悲しさうに泣いてゐる。空には、太陽が輝いて、その光りは、夏といふけれど、冷かに、水の上に、陸の上に、哀れな漂泊者の上に、すき透つた澄んだ色で、にじんでゐる。空氣は、熱と光りに傷んでゐる。子供の泣聲は、一處から起つてはかなく、青い空の下に消えてゐる。半裸體の女が、苫の中から、出たり、入つたりしてゐました。

私は、其時、皮膚の赤銅色をした船夫等が、無限に、永久に、怒號してゐる海の方に向つて、叫んでゐた聲に、悲壯を感じたよりも、また、石竹色の赤い旗に悲しみを感じたよりも、一層、赤く、錆びて河幅を遮つてゐた、默々とした、鐵橋に對して、言ふことのできない感慨を催うしてゐたのでした。

太陽の照りはたゝく、波と光の交錯する、大空の下を、吹いて、吹いて止まない風が、どこからか、埃を持つて來て、鐵橋の欄干の上を白くしてゐるのでした。それは、指頭で、撫て見なければ、氣付かない程のものでしたけれども、恐らく、海の上を漂泊して來た貨物から、汽船の黑い煙から、船を引く繩から、自然に、また摺れたり、荷を上げ

たり、下したりするたびに飛んで來た埃だと思はれました。

私は、鐵橋の赤い錆に對して、一種の愛着を感ずるやうになつたのは、この時からでした。

南の、この都會を取卷いてゐる海の色は、北國の海の如くに、青く、冴えてはゐないのです。時間の經つた魚の眼のやうに、どんよりと、よどんでゐます。

しかし、やはり、海は生きてゐました。私には、さう思はれました。汚れた襤のやうな帆船は見えなくとも、赤い石竹色の旗は閃かなくとも、地平線は、無限を感じさせてゐます。そして、青く塗つたモーターボートが波を剪いて走つてゐました。私は、モーターボートを見ると、やはり、この太平洋岸に面した、他の、K港を思ひ出しました。そこには、造船所があつて、急進的のL組合員が、澤山働いてゐます。絶えず、ドック内を巡視するモーターボートが、息急しさうに煙を吐きながら波間に出沒してゐます。私は、そのK港を思ひ出しました。

いま、私の凭りかゝつてゐる、S鐵橋の欄干にも、白い埃が、かゝつてゐました。北國の港で見たと同じやうに。私は、その埃を指頭で撫て見て、はかない哀愁を心に催したのです。

私は、同じS鐵橋の上に立つてゐました。そして、故郷のN氏から來た、手紙を思ひ出してゐます。――東京に、何か、自分に適した仕事はないものだらうか。あつたら知らしてもらひたい。自分は、どんな職業にでも就いて見る決心だから。妻子は、田舍に、しばらく殘して置いて、自分は、いつでも上京したいと思ふ――私は、五十に近い、人の好いNの黑い顔を眼にありくと浮べました。

Nは中學校の舍監を勤めてゐました。生徒等は、Nが、いかなる場合でも、決して、本氣になつて、叱らないといふことをよく知つてゐたので、思ひ切つた我儘をNに向つて言ひました。Nは、困ると掌で、自分の黑い顏を撫で廻はしました。そして、怒ることのかはりに、笑ひました。强いて笑はうとするので、咽喉にひつるやうな音を立て、眼は、寧ろ恐怖の念に戰いてゐるのでした。私は、こんなに、氣の弱い人間を見たことがありません。兵隊に行つて、軍曹にまでなつたといひますが、不思議な氣がしました。しかし、家にゐては、子供を擲るといふことを聞きました時に、なぜだか、私は、一層この男の顏をしみ〴〵と見られたのです。

「先生、僕は、落第するでせうか?」と、一人の運動部の選手が言ひました。

「いや、君は、大丈夫だ。そんな、ことを心配しなくてもいゝ」と、Nは、答へました。

「ですけれど、幾何が、二學期は、零でした。それに、代數も注意點をもらつたのです」

「まだ、及落は、明日にならなければ、分らない」

「先生、分つてゐたら、敎へて下さい。僕は、考へがあるのです。落第でせうか?」

「いや、ほんたうに、まだ分つてゐない」

「先生、あなたの力で、どうか、及第にして下さることは、できないでせうか?」

「いづれ、敎員會議が開かれる筈だ。その時には、できるだけの盡力をしよう」

「先生、僕は、舍にゐて、勉强をしてゐるのを、先生は、よく知つてゐられます。また、三週間も、病氣で休みましたのも、先生は、知つてゐられます。先生、どうか、僕が、落第をしないやうに、保證をして下さることはできますまいか?」

「いや、私は、さう、勢力がないんだ。たゞ意見を聞かれゝば、その時は、言ふが、君達が、考へてゐるやうに、私

は、さう、勢力がないんだ」と、Nに、氣まり惡さうに、にた、にたと笑つて、掌で、自分の顏を撫でました。

「だが、先生は、この學校では、古い方ではないんですか」と、其の生徒は、言ひました。

「いや、どうも……」と、Nは、言つて、さも氣まり惡さうに、顏を幾たびも撫で廻してゐましたが、生徒が、去ると、沈んだ面持をして、こんどは、黒い口髭を捻つてゐました。

生徒は、廊下をあちらに突當つて、運動場の方へ姿を躍すと、こちらにまで聞えるように「なまづ――」と、N教師の綽名を大きな聲で、叫びました。つゞいて、バットで、壁板や、柱を、力委かせに擲り付けてゐる響きが聞えました。けれど、Nは、小さな眼を恐怖に、戰かせながら、笑つてゐたのでした。――

私は、誰によらず、相手によつて、態度を變へることのできない性質です。何人にも、眞實でおりたいと思ひました。Nが、私に對して、就職口を探がしてくれいと賴んできたのを不思議とは思ひません。しかし、この都會のどこで、田舍出の、あの人の好い、怒ることもできない男を必要としませう。

――探がして見るが、すぐには、見つからないでせう。工場の前には、失業の勞働者が溢れてゐるし、濛朦會社は給料を拂はない。上京をして、宿屋に、まご／＼してゐれば、少しばかりの金は、ぢきになくなつてしまふ――と、返事を認めてやりました。

學校で、Nは、相變らず、教員達から、また生徒等から侮辱されて、いつもするやうに掌で、黒い顏を撫て、咽喉にひつるやうな聲を立て笑ひながらも、どんな返事が來るだらうかと、私の便りを待つてゐる姿を想像すると、私は、をかしみの裡にも、悲哀を感じたのであります。

しかし、海は、霞んでゐました。地平線は起伏してゐます。そして、故郷も見えなければ、もとよりNの姿の見えや

う筈がないのでした。私は、鐵橋に凭れて、たゞ、過去を思つたり、人間の生活を考へたりしたのでした。

青い澄み渡つた空に、黒い煙が、一筋上つてゐます。あちらから、まだ、影は見えないが、汽車がはいつて來るのだと、思はれました。

ある日、私は、S鐵橋の近傍の某驛から、電車に乘らうとしました。ちうど、其時、汽車が着いたのでした。その列車の中から、青い色の服を着た、囚人の群が、繩に繋がれて出て來ました。彼等は、俯向き加減に、草履を穿いて、プラットホームを歩るいて、ちやうど私達の佇んでゐる前を通りました。

編笠を眼深に被つてゐるので、どんな顏付をした男達だが、よく分りません。けれど、顏の半分下は、僅かに覗かれたのでした。角張つた顏、四十前後と思はれる顏、細長い三十代の顏、老人の顏、……鬚の濃く延びてゐるのもあれば、剃つた痕の青々としたのもありました。

私は、刹那、子供の時分、村の鍛冶屋で、放火罪で捕へられて行つた男を思ひ出しました。また、町の、賭博犯で收監された、荒物屋の主人の顏を思ひ出して、何んだか、それ等の男が、この中に混つてゐるやうな氣がしたのです。實際、顏の半面が、その記憶を呼び起したものがあつたからです。けれど、そんな筈がない。その人達が、まだ牢獄に繋がれてゐるとは思はれない。しかし、あのやうな、村や、町が、廣い國々に幾つもあつて、あんなやうな人間が、また住んでゐる。そして、略同じやうな境遇から、また、動機から、それ等は互に似たやうな犯罪者であつたことだけは、たしかなやうな氣がしました。

囚人は、いづれも、手錠をはめられてゐます。青白い皮膚に、この堅い頑丈な鐵が、喰ひ込んでゐたのです。榮養不良と太陽の光りを受けぬところから、囚人の皮膚は、蠟の如く透きとほるやうな色をしてゐました。私は、赤い、熱い、血がその下に流れてゐることを不思議に考へた程です。

何のための手錠か？　それは、逃げないためだといふことだけは、よく分つてゐます。青い色の服の存中は、折からの暑さのために、汗が、黑くにじんでゐました。そして、青服の染料と泥じて、一種言ふことのできない臭氣が、陰慘な感じを與へたのでした。

すべての生物に、附與された、自由といふものについて、私は、考へされました。そして、稀には、その自由を欲するあまりに、あの頑丈な鐵で造られた手錠を着けたまゝ逃亡して、鐵橋の欄干か、また石垣の角で、叩き壞はす者もある、その驚嘆すべき事實について、考へさせられたのです。

青い服を着た、囚人の群は、みんなから離れて、一處に固まつてゐました。そして、やがて、この驛に着く、他の列車を待つて、どこかの監獄へ送られるのでした。いま、彼等は、その途中にあるために、この瞬間だけ、廣々とした、青空を見ることもできれば、また、焰々と燃える太陽の光りにも浴することができるのです。けれど、兩手は、鎖で縛られ、錠をかけられて、動かすことができない。そして、大空を仰ぐのも、編笠の細い網の目からでなければ、見ることがでないのでした。

私は、電車に乘りました。プラットホームの端の處に固まつてゐた、囚人の影は、もう見えなくなつたのです。電車は、しばらく、海岸について走つてゐました。私は、獨り空想を逞うしてゐたのです。

（……逃げる……逃げる……逃げる……本能的に、うしろを振向かうとしたが、意志で我慢をして、たゞ、前

直を向いて、命がけで走る。そして、やつと、鐵橋のところまで來る。欄干の角で手錠を叩き壊はさうとする。火花が散つて、たとへ兩手が斷れても、鎖を解くことが出來ない

（もう、一度自由になりたいといふ慾望が燃える。鐵橋から飛び下りて死んでしまへば、永久に苦痛も、焦燥も、……すべてがなくなるのだ。瞬間そんなことも頭に浮んだが、右を見ても、左を見ても、追つて來る人間の影を見なかつたので、死んではならないと思ふ。

（貨車がやつて來る。突差に考へが浮ぶ。すべてが命がけだから、躊躇しない。手錠のかゝつた兩手を、身を縮めて、線路の上に置く。車輪で手錠を碎かうとするのだ。疾風のやうな勢で汽車は、轟とすれ／＼に熱氣を吹きかけて去つてしまふ。手錠といつしよに、二本の腕が切斷されてしまつたのだ。

（血に塗れた、二本の棒を太陽の輝く下で、苦しさぎれに、叫びながら、ぐる／＼と振廻はしてゐたが、たちまち、鐵橋の上から、身を跳らして、河の中へ飛び込んでしまふ。それと同時に、束縛も、苦痛も、恐怖も、一切、この地上から無くなつてしまふ……）

私は、そんな、奇怪な光景を眼に描いてゐたのです。そして、最後に、死の自由だけが、何一つ持つてゐない、私達にもあることが確信されると、微笑まれたのです。

其時、私は、電車の中を見廻しました。ダイヤモンドの輝く、指輪をはめた若い女と細いズボンを穿いた紳士とか、すぐ、私の前に並んで腰をかけてゐます。その他、いろ／＼な人達が……。私には、彼等が、闇の中に、飼はれて、よく生殺、與奪、の權を握つてゐる主人に、馴らされた、雄雞と雌雞の如くに思はれました。善良で、溫順で、つゝましやかであるから、もとより牢獄へ送られたり、手錠をはめられたりする氣使ひがないのであります。

K港の造船場に、鹹首の噂から、不隠の空氣が漲てゐる通知に接しました。

それから、二日目の午後のことです。

軒の傾いた、じめじめした路次をはいつて、海の水の見えるところへと出たのであります。このあたりの小さな、狹い、家屋は、貧しげな暮らしをしてゐるやうに見えました。そして、勞働者の家族が多いと見えて、外の空地に、子供等ばかりが集つて遊んでゐます。中には、入口の雨戸を半分だけ閉めたのや、格子戸に鍵のかゝつたのなどもあつたかと思ふと、白粉を厚く塗つた、娘が店頭に坐つてゐる煙草店もありました。一ぜん飯屋、おでんやみつ豆などを賣る店か、これ等の頽廢した家々の間に混つてゐました。子供等の遊んでゐる空地には、小さな石の祠が建つてゐて、海の方から吹く風に、いつ廻はされたか分らないやうな、雨に汚れた注連繩の、結ばれた紙が動いてゐました。

この空地を唯一の樂園をしてゐる子供等の顏には、いつか、私が、北國の海岸で見た、子供と共通したやうな、孤獨な表情が見られたのでした。

そんなことを考へながら、早く、海の邊へ出ようとしました。私の前になつて、Mが歩るいて行くのです。二人は、ドックへ、訪ねる人があつて行くやうに、さあらぬ態で、平氣を裝つてゐました。

鐵槌のひゞく、大きな、暗い、煉瓦造りの建物の内部には、青白い、强烈の焰が燃えてゐました。その火の力は、鐵板を眞紅に燒き坩堝の中の金屬をどろどろに溶してゐるのです。

二人は、その建物へ近寄つて、內部の樣子を覗いましたが、素通りしてしまひました。空は、雨氣を含んで曇つてゐ

ました。

エンヤ、コラ……エンヤ、コラ……

私達は、あちらに工夫の懸聲をきゝました。そして、石炭殼や、鐵屑の散ばつてゐる、ところ〳〵水溜りのした、細い路を歩るいて行きますと電信柱が、灰色に、曇つた遠くの地平線へとつゞいてゐる、その電線の下で、工夫がトロッコの通つてゐる、線路を修繕してゐるでした。

懸聲といつしよに、鶴嘴が、頭の上に翳されて、また、同じやうな懸聲といつしよに、足許の堅い土を碎いてゐたのです。そこには、十數人の勞働者が固まつてゐました。私達の眼は、本能的に、監督らしい者を、その中から見分ようと焦りましたが、この時、Mは大膽に、外套のポケットから、ビラを摑み出して、二三十枚、いつしよくたに、彼等の一人に手渡したのです。

二人は、其處を去つて、振向きもせずに、大きな、魔物のやうな工場が、さながら、口を開けて、誰でも吸ひ込まふとしてゐる、其の正面を目さして進んで行きました。その兩側には、雜然として、いろ〳〵な倉庫や小舍が、建混でゐました。其の間を拔けて行くと、いつの間にか、私達は、正服の巡査によつて、尾行されてゐたのです。

魔物のやうな、建物の内部には、幾つか、火が點つて、ちら〳〵と輝いてゐました。その下には、煙のやうに、幻のやうに、働いてゐる人間の頭が動いてゐます。けれど、そこへ達するまでに、私達は、一つの鐵橋を渡らなければなりません。鐵橋のところまで尾行して來た、巡査の姿が、この時、見えなくなつてしまひました。

「どこへ行つたらう？」と、眼で、言ひながら、Mは、眼深に被つた、帽子の庇の下から、眼を四方に配つてゐました。

私は、たゞその巡査が、もう、いゝ加減な老人であつたやうに思ひました。そして、欄干に凭りかゝつた時、グレゴリ

イの「月の出」の中に出て來る、巡査部長のことなどを空想に描いたのです。

海は、黒ずんでゐました。その海を私達の眼から遮つて、幾艘かの船が停泊してゐました。仰斜勝な、水平線がマストとマストの間から見えます。また、見てゐると、海が次第に膨らんでき さうな、黒光りのする潑剌とした體を、船と、船の隙間から見ました。船には、女の勞働者も混つて働いてゐます。そして、絶えず、あたりを警戒するモーターボートが、濤を剪つてうなりつゞけてゐました。

「L組合のある、K港だ！」

私はさう思ひながら、何事もなく、暴風の前に眠つてゐるやうな、靜かな、しかし不安な色の漂つた、港の内外の光景を眺めたのです。

この時、工場から、どや／＼と一群の勞働者が、出て、橋の方に向つて歩るいて來ました。

夕暮方、街の中を歸る、月給生活者の青白い顏の群を見るたびに、私は、滅びゆかんとしつゝある知識階級と、ブルジョアを取卷く寄生階級の末路を考へさせられるのでした。いま、濶歩して來る、勞働者の顏は、日に燒けて、健康と意志と果斷との緊張を示してゐます。そして、眼は、隼のやうに澄んで、鋭く輝いてゐます。彼等のある者は、レインコートを着、ある者は、青い勞働服を着てゐました。

Mはその一人に、ビラを渡しました。私は、次に來るものを待つて、其の手に、無産階級解放の血の叫びである、感激の文字を連ねたビラを握らせたのです。

飲食店の女中らしい、派手な様子をした女が、橋を渡つて、あちらへ行きました。二人は、その女の後を追つて、二人が、さながら同行者であるやうに、魔物の黒い口を目がけて、近付かうとした瞬間です。傍から、躍り出て、黒い帽

子を被つた、口髭の濃い男が、前になつて行つた、Mの片腕をしつかりと握りました。Mは、スパイだと知ると、いきなり、其男の顏を擲付けて、逃げようとしました。つゞいて、二人ばかり、同じやうな、洋服を着た大男が、左右から驅け寄りました。Mは、奮闘をしました。私は、危ふく捕へられやうとしたのを、縱橫に暴れ廻つて、兎に角、其處から逃げ出したのです。

其の中の一人は、飽迄、私の後を追駈けて來ました。私は、先刻、工夫等が修繕してゐた線路のところまで來て、振向くと、大分距離があつたが、やはり、追て來る姿を認めたのです。私は、線路について、廣い空地の方へ向つて走りました。

私は、勞働者が、必ずスパイの前に立塞つて、追跡を遮つてくれるものと信じました。私は、いつしか、町の中に出てゐました。そこから電車に乘ると、K港の所在地から遠ざかつたのです。

電車の窓から、見返へると、灰色の雲の下にK港から上る黑い煙が漂つてゐました。いま、起つた事件が、まざ〳〵と頭の中に浮んで來ます。廢物のやうに、大きな口を開けた建物、其の內部に閃く燈火の光り、汽船の上に働いてゐた女勞働者、濤を剪つて行つたモーターボート、その上に乘つてゐた白服の警官……最後に、兩腕を捕へられた、Mの姿が、眼に、あり〳〵と浮ぶと、いつしか、私は、熱い涙が湧いて、拳を固く握つてゐたのでした。

もはや、K港から、立ち上る黑い煙の影が全く見えなくなつた時分、私は、車內の人々の顏を落付いて見廻はしました。そして、少なくも、この車內には、自分を尾行して來たものゝないことを知りました。

海から吹いて來る風を顏に受けながら、私は、S鐵橋の上に立つて、虛假に眺つたのです。

大空の色は、眞夏の日の光りに傷んでゐました。奥底の知れないやうな、幾分かどよんだ、青い色は、悲しみを湛へてゐましたけれど、その下の海の面は、平凡に、平和に見られたのです。そして、沿岸の工場からは、黒い煙が、うねうねと流れてゐました。さながら、きまつた行方があるやうに、また、到達する目的地があるやうな樣子をして、煙は、悠々として、煙突から、吐き出される時は、元氣よく見えたのですが、いつとはなしに、其の影は、うすくなつて、漠然として、空に散つてしまふのであります。

その煙の出る建物の下に、また重なり合つて、一個の額緣に收められた、風景畫を見るやうに、家根の光つた、多くの建物があります。そこには、各々の異つた、生活があるのですけれども、いま、こゝでは、それを想像するだけで、見ることができない。私は、そんなことを考へると、また、同じ時刻に、牢獄に於て、精神病院に於て、炭坑に於て、彈藥製造所に於て、……いろ〳〵な場處に於て、虐待されたり、搾取されたり、苦るしんだり、空想したりする、さま〴〵な人間の生活があることをも知りました。

しかし、私は、この瞬間、鐵橋の上に立つて、日の光りの下に晒らされた、波と工場と土砂を發掘しては、車に積んで、馬に引かせて行く、自由勞働者の働く有樣を目のあたり見てゐるばかりでした。

彼等の中に、一人の赤いシヤツを着た男がありました。その男の體には、火が燃え付いたやうに、こちらから見てゐるばかりでも、眼の珠を痛く刺戟するのです。その男は、いま車の上に、土の塊といつしよに乘つて、箱の緣に腰をかけながら、馬に引かれて、煙草を吹かしてゐました。

背中をこちらに向けて、海の方を見てゐるので 其の男の顏は 私には、分りません。白い煙草の煙が、彼の頭の上

で、消えて行くのが見えました。

男は、茫然として、この時、何か、遠くのことでも思つてゐるやうでした。

私は、ゴルキイの作にありさうな、この光景を眺めてゐるうちに、自由と、幸福といふことが考へられたのです。そして、この男が、まさしく、幸福な、一人であるやうに思はれたのです。

私は、一定の宿すら持つてゐませんでした。もし、彼等が、快く、私を其の仲間に入れてくれたら、また、私に、焦燥と不安と……そして、衝動とがなかつたら、喜んで、彼等といつしよになつて、働くことができるだらうと思ひました。

「君の生れた國は、どこだい。まだ、兩親は達者かい。そして、子供の時分の友達は、いまみんなどうしたかい?」などと、私は、問ふたでありませう。

私は、そのやうな勞働を愛します。けれど、不正と虛僞の條件の下に、搾取階級のために働くことを拒みます。

「オーイ」私は　赤いシャツを着た男に向つて、橋の上から呼びかけて見ました。兄弟であるといふ、感激のために―

私は、いま、この都會から、去らなくてはなりませんでした。ある日の朝早く、獨り、公園のベンチに腰をかけて、新聞を讀んでゐました。こゝで、遇ふ約束をした友達があつたからです。

花壇の花は、まだ、夜露に濡れたまゝで首垂れてゐました。年の少ない娘が、泣いてゐる時の姿を目に描かせるのです。太陽は、きら／＼と常盤木の隙間から、光りを投げて、一つ、一つ、笑つたり、囁いたりしてゐる木の葉の姿を透かして見せてゐました。どんな、細い枝の先にも、生命が行き渡つてゐます。そして、これから、眞紅となり、やがて夜となつて、また、翌日には、同じやうなことが繰り返へされるが、しかも、こゝの徑路を通る人間は、恐らく、昨日とは變つてゐるでせう……たとへ變つてゐても、畢竟、同じやうに――夏が逝き、秋が來て、冬となる日まで、この小

枝は、雨や、風と戰ふのを考へると、戰ひといふことが、すべての生命あるものに、擔はされた、永久の運命である如くも考へられるのです。

「午後九時二十五分——S鐵橋下——田舎出らしい五十前後の紳士——口髭あり、眼窪み、色黑き男——投身覺悟の自殺す」

私は、これを讀むうちに、ふとNのことを思ひ出しました。

「Nではないだらうか？」

其後、私の居所は轉々としたのです。Nより、たとへたよりがあつても、それは、私の手中にはいらなかつたにちがひない。私は、また、Nがこの都會へ出て來て、私の前にゐた宿へたづねて行つたことを考へ、またその時の様子などを空想したのでした。

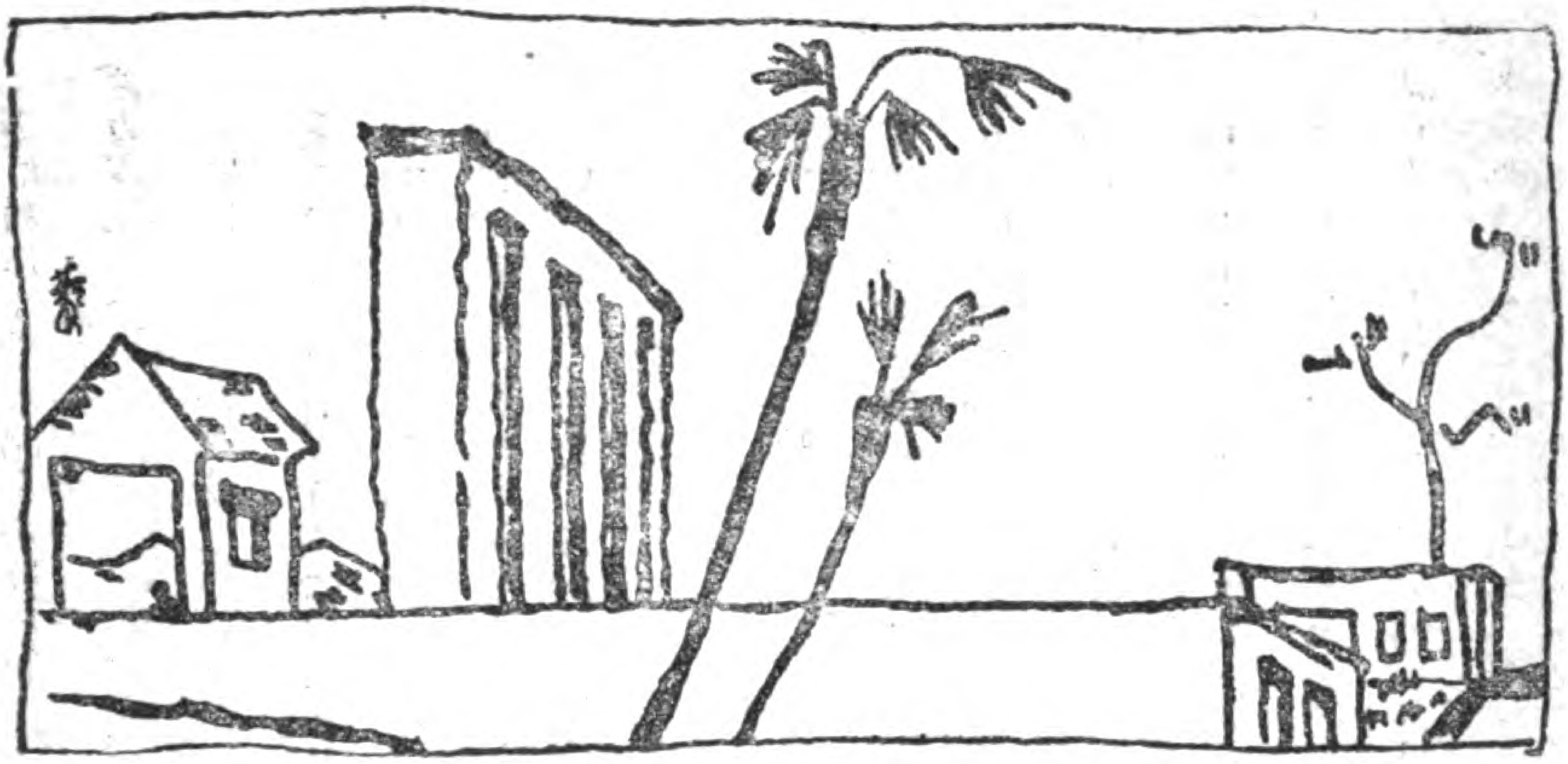
「その方は、もう、とつくに、こゝにはおゐでになりません。さあ、どこに——か分らないのです」と、宿の者は、言つたにちがひない。

Nは、立ちながら、これを聞く間も、人の好さから、相手の感情を害しまいとするやうに、掌で、自分の顔を撫でまはして、笑つてゐるのです。しかし、其家から出た、彼は、それから、何處へ行つたらいゝか分らないのでした。しばらく、當もなく街上をさ迷つたでありませう。次の日も、次の日も、彼は、就職口を見付けに歩いたのです。しかし、どこまでも、相手にしてくれませんでした。

彼は、わざ〳〵都會に來て——そこでは、日に、幾十人、幾百人となく、弱者は强者の犧牲にされるのであるが——その一人となつたのであります。私は、こんなことを空想した。

この時、不意に、うしろから、私の肩を叩いた者があります。

—一九二四、六、作—



身邊

室生犀星

母と妻とが鮎を燒いてゐる。

「そんなに不格構に燒いて了つては切角のお土産も駄目になつてしまふ。鮒屋へ電話をかけて燒かせたらどう？」

「その方がよござんすね。こんなに尾も頭も黒く焦げては鮎だか何だか分りませんからね。電話をかけませう。」

妻が左う言ふ間に母はまた新らしく鮎串を火の上に置いた。あとにいくらも無いのだから此方で燒いたらいゝぢやないか？　六時きつかりの間に合ふかどうか分らないし、第一じぶん時だから料理屋も混んでゐるにちがひないと母が言つた。

「それもそうだが鮎なんてものは眼で食べるものですからね。お前、行つてかけて來て吳れ。この間托んでをいたから直ぐ來てくれるにちがひないから」

「六二四番でしたね。」

妻は紺屋まで電話をかけに行つた。すれちがひに甥の兄弟が白い襯衣に手拭をすつぼりと後腦で括つて、鮎網をかつぎながら這入つて來た。草鞋は瀬踏みの荒いために擦り切れ、弟の方は片方だけ脱いでゐる。

「時間がないから餘計捕れなかつた。それでも十五尾くらゐゐるかも知れません。おい、開けて見い。」

兄の由種が弟に魚籃をあけさせた。かなり大きなのがゐる。

「ほう！　なかなか大きいのがいたね。」

わざわざ今日わたしが東京に行くことを知つてゐる兄弟が、一週間ばかり食べられないだらうと言ふんで、中學の時間の濟むのを間に合せ、川上へ網をかついで行つた好意を美しいものに思ふた。

「このお禮に白靴を買つてやらう！」

妻が戻つて來て料理屋が來て呉れると告げた。——母はまだ一心に鮎を燒いてゐる。由種も鮎の活きたのを殺してゐる。匂ひがあたりにしてゐる。

「時間は？」

「まだ一時間あります。」

しんまいの女中が答へた。

そこへ近所の女の子どもが二人、目高を掬つたのを持つて來て、石手洗ひに入れてゐる。この間の晩おぢさん何かお話して呉れと言つたので、稻垣足穗の星の話を一つしてやつたら、もう一つ話してくれたら明日きつと目高をすくつて來てあげようと言つてから、隔日くらゐに前の川から目高をすくつては持つて來てくれるのである。三つある石手洗は目高で一杯になつた。

「ありがたう、もうこれで澤山ですよ。」

「お留守のときにも入れてをいてあげます。」

子供はさう云つて出て行つた。

鮎釣の人が川岸にたくさんゐるので伜はやめにして、山椒と女中が鞄をもつて送つてくれた。

「こんど東京へゆくのが心配になつて仕方がない。」

母はこんなことを川の瀬の音で能く聞えない門の前で言つた。なに大丈夫ですよとわたしは答へた。上野の甃石の上を洋杖で一つ敲いてあるき出したら、十四年も住んだところだものといふ腹があつた。けれども何か知らこだわりを東京に感じた。わずか一週間くらゐ旅行して東京へ入ると胸さわぎするくらゐだ。まして、田舎に暮しを移してゐると一層氣兼ねらしいものの物怖ぢしたものを感じた。

ひとり上野の甃石の上に立つと、公園の大きな銀杏の樹の伐り込んだ姿が、五本の指をそらに向けたやうな、手の形をして芽を吹いてゐた。厭な姿だとすぐにさう思つた。

旅館は驛前でぼろぼろに缺けた庭石と二三本の櫻の外に、蟻一疋這ふてゐなかつた。蜘蛛もゐないやうだつた。みんな死んだのか知らと思つた。

「さうおつしやれば蟻なんてまだ一疋も見ませんわ。」

聲の美しい女中が次の間で着物を畳みながら言つた。その東京語が泥くさい黒ずんだ田舎言葉に慣たわたしには、耳

ざわり美しく實際誇張ではなく音樂みたいやうな氣がした。それに最一つは十四年間の東京辯も田舍では一朝にして破れてしまひ、いま、かうして東京言葉で話すのに骨が折れてならなかつた。それにわたし自身の聲の大きく荒々しくなつたことにも氣がついた。

朝、おみをつけの中に、柔らかい葱をつまみあげたときに、東京にゐるらしい甘口のおつゆの感じをほほえみながら感じた。箸を擱いてこんど上京の用件を考へると、又しても暗然とした。とにかく辯護士の八郎氏へ葉書を出した。宿へ來て貰ふのは失禮ではあり、たづねるには道案內の勝手が分らず、止むを得ないで三橋亭までおはこびをお願ひすると書いた。書いてから一たい三橋亭といふのが未だあるか知らと思ひ、女中に尋ねろと有りますと言つた。

鮎を車やにたのんで知人に送つた。時間の都合で牛込の本屋までタクシに乘つた。乘つてみてから東京に自動車の數が殖えたやうな氣がした。埃と塵とにまみれた空氣のわるさは、くもり硝子をすかして見るやうな曇天つづきの中に、悲しさうな家々がつらなつて見えた。わけても新建の木地のえがらつぽい肌地が、なまなましく頭腦に刺立つた感じをあたへた。

町の遠景が見え、家々が見え、電車自動車が見え、通行人が見え、その間を驅る自動車の上で久振りで目まひを催した。長途の疲れも加はつた快よい目まひであつた。神樂坂から北町へ曲るところで、ぢやりぢやりと自動車に何かぶつかつた。見ると小包郵便の車とぶつかつたのだつた。

「降りるよ、降りるよ。」

わたしは子供のやうに左う叫んだ。こんなこともあるだらうと思つてゐた矢先きだつたので、なほ胸さわぎがした。

「どうも濟みません。」

歩きながら運轉手が平氣な顔をしてゐた。本屋の石造の上にゐても不安だつた。こんな神經はやくざな神經だと思つたが、人と話をしてゐても話の間にときどき留守になるやうな何ものかを感じた。

かへり途は電車に乘つた。どの人の表情にも殺伐な色があつた。夏帽の裏に挿んだ田舍の回數券を落した。往復のかへりを帽子にはさむときに落したのだ。誰も氣をつけて見てゐもしないのに、がらにもなく狼らんで了つた。――窓から見えるものは矢張り埃と曇天と目まぐるしい人通りである。今年の十月に歸京するつもりでゐたのが、どうやら最う少し田舍にゐたい氣もちになりかけ、こんな惡い空氣は生れ立ての子供によくないだらう、まだ出京するのは早い、どうせ行つたついでだから落着いてゐやうと心で決めかけた。さういふ心は花屋の主人と花屋の畑へでかけたときの、二千歩からある高臺の田舍の畑のことまで、女々しく思ひ起された。そこの畑のまんなかにトタン屋根の番小屋がこしらへてあり、植木を買ひに行つたわたしは木の枯枝を集め、火を焚いて茶を淹れてくれた。目をさへぎるものは紫含んだ山と青い田圃とか林や森だけであつた。

花屋の主人は町から花の手入れや、花の剪り立てのために半日くらゐづつ此處へ來るらしかつた。茶をのんだが熱いうまい番茶だつた。

「一時間くらゐ晝寢もしましてね。それから町へかへるんですよ。」

花屋の主人はこんなたはいない事を言つたが、そんな詰らない言葉がなぜにわたしに思ひ出されたのか？ひとつはわたしのやうに次第に蝸牛のからの中にちぢこまり、天下の事に鈍く、己れだけを守るくすんだ氣もちをそつと撫でてくれるからである。今の世は己れ一身のことを考へるだけでも物憂く悲しい。人のことなど元よりどうにもなるものではない。己れの病ひは己れでなほさなければならない。左う思ふと矢張り山川の間にいましばらく住んでゐた方ががら

に合つてゐるやうに思はれた。東京に居ても人と交際するではなし、待合へなぞ人見知りのわたしが出て行くことも少ないのだ。小數の友人を守つてゐたら最早やわたしなぞは何と言はれやうとも、ひとところに籠つてゐたらいいのだ。こんな埃の中から早く逃げ出したい。こんな埃の中を泳ぐ勇敢の人もあるだらう。しかしわたしには不向きである。わたしはわたしらしいものに凝り固まつて居ればよい。批評それ何ぞやである、……わたしはかう思ひ返して、灰だみた町々の風色をながめ、これが十四年間もわたしを育ててくれた都だと思ひ、感謝の心持かないでもなかつた。それ故にまたこの都の落着いたむかしどほりの薄ら日の中に浮び、そこに落着いて暮らすことが祈られたのである。

午後過ぎA氏と一しよに日本橋仲通りを歩きながら、むかしの仲通りの瀟洒たる骨董店をあさらうとしたが、それは最う空想に近いものであつた。ボール紙造りの家並みに挿まれた二三軒の道具屋にも、急場に蒐めた氣品に乏しい陶器などが僅かに目に留るだけで、何一つむかしの仲通りをもの語るものとてなかつた。

「これぢや當分どころではない、二三年はだめですね。」

と、わたしは言つた。

「廢めてしまつた店もあるらしい。――やはり當分ゐなかにゐた方がよいやうですね。子供のためにも。」

仲通りを過ぎてからA氏はかう云つた。しかし唯一軒だけ石をひさいだ店さきに、青い石手洗を見たとき、水くさい苔の匂ひのなかに、むかしの仲通りの餘影がないでもなかつた。わたしはそれを目にえがきながら、A氏と川合には未だないアイスクリイムソーダを飲んだ。

上野三橋亭で辯護士の八郎氏を待つために三品の註文を濟したが、折柄じぶん時のせいか込んで空いたテエブルは一つもなかつた。見知り合の女らの顏もなく、みんな若い女ばかりであつた。微笑一つするでもない此の女らは白い皿をあち行きこち行きして搬んでゐたが、べつに浮いたやうなところもなかつた。女學生か令孃のやうな裝ひや顏容なぞも田舍から來た眼にはかういふ境涯の女らが次第にむかしのカフエ女らしくなりかけてゐるのを知つた。

約束の一時になつても八郎氏は來ないので、階下の卓と卓の間を捜してもその顏は見えなかつた。八郎氏では先方の本屋とぢかに會つた方が早わかりだから、徒らに手紙で談判するより先方に出て來るやうに言つてやつたと云ふのだつたが、何しろこんな著作上の問題は本屋に良心がなかつたらどうにも仕方がないと言つて、田舍のわたしへ知らせて來たのだつた。

この事件は三年ほど前に寫した原稿が、震災後になつて大阪の本屋から出版されたのが此の春のことだつた。月映といふ命題を肉の記錄として處女國といふのを肉を求める者と改め、廣告には肉欲の聖典と書いてあつた。しかもその本は檢印もなし又寄贈もしてこなかつた。俗惡卑俗な裝幀で出版されたことは言ふまでもない、——こんな事を考へてゐるうちにわたしはいゝ加減な本屋から本を出したことを悔ひたが、それにしても齒がみしていゝのか、泣いて見たらいいのか、また、惘れるだけ怒つてみたらいゝのか、混雜した一時の感情がまるで靜かな山川の中にゐるわたしを凶暴なむかしの氣質にさへ逆もどりさせ、何か人間に暴力が最後のものとして許されるならと言ふ氣にさへなつた。二三日經つてから氣もちは沈むばかりで、何をしても面白くないやうな氣がした。ことに、その本の中にはもはや近頃のわたしらしい靜かな氣もちさへ含まれてゐる作が多かつたから、なほ肉慾の聖典には腹立たしかつた。大方、わたしの以前にかたむきかけた或る病的な作の一部分を俗人らしく肉的なものと考へ込んで、さういふ廣告をしたものであらう、わけ

て題命を變えるなどゝいふことも亂發どころではない、作家を畏敬することを知らない遣り方であつた。

わたしはこの事件では泣寝入りすることが厭であつた。作品はわたしの子供のやうなもので、装幀や命題はきものや魂みたいなものである。三年位かゝつて書いた永い年月の間の頭の疲れや痛さの積みかさなつて行つたものが、まざまざと泥まみれにされてゐることを例令わたしがどんなに大概のことを默つて過ごす性分であらうとも、これだけは苦笑ひさへできなかつた。飯咽喉を通らぬ氣もちだけでも舐めさせないで置かれなかつた。わたしは自分のことは決して人に相談しない男である。わたしはよいにつけ悪いにつけ一人で考へ、その考へを結果を別にして押し進む男である。それ故先方へ交渉したがいづれ上京の上おわびをするといふ體のいい挨拶であつた。條件として装幀をあらため改題することであつたが、そんな事が事實行はれるものではなし、又、原稿の本屋のことではありしに見れさうもなかつたから、八郎氏へは六大新聞に謝罪廣告を出させることに手紙で交渉し、いまの世は名譽毀損をも物質に換えることにより解決する傾きはあるが、わたしはそれはしたくないことを手紙でつたへた。とにかく一遍會つた上で君の氣もちをも聞かうといふ八郎氏の返事であつた。最近出る本のこともあり、こんどの上京となつたのである。

二時になつても八郎氏がこないので、ナプキンに宿にゐるから來てくれるやうにと書いて、宿でまつことにした。そとへ出ると大道藝人が賣つてゐる小さい繪日傘をこの間見て置いたので、それを廣小路まで子供の土産のために買ひに行つた。そして宿の前へくるとレインコートを抱えた歌人である快活さうな八郎氏が、左の手を振つて、やあ、しばらくと言つた。十年前に會つたとほりの若々しい男である。

「こんどはいろいろありがたう。」

「何しろ一度會はないことには仕事がやりにくいものだから。」

奥まつたとは云へ、バラツクではあつたが鳥渡離れのやうになつた部屋に這入ると、八郎氏はとにかくこんな問題は先方の良心に據る外がないと言ひ、命題を換へたのは刑法の條箇にふれてゐると言つた。先方は今月の八日ころに出京してくると手紙に言つてきたからと、その手紙を見せた。わたしは見覺えのあるペン文字にさへ屈辱的な嫌厭をかんじた。

「僕の考へではもう何も彼も遲いやうな氣がするのです。地方の本屋へ廻つてゐる分もあり、それを一々裝幀を變へさせる譯にゆかない、そのためにあんなやくざな本のために頭を疲らせたことも今更らどうにもなるものでもありませんからね」

わたしはここまで言ふと矢張り嘆息より外にはなかつた。山川の都市であんなに考へ憤つたことも、いまでは自ら嘆き悲しむの情にさいなつてゐるのを自分ながら忌々しく思つた。

「では謝罪文でも書かせた上以後は絶版にさせるやうにするより外に方法はありませんね。それもずるい男だとすれば一片の謝罪文で事濟みになることとくらゐは平氣なことですから。」

「つまりあの本屋がうかうか遣つて見はしたが、いまになると、これはこちらが惡かつたといふふうに、じつくり考へてくれるやうな人物なら、僕も面倒だからどうせ災難のことだし諦らめもしますがね。さういふ人物ならあんな淫らな題命に變えはしないだらうし……。」

「とにかくできるだけ良心をえぐり立てて見るんですね。法律が背景をしてくれてゐてもそれが用に立つことと立たないこととがありますから。」

これでは結局やはりわたしの泣寢入りになりはしないか？　謝罪文がわたしの沈靜な氣持ちに何の役立たう、そんな

義理一片のものに一息つくことなぞ表面的すぎるとも思はれた。
「結局は僕の損をした分の氣もちには一つも還つて來さうもありませんね。」
「全く何一つつぐなふためにはなりませんよ、唯、あの男の心もちに或る種の悔悟を感じさせるだけですよ。それが肝心なことではないですか?——」
「悔悟、——さうですね。」
わたしは困り切つて八郎氏の顏をながめた。結局それより外に仕方がない。悔悟が冷笑となつてもこの世の中のことが一人の人間の怒りや悔みを容れるやうには出來てゐない。それ故に法律にも人情にも手慣れさうもなかつた。損をしたり辱しめられたりするものはそれ以外のものでその屈辱を償へさうもなかつた。
「とにかく俗人にはかなひませんね。理屈も何もわからない。思ひ切り俗人には高びしやに出ろか、對手にならないかの二途あるのみですね。」
わたしはかう言ふと、もう何か莫迦々々しいことだらけで、一體わたしの怒りなどといふものも結局自身の中に沁みこんでしまふところの、極めて淡々しいものに過ぎなかつた。言はば自分自身で世の中の何も彼もを諦めてしまうやうな卑怯な人情、己れを最極端まで他人にひろげて見せることの面倒ぽい退屈さに、つい自分までも默り込んで見せるやうな性質などと言ふやうなものは、わたしなどの年輩者の、そして明治時代の最後の性質かも知れないと思つた。こんな純東洋風な人情は早く早く亡びてしまへばいい、こんな人情のある間は人間が卑屈にさいなる、……と言つてもわたし自身のこんな淡々しい氣もちはどうなるものではない、——。
「法律上の問題などといふものも、ぎりぎりは人情の問題になつて了ふんですからね。」

八郎氏は併し「やるだけは遣つて懲らしめる必要がある。」とも言つた。

「とにかくその本はここにはないんですか？——。」

「まだ一度も見ないんです。見ることが厭なんで本屋の店さきへも近づかないんですが、故郷の本屋へ來てゐるさうでそれを知らして呉れた人もあるが、それには困りましたね。故郷にまで恥を曝らすやうな氣がしましてね。」うつかり本屋へ這入つて行つたら、そんなやくざな自分の本が眼にふれるかと、本屋へも行かなかつた。それが坊ちやんと來てしまつてゐる……。

「僕は生涯法律なんてものに關係のない人間だと思つてゐたら存外ですね。ことに君にこんな事件で會はうとは思はなかつた。」

「全く僕もその感が深いんですよ。」

八郎氏はもと都會詩人などと號して、血氣に迅まつた詩や歌の破調のものを雜誌で書いてゐた。かうして見たかれはその破調風な性格はあるが、いつの間にか一味の落着きが風貌の上に加へられ、しまひに妻帶すべきかどうかと言ふことまで話し合つた。わたしは妻帶をすすめた。

「一人きりの女でみんなが、收まつてゐるから妙ですね。僕にはそれがとても出來さうもない。——」

「美人はそとで見てくれればいいぢやありませんか？」

かうわたしが巫山戯ていふと、八郎氏は持前の大聲で

「ははは……」と笑つた。

獨身で苦學力行したかれが妻をめとることに幾度か迷ひ惑ふてゐる有さまが、この變に快活らしく又た妙に寂しい笑

壁の中にもこもつて見えた。

田端のもとゐた家の近くへまで行つたが、もとゐた家の前を通る氣がしなかつた。樹のある家々の庭さきや、角の酒屋や菓子屋なども別に變つたところがなかつた。肌ぬぎになつた酒屋のかみさんがわたしの姿を見て、ふしぎさうな表情であとを見送つてゐた。出入りの車やだけへ途すがらではあり顔だけ出して見たが、仕事にあくせくしないかれはその晩も家にゐて、わたしの顔をみるとびつくりして狹い土間の椽の上にこれは記念にいただいのだからと、わたしから遣つたよごれた坐布團などを取り出した。そしてさきにゐた女中のお仲はこのすぐ坂の上のカフエに女給をしてゐると言つた。

「あれは家がいい筈だからそんなカフエなんぞ出なくともいいんだが。」

「好きで出たらしいんです。この間もそんな所へ行つてゐるより堅氣な奉公をしたらどうだと言ひましたら默つてゐましたが、まだ居るらしいのです。何か動けないことでもあるぢやないんですかに」

お仲は獨逸女のやうにがつしりして、使ひに出ると近所の男の子の首つ玉を引つかかへたまま二三間ばかり行きずりに引摺つて行くといふふうた女であつた。二年ばかりわたしの家にゐたが震災當時生死を賭して赤羽落ちをしたりしたくらゐで、わたしはその話にあはれを感じた。わたしの妻と手紙のやり取りをしてゐたが、お仲のところ書きは田端のもとゐた同番地の、或るおめかけさんの氣附だつたところから少しお可笑しいと思つてゐたが、やはりカフエへなぞ出たのかと思ふた。

車やを出ると私は坂の上の、明るいカフェを目がけて歩き出した。旦那さまがお好きだからと云ひ、田舎へわざわざ行つて土瓶を一と抱えも探つてきてくれたりしたこと、又そのとき田舎道を下駄のまま自轉車を乗廻して罰金五圓を取られたりしたことなども、いまになると可笑しく思ひ出された。一門郎黨のうちに例令一たん出て行つたものにしても、そんなカフェなぞへ出てゐることを聞くといい氣はしなかつた。

坂下で見たときとちがひ、前に立つと急拵へらしい建物であつた。わたしは硝子戸を開け内部へはいるときに、入口の卓に三人の客が飲み食ひをしてゐるところに、うす紅い着付の女がうつむいてビールの酌をしてゐるのをちらと見た。お仲であつた。向ふもすぐ氣づいたがしづかに酌をしたまま挨拶もしなかつた。わたしは背後の卓を前にして別の女にサイダーを命じたときに、お仲は突然ばたばたと二階へ上つてしまつた。そんな庭鶏の羽ばたきのやうな音を階段の方にきいてから、わたしはサイダーを一杯のんで扨てこの始末をどうしようと思つた。すぐカフェを出るのは變だ。それに三人の客がお仲があまり突然に二階へ上つたときから、わたしの顔をじろじろ眺めた。他のふたりの女給もわたしの様子を窺ふてゐる、——。

「なにか召し上りになりますか？——。」

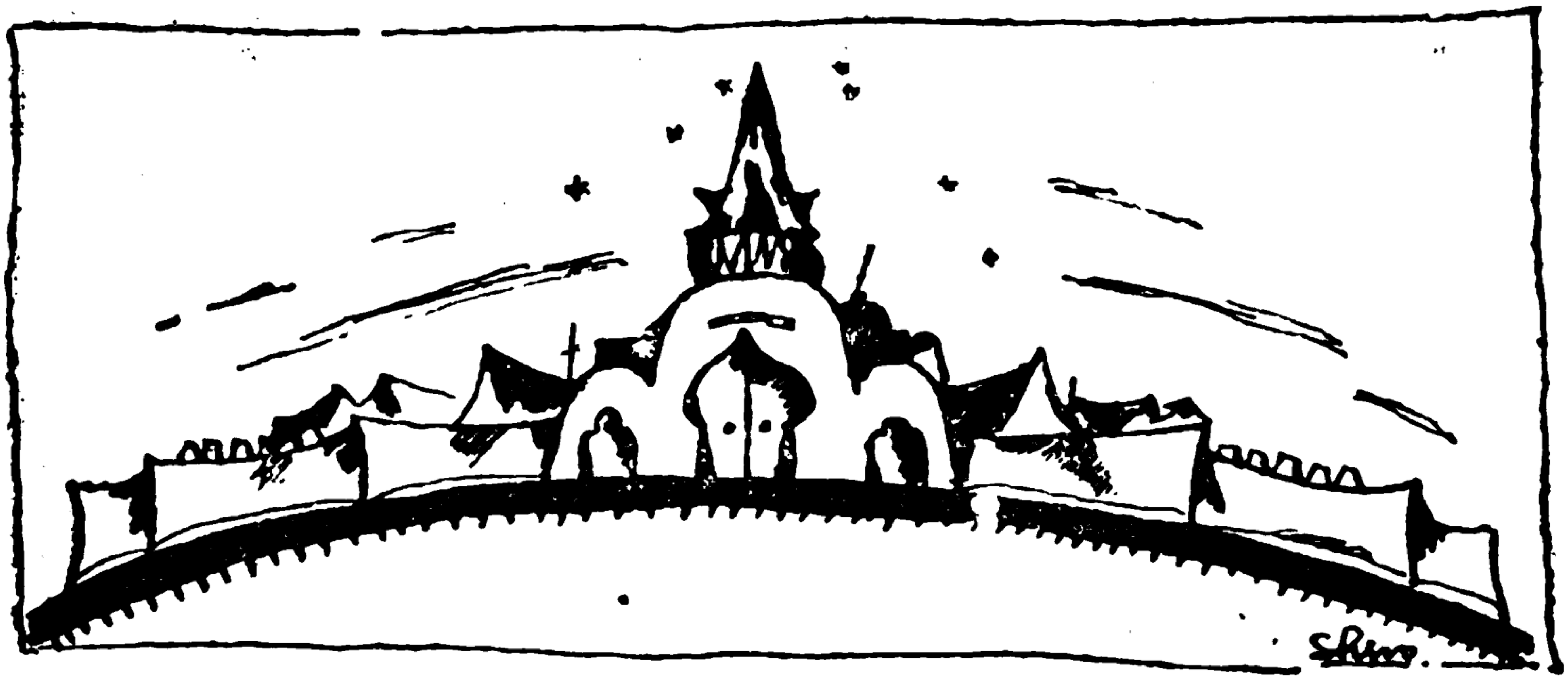
「いや。」

わたくしはあたまを振つた。

勘定場の四角な窓から白いコック帽の、三角な奴がこちらを見てゐた。わたくしは金を置くと外へ出やうとしかかると、漸つと二階からこつそりと下りてくるらしい先刻の、いやに紅ぽい着物とエプロンの端が上から二段目くらいを下りてくるのを見た。が、わたしはそのとき軌りのわるい硝子戸を半分ばかり開けたあとであつた。

坂を下りかかりながら先刻二階へ馳け上つたのは、あまり突然だつたので物言ふこともできずにああやつたのかも知れないと思ふとその氣持が判つた。車やへ又寄つてこの譯を話して若しお仲が國のところを聞いたら知らしてもいいと左う言つて別れた。

曇天つづきの朝ぞらに最う夕方の光景がありさうで、坐つてゐると誰を訪ねる氣にもならず、いち早く夏の朝起の滿い氣もちに囚はれた。となりが小學校になつてゐるので、オルガンに合せた兒童の唄が同じことを幾度も繰り返してはゐる。聞いてゐると幼稚た弱々しい氣もちになる。ひとりが唄ひ終ると何かの練習であらう、唄はない子供らがぱちぱち拍手をしてゐる。童女らがオルガンを取り圍んでゐる有樣が、坐つてゐるわたしの目の前にならび出してくる……沈んだ弱々しい氣もちと、淸い可憐な心とになぐさめられてゐるやうな思ひである。最う何も用事はない。會ひたい友だちはあるが會ひにゆくのが大儀である。それよりかう思ひながらこつそりと黄昏の上野から田舍へ歸つてしまはう。少しくらゐ心殘りになるのはよい、そのくらゐが却つていい……。



白豆の花

有島生馬

朽ちた丸太と建仁寺垣の一部が僅か殘つてゐた。それは五年前も、十年前も、十五年前も略ぼ同じやうだつた。唯目立つて變つたのは松の樹の伸びて繁つたことである。

無用の者入るべからずと書かれた木札が風雨に曝され、自然に落ちて終つてからも久しいことだ。人の這入らないだけに立てかけてあつた古木もなくなつて終つた。その代り松の枝は擴がつて殆ど道を無くして終つた。

前の往來は河口に近く、河の流れと併行してゐた。だから海から吹く風が砂を持つて來たり、浚つて行つたりして高低がいつも定まらずに、朽ちた丸太を埋めたり、垣根の裾を深く刳つたりした。夏中そこは海水浴客の頻繁な往還で、濱砂も泥のやうに穢れたかと思ふと、冬の朝などは人の足跡一つない神代ながらの道に清められ、前の夜通つた風の足並が鱗形に殘つてゐたりした。

潮風のために白骨になつて丸太もいつか一本だけになつてゐた。片方は根元から

倒れ松と草との間に朽ちて、蟻の巣になつてゐた。

ある日彼は隣村の谷を出て、その小徑へ來た。松の生長したのには今更ら驚かれた。針に刺されながらも時々邪魔になる枝を手でよけて通らねばならなかつた。まだ梅雨期に入らない前の六月の草はその清淨さに於て少年に似てゐた。綠が若く、蝕がなく、完全な形に、軟かく眞直ぐ、陽に向つて高く伸びながら、少しの微風にもゆら〳〵と搖れた。松の幹、松の葉の色に較べると遙かに鮮かに、且つ天に向つて平らに舒べられてゐるため餘計に光を受けてゐた。彼はこの小徑が嘗つては人力を通じ、荷車を通じ、馬車を通じた時のことを憶つた。

彼の父がそこへ初めて別莊、別莊と云へば別莊であるが、小さな茅葺屋根の小屋を建てた頃、その邊には二抱三抱ある何丈といふ高い松の林が立つてゐた。それが四五年の間に段々枯れて一本もなくなつて終つた。そこで小松の殖林を初めたが、別莊と海との間にある砂の丘が常に極りなく西へ東へ動き流れるので、折角の苗木も多方砂の下に埋れて終つた。彼の父はその草一本生えない濱砂の丘に小松を植ゑつけ砂の流れを止めやうと苦心した。毎年何千本といふ苗木を新に植ゑ付けた。初め彼は砂止めのために植林を思ひ立つたが、後には松を植ゑるために砂と風とを豫め防がねばならぬことに氣付いた。最後には自然力が勝つか、人力が强いか根比べになつた。彼は氣候風、暴風等の方位を考へ篠竹や、河口の芦を切つて風除けの垣を樣々な格好、位置に建てみた。然し風位と風力とは年々に決して同じことはなかつた。極りない變化と奇襲とによつて彼の豫防線を悉く破つて終つた。でも彼は根よくそれを續けていつか成功すると思つてゐたらしい。

彼の兄弟姉妹は段々增へて來た。小さな茅葺だけでは足りなくなつた。で幾年かの後には茅葺と鍵の手に瓦葺の座敷が二間增築されることになつた。その頃のことが彼の記憶に浮んで來た。父は年々別莊の方へ通つて來る怪物のやうな

砂丘を堀り崩し、庭一面地盛りしようとした。その工事にはどういふ手蔓からであつたか、監獄の囚人を使つた。初め家内のものは誰れ一人赭色の着物に手錠をし、二人づゝつながつて、深い笠を被つた囚人が庭先で勞働するのを喜ぶものはなかつた 暑い夏の日は彼等が顏を見せないやうにしながら默つてこつ〳〵働いてゐた有樣、その笠の形と着物の色合はいつまでも目に見るやうだつた。夜はどこにどうしてゐたのか彼は覺えてゐない。二月も三月もの間彼等は庭に來て働いてゐたが、家内の人達は恐らく一度も彼等と話をしたことがなかつた。片方は惡んではゐなかつたけれども恐れてゐたし、片方は恐れてはゐなかつたけれども恥ぢてゐた。彼等と平氣で話したり笑つたりするのは彼の父一人だつた。

盛土が出來ると緣先と垣根の周圍、その他例によつて松を植ゑた。裏門と堀り崩した砂山との間には大弓の射場が出來、その兩側にも松が植ゑられた。

その苗木の何割だか何分だかが今日生殘つてゐるのであつた。彼はその苗木の時を知つてゐたやうに、小松の時を知つてゐる。人力の幌に松の枝がさはるやうになつたと云つて父の喜んだのも思ひ出せば、もう人の丈の二倍位になつて小暗い影をその下に作つた時、友達と蛇をその下で殺したら、目玉が一つ飛び出し着物の肩の處についてゐた、それがため母が殆ど氣絕しかけたことも憶ひ出せた。

彼が海外に行つてゐた五年の間に、この別莊は惡い隣人のために通路を絕たれたやうな目に逢ひ、取上げられたも同然に手放して終つた。

彼は歸國した當時、久しぶりで餘所ながらその憶出の多い別莊を訪づれてみた。往來に臨んだ丸太はもう朽ち傾いてゐたがまだ二本並んでゐた。松は大きくなつてゐたが、道は踏みならされ、玄關前の本門までＳ字を二つ續けたやうな形でうね〳〵松林の下を縫つてゐた。借別莊になつてゐて誰れか知らない人の表札がそこにかゝつてゐた。

それから又十年も經つた。偶然にも彼の識つたある外國人がそこに假住してゐた。ある年の降誕祭の晩彼はそこに招かれて行つた。松の下道は星の光もなくつて眞暗だつた。門に近づくと雨戸の間から燈火の影がさした。彼の父が自身で斧をとつて枝を伐つた柚の白い床柱の前に深紅の寢臺掛けをしたベエドが置いてあつた。違ひ棚には降誕祭の樹が立てゝあつた。

ごめんなさい。あなたの家で是非一つ見せて頂き度いものがある、と彼が云つた。それは茅葺屋と瓦葺屋の間の戸袋の脇にある一本の柱だつた。柱には彼の兄弟姉妹の丈の高さが筆、鉛筆、火著色々なもので幾十となく印してあつた。その中には父の印をしたものもあり、母の印をしたものもあつた。亦彼の十二の時、別莊でなくなつたその祖母のした印もあつた。兄の低い背の印もあれば、妹より低い背丈けの彼の名も見出された。彼は容易にその前を去ることが出來なかつた。柱の前に直立した兄弟姉妹の懷しい幼な顏が夏の輕い服裝をしてそこに浮んで來るやうだつた。又は自身がそこに立たされた時、一寸心に浮んだ何んでもなかつた事が何十年目かでも忘られずにゐるのを見出した。それこそ過去へ向つて立てられた傘の柱とも譬へてみたかつた。

彼は尙ほその小徑を門の方へ進んで行つた。その邊の松は下枝を拂はれ、從つて道といふものはなくなつて終つた。そこの松は建物で風を遮られもとから一番大きかつたが、益々餘計外より伸びて見上げるほどになつてゐた。道のない林の中で昔あつた道、車廻しの模樣などをどの邊だらうと自問自答しつつ彼は佇んだ。

震災後十箇月で建物は綺麗に取片づけられて終つてゐた。もつとも二三年前から茅葺の方は取毀はされてゐた。玄關、臺處、座敷だけが殘されてゐたのであるから、材木として積み上げれば一束しかなかつた。建物を壞した蹟の狹く見えるのは意外なものであるが、周圍をすつかり包んだ松やその他の植樹が大きくなつたせいもあるが、屋敷は記憶

の三分の一程もなかつた。どうして裏庭の中で多勢の子供等があんな様々な遊戯をして遊ぶことが出來たらうと怪しく思はれる程だつた。

座敷に上る踏石が二つもとのまゝに置いてあつた。家の中と庭の中央とに僅か許かりの畑が作られてゐた。井戸はどうしたらうと後方の崖下へ行つてみた。側石こそそのまゝであつたが、多方埋まつて底まで二三尺しかなくなつて、雨水のやうな水が少し許り溜つてゐた。凡そ四十年間幾箇の家族、いくたりの人間に生命を與へてゐた水はもうその任を果し盡して涸れようとしてゐる。又もとのまゝの平地に歸らうとしてゐる。

彼は積み重ねられた材木の方へ歩み寄つた。その中に彼の父が一心に細工した柚の床柱も、彼等の背丈を印した杉の角柱も必ずあるであらうと想像してみた。家が建てられ、住まれ、代が變つて、壞され、その用材もやがて持去られる。庭は畑になり、植木は林になる。砂山はもとよりもなほ近く迫り、射場は埋まり、囚人の努力も一夢と消え、川は淺くなり、橋も石崖も崩壞し、海は遠く退いて終つた。萬物は流轉して極る所ない。

彼は井戸の方から庭の中心に悲みに滿ちて歸つて來た。そこからよく眺まれた砂丘も、海も、東の岬も、松の樹の生長と共に何一つ望むことが出來なくなつて終つた。厚い松葉の掩で包まれたそこは一つの穴か窪地のやうになつて終つた。

流石風當ての烈しかつた庭も、林に包まれては菜園すら出來るやうになつた。畑には竹枝にからませた白豆花が眞盛りである。優しい莖と葉に、それはふさはしく靜かな花である。彼はその脇に昔なつかしい草を敷いて坐はり、林叢の裡に深く隱れて、それを耕した百姓以外、恐らく誰れの目にも觸れないであらう所の澗花を愛でた。近い海の音も松の葉を透して騷々しくは來なかつた。

彼はその靜寂を心から樂んだ。今度は誰れかその同胞の一人を連れてこゝへ來よう、さうして一緒に一杯傾けながら昔のことでも思ひ出したら一層樂しいだらうと思つた。

やがて彼は松林の下を滑り、もとの射場を通りぬけて砂丘へ滑り〳〵登つて行つた。

六月の穩かな空は松間から段々開けて擴がり、頂上へ登ると、五年前、十年前、十五年前と同じ海が煙つて彼の眼前に遙かに表はれた。海上の風が爽かに來て彼の袷の袖を吹いた。



藝術家の愛想

廣津和郞

K君の詩集出版の會は大變愉快だつた。二十五六人の人々が集まつて、テーブルを圍んでゐるんだが、主人公のK君がなかなかやつて來ない。何でも午後の五時頃から集まつて、六時頃には晩餐が出る筈になつてゐたのに、六時は愚か、六時半になつてもK君はやつて來ない。だんだん皆腹が空つて來て、その事を互に云ひ合つて、早くK君が來て呉れるといいんだがと、噂し合つてゐるんだが、それでゐて誰も不愉快にも思はず、非常に愉快がつて、K君の遲刻を何だか喜んでゐるやうな様子をしてゐる。

時間と云ふ觀念がK君には全然缺除してゐるのだと云ふのが一般の定評だつた。

『あの人は夜中の三時頃に突然やつて來ることがあるんですよ。そしてそれが夜中の三時だと云ふ事は全然氣がつかないらしく、普通な顔をしてゐるんですよ』

そんなやうな例が幾つも人々の口から語られて、そしてさういふ話が誰かの口から出る度に、みんな喜んで笑ひ合つてゐた。自分はそれ程K君と親しくはしてゐな

いが、K君の詩が好きだつたので、滅多にかういふ會合に出ない癖に、今夜は出かけて來る氣になつたわけだが、みんなの口から出るK君の人となりについての好評は愉快だつた。

七時を過ぎてから、K君は姪だと云ふ五つ六つの女の子の手を引いてやつて來た。

『どうも大變失禮して居りました。實は今夜だと云ふ事を失念いたしまして、この姪をつれまして、散歩に出かけましたところに、唯今お使の方が迎へに來て下さりましたやうな次第で……』丈の高いK君は、片手で姪の手を引き、片手で額に亂れかかる髮の毛を、かき上げかき上げしながら、戸口のところでかう云つて辯解して、それから這入つて來た。

みんなが拍手した。K君の遲れて來た事、今日の出版記念の會を失念してゐた事までが、多大の人氣を博した。——いや、自分の詩集出版の記念の會を忘れてしまふなどと云ふのは、全く面白い、愉快な話だと、自分などもすつかり嬉しがつてしまつてゐたのだ。實際かういふ話は詩人などにはありさうな事で、いかにも我々が詩人について考へる時、想像に浮ぶ一つの詩人の特性のやうな氣のすることなんだが、併し現代にはだんだんかう云ふ人はゐなくなつて來たので、兎に角、めづらしい話だと云つても、差支へなからうではないか。

そこで直ぐに食事が出たんだが、腹が空つてゐるので、みんなが大變よろこんで、出る料理出る料理を、片つぱしから食べた。それからデザアト、コースに入つて、發起人が詩集出版の祝賀の意を述べて、詩人がそれに答禮をして、未だ誰だかのテーブルスピーチがあつて、それから次にE氏が立上つたわけなのである。

みんなが盛んに拍手した。それは無理もない。Eはこの會の出席者の全部の中で、一番の年長者でもあり、一番の先輩でもあり、そればかりでなく、日本の詩壇から云つても、最も先輩の一人である。自分は詩といふものを子供の時か

ら餘り讀んだことがないので、この人がどんな仕事をした人かよくは知らないが、その名聲は自分の小學生、中學生時分から既に聞及んでゐた。E夫人は又有名なる歌人で、この歌人の歌は、自分は中學生時分から尊敬して讀んでゐる。夫人もその晩はそこに出席してゐて、E氏の隣りに、にこやかな笑を浮べながら、つつましやかに控へてゐた。

拍手に迎へられて立つたE氏は、諧味のある聲で、馴れた調子で、

『私がフランスに居りました時分、私は誰々、誰々のやつてゐる詩人の會合にも、△△が主宰してゐる一派の詩人の會合にも、××の客間にも、その他澤山の詩人達の集まりにも出席しました』さういふ風に語り出した。フランスの詩壇について無知識な自分には、E氏が擧げた數々の詩人の名を殆んど知らなかつた。

E氏はそれから、それ等の詩人の會合がいかに愉快であるかを語り出した。分け隔てなく、胸に何の蟠りもなく、その思想を語り合ひ、嬉々としてみなこの生活を愉快ならしめてゐる。陰氣な顔をして、じろりじろり盜み見合つてゐる日本の藝術家のやうな不愉快さは藥にしたくもない。誰でも心から胸襟をひらき合ふ……

『私はそこで思ふのであります。日本の藝術家の間にも、どうかしてこの美しき愉快な氣風を植ゑつけたいものであると。汽車の中で會つても、實に愉快に語り、愉快に笑ひ、何の蟠りもなく、生活を互に豐富にし合つてゐる――この貴むべき、美しき氣風を我々の間にもどうかして植ゑつけたいと思ふのであります。今夜はかうした愉快な會合に出席して、私は心から喜びを感じてゐるのでありますが、今夜此處に集まられた諸君は、今後どうかさう云ふ氣分が日本の藝術家の間に發達するやうに心懸けて頂きたい。さうして我々藝術家の生活を、好い意味で、少しでも豐富にして行く事を、互に期さうではありませんか……』

『贊成！』自分はほんたうに腹の中でかう呟いた。自分のやうな人見知りをする人間には、E氏の話は全く好い教訓

だ。自分は新進作家のはしくれに入れられて、小說家といふものの片隅に腰をかけ始めた人間なんだが、どうもさういふ好い意味ひの快活さが足りないと云ふ事を、平生から感じてゐる。小說家仲間とつき合つても、どうもフランクになれない。互に互の心持の中に這入つて行けない。愉快な笑顏を見せたいと思つても、頰ぺたが引きつをて來る。こいつは自分でもかねがね醜いと思つてゐる。それからこれはE氏に聞いたわけではないが、十九世紀の厭世時な作家達でも、あんなに陰氣な人生觀を持つてゐながら、多くは、人と人との交涉では愉快な笑顏を見せ合ひもし、快活に人と談話をしたさうだ。――實際、その方が本當だ。自分ばかりではなく、日本の藝術家はみんな陰氣だ。奥齒に物がはさまつたやうな顏をしてゐる。これはほんたうに好くない話だ。――それをしみじみ感じてゐるので、自分はE氏のテーブル、スピーチに對して、

『贊成！』から腹の中で呟いたのである。腹の中で呟いたところが、やつぱり日本人なのかも知れない。ほんとうに贊成なら、

『贊成！』から口に出して叫ぶべきものかも知れないが……

兎に角　自分は今夜の會合に出て來てよかつたと思つた、いつもから云の會合に出て來ないが、これからは努めても、からした集まりに出席することにしよう　それで　甚だ愉快な氣持で、その夜は過したわけなのである。

◇

何でもその會合のあつだのは、初夏だつたと思ふが、それから二三ケ月後――九月の半ば頃ではなかつたかと思ふ。ある晩自分は友人と一緒に銀座を散步した。そしてその歸りに有樂町から院線（今は省線だが）が電車に乘つた。空い

てゐる席があつたので、並んで友人と腰を下ろしてから、ふと氣がつくと、直ぐ側にE氏夫妻が腰かけてゐた。自分の右隣りに自分の友人が腰をかけ、その右隣りにE氏、その又右隣りにE夫人……さう云つた風に腰を下ろしたわけである。自分は一寸顏を知つてゐる程度の人だと、そんな風な場合、なるたけ氣のつかないやうな顏をして過してしまふ癖がある。だが、何しろさういふ癖は、好い癖ではない。殊に相手はE氏夫妻だ。この間、E氏はあゝして藝術家の快活さを主張してゐた。自分もそれに非常に贊成したわけだ。このままにしてゐる事は何と云つても惡い。さう思つたので、自分は自分の友人と席を代つて貰つて、そしてE氏の隣に腰を下ろし、

『Eさん　暫くでした』かう云つて帽子を脫つて、にこやかに――自分はほんとうににこやかな顏になつてゐたつもりだ――挨拶した。

ところが、E氏は、丁度哲學雜誌を開き、かなり遠視眼と見えて、それを眼から遠ざけて　ぢつと讀んでゐたが、自分の方をチラと見て、直ぐその眼を雜誌に返し、一寸帽子のはじに手を觸れただけで

『やあ』と冷淡に事務的に云つた。おや、こんな筈ではなかつたが、と思つたが、E氏はそれきりこつちを見ない。――若しその時、E氏を置いた向うに腰をかけてゐるE夫人が、自分の方を向いて、E氏とはまるで反對の丁寧な、愛想の好い樣子で挨拶をして呉れなかつたら、癇癪持の自分は、直ぐにぱつと立上つて、E氏の側を離れてしまつたかも知れない。

自分は再びE夫人に挨拶をして、それからE氏と並んで腰をかけたが、やはり心は不快でいつぱいになつてゐた。――この人があの會合の時に、あんな事を喋つた人だらうか。フランス藝術家の快活と親しみ易さとを說いて、日本の藝術家の陰氣と冷たさとを攻擊した人だらうか。その話を聞いたがために、それを尊重して、わざわざ友人と席を代つて貰

つて、この男に挨拶をした自分は、何と云ふ間抜だらう。……E氏は相變らず冷たい表情をして、にこりともしないで哲學雜誌によみ耽つてゐる。よみ耽つてゐるのかどうか知らんが、眼をその方へ向けてゐる。自分が隣りにゐるなどと云ふ事は、忘れてしまつたやうな顏をしてゐる。――一體どうしたと云ふんだ？

『先輩振つてゐるのかな、つまり？』と自分は腹の中で考へた。

自分が小學生、中學生の時分に有名だつたこの詩人は、なるほど、時代から云つたら、自分には一時代も二時代も三時代も前の先輩だ。――それだから、つまり、彼に取つてはこの態度が當然なのかな？併し自分は先輩に對する態度で禮を厚うして挨拶した筈だつたが、それに對して何とかもう少し愛相つ氣はありさうではないか。

すつかり不愉快になつてしまつた自分に、牛込に來るのが待遠しかつた。E氏と身體を並べてゐるのが、堪らなかつた。それで牛込に着くと、直ぐと立上つて、併しE氏夫人がゐるので、再び丁寧に挨拶をして、そうしたら、E氏夫人はやはりにこやかに愛想よく挨拶をし返したが、E氏は先刻と同じやうに帽子のはじに手を觸れたきりで、自分の方を見もしないで、どういふつもりか、相變らず哲學雜誌と首つぴきをしてゐた……そして自分は電車から下りて、ほつとしたわけだ。

自分が默々として、陰氣になつて歩いてゐるので、自分よりも年の若い自分の友人は、

『あれ誰ですか？』かう云つて自分に訊いた。

『E――』

『ああ、あれがEですか、それぢやその隣りのがM子ですね』

『さう。』

自分こんな下らない事で、みじめな氣持になるのが莫迦らしいと思ひながら、やつぱり不愉快なので、自分の心持の持扱ひに困つたが、併しあれだけの事を會合で云ひながら、やつぱり日本人なので、彼自身は自身の說が[illegible]ないのかと云ふ風に考へて、兎に角日本人だからあの男もああなんだと云ふやうに解釋した。日本人だつて、あんなものではないが、併しさう解釋してしまはないと、いつまでもむしやくしやして腹が立つて困る。

むしやくしやして腹を立てゝゐると云ふ事は、何んと云つても自分の心の不經濟だ。――そこでつまりEに對する腹立を日本人の不愛相と云ふ一つの一般的事實の波の中に流し込んで、溶かしてしまはうと云ふんだが、一體我々――いや、我々では抗議を申し込んで來られると困るから、自分とするが、一體自分の頭なんていふものは、どうして一々こんな事のためにこまかにクルクル働いてゐなければならないのだらう。疲れてやり切れないではないか……

編輯だより

□在野黨に鬪將のないことがどれ丈け我政界を寂寥にしたらう。政友本黨の鬪將は雄辯家もなければ、人格者もなく憲政會に比して格段の遜色で三役角力と褌かつぎの觀があつた。木下、吉植、川原の如き鼻摘みがたとへ名論を吐いた處が國民は彼等に惡感を覺えるのみだ。

□閣僚及政務官の選任に對する加藤君の態度は官僚以上の官僚。山縣以上の官僚と思はせた。北樺太の撤 は、十二年一月廿三日の上院演說で立派に斷言してゐる。これは新二枚舌である。護憲三派といつたとか云はぬとか、丸で三百 言のやり方だ。淸節雄風の大度は微塵もない。

□大阪市電從業員罷工問題で、代表者三百名を拘束したのは失態だ。それに學生連の執つた態度は流石に大阪だと感心(?)した。東京の學生なら弱いものに同情するだろう。工業政策の大家たる關一君もこの頃は氣迷つてゐる。

□日本の自治制は水野錬太郎によりて幾分訓錬はされたろうが、しかし水野君は內相としては尤も不適任であつた。それは君は我が國の經濟及農村上の知識が皆無であつた爲め、地方官の採用等も單に大學の秀才といふものばかりを囑目した。我地方官は同一縣に、半歳か一年しか居らぬから到底地方開發の如き落ちついた仕事は出來ない。此點からいつて我國では農科出身、經濟科出身に知事、內務部長への登用法を開くことが我農本國としての最急務だ。農村の病患は一日一日と深淵に陷ろうとするとき政府者は此點に注意して貰ひたい。

□勝田主計は退職當日三千萬圓を鮮銀に融通したそうだ。全國の農民、勞働者が食ふや、食はずにいるとき、地方の農民の爲に此丈け融通するのが當然だ。我々は思はず泣いた。此男位日本國で惡い奴はない全國の農民は永遠に此男を忘るるな。

□「無產政黨の前提たる「政治研究會」の健全の發展を祈る。ただ片手間や、賣名でかくの如き會を企つるに於て將來に異常の惡弊を殘すから發企人は總ての職務を抛つて從事するのが當然だ。此の如き大業を成すには全精神を傾注するを要する。此會に熱と、眞劍味と、光りとを加へよ。フェビアン協會の人逹も不眞面目だ。我々は衷心から此會に對しても發展を祈るが故に、機關雜誌にモット熱を研究的態度を深く掘り下ぐる必要切なるを贊成する。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	[illegible]六[illegible]共 郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	[illegible]大[illegible]共 郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切れの節は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾參年七月廿日　印刷納本
大正拾參年八月壹日　發行

（定價八拾錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　平田貫一郎

東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三


お口の安全を計るなら、
夜寝る前にも、食後にも、外出歸りにも、きつと
ライオン水歯磨で
おうがひをあそばせ！
DENTE
LION
LIQUID DENTIFRICE

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS. LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可 [illegible] 第六巻第八號 八月號 定價金八拾錢

東京株式會社秀英舍印刷